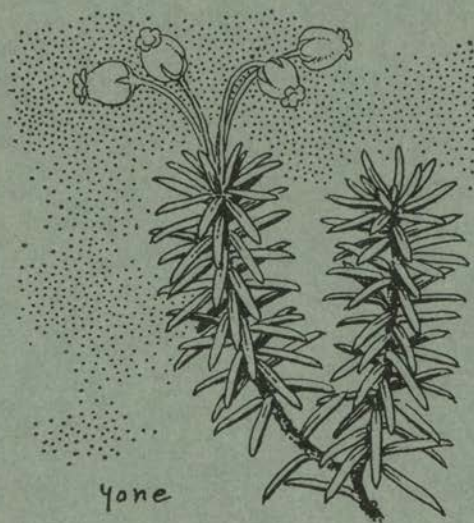


山 岳



LVII



軽登山靴のバイオニア

キャラバン

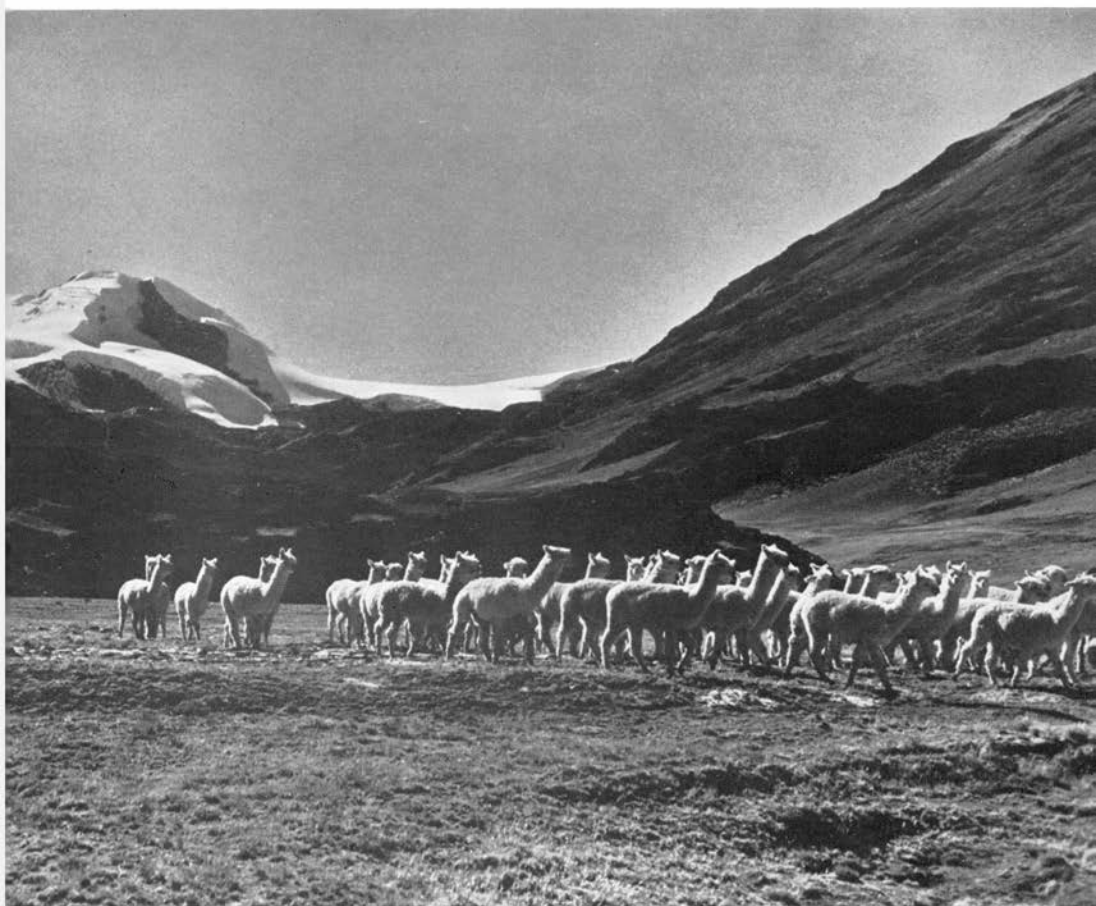
キャラバンシューズ	デラックス	濃紺	¥ 2,300
〃	〃	スタンダード	濃紺・赤 ¥ 2,100
〃	〃	ガイドオンリー	うす茶 ¥ 1,650
〃	〃	ハイビック	濃紺・赤 ¥ 1,300

姉妹品

リザードエアーマット	大型	枕付	¥ 2,900
〃	〃	中型	枕付 ¥ 1,550
〃	〃	小型	¥ 1,300
〃	〃	コンビ型	¥ 2,700

新製品	キャラバン	アイゼン	¥ 850
-----	-------	------	-------

製造元 藤倉ゴム工業株式会社
 発売元 株式会社 山崎社



コルディエラ・アポロバンバにて—チョコニャコータ峰とアルパカの群—

Cordillera Apolobamba—A herd of alpaca and Chocnacota (5650m) in the background.
(photo by I. Yoshizawa)

山

岳

第五十七年

山 岳 第五十七年 目 次 (一九六二年度)

山 岳 十 話	榎 有 恒	一
コルデイエラ・ブランカとアポロバンバ―ペルーとポリヴィアの山へ	吉 沢 一 郎	二
ペルー・アンデスの山々	藤 木 高 嶺	三
P二九の西面	篠 田 軍 治	七
未踏の山 ランタン・リルン (一九六一年)	広 谷 光 一 郎	九
ジュガール・ヒマール主峰の直下まで (一九六一年)	梶 本 徳 次 郎	一六
マツキンレー登頂記	交 野 武 一	三
マツキンレー登山―新しい一般ルートの提案―	吉 阪 隆 正	四
西部カラコルム紀行 (一九六一年)	島 澄 夫	五
剱岳「源治郎尾根」の由来と当時の思い出	馬 場 忠 三 郎	一五
登山技術指導者講習会	金 坂 一 郎	一六
追 悼		
山崎春雄氏 (伊藤秀五郎・藤島敏男)		一七
ガルトエン・ノルブ Gyalsen Norbu (横有恒・松田雄一)		一七
森本嘉一氏 (泉隆次郎)		一七
大島健司氏 (橋本信行)		一八
会 務 報 告 (一九六一年十月―一九六二年九月)		一八
ヒマラヤ登山年譜 (続・補遺) (一九五四―一九五五年)	馬 場 勝 嘉	三

写真

コルディエラ・アポロバンバにて(巻頭)
 ブカヒルカ北峰のC IIからC IIIへの登行
 ブカヒルカのBCでの吉沢隊長と甘利隊員
 ブカヒルカ北峰の頂塊
 ブカヒルカ北峰——ヤナハンカ谷の東尾根南部から——
 チョウビカ・オルコ——サニーヨから——
 ブヤ山群の西面
 カイヤンガテのヴィクトール峰初登頂成功の一瞬
 コヨリテイの稜線めざして登る
 カイヤンガテII・III・IV峰と大アイスフォール
 コヨリテイ氷河末端のアイスフォールに挑む
 カイヤンガテBCの夜景とハットンウーマイ峰
 ワスカランCIの夕暮れとワスカラン南峰
 P 29のRC 2から六七〇〇m峰と三本槍を望む
 BCから六七〇〇m峰、マナスル及びP 29を望む
 住吉コルから望んだツラギ氷河と大アイスフォール(折込)
 P 29西尾根基部のキャンプ付近から北望(折込)
 リルン氷河のCIとC II間のアイスフォール
 リルンのCIとC II間の氷河台地で休むローカル・ポーター
 雪原上のC IIIとアン・ダワ4号、ガルツェン・ノルプ及び伴明
 リルン氷河のBCから見たランタン・リルンとアイスフォール
 ギャルツェン・ピークから望んだビッグ・ホワイト・ピーク
 ブルビ・チャチュン氷河を登る
 C 5からレディス・ピークを望む
 ギャルツェン・ピークの頂上における梶本隊長と二人のシエルバ
 機上から見たマッキンレーの南西面
 マッキンレー南峰頂上直下を登る隊員

マッキンレー南峰頂上の幕営
 マッキンレー南峰頂上に立つ
 南西から望んだマッキンレー山
 バルタール氷河からパツラ峰を望む
 バルタールのベースキャンプ
 ククアイ氷河からクテイ・ドルクシユを望む
 パツラ峰南壁の威容
 劔岳八ツ峰第二峰を降る佐伯宗作
 積雪期登山技術指導者講習会(四葉)
 山崎春雄氏、ガルツェン・ノルプ氏、森本嘉一氏、大島健司氏
 リルン氷河で通った三氏の墓碑

地図

ブカヒルカ峰登頂ルート図
 ブカヒルカ山群概念図
 コルディエラ・プランカとアポロバンバ概念図(折込)
 ブヤ山群概念図(折込)
 アカマニ峰登頂ルート図
 カイヤンガテ山群概念図
 コヨリテイ山群概念図
 P 29西面概念図(折込)
 ランタン・ヒマール概念図(折込)
 リルン氷河雪崩発生説明図
 ジュガール・ヒマール概念図
 マッキンレー登山ルート図
 マッキンレー概念図
 カラコルム北西部概念図

表紙カット

牧野四子吉

山 岳 十 話

榎 有 恒

一、山の姿 その一

いまから六年前の五月、私たちはヒマラヤのマナスルに登った。そのとき今西寿雄君が写した頂上の写真は記念すべきものである。八、一二五メートルの巨峰の山頂は、鋭いピラミッド型をなしており、岩石が黒白二色に明瞭に色分けされている。黒色の岩石が頂の点をつくり、厚さ数メートルの幅で東面のガケに帯状に面している。この黒色の岩石の下、西側は白色の岩石である。頂上からもち帰った岩石を見ると、黒色の方は変成岩であり、白色の方は花崗岩である。学者のいうところによれば、中世代から新世代にかけて、アルプス造山運動と名付けられる地殻に大きな褶曲運動が起こって、アルプス、ロッキー、ヒマラヤなどが隆起したとのことである。この運動によって隆起した山は、花崗岩が中核であって、横圧をうけた変成岩がこれを囲む構造であるとのことである。もし、そうであるとすれば、マナスルはヒマラヤの構造面を頂上の一点に示しているように思われるのである。

山 岳 十 話
このアルプス造山運動によってできた褶曲山脈は、景観上一つの型をもつ。それはアルプ斯的景観といわれるもの

であつて、隆起した山地が氷雪、雨水などによつて侵食され、中核の堅硬な岩石が鋭い峰々となつて残るものである。日本アルプスや日高山脈もこれである。この侵食に耐えた山脈が一年のうちもつとも気温の高い七、八月に平均気温零度以下を保つときは、それからの上部は始終、氷雪の地域となつて氷河が形成されるのである。この線は山の位置によつて高低に違いがあるが、雪線とよばれるものである。アルプスもロッキーもアンデスもヒマラヤも、氷河をいだく山々はみな雪線を越えた高さをもつものである。わが国では日本アルプスや日高山脈などに氷期に氷河のあつた痕跡はあるが、現存しない。雪線以上の山に降つた雪は、もし尾根がゆるやかであれば尾根の上に、もし急峻で止めることができなければ落ちて谷を埋めて氷河を形成する。

幾百幾千年の長い間、降り積もつた膨大な量の雪は、下方から氷化して、自らの重量と傾斜によつて、谷に沿つて谷の両側および河床を削りながら流下する。流下といつてもすべり落ちるのであつて、往年スイスの山村におつたとき、その氷河の流下速度を地質学者が調査していたが、一日二センチくらいのものであつた。もつともカラコラムのバルトロ氷河などは一日一メートルの速度で動くという記録もあるが、これなどは例外に早い方であらう。氷河は流下する河床の変化によつて亀裂がはいる。クレバスといわれるが、深いものは数百メートルに達するものもある。流下しながら山腹から崩壊した岩石を運んで両側に土手を作つたりして、雪線までくると溶解して消失し、ここにも岩石の堆積をつくる。これをモレインという。スイス、イタリア国境のテオドル峠の氷河の末端に、ローマ時代の貨幣が発見されたりするが、二千年の昔、峠越えした旅人の遺物であらう。中央の山脈から谷に流れ出た水は、はじめは流れの勾配も強く、変化に富んで大小の滝が多い。しだいに水量を増すにつれて両岸はげしく削つてV字谷をなす。マナスルの山麓に達する前に通過したブリ・ガンダキ溪谷はこの壮大なものであつた。この溪流は四、五千米ートル級の東西に走る山脈を南北にV字型に切つているもので、十日間は、その断崖の中腹の険阻な小道をたどるのであつた。

雪や氷をまとうたけわしい山脈と奔流する溪谷、山麓をおおう森林帯と森林帯を越えた高所の灌木帯や草本帯への変化、生物界もまた高度によって生態を異にする。アルプスの景観の山々の空高くうち続く壮麗さは人の心を強くひく。その最も壮大なものはヒマラヤであつて、亜熱帯の地域に白雪に輝く姿は神秘的である。しかし私がヒマラヤの壮大さを如実に感じたのは二カ月も山懐に暮らした後、ポカラから飛行機でカトマンズへ帰るとき、四千メートルの高度を飛びながら、その雲上さらに四千メートルも高く山々がそびえるのをながめたときであつた。

二、山の姿 その二

氷雪におおわれた連山が、すみきつた大気の高く無垢の光をけわしい絶壁や山稜にうけて、音もなくしずかに輝く姿は、美と力とにみちて、祈りにも似たおごそかな思いに心を奪う。アルプスもヒマラヤもロッキーもみなそのよくな山々であつた。私は青年時代をこの姿に魅せられて飽くこともなく通つた。しかし少年時代にはじめた登山は、富士をはじめ阿蘇や後方羊蹄山などいづれも火山であつた。

明治時代の日本アルプスは、笠ヶ岳が一七八三年南裔により、槍ヶ岳が一八二八年播隆により開かれ、また剣岳に一九〇七年陸地測量部員が錫杖などを発見したとはいへ、少数の先駆者たちの秘境であつた。わが国では古くから山そのものを神体と仰ぎ、山頂を神の座としてあがめておつたが、仏教が六世紀の中葉に渡来してから僧の山にこもつて修行するものがあらわれ、山伏の役の小角が大峯を開き、七〇一年慈興が立山を、七一七年泰澄が白山を、七八二年勝道が二荒山を、七八五年最澄が比叡山を、八一六年空海が高野山を開いたことは有名な話で人の知るところである。この神道と仏教とによつてつちかわれた山への親近の情愛は、明治中葉に、山に登ることを楽しみとする近代的な趣味が、ヨーロッパの影響をうけて発達するにおよび、今日に至つてもその根底に深く強い伝統となつて生きていふと思われる。

そのころの登山の多くは伝統的に親しまれた火山に向かったのは自然であった。古くから登られた火山には石室とか室堂があつて宿泊もできたし、登山用具といつても、草鞋、脚絆、着藁蓆に金剛杖といっただれにも容易にとのえられる用具であることとか、登山路もなだらかで格別の技術を必要としないこともその原因であろう。環太平洋火山帯に位置するわが国は、第四紀以後に活動した火山だけでも二百六十五座もあり、有史時代になってから活動したものが四十座以上もあるとのことである。国土の面積に比べてもつ火山の数は世界最高であり、温泉の湧出も三千万所を越え、国土造成のときから現代にまで火山活動を見ることを思えば、まさしく火山国なのである。千島、那須、鳥海、富士、乗鞍、大山、霧島と各火山帯をながめてくると、国土の大きな面積が火山群やその噴出物でおおわれている。

火山の姿は褶曲山脈とちがつて、地下深所から岩漿を噴きあげ堆積されてできるだけに、いつもなにか熱情ともいつたものをもっているように思われ「わたしや大島御神火育ち……」というように、地球の内部に秘められた強大なエネルギーの奔放な活動を感じる。火山はいくつかの型式に分けられているが、噴火によって形成されるがゆえに、どれも噴出物堆積の形をもっている。そのため山稜はおおむね曲線的な穏和なものである。火山の稜線とそのすそ野の描く广大で、ゆるやかな傾斜は、細分されがちなわが国の風景の中にあつて、まことに牧歌的なおおらかな解放感を与えてくれる。乙女峠からながめる富士ほど余裕しやくしやくとして清らかに君臨する姿があるか。富士だけとはいわず山々が、私たちの魂をゆさぶり、情熱をかきたてるのはどうしてであらう。山のもつ性格がそうさせるのだともいえるが、都会の煙にかすんで不安な目が、山のもつ自然のさわやかな光に、再び幸福を見出してよみがえるのかもしれない。

わが国の山の性格をつくるうち、ことに著しいものは森林と思う。氣候風土が樹木の成育に適しているために、その多種多様なことと、多くの山麓をおおう広大なことについては、他に比を見ないと思う。南北に長い島嶼国である

だけに、屋久島にはじまって、北海道に至る山々に見る原生林の美しさは豪華なものである。ただ近来乱伐の傾向にあるのは残念である。この森林から流れ出る溪流は、これまた比を見ないほど清冽である。源流に氷河をいただくものは、重い氷河が削る岩石の粉末によって混濁している。アルプス、ロッキー、ヒマラヤの溪流はみなそうである。いつも新鮮な原生の密林とその中を躍る美しい溪流とは、わが山々の特色ともいえよう。

三、風光は万人のもの

わが国天与の大風景を保護開発し、一般の利用に供するは国民の保健休養上緊要なる時務にして、かつ外客誘致に資する所ありというのが昭和六年国立公園法の制定されたときの要旨である。二十五年さらに国立公園に準ずる地域に対し、国定公園法が制定され、三十二年にいたり国立公園法は廃止され、新たに自然公園法が制定されて、国立公園、国定公園および都道府県立自然公園を一括して自然公園として規制することになった。いまや国立公園は十九カ所および、北海道から九州にかけて一都一道三十二県にわたって設定されている。国立公園、国定公園、都道府県立公園と区別はあっても、いずれもみなすぐれた自然を保護し、国民のための休養、教化に資することを目的としている。十九カ所の国立公園のうち、十五カ所は山岳地域に属するものであって、国土の七五パーセントが山であるわが国としては当然のことであろう。

この自然公園制度は厚生省の主管するところであるが、その他関連する官庁や各種の自然保護団体の協力とまっけて、その目的の達成に努力が続けられている。つまり自然保護の骨格ができて、これからその肉付けを苦勞してしなければならぬ。自然保護の運動は世界の文明国では、いずれも活発である。この運動は、今日では利用の面よりも、むしろ文化財として大切に保存することに重点がおかれている。その著しい例はスイス、アメリカ、カナダ、ドイツなどで自然を原生のままに保存していることである。今日、機械文明の發達にともなうて、人間性の復活を要求

する願いが、再び自然に帰れという声となつて力をもつのは当然であろう。ただ現代人、ことに自然から離れた人工的な生活環境におけるものは、自然に対して、たとえ郷愁をいだいても、飛躍することなしには、帰りがたいのではなからうか。ここに自然をあくまで人手から守ろうとする理想と、現実の利用を重視する開発の要求との競合があると思われる。

今日のわが国ではこの自然利用の重視に少しく片寄つてはいないだろうか。ことに観光事業の計画において、また風光地に遊ぶものにおいて、自然の破壊と汚損とを意に介しない様子も見受けられる。いうまでもなく自然は無機、無機の要素から、地下、地上すべての生物および気候までが一体となつてつり合いのとれた協同体なのである。人工を加える場合には、このつり合いの力を失わせないように注意すべきであつて、ひとたびこれの破壊されたものは、おそらく再現しないであろう。わが国の現状は保護区域であつても、そのなかに自由処分可能な土地が散在するために全地域を一括して保護することもむずかしく、結局は各方面の利用者の良識にまつよりほかに道がない。国民の良識が自然を保護した例を申しあげよう。

スイスのマッターホルンといへば、わが国での富士に当たるほど、スイス人にとっては大切な山である。一八六五年英人エドワード・ウイムパーの一行七人が初登頂をなしての帰途、たがいに安全のために体を結んだロープが途中で切れて、四人が墜死した栄光と悲劇の山で有名であるが、二十世紀の初め、この山頂までケーブルカーを敷設せんとする事業家が現われた。そして政府の建設許可まで得た。ところが地元スイス人のみならず、ヨーロッパ各国山岳会や自然愛護者がたちあがつて、スイス国土防衛連盟といういかめしい名のもとにアルプスは売り物でないといふ運動を起こし、ついにこの計画をつぶしてしまつた。

また私は第一次世界大戦後ドイツである大学の教授の家に寄寓していたが、自然保護の話のときに、ドイツでは戦時物資欠乏のときも、民族発祥の伝説の森、シュワルツワルトの樹木は保護されて一本も切らなかつたと語つた。

元箱根新旧両街道の分岐点に一個の石碑が建っている。碑文は「西曆千七百二十七年四月二十七日倫敦に於いて出版せられたるケンピア氏著日本歴史の序文に曰く、本書は隆盛にして強大なる帝国の歴史なり、本書は勇敢にして不屈なる国民の記録なり、其人民は謙讓、勤勉、敦厚にして其抛れる地は最も天恵に富めり。新旧両街道の会合する此地点に立つ人よ、此光荣ある祖国をばさらに美しく尊くして卿等の子孫に伝へられよ」とある。私の好きな石碑なのである。

四、山の天候

私たちが登山というのは、自分の足で登ることであつて、自力によることなのである。したがつて、行程の大小によつて、違いはあるが、登山に必要な食糧から寝泊まりの道具までを背負つてゆく。登山シーズンともなれば、大勢の青年たちが重いルックサックを背負つて列車を待つ元氣な姿を見る。その重いルックサックの中は、めいめいの考えぬいた品物でいっぱいなのである。登山の楽しみは準備にかかるときに始まる。もちろん、その計画は自分の力量相応でなければならぬが、目的の登山に対して、降つても照つてもこれで大丈夫と決意のできるまでには、いろいろと思案する。

この準備品のなかで、いつも苦勞するのが雨具である。いまは、ビニールやナイロン製の軽くて便利な雨具もできて昔とはちがうが、それでも山であうはげしい吹き降りには苦勞する。雨の心配をいつもしなければならぬほど、わが国は雨が多い。近ごろは天候の長期予報も發達し、便利な携帯ラジオもあるので天気予報を聞きとつて行動すれば、無理を通さないか、または局地的な急變のない限り、悪天候にそなえることができる。そのうえ、たえず注意すれば觀天望氣の經驗も加えることができるであらう。わが国土がアジア大陸の周辺にあつて、南北に長い島嶼であるうえに、複雑多機な地形のために、大陸の天候に比べてはなはだ変化しやすい。この変化を強く受けるのが山である

る。

専門家によれば、わが国の気象に夏冬を両極とする特性がある。夏は小笠原高気圧が発達し東高西低の気圧型となり、本州をおおうときは良い天候が続くが、寒冷前線が通過したり停滞すると雷雨や雨模様が続く。冬はシベリア高気圧が発達し西高東低の気圧型となり、その高気圧の強弱によって寒冬、暖冬となる。この高気圧は日本海の湿気を運び、脊梁山脈に当って多量の降雨となる。であるから脊梁山脈の冬はたいいてい風速の大きい吹雪の天候が続く。しかも、この状態のとき太平洋側は快晴が続くのである。

この両極の気圧型の中間に春と秋が存在し、春は高気圧と低気圧の東進する移動が速く、山の天候も変わりやすい。初夏からの梅雨では、その前線が停滞しているとき山は荒れ模様である。ことにこれに低気圧が近づくといわゆる集中豪雨となつて、山間部ではことにはげしい。秋も春と同様、低気圧と高気圧との東進移動がはげしく、天候は変わりやすい。初秋は梅雨と同様な雨期である。また夏から秋へかけての台風のとときは、登山はできない。秋の登山で注意を要するのは、冷雨や降雪である。これが、わが国四季の天候の主要である。つまり太平洋側に夏と冬の高気圧がおおい、日本海側に夏の高気圧がおおうときだけ、山ではいくらか長続きする良い天候なのである。であるから数回の登山によい天候に恵まれたからといって安心するのは早計である。

この天候の変化が登山事故発生の大きな一原因であると同時に、いつも雨に留意しなければならないのもこのためである。志賀重昂先生は名著「日本風景論」の中で、雲霧のつくる景観について論じている。登山者にとっては、お山はいつも晴天であることが望ましいが、そういかない風土なのである。そして山での降雨は、平地よりも量も多く風もはげしいと思わなければならない。

わが山に比べて、アルプスもロッキーマウンテンも、天候の動きは大陸的であつて、ことに登山シーズンである夏は、乾燥期とて、だいたい安定している。先年、故秩父宮殿下が、アルプスにお登りになった夏などは、一カ月も好天氣に恵ま

れ、十二分に登山に楽しまれたのであった。アルプスでは、その高度とナダレの危険のために、冬季登山は安全なルートと山とに限られている。

ヒマラヤは事情をまったく異にする。十月から六月上旬までの大陸高気圧が発達する乾燥期と、六月中旬ごろから九月いっぱいベンガル湾に高気圧が発達して多量の降雨と降雪を山にもたらす、いわゆるモンスーン期とに分かれている。この雨期の間だけが登山に適するのである。それもそのときの天候が登山の成否を決する第一の要因となっている。

五、夏山の風物

白峯三山、農鳥岳の残雪に鳥の姿が現われると、田植えどきになるといふ。ヒマラヤ山麓ソロ・クンプの村では、白鳥の群れが南から北へ雪山を越えて渡ると種まきをはじめ。スイスの山村では、六月半ばになると全村の牛や羊をひきつれて放牧のためにアルプに登る。長い間、寒さと雪に閉じこめられていた高山に夏はかけ足でやってくる。アルプスの山麓では、消える雪を追うように、クロカスの花が山腹をおおう。マナスルでベースキャンプを標高三、八五〇メートルの地点に積雪を置いて設営したのは三月下旬であったが、二、三日の好天続きで、目に見えて雪は消え、その後一面に黄や赤のサクラ草が咲き出した。輝かしい夏の太陽は、高山植物の地域に、あふれる紫外線を投げかけて祝福する。

十 話
山 岳
夏山の私たちに呼びかける美しさは、この雪との境の灌木や草本の地帯である。生物の生態は、環境に適応していろいろらしく。その変化を訪ねるなら、熱帯から温帯、寒帯へと水平的に追うこともできるが、高山ではこの気候的变化が垂直的に存在する。さすがに、ヒマラヤはそのすばらしい高さのためと位置から、亜熱帯から寒帯にいたる変化をおさめている。ヒマラヤが自然科学にとって未知の宝庫といわれるわけで、マナスル登山に際しても、いく度か科学

班を加え、動植物、地質、医学、氣象などについて資料を集めた。そのうち、動植物については京都大学から、三巻におよぶ英文の報告書が発表されている。

山がアルプ斯的景観を示すのは、主として森林を越えてからの高所である。どの高山にも森林限界とみられる高度があつて、それから上は、雪や強風や気温の低いために喬木が育たないのである。森林の育つためには、最も高温な七、八月でも平均一〇度はなければならぬことである。日本アルプスの森林限界は、地域によって少差はあるが、だいたい二千五百メートル辺である。お花畑のあるのは、これから上である。アルプスやロッキーは、高緯度のため一千メートル前後、ヒマラヤは高温のためであろう三千メートルから四千メートル辺がこの限界であつた。わが国の森林の美しいことはさきに述べたが、カナダのロッキーに見た森林は広大ではあるが、梅の類の純林ともいふべく、密生して谷と山腹をおおうていた。ヒマラヤでは千七百メートルから松の疎林が現われ、その間に真紅の花の満開するシャクナゲの喬木を見た。二千メートル辺から針葉樹林となり、樹幹三十メートルもあると思われる梅の巨木の茂る林もあつた。

山は現在では、人手の加わらない最後の地域であつてみれば、それぞれの高度に応じた植物帯とともに、動物もまた自然状態のままに生息している。この自然の状態も狩猟者のはいるところでは、人間を恐れて避けるが、ロッキーでは禁猟のためヒグマですら人におじず、角の平たい大きなシカはテントをのぞきこむのであつた。またビーバーが河中に巣を作つたり、山羊の群れが山腹に思いがけぬかよい道を作つてもいた。登つたのはアルバータという山であるが、その山裾で三葉虫の化石も発見した。わが国でもいまはカモシカは保護されているので数はふえているが、クマの姿も見ることは少なくなつた。もっとも北海道の山ではヒグマがいまも推定五千頭くらいはおるといふ話である。アルプスではカモシカが主たる動物で保護されているが、よく懸崖を群れて走るのをながめた。

ヒマラヤは未知の地域だけあつて珍しいことが多い。低いところではマラリヤや毒蛇の心配をし血清や予防薬まで

持っていているが、森林にはラングールザルがすみ、灌木帯にはいれば、ナキウサギがいる（これは大雪山にもいる）。第一キャンプ五二五〇メートルの雪線上の高所までカラスが私たちを追うてきたのは珍しいことであった。

なおヒマラヤでの問題は雪男である。小川東大教授のひきいる探検隊は、降雪のない冬にあって足跡の発見に苦心されたが、いまだに未解決のものである。

山の夏はすべての生物が活力にみち、絢爛として私たちに呼びかけている。

六、安全な登山のために その一

「安全な登山をせよ」という忠告は耳にタコのできるほどいわれている。安全な登山とは自分の力量を超える行動をしないという、きわめて平凡なことである。しかし、このことは現実には行ないがたく、またなかなか行なわれないことである。なにゆえにこの平凡なことが行ないがたいのであろう。自分の力量は、多くの経験のテストを重ねて知ることであると同時に、山についての経験はどこまでいっても終わりが無いからである。

登山のよろこびのなかには行動によって満足を得る分野が大きい。老年になれば体力の衰えから行動に規制をうけるが、青年はそうでない。余るほどのエネルギーをもっているのである。このくらいの登山は大丈夫と決行する。私はこの進取的な勇気をたたえる。しかし、もし自分の力量について顧みることをしなかったら、そこに登山の危険が、自分自身のうちに潜んでいることを忘れているのである。

それなら、どうすれば自分の力量を越えないことができるか、この道筋もたいへんに平凡なことである。容易なものから順を追うて程度を高め、いつも余裕をもって無理をせずにお登りなさいということである。なぜ、一見このように消極的で、飛躍と魅力の少ない仕方が大切であるかを少しく述べてみたい。

登山が他のスポーツと区別されることの一つは、いつも自然的要素と組み合っていることである。多くの競技は競

技者間の問題にしぼることができるが、登山では、自然的要素が重要性をもって、いつも登る場所と時間の関係がっている。どのような山に登るかということは、山の位置、高さ、地形などを含み、時とは、どんな季節、どんな天候のときを選んでいるかというのである。山が遠いか近いか、どんなところに位置しているか、高さはどのくらいであるか、その高さに登るルートがあるかないか、あればどのようなルートであるか、ルートの難易の程度はどうか、小屋があるかないか、いま登ろうとしている季節はどんな性質か、そして登る山の高さの気温はどのくらいであるか、また登る日を加えての天候の概況はどう予報されているかなどを考えるのである。

このように資料を集めて、おおよその見通しを立てるのであるが、この見通しがそのまま的中することはまずありえないほどに、山と天候との関係は複雑で変化が多いと承知しなければならない。ただ詳細な資料による見通しの心構えができていることは、変化に対応するのに大きなあやまちをせずにすむ。この経験を積むことによって、山での行動の判断も、しだいに的確になり安全度を増すであろう。

山と季節との関係は、さきに山の天候で述べたようなわが国の気象状態から留意することが必要である。ことに冬季北西風をうける日本海側および脊梁山脈は、いわゆる豪雪と呼ばれるほど多量の降雪と、その積雪とによって、山容を一変する。この期間の山ではきびしい寒気のみならず、常に吹雪と雪崩の危険を忘れることはできない。一年間二千ミリの降水量のあるわが国は、山ではもっと多量とみてよいだろう。この膨大な雨水が山を浸食して、地形を急峻に削る。急峻な山腹に多量の降雪があれば雪崩れる。であるから積雪期の山は、いたるところ雪崩の危険があり、ことに沢筋は雪崩の集まる場所というも過言でない。雪崩の特性も研究されているが、積雪期の登山は、雪崩の危険のないルート以外はなすべきでない。

また積雪期の天候の悪いことは、強い吹雪が幾日も続くことであって、これまた安易に考えることは許されない。登山用の食糧や装備が発達したとはいえ、たとえ完全なものを用意したからといって、冬山の危険が稀薄になるもの

ではなく、もしそれにあまり大きな安全感を寄せるなら十分な思慮を欠くことになるであろう。

春の山は冬山の延長であり、晩秋の山は冬山の始まりであつて、ことに変わりやすい天候と冷雨にたたかれることが多く、不完全な装備では危険である。一般的にいってわが国では梅雨明けから台風前の期間が登山に適するといえよう。

七、安全な登山のために その二

山と天候を語つたが、この自然の理法をよく知つて、これに従い慎重に適應することが、自分の力量を知る第一歩と思われる。常識として気温は高さ百メートルを増すごとに○・五から○・六度くらい低減するとみてよい。また体感温度といつて体を感じる温度をいうが、風速一メートルごとに一度低減するとみてよい。この目算だけでも、夏四千メートル近い富士に登るに、木綿のシャツ一枚では不適當なことを知るであろう。であるから登山のときは、まず心を重く装うて、いかにしたなら適應して十分に活動できるかを考えなければならない。

ヒマラヤの高所では高度馴化を行なつて体を適應させ、それでも不十分な七千メートル以上の辺に達すれば、酸素補給器を使う。みな自然の理法に従つた考えであつて、装備も食糧もこの見地からとどのえるべきである。このように準備された物を使うに当たつて、当人は登山に適するように訓練されていなければならぬ。昔、私はロンドンで早朝、公園を重いリュックサックを背負うて散歩する老人に会つたことがあつた。夏の登山に対して訓練していると語つた。近ごろは身体訓練法も科学的に発達しているので、有効な方法も多いであろう。

話 十 岳 山

この身体の訓練によつて体力を増強すると同時に忘れてならないのは気力である。登山の困難と戦ふということ、とりもなおさず自らに対して自制、忍耐して戦ふことであつて、最終段階には体力以上に気力が自らを支配するのである。単独で登山する人もあるが、たとえその人の力量がすぐれておつても危険に対してはもろい。仲間同士で

チームで行動するにしくはない。チームではリーダーの力量、能力が他よりすぐれておらなければならないのは当然であるが、リーダーはいつも自分の経験や知識を謙虚に内省して責任を負うべきである。機に臨んで退くことを知るものは、よき登山者といえよう。

アメリカの古い山岳会でアパラチアン山岳会というのがあるが、この会では登山事故防止のために、幾段階かのリーダーの養成と資格とを定めている。わが国でも日本山岳会が、この数年来、文部省援助の下に、リーダーの訓練を實行しているが、このような指導を長く広く継続されんことが望ましい。

参考までに統計は少し古いが、登山事故の例をひろってみよう。気象庁奥山技官の昭和二十六年一月から三十一年十二月にいたる調査資料によれば、件数二〇一、うち北アルプス五五、谷川四六、南・中アルプス二〇、富士山一九、丹沢一二など。これが月別は、七月五二、五、八月二六、十一月一八、三月一五など。原因別は、転落五六、墜落四一、吹雪三二、冷雨二九、雪崩一五、暴風雨九など。また警察庁警備局の調査による昭和三十四年の遭難事故は件数二五二、うち死者一三四、負傷者一〇七、行方不明一一。死者のうち転落死六八、天候急変による疲労死三七。月別は、五月三四、七月三三、八月三二、十一月二六、三月二五、十月二五、一月一九、四月一七、十二月一五、九月一三、二月三となつている。

右両表によれば、昭和三十一年から三十四年にいたる三カ年間に遭難事故は六倍以上に増加しているのである。またアメリカ山岳会一九四七年から五八年にいたる調査によれば、遭難事故二九四、うち死者一一一、負傷者一八三、事故場所は死者が岩場八五、雪上二九、負傷者は岩場一一二、雪上六八、経験の有無では初心者が死者六二、負傷者六三、中級者が死者二二、負傷者四三、エキスパートで死者一一、負傷者三一、不明が死者一六、負傷者四六となつており、年齢別には二十一二十四才までが最高で、これと十五―十九才までの遭難者は全遭難者の五割を越えるところが多い。いずれの調査も取材点に相違があるが、事故発生の多い月とか場所とか原因について示唆するところが多

い。

まったく不安のない登山は望みがたいとしても、登山者は事故防止に心をいたすべく、また、そのことは社会的義務とも思う。安全な登山は、山と天候の自然的要素に対して登るものの力量が、余裕あるときにのみ望みうることなのである。

八、案内人の面影 その一

修験者の修行した山には、いにしえから登山道も宿泊所の坊などもあったが、日本アルプスには山々を結ぶ道もなく、また山小屋もなく、明治末期から大正初期ごろまでは、登山者は地理に明るい猟師を案内人としたものである。林道も奥深くまではいっておらず溪谷の源流や尾根筋は、林道には用のない地域であった。ただ猟師だけが、カモシカ（当時は禁猟の保護はなかった）やクマを追い岩魚を求めて山といわず谷といわず、よく歩いていたのである。この意味で日本アルプス登山初期の山案内人の功績は大きく、隠れた先駆者といえよう。

当時のすぐれた案内人はみな猟師であった。北アルプスには、上高地の上条嘉門次、大町の大西又吉、伝刀林蔵、芦峠の佐伯平蔵、宇治長次郎、またその後にくもものとして上高地には嘉門次のセガレ嘉与吉、内野常次郎、芦峠の佐伯栄作、宗作兄弟、佐伯八郎、志鷹光次郎、佐伯福松、佐伯文蔵、佐伯利雄、中尾や蒲田に松井憲三、今田重太郎、中島政太郎などがいた。しかしこの二代目のころになると山案内と猟とを兼ねた職業になっていた。しかし彼らが山を歩いたのは、晩春、クマが冬ごもりから出るときから晩秋、積雪の深くなるまでの間であった。

私は前に述べた人々のうち、長次郎だけは知らないが、あとはどの案内人も行をともし知っている。実に彼らはよく山を知っていた。方向を測定するにしても、徒渉の浅瀬を探るにしても、露营地の選定にしても、天候の予想にしても、すべて豊富な経験からくる鋭い勘をもっていた。今日の登山道は、ほとんどみな、彼らが猟のために歩

いた道筋に手を加えられたものといっても過言でなからう。ただ上高地から槍へ行く梓川に沿う道は、後年に作られたもので、そのころ十数回も徒渉しなければならなかった。

ここに山案内人の面影をいまでもその名を知られる嘉門次を通して語ってみたい。嘉門次は島々の自宅でなくなったが、死の床につくまでは生涯、上高地にひとり暮らししていた。茶かっ色のしば犬を一人飼っていたが、他人になつかないけわしい犬で、冬の夜も屋外に寝るとのことであった。後年、立山温泉で、平蔵か宗作のしば犬が朝、積もる雪の中から現われたのを見たことがあるので、猟に使う日本犬はみなそうなのであろう。大正三年の夏、彼と前穂高から奥穂高、北穂高を経て槍、三俣蓮華、上ノ岳、薬師へと縦走したことがあった。彼は火打石を使っていた。当時の案内人はみな煙管を使うので、客人は出発前に彼らのために一袋のキザミタバコを用意する慣例があった。露営のたき火のためには、枯れたかんばの皮と付木とを湿らぬよう油紙に包んでもっていて、雨の中でも生木をじょうずに燃した。登山用のテントはその後に外国の本のさし絵にヒントを得て作ったが、そのころは大型の油紙をハイ松の上に張って、その下に毛布をかぶって寝た。雨が降れば起きあがってみんな油紙をかぶってしのぐのである。

嘉門次は綿入れのちゃんちゃんこを着て、シリ当てる毛皮を背に安眠していた。彼はびっこであったが、若いころクマを追い出そうとして穴にはいり、組み打ちになって、かまれたためといていた。前穂高を登るとき私にネコのように歩くと教えた。踏む足の下から小石でもけ落とはいけないというのだ。一言にして山での足の運びを教えていると思う。薬師頂上の祠にねんごろに生涯の猟の札を述べていたが、それが彼の最後の登山となった。自分でも命数を感じていたのであったらうか。

私たちが薬師から再び太郎兵衛平に下りかけていたとき、濃霧に囲まれて視界がまったくきかなくなった。彼は腰をおろしてタバコを吸いだした。私の催促などには耳をかさず、小一時間もすわっていたが霧に切れ間が現われると、北から南へ歩いているはずのものが、逆に歩いていたことに気づいた。老いの影の濃い彼ではあったが、その勘と判

断とはさえざえとしていた。彼は私のすすめにもかかわらず、里に出るのはイヤだといって、ひとり山道を上高地に帰って行った。

九、案内人の面影 その二

戦後、山小屋の施設や登山道の開発などが進み、夏などは案内人なくして歩けるところが多くなった。一には装備や技術が良くなったことにもよるが、雪線下の山であつてみれば、この変化は当然であつて、かつて、明治から大正へかけて現われたような、案内人の花々しい時代は再び見ることはないであろう。わが国の山での探検的登山時代は遠く過ぎ去つて、山は人々にとつて身近な存在になつたのである。しかし、たとえ小屋はでき、道は整つたといつても、山はいぜんとして深く、天候は変わりやすいのであるから、よいリーダーを欠く初心者は事故防止のため、山に明るい案内人に頼るべきである。少しく目を国外の案内人に転じてみよう。

今日に見る登山の仕方は、百年ばかり前、ヨーロッパに始まつた。アルプス四千メートル級の未踏峰に向かつた先駆者たちは、案内人としてやはり獵師を求めた。しかし、この案内人たちは、山麓に住んでいるものの氷雪の高所には、それまでは縁のないものであつた。だが閉ざされていた秘境にひとたびその熱情を傾けるとなるや、生来の山男だけに、険難な登山をこなす力量を備えるようになった。初期登山史に、彼らの勇敢な行為や強い責任感の話題は数多く伝えられている。そして山の高さ、むずかしさが、いつまでも要求するように、この鍛えあげられたアルプス山案内人の伝統は今日に続いている。

十 山 岳 話

スイスでは山案内人の資格は、幾段階かの国家試験を合格して得るようになってゐる。生命の危険をとまなう高所の登山に対して、十分の技量もち、責任を担うだけの資格が要求されているのである。したがつて、彼らは確固たる信念をもつておつて、未熟な登山者の過当な山への誘いを受けたり、悪天候をおかして登るようなことはしない。

私のスイスに行ったのは一九一九年であったが、それまで育ってきたわが国の山とは全く様相を異にするアルプスに面して、氷雪の技術とか、岩登りの方法などを初歩から習った。わが国には、まだその技術も用具もなかったのである。私はアルプスをしだいに体験として納得できるようになって氷雪の山に向かった。

私の知った案内人たちは、グリーンデルワルト村のアマター、フリッツ・ストイリ、エミール・ストイリ、ブラバンド、サンクト・ニコラウス村のクニウベル、数年後にカナダで知ったグシュタート村のフリーレルにマイリンゲン村のコーレルなどであった。いずれも当時、登山界に名を知られたそうそうたる連中であつた。

アマターは、アイガー東山稜の初登攀を生涯の念願として執心し、フリッツ・ストイリはがんじょうな体軀で、どんな緊張するような場面でもパイプを口から離したことはなく、ブラバンドは長身美男の村の小学校の先生であつた。ストイリは牛、ブラバンドはキリン、小柄な私は山羊というのが三人の間のアダ名であつた。エミール・ストイリは、冗談をとばしながら、メンヒの氷壁に、彼の考案になる大型のピッケルを振るほどの名人である。クニウベルは岩登りの名手で、底抜けに陽気で元気な人柄は人々に好かれた。フリーレルとコーレルは私たちがカナダのマウント・アルバータに登ったとき、回国鉄に招かれてジャスパールに来ておつたのを、私の誘いを受けて一行に加わつた。フリーレルはそのころすでに、エヴェレストのブルース隊長にもなわれて、ヒマラヤに行った経験をもつていたが、口数の少ない温厚な人であつた。コーレルは彼の弟子で、同じように温和な人であるが、ともに山ではすばらしい働きをした。

ヒマラヤの登山に、高所の荷揚げに使うシェルパがある。彼らは心からの山好きでみごとな協力者である。おそろく将来は重装備を要しない登山の案内人に成長するであろう。ガルツェン・ノルプは私たちの隊のシェルパ頭であつた。温和で周密な彼が、部下および四百人のポーターを使う手腕は絶賛に値した。私は多くの山の人々と交わつた。これらの人々は、みな山で苦業をともした私の師匠であり、心の友でもある。

十、山への想念

日本人として、はじめてヒマラヤの峠を越えたのは河口慧海である。一九〇〇年夏、ティーゼ・ラを越えて、チベットにはいったときである。師が第二回のチベット行から帰られたころであった。西藏旅行記に感激しておった私、いろいろとヒマラヤの話をうかがっていたが、一部の人の無理解を言外に嘆いておられたのを記憶している。当時、わが国の人にとっては、チベットやヒマラヤは、まったくの秘境に過ぎなかった。

しかしその後、一九〇八年橋瑞超、野村栄三郎のカロルム越え、一九一二年青木文教のチベット入り、一九一三年多田等観のプータンからチベット入り、一九一八年鹿子木員信のカンチェンジュンガ偵察にいたって、はじめて目はヒマラヤそのものに向けられた。一九二七年長谷川伝次郎のカイラス巡礼とナンガパルバット偵察は、ヒマラヤの風物のみごとな写真によって紹介し、一九三〇年三田幸夫のクル地方の冬季登山につづき、一九三六年、堀田弥一を隊長とする立教大学登山隊は、はじめての本格的な登山として、ナンダコットの初登頂に成功した。以上が今次大戦前までの経過であった。

しかるに戦後わが国登山隊の海外遠征の盛況はどうであろう。一九五二年、マナスル踏査隊にはじまって十カ年間に、ヒマラヤに向かった登山隊および科学調査隊は三十組を越え、初登頂の山は十指に余る。ヒマラヤの他にアンデスに向かう隊も年をかさね、その初登頂の山も十指に近い。婦人だけによる隊もヒマラヤとニュージーランドに行っている。この盛んな海外登山はいうまでもなく、わが国登山人口四百万といわれる山岳愛好の基盤と、その支援とによることであって、世界第一級の登山国に伍している。不遇な河口師の時代に比べ最近十カ年のヒマラヤについての知識、経験と興味の増大とは驚くべきことである。

しかし願みるに、この進展は偶然のことではなくいまから四十年ほど前からヒマラヤへの熱情と、それに必要な訓

練とを積み上げていたのであった。この数多い登山隊は、みな未踏峰の登頂という目的をもっていつているのであるが、その成否にかかわらず、いずれも登山を十分に味わっていることである。その味わい方について思い出すのは一九二六年夏、秩父宮様がアルプスに登られたとき、スイスの山村にまで来て、気を配られていたウェストンさんが、私たち一行が元気で愉快そうに山から下りてくるのを迎えて、日本人の登山はヨーロッパ人とはちがうようだ。少しも苦勞を感じていないのは、おそらく禪の影響と思うと私にいわれた。ウェストンさんは人も知る日本アルプスの先駆者であり、また日本をよく知る英国宣教師であった。私はもとより、失礼ながら宮様も他の仲間も、禪に悟りを開いたとは思われないが、何がウェストンさんに、そのように映ったのであろうか。

エヴェレスト登頂のハント隊長の手に「未踏の地に達する可能性、ただ地球上の最高地点という単純な事実——このことが、われわれを駆り立てる。問題は一切のくだらぬ比較を超越したものだ。このことは、一つのチームとしても、また個人としてのわれわれにとっても身近な問題であった。そこに山の挑戦があった。他の一切を捨ててこれに応じよう」と。またローマ教皇ピオ十一世（一八五七—一九三九）は有名な登山家であったが「私は高い山頂に立つたびごとに、それは自分が困難辛苦を克服したというよろこびもあるが、それよりも高きに登ることによって、一歩前進し神に近づくことを得たという感に浸り、まったく世俗的な一切の幸、不幸から超越して精神の深みよりわきおこるところの生そのものへの歎びを覚えるのである」という。この二つの登山魂は深くかつ尊いものである。

しかしもう一つの魂、それは自分は自然と別個の存在ではなく、その中に一つに生きることのしあわせを覚えるものが私たちにある。あるいはあまりに情緒的、直観的、非合理的といわれるかもしれないが、私たちの精神的風土ともいべきものうちに育まれたこのようなふんい気が、登山にも現われるのではなからうか。（おわり）

（附記）本稿は昭和三十七年七月下旬、十回にわたって毎日新聞に掲載されたものである。本誌への転載にあたり、こころよく承諾された植氏及び毎日新聞社に対し深く謝意を表する。（編者）

コルディエラ・ブランカとアポロバンバ

＝ペルーとボリヴィアの山へ＝

吉 沢 一 郎

チャンスというものはどんな人にも一生に少なくとも一度は、つくればやってくるものと見える。コルディエラ・ブランカ (Cordillera Blanca, 白い山脈) のプカヒルカ北峰 (Pucahirca Norte, 6050m ケチニア語で、赤い山) にしろ、コルディエラ・アポロバンバ (Cordillera Apolobamba, 太陽神の宿駅) の南部に位するボリヴィア領内のププヤ山群 (Pupuya, ケチニア語のプニプニ即ち、黒雲の巨塊、からの転化か) にしろ、前者はコルディエラ・ブランカに残された六〇〇〇メートル以上の最後の処女峰であり、後者はヴィルヘン (処女峰) を数多く持った、全くの未踏査地域。今時こんな願ってもないような場所が、われわれのために残されていたとは本当に夢みたいな話である。

それにしても、こういう事実を私に直接教えてくれたのは次の二冊の本であった。一つは The American Alpine Journal, 1956。この中に Harvey N. Platts の書いた "Nevado Pucahirca" というのがあった。今度のわれわれのプカヒルカ行について大変な世話になったニック・クリンチ (Nicolas B. Clinch) は、この遠征隊のメンバーの一人

だったのである。プラッツの報告の中で六番目に出て来る名前の人のところに、何故照会を出したのか、これは瞭きりは覚えていない。多分カールコルムのマシャーブルム東峰についての問合せなどのことから、二人の間に手紙の往復が始まったのであろうと思う。

プカヒルカ山群の命名法については、プラッツの描いた概念図において、シュナイダー (Erwin Schneider) が一九三六年にたった一人で登ったといわれている南峰 (六〇四〇メートル) が無名になっており、従って南、中、北峰が一つづつ上にずれている。というのはクリンチの説明によると、彼等が行った時 (一九五五年) にはシュナイダーの登ったという南峰が見えなかったからである。彼等はキャラバンの途中でも天気が悪く、あの堂々たる南峰を全然見ていない。余程運が悪かったのである。クリンチの住んでいたバークレー (Berkeley, California) で、彼に彼等の見ない南峰の写真を見せたら、非常に驚いていた。そして、その時私にくれた一九六一年のAAJに彼は次のように記している。

September 23, 1961—Presented to Ichiro Yoshizawa upon our happy reunion in San Francisco. Heartiest congratulations on a magnificent Andean expedition and for making the first ascent of the right North Pucahirca, Nick Clinch.

AAJで「遠征」関係事務を担当 (一九六一年) しているアダムス・カーター (H. Adams Carter) からその後、AAJに簡単な報告を出してくれとの依頼が来たが、その中でプラッツ隊の登った (但し真の頂上には立っていない。然し特徴あるあの雪庇の頂上二〇フィートまで行ったから、真の頂上よりは高いといっている) 峰をアメリカンス・ピーク (Americans' Peak) と書いている。われわれは世話になったクリンチに敬意を表して、これをクリンチ峰と名づけていたが、やはりカーターのいう方が穩当であろう。従ってプラッツの書いている山名 (AAJ, 一九五六) は、アンヘレス峰以外全部訂正せらるべきである。

クリンチ達は北峰へ行こうとしてアメリカ人峰の西面を覗いたが、これは問題外。然し急斜面をアメリカ人峰の東稜にトラバースし、それを頂上までつめ、そこから急傾斜の水壁をコルに下って北峰に登るといふことの可能性を見出した(だが事實は、これも相当なものである)。それにはもう一つこのコルにテントを張らねばならない。食糧も残り少なくなり、それをやりとげるには不充分、そして……then everyone returned to Camp II, leaving North Puchirca for future expeditions. とまあこういふ次第であつたのである。

一九五七年にはランベール (Raymond Lambert) の率いる瑞仏隊が中央峰(六〇〇〇メートル、実際はもう少し低いと思われる)を狙い、ケブラダ・サンタ・クルス(Quebrada Santa Cruz、谷)經由でやって来た。隊員の中には偶然にもヒマラヤのチョー・オユー(Cho Oyu, 8153m)と一緒に死んだ(一九五九年)クロード・コーガン(Claude Kogan)とベルギー人のストラッテン(Claudine Vander Stratten)の名も見える。

彼等はワラス(Huaras、偉大なる夜明け、という意味)からリオ・サンタ(Rio Santa)を下り、カラス(Caras)よりサンタ・クルス溪谷を遡り、プンタ・ウニオン(Punta Union, 4750m、峠)の下にBC(4114m)、四日後に峻峰タウイラフー(Tauillraju, 5830m)の氷河末端の堆石上にCI(四七〇〇メートル)、それからプカヒルカ山群とタウイラフーの間のコル(五三〇〇メートル)を越え、巨大な氷河上の雪原を横断し、中央峰南面直下にCII(五三九四メートル)を建設した。

はじめは東稜が容易に思われたのでこれにとりついたが、雪が悪く数日後に放棄、今度は西稜(むしろ南稜か)への上っている南東支稜を攻撃し、七〇〇メートルの岩場と闘い、一日のビバークの後漸く西稜に出た。最初はいけると思えたが、頂上から四、五〇メートルのところで大きなクレバスにぶつかり(稜線上に大小のクレバスがあるのが、ペルー・アンデスの特徴の一つ)、これがどうしても乗りこえられず、遂に退却と決った。

プカヒルカの中央峰は、懸垂氷河が山頂におかれたように大きな氷塔から出来ている(南緯八度五〇分の氷雪の特質によ

る。二週間早かったら雪橋により通過出来たかも知れないといっている。

二度目の中央峰攻撃はイタリアのベルガモ隊 (Spedizione Bergamasca, 隊長はB・メルレンディ Bruno Berlandi) が一九六〇年に行った。ルートは大体ランベール隊と同じ。但しBCは瑞仏隊のCIの地点。CIがコル(五三〇〇メートル)、CIIは五六〇〇メートル(瑞仏隊の最高Cと同じ)。CIIIは西稜上五九〇〇メートルに設置して、そこから頂上攻撃も行った。然しオーバーハンクに近い深い雪壁に阻まれ、頂下二〇メートルにして涙を呑んだ。それでも瑞仏隊よりは三〇メートル高く登ったといっている。この攻撃隊は Calegari, Farina, Poloni, Rossetti の四名からなっていた。(Club Alpino Italiano, "Rivista Mensile", Vol. LXXIX, N. 7-8, 1960)

最後が一九六一年、山名の不明確なことから一橋隊とは競合の形となったが、実際は別々の峰であった。

詳細はまだ不明だがトリノから来たイタリア隊で、隊長はジウゼッペ・ディオニシー(Giuseppe Dionisi, 四七才)。ルートはベルガモ隊と全然同じ。南東支稜の登攀にはやはりえらく時間がかかり、且つ苦勞したらしい。然し登攀隊は六月一三日、一橋の第二隊が北峰に立ったのと殆んど同じ時刻に、彼等も又雲につつまれた中央峰の初登頂に成功したという。四七才の隊長もその中にいたということは大いに賞讃していいと思う。われわれの隊の丸山と倉知の二名は北峰登頂後、われわれのCIIからイタリア隊のBCを訪れ、大いに歓迎された。但しこれはわれわれの予定になかった行動なので、他の隊員に大変な心配をかける結果となった。一日位の違いは大勢には影響しないとしても、精神的な苦痛は大きい。遠征においてはそれがたとえ国際親善に役立つことではあっても、自分勝手な行動、隊長の許可のないことをやるということは、それ自身隊員としての資格を放棄するに等しい。

それにしても私にとつていまだに解せないのは、ランベールにしても二つのイタリア隊にしても、何故一番高い北峰を狙わず、それより五、六〇メートルも低い中央峰を一所懸命に攻撃したか、ということである。結局、彼等が北峰がアメリカ隊によって、すでに一九五五年に登られてしまったという誤認に基づくものと考えるより外はない。そ

うとすればわれわれは、益々千載一遇のチャンスに恵まれたということになる。

プカヒルカの方の前置きが大部長くなつたが、次はアポロバンバの方の故事來歴に移ろう。

アポロバンバの南部にウエランカヨック (Huelancallo, 5836m) という山がある。別名をカニウマ峰 (Canuma, アイマラ語で「汚ない水」の意)、又はハツチャ・クチュエ峰 (Jaccha Cuchu, アイマラ語で「大きな」片隅、大水河の曲り角にあるからである) というが、この山は一九五七年七月一八日北稜からドイツ山岳会のウエルナー・カルル隊 (Werner Karl) が初登頂した。

そしてその頂上から南方に延々とびる処女峰の宝库、プピヤ山群を発見したのである。その報告を私は *Jahrbuch des Deutschen Alpen-Vereins, 1958* で見た。彼の “Anden-Kundfahrt 1957 der Sektion Berchtesgaden des Deutschen Alpenvereins” の中の結語にこう書つてある。——Die gewaltige Kette der Hochkordillere birgt noch viele wenig bekannte und manche unbekante Gebirgszüge. In ihren Klüften und Flanken, auf ihren Graten und Gipfeln wartet des grosse Abenteuer der Tat.——

私の心はこれを読んでおどつたのである。

それにカルルはもう一つ、アポロバンバ北部のカイエホン (Callejon, 5824m, スペイン語で「狭い廊下状の谷」) の南東尾根上に、五九九八メートルの未登峰を記している。これも一つ登つてやれと思つた。そして、ここまで来るなら序でにアポロバンバの最高峰たるチャウピ・オルコ (Chaupi Oreo, 6044m, ケチュエ語で「中心の山」) のこの辺の地名はアイマラ語とケチュエ語が錯綜していてややこしい。それに両語が同じ場合もあるので全く厄介である。ボリヴィア発行の地図にはヤグワ・ヤグワ Yagua Yagua とある。意味不明。並びにその付近にある手応えのある山にも登りたいものだ、というようなことで、えらい大仕事は欲ばつた計画になつてしまつたが、それには折角南米くんだりまで行くのなら、可能な限り広く歩こうではない

か、ということも私の頭の中にあつた訳である。

さてそこでアポロバンバ北部まで足を伸ばすと、又その研究もしておく必要がある。そこへ丁度旨い具合に、私がロンドンの地理学協会が発行しているジオグラフィカル・ジャーナルの一九六〇年三月号を克明に読んでいた時、偶々その一一三頁に、ロンドン大学のインピアリアル・カレッジが出したジオフレイ・プラット (Geoffrey C. Pratt) を隊長とするアポロバンバ遠征隊が、その報告書を協会に寄贈したということを見つけた。地図が四枚、その他にスケッチもあるらしい。これを入手した経路について話すと、可なり長くなるのでこゝでは省いておこう。クリンチもタスマニアのレイキンも、これには一役買ってくれているのである。

ペルーとボリヴィアの国境は、大体西経六九度の線に沿って南北にのびている。その一部がアポロバンバ山群の背稜を通っているのだ。

一九一一年から一三年にかけて英国の地理学協会は、ペルー並びにボリヴィア両政府の合議になる国境確定委員会の依頼によって、専門家を現地派遣し、二五万分の一の地図を作成した。登山とは直接関係はないが、外国人がアポロバンバに入った大規模な遠征隊としてはこれが最初のものであろう。

その後、年代は瞭つきりしないが、少なくとも一九三二年以前に、ボリヴィアの陸軍大尉がパロマニ・グランデ (Palomani Grande, 5769m) に登ったと云う。(Friedrich Ahlfeld, "Die Alpen" 1932, p. 132)

それからが近代的な遠征、登山となる訳で、その第一が前述のドイツ隊、これは一九五七年であつて、主としてアポロバンバの中央部で活動した。チャウピ・オルコの第一登、コロロ (Cololo, 5915m, — Kollu なら単に「山」というアイマラ語)、その他の初登頂をやつてゐる。

一九五八年の遠征隊はCAI、ミラノ支部が派遣したもので、隊長はロマノ・メレンディ (Romano Melendi)。これは主として北部を歩いてゐるが、登った山の高度が全然出鱈目、二〇〇—三〇〇メートルも公式のものより高く

なっている。それに自分達の登った山にやたらにイタリー人の名前やイタリー山岳会峰などつけてみたり、その作った地図を見ると妙なところが沢山ある。四八〇〇メートルのアパチエタ・デ・イスカイクルス (Apacheta de Iscaycruz, 普通の解釈ではケチュエ語で、『二つの十字路(架)の峠』となる。アパチエタ又はアパチタはケチュエ語でいうと、『旅の途中で死んだ人を埋めた飯の墓の上に積上げた石の塔』、飯の墓、新しくは『聖所』となるが、アイマラ語では『山の頂上』又は『高くて寒い所』という意味である) の上を大きな河が北から南に流れているし、私の登ったカカワイチヨ (Cacahuaycho, 5450m, ケチュエ語で『鳥の山』) 及びその付近の稜線も何一つ入れてない。兎に角大変な遠征隊ではある。

次は前出一九五九年のG・C・ブラット隊。彼等は主として中東部で活動している。彼等の報告は A.A.J. 1960, "Nudo de Apolobamba" by Geoffrey C. Bratt 及び G.J. Vol. 126, Part 4, Dec. 1960, "Exploration on the Bolivia-Peru border", by W.H. Melbourne にも出ているから読んで頂きたい。尚この年にはペルーのモラレス (Morales) よりの情報によると、『メキシコ隊がアポロバンバに入ったという』が詳報がない。

一九六〇年にはスイスの前出ランベールがフリアカ (Tuliaca, ブーノ、アレキバ、クスコへの鉄道の分岐点) からワンカネ (Huancane) 經由アナネア (Ananea, 5841m) に挑んだが、頂上までは行けなかつたらしい。ランベールは『ヒマラヤの悲運児』といわれているようだが、アンデスでも又恵まれぬ山男である。

そして一九六一年、それがわれわれの隊となるのである。一橋大学アンデス遠征隊は同校の創立八五周年と同校山岳部の四〇年(私はその誕生以来の部員である)を記念して組織され派遣された。名目は立派だが資金集めには苦勞した。個人的には会社をほっぽり出し、家庭のことも忘れて出かけてしまった私を狂い扱いにした人もある。常識的には無理からぬことであろう。兎に角、一橋関係だけではない多くの理解ある先輩、同輩、後輩の諸氏、朝日新聞社、日本山岳会その他の登山団体の人々、それに外国の登山家達の支持によって、われわれは遂に日本を後に目的地に向うこ

とが出来た訳だ。

一橋大学ア ند ス遠征隊隊員

隊長 吉沢一郎（当時五七才、以下皆同じ）電通映画社専務を棒に振り遠征隊に参加、帰国後電通社長吉田秀雄氏その他の人々の取計らいにより、全日本広告協議会の事務局長、そして現在に至る。昭和三年、東京商科大学山岳部卒業。

副隊長 甘利仁朗（二七才）昭和三三年一橋大学（これも山岳部組）卒業。八王子にてワカバ衣料自営。日本山岳会の講習会には講師として時々顔を出す。

隊員 中村 保（二六才）昭和三三年卒。石川島播磨重工勤務。長身でボサツとした猫背の彼が、昭和三四年の暮も押し詰ったある曇った日の夕方、突然映画社にいた私を訪ね、ア ند スへ行きませんかと切り出した。この日から私の生活は変わってしまったのである。

隊員 丸山則二（二六才）昭和三三年卒。三井物産勤務。途中から山岳部に入ってきたので、隊員に加えるには多少問題があったが、中村とともにスペイン語を勉強していたので、涉外係として参加させた。

隊員 中川滋夫（二三才）昭和三六年卒。伊藤忠商事に入社が決定していたが、帰国まで延ばして貰った。会社は喜んでOKしてくれた。伊藤忠も偉いが、色々の意味でこんな優秀な人間はいないと思うので、その好意は会社にとつても、決してムダではなかった筈である。

隊員 中島 寛（二三才）右に同じ。出発前に日立金属入社決定。中川にいったことはその儘、中島及び日立金属にあてはまる。

隊員 倉知 敬（二三才）経済学部在学中、昭和三七年卒業予定。よく小まめに働らいてくれた。学生は彼一人。序でにポーターもここで紹介しておこう。ワラス（ベル）で働ったもの三人。

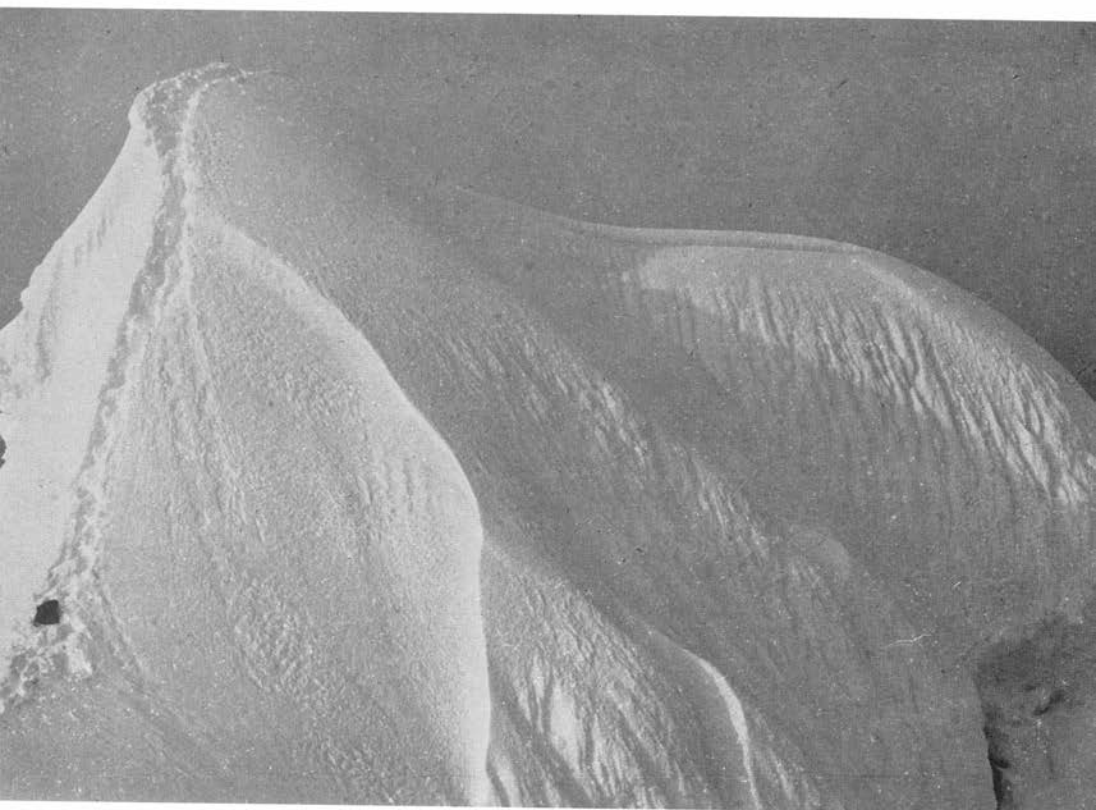


ブカヒルカ北峰のCII からCIII への登行
Ascending from CII to CIII on Pucahirca Norte, Cordillera
Blanca.



ブカヒルカのベースキャンプでの吉沢隊長と甘利隊員

Yoshizawa, the leader (right) and J. Amari (left) at the Base-camp of Pucahirca Norte.



ブカヒルカ北峰の頂塊

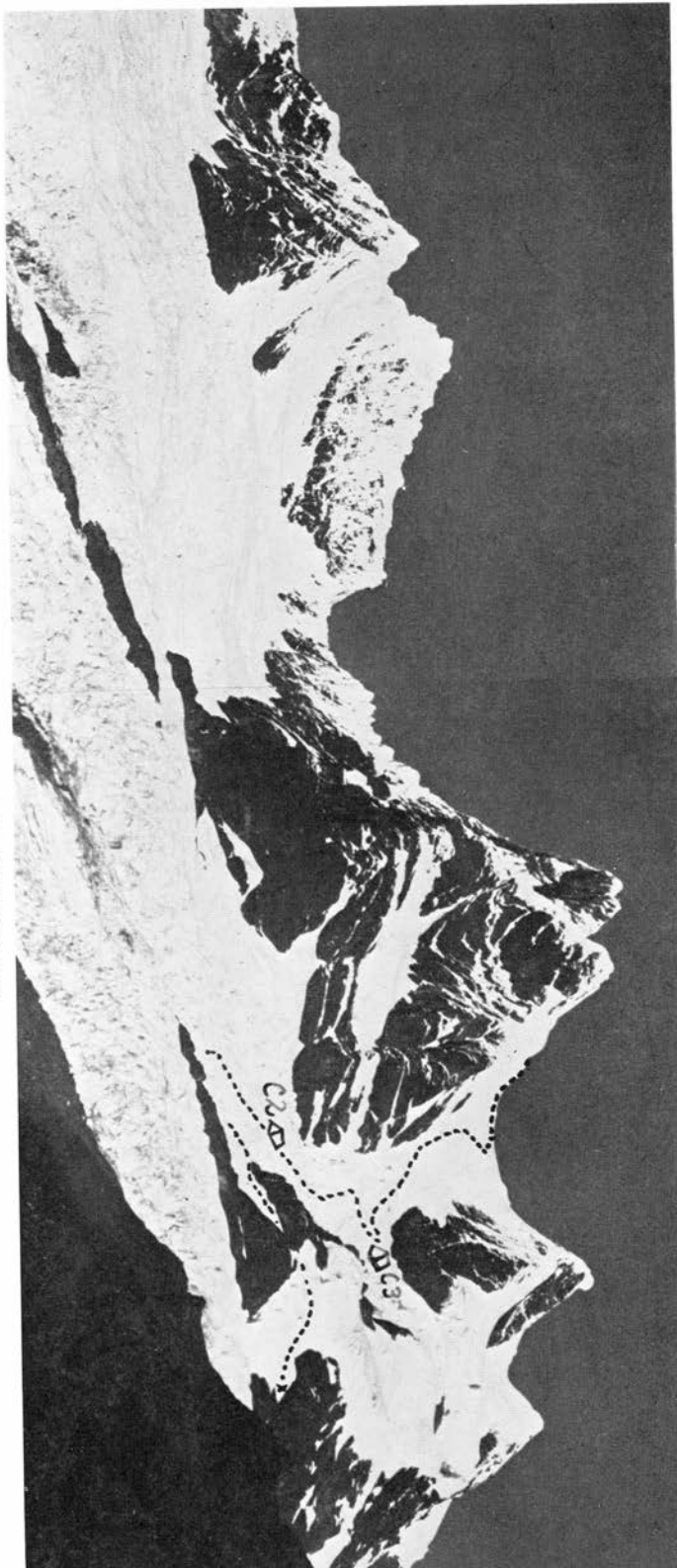
The real summit of Pucahirca Norte.

Pucahirca Central
↑ (6000m)

Pucahirca Norte
↑ (6050m)

Americans' Peak
(6030m) ↓

Angeles Peak
↓



—ヤナハンカ谷の東尾根南部から—
Pucahirca Norte seen from the southern part of the east ridge of Yanahance Valley.

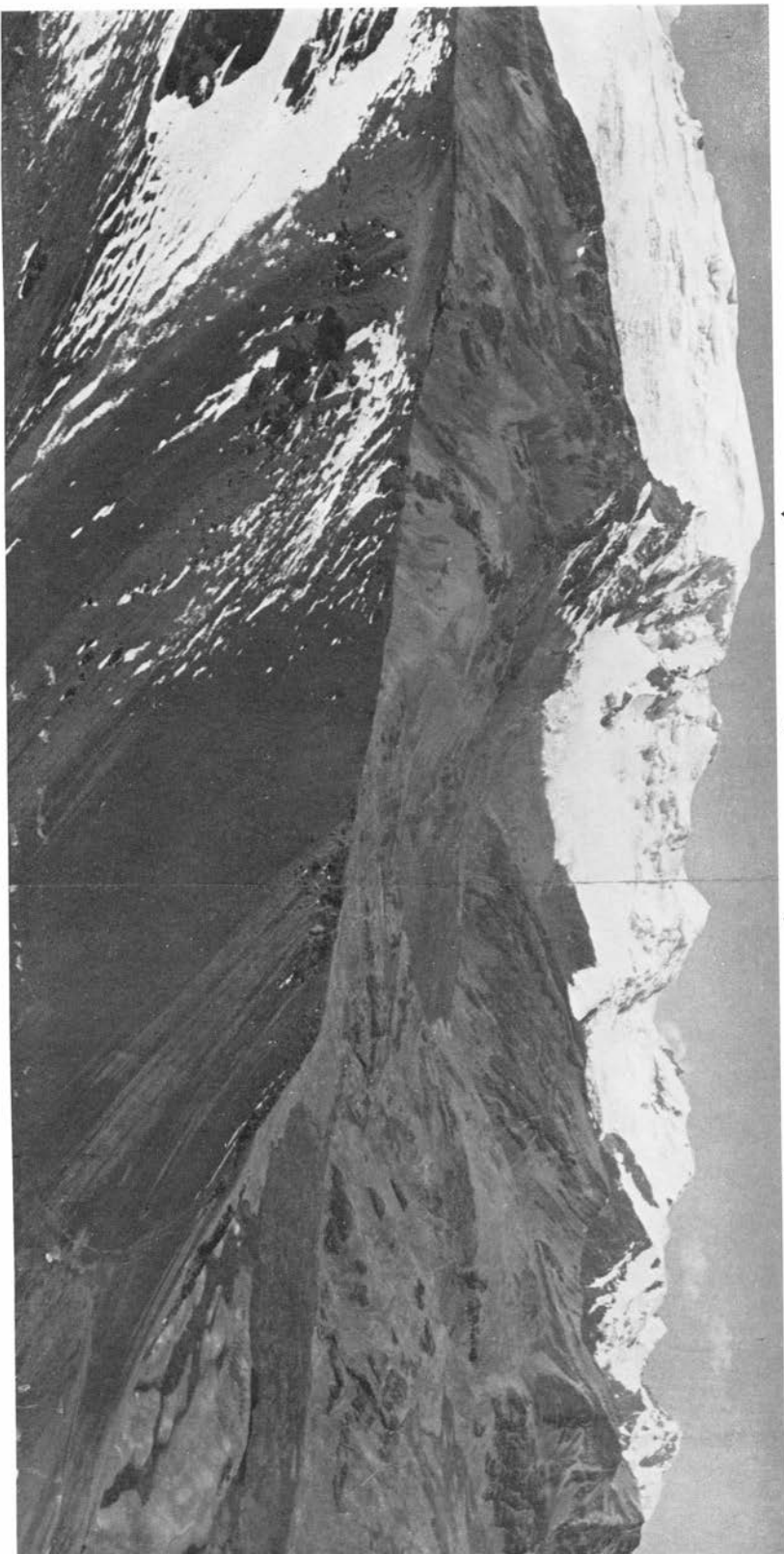


チヨウビ・オルク—サユ—ヨから—

The most left peak is Chaupi Orco Norte (c.6000m) (Center Peak) and the right big one is Chaupi Orco (6044m) the highest peak in Cordillera Apolobamba, taken from Salluyo (5808m). Las Tres Mujeres in the foreground.

The western side of Pupuya group. (Lago Caniuma is seen in the center of the picture.)

ププヤ山群の西面



← Huelanccallo
5836m

← Casalala
5700m

← Canisaya
5750m

← Torre Boliviano

← Cavayani
5700m

← Yanaorco
5600m

← Acamani
5700m

エミリーオ・アンヘレス (Emilio Angeles, 36) 一九五一年、仏白隊 (コーガン) のアルパマヨ攻撃にアリエロ (Ariero, 馬方) として参加。一九五三年、ハンス・キンツル (Hans Kinzl) のドイツ科学隊に加わりワイワシユ (Hayhuash)。一九五四年、レイ・オーテンバーガー (Leigh Ortenburger) の北米隊に備われ、ワスカランやコントライエルバス (Contrahierbas) に入る。一九五五年、クリンチ等のプカヒルカ山群に H A P (High Altitude Porter) として加わる。アンヘレス峰とは彼の名をとったもの。一九五六年、G・バンド (George Band) 隊とともにヴィルカバンバ (Vilcabamba) 山群に入り、プマシヨ (Pumasillo)・ワガルンチヨ (Huagalunchu) 等偵察。一九五七年、H・クリエル (Hans Klier) のオーストリア隊に参加、ワイワシユのヒリシヤンカ (Jirishanca)・エル・トロ (El Toro) 等に挑む。一九五九年、シエッツ (Ruedi Schütz) のスイス隊に従ってヴィルカバンバ入り。同じくモラーレスとワスカラン。又オーテンバーガー隊とワンツァン (Huantsan)・サンタ・クルス、ワスカランへもっている。一九六〇年、ベルガモ隊とともにプカヒルカの中央峰へ。一九六一年、一橋隊、プカヒルカ北峰。尚、エミリーオの兄弟は三人とも有名且つ有能なポーターである。

デメトリオ (Demetrio Natividad Henostroza, 21)

一九五八年、モラーレスに従ってワスカランへ。一九六〇年、ドミンゲス (Dominges) のブラジル隊についてプ
ランカ山群。職業は仕立屋。

パブロ (Pablo Morales Flores, 21)

一九五七年、瑞仏隊に備われ、ランベールについてプカヒルカ中央峰、プカランラ (Pucarana)・カイエシユ (Cayesh) 等に行く。一九六〇年、ケンダー (Kender) の北米隊とともにウルタ (Ulla)・チョピカルキー (Chopica-Iqui) へ。

尚、彼の両親の名は Felit Morales Vargas 及び Fulio Flores Alboral である。

ボリヴィアのラ・パスで山岳会から推せんされ備ったポーターは

ベナンシオ (Venancio Pachaway, 30)

彼等山岳会の幹部のいうところによると、ベナンシオはドイツ及び英国隊について二回アポロバンバに、その他アルのワイナポトシ及びイリマニにもポーターとして行っているという。雪の上では四〇—五〇キロの荷を背負うといったが、事実は反対で、こんな役に立たないポーターなんて滅多にいない。雪上技術もなっていないし、三、四年前に行ったところなのに、碌に地理も覚えていないのである。

フリーオ (Julio Choque, 18)

ベナンシオの妻君の弟だという。大人しい青年だが、遠征隊について来るだけの資格はない。荷も余り担げないし、二人とも料理は出来ない。出来るのはラジウスに火をつけて、アグワ・カリエンテ (Agua Caliente, お湯) をつくることだけ。それでも一人一日一五、〇〇〇ボリヴィアーノス (約五〇〇円) だった。ボリヴィアにはこの程度の人夫しかいないことを、よく心得ておく必要がある。

遠征日誌

昭和三十六年 (一九六一年)

(三月一七日) 中村、丸山、昭川丸 (川崎汽船) にて横浜発。

(四・二) 中川、中島、倉知、荷物 (約三屯) とともに玖馬丸 (川崎汽船) にて横浜発。

(五・九) 吉沢、甘利、羽田発 (JAL)。

(五・一九) 全員リマ集結。

(五・二五) リマ発、ワラス着。

(五・二七) ワラス発。

- (五・三二) プカヒルカのBC (四〇〇〇メートル) 着。
- (六・一) ルート偵察、高所キャンプの建設開始。
- (六・二) CI (四七〇〇メートル) 建設。
- (六・七) CII (五一五〇メートル) 建設。
- (六・一〇) CIII (五四〇〇メートル) 建設。
- (六・一二) プカヒルカ北峰 (六〇五〇メートル) 初登頂 (中村、中川、中島)。
- (六・一三) 同じく (甘利、丸山、倉知)。
- (六・一七) 全員BC集合。
- (六・二二) BC撤収、帰途につく。ポマバンバ (Pomabamba, 約のいる宿場)、パサカンチャ (Pasacancha)、フヤンカ (Hualla-nea) 経由。
- (六・二五) ワラス着。
- (六・二八) ワラス発、リマ着。
- (七・四) リマ発、ボリヴィアへ。
- (七・六) ラ・パス着。
- (七・一五) ラ・パス発、アポロバンバへ。
- (七・一六) チョクニャコータ (四六五〇メートル) に第一BC建設。登頂峰については一覽表参照のこと。
- (七・三〇) 先発隊第一BCよりプロポの第二BC (四七〇〇メートル) に移動。
- (八・六) 全員第二BC集結。この間先発隊はプチャ山群の偵察を行う。
- (八・七) 二隊に分れてプチャ山群へ出発。一三日までに五峰登頂 (一覽表参照)。
- (八・一四) 全員第二BC帰着。
- (八・一六) 第二BC撤収、ラ・パスに向う。
- (八・一七) ラ・パス着。

(八・二二) ボリヴィア大統領と会見。

(八・二三) ラ・パス発、ペルーに向う。

(八・二四) プーノ経由クスコ着。

(八・二六) マーチュー・ピヒチューその他に向う。

(八・二九) クスコより飛行機にてリマへ(隊長)。

(九・一) 全員リマ集結。

(一〇・二) 隊長はニュー・ヨークのアメリカ山岳会で講演の後、パークレー(カリフォルニア)のファークハール及びクリンチを訪問、報告並びにヨセミテ見学を行い、ホノルル経由にて羽田着。

(一〇・一七) 甘利、フィラデルフィアにての自社の用件を済ませ、アラスカ経由にて羽田帰着。

(一一・三〇) 経済調査、船の都合等でリマに残っていた中村、丸山、中川、中島、倉知の五人は、一〇月二三日カイヤオにて川崎汽船の第五真盛丸に乗船、太平洋を無事のりこえて横浜に入港、午前一一時上陸。これで全員無事故で故国に戻ることが出来た。

第一部 プカヒルカ北峰の初登頂

アンデス特にペルー及びボリヴィアにおける南米背稜山脈の天候は、五、六、七の三カ月間非常に安定しているといわれている。然し一般に規則には例外があるように、こゝでもそれは適用される。

特にコルデイエラ・ブランカの北部に位し、而もその最も東に張り出し直接アマゾン地帯に面しているプカヒルカ山群の場合には、その例外現象が極めて顕著に現われている。BCが晴れていてもCII、CIII等はガスに包まれ、時には雲、霧に見舞われることもある。五〇〇メートル以上の高所では午前中から午後にかけてガスに被われることが屢々で、難所の登攀には可なりの障害になる。

夜明けがおそく、その反対に黄昏が殆んどないからビバークの覚悟が必要になる。その代り、強風が吹かないことは気持ち非常に楽にする。

雪と氷は緯度（南緯八度）の関係から非常にねばりがあるし、氷は硬い。他の場所を知らないから比較は出来ないが、雪庇の発達が極端で、これによる事故の発生も珍らしくない。高い稜線上に直角に巨大なクレパスが出来るのは、ヒマラヤでは見られない現象であろうか（勿論例外はあると思うが）。頂上が雪や氷で出来たマッシュルームそっくりの写真がよくあるが、全くあの通りである。従って少くともブランカでは、ある峰から峰への縦走なんていうことは殆んど考えられない。

氷も硬軟色々あるが、硬いところではピッケルもうけつけない。ハーケンも平型、筒型はダメ、たたいっているうちに頭が曲ってしまう。コの字型のはよかつたようだ。

雪が急斜面に腰まで潜るほどついているので、確保のためには可なり長い（二メートル位）而も軽いスノー・バーが必要である。われわれはこれを四〇本持つていったが、殆んどみんな使い且つおいて来てしまった。日本を出る時、手違いで出来るのが遅く、到々船便の間に合わず、飛行便で持つていったため、えらい高価なものだったが、これになかったら成功は覚つかなかつたらう。

アイゼンは十二本爪が有効、縄梯子、脚立、ともに役に立つ。

偵察、ハイ・キャンプ建設、登頂、BC撤収

ヤナハンカ谷（Yanahanca, ケチュア語で『黒い雪』）のイチガイコ（Ichigako, 小牧場）にBCを設けた翌六月一日（曇後晴）から、早速攻撃体制に移る。

リマからコノコチャの峠 (Conococha, 4080m, ケチュ語で、温い湖、湖はアイマラ語ではユータ Coota となる) を越えワラス、ワラスからユンガイ (Yungay, これも、温い) を経てヤンガヌコ (Yanguico, ワラスの博物館長にも意味がわからない程古いケチュア語とかいう)。それから本当のキヤラバンを三日続けてBCについたのだが、途中に四五〇〇メートル前後の峠がいくつもあったので、皆ソロチエ(高山病)は通過済み。全員健康状態は上乘であった。

中島とエミリオがまず先陣だ。一段上に出ると左に大きな草つきの壁が現われ、岩のバンドが幾つも階段状をなして重なっている。それがわれわれのルートとなる。ところどころにケルンがある。六年前にアメリカ隊が立てたもの。四七〇〇メートルのところで氷河の末端に出る。CIはここにきめる。アメリカ隊と同じ場所。クリンチ達の寝たあとが二カ所、平らになって残っていた。

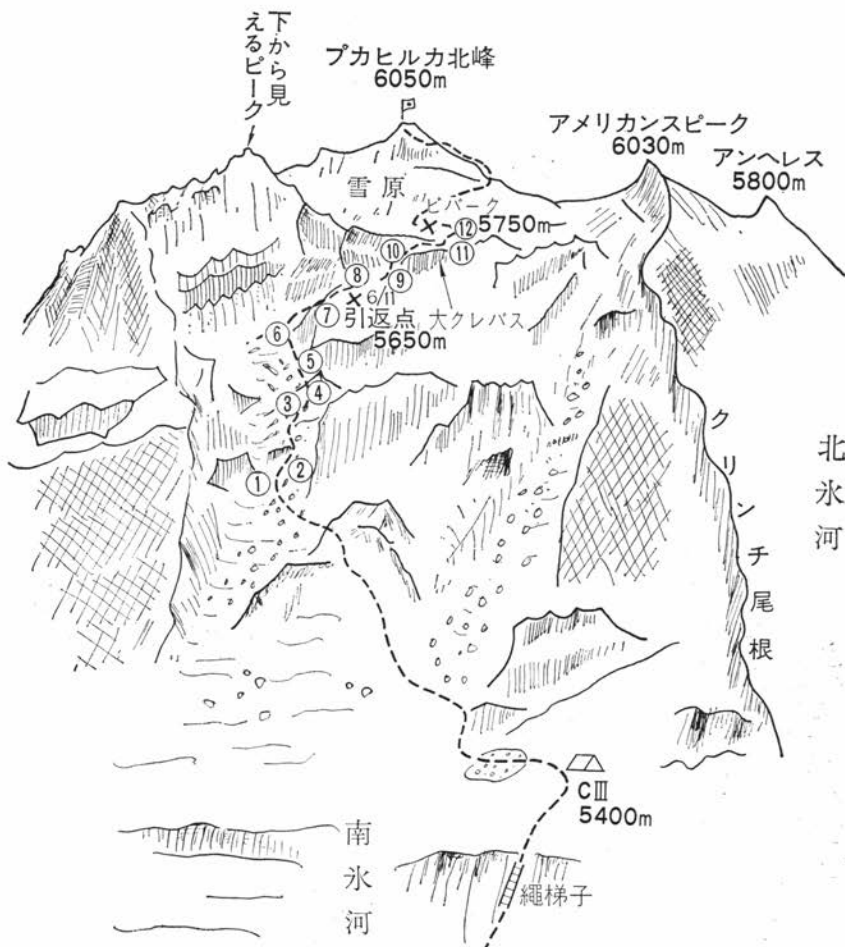
氷河末端の突破はなかなか難しかった。結局左側の三〇メートルの壁(約五〇度)にザイルを固定してBCに戻る。無線機は旨く働らいてくれた。BC、CI間登り二時間半、下り一時間半、但し私は四時間かかった。

六月二日(晴)は甘利他CI入り。三日(曇後晴)クリンチ尾根下北氷河の偵察。四日(晴後ガス、夜雨、雹)氷河末端から登り左(南)へ少しづつ雪面を登っていくと大雪原に出る。この中心にデポーをつくる。二隊に分れてクリンチ尾根右の北氷河上部と下部を探る。上部からクリンチ尾根をこえて南氷河に入れれば近いのであるが、この尾根の南側は全部断崖で下降不可能。下部を探っていた中村達が遂に立派な岩棚を発見して南氷河への鍵を握った。

五日(晴後ガス)ポツカ。六日(曇後曇)動かず。七日(上は曇時々雨、下は晴後ガス、BCは晴)甘利、中川、南氷河のCII(五一五〇メートル)予定地到着後CIへ戻る。八日(晴)CII建設。岩棚から氷河の尾根に出て南氷河に下るところに(五〇度)四〇メートル一本固定する。隊長CI入り。九日(快晴)中村達、南氷河を登りCIII(五四〇〇メートル)予定地発見。途中に三〇メートル一本固定。隊長CIIを見下ろすところまで丸山と往復。一〇日(晴曇晴)CIII建設。途中のクレバスにアルミの脚立、CIII下に縄梯子。

プカヒルカ群概念図





- | | | | |
|-----|-------------------------------|-----|---------------------|
| ①—② | 第1ピッチ | ⑦—⑧ | 第6ピッチ |
| ②—③ | 第2 " | ⑧ | 6/11引返点 |
| ③—④ | コンティにてク
レバスをへずる | ⑧—⑨ | トラバース |
| ④—⑤ | 第3ピッチ | ⑨—⑩ | 上のテラスへの
氷壁の直登 |
| ⑤—⑥ | 第4 " | ⑩—⑪ | テラス |
| ⑥—⑦ | 第5 " (70°の
氷壁, 非常に難し
い) | ⑪—⑫ | 大クレバスの通
過(最大の難所) |

プカヒルカ北峰ルート図

一日(晴曇) 甘利、中島、倉知、CⅢより試登開始。引返点(五六五〇メートル)までに固定綱四本張り(五〇、三〇、一〇、三〇メートル)、CⅢ經由CⅡに下る。隊長、中川の案内でCⅡに登る。

甘利等は七時一五分にCⅢを出発。台地から氷河の本流に下り、左側の氷瀑の中に入ったが、氷のブロックが落ちていたので猛スピードで通りぬける。ルンゼを見上げると幾段ものクレパスが見え、前途の困難が予想される。

氷瀑右側の壁にルートを求め、四〇メートル六ピッチ。クレパスの端に出る。大クレパスの上の急な雪壁トラバース、三ピッチ。その上の青氷の急壁、五ピッチ。これは特に悪い。六ピッチの間にスノー・バー三本、アイス・ハーケン八本、固定綱。氷棚に出たところで二時となったので引返す。

第一登頂隊の行動

六月一二日(上方、曇、雪、曇、下方、晴、曇) 中村、中川、中島の三人。CⅢ(五・四〇)、甘利隊引返点(九・〇〇)。ここまでは固定綱があつたので三時間半で来る。これからは手探りの前進となる。サブザックは一五キロ、ビバークの用意あり。四〇メートル一杯のトラバースから上の台地への急氷壁の登攀。コの字二八センチの氷ハーケン三本で這い上る。ステップ・カットの連続。上の台地にあがると初めて北峰の全貌が眼に入ってきた。

意外なことに今まで苦労して登攀し続けて来た氷河が、北峰とアメリカ人峰との間から落ちてきている大氷河の末端に過ぎず、その先遙かの彼方まで雪に被われた大氷原が続いている。而もこの境目に幅一〇メートル、深さ不明の薄気味悪い巨大なクレパスが拵がっているのである。

朝からガスに包まれ通し、曇さえ降って来るので陰うつなことこの上なし。それに何処をみても渡れそうのないこの大クレパスだった。最後の手段として、ブロックの詰った底の浅くなったクレパスの中に下りてみる。大きなローソクのような氷塔の上が、アッパー・リップの雪庇とつながっている。

中川トップで二〇メートルのテラテラな青氷の壁を攀じ登る。氷バイルでステップをきり、ハーケン四本、微妙な

バランスを要するアクロバート。それでも一時間半で氷塔を登り切り、裏側にあった雪橋を渡って対岸の中段に無事立つことが出来た。午後二時半である。この頃天候は益々悪化して来た。

主稜線目指して黙々と大雪原を横切っていく。クレバス二カ所、二回とも左へ廻り込んで向側に出る。コルに達しない内にガスが切れて北峰が又現われて来た。コルより少し高い南側で稜線に出る。五時であった。頂上直下は一〇〇メートルばかりの急な雪壁だ。自分の年だけ歩いて呼吸を整える。

頂上には六時一五分についた。CⅢから一二時間半かかった訳だ。ここは雪庇の上で非常に不安定。ガスの切れるのを待ったが、諦らめて六時四五分、旗を残して下る。

漆黒の暗闇の中をライトだけで雪壁下降。大クレバスの上唇でビバークとする（九時）。

装備は完璧だが、零下二〇度Cでは仮睡も許されない。南十字星が中天にかかる。一杯のミルクで夜明けを待った。一三日無事CⅢへ。

第二の甘利隊は第一隊が一二日にCⅢに戻って来ないので、多少心配だったが兎に角出発。天候不良（曇一時小雪、晴、曇）。一時間で引返点につく。この頃、上のテラスに第一隊の姿が見えた。テラスの上で一時間半も待った。彼等も疲れているとみえ、なかなか下りて来ない。然しその成功を知ってともに喜ぶ。

頂上で雪面をならし、ツェルトをかぶってガスの晴れ間を待ったがダメ、第一隊が埋めた旗を掘出しスノー・バーにつけて立てる。三〇メートル下った時に、とうとうガスが晴れてくれた。あとできくと、丁度この頃、イタリーのディオニシー隊は、同じくガスに包まれた一つ南の中央峰に立っていたらしい。

前に述べたようにプカヒルカにおいては風はあっても弱く、烈風がないのでビバークしても安心だ。気温はプラス三〇度からマイナス二〇度C。従ってこの温度差に堪えられる身体を持ち主でなければならぬ。然し湿度は低いので登攀は快的である。ガスはしょつ中出るが、午後四時から朝の九時までには大体安定している。

底雪崩も表層雪崩も殆んどない。総てブロックの崩壊。随分おっかないのが、方々に立っている。雪は乾季でも山
上では殆んど毎日降る。然し量も少なく、よく乾いた雪である。

一三日、隊長はC IIよりC Iに戻り、更に足をのばしてB Cに下る。一四日(晴、曇、時々雪)中島一人C IIより
約二時間でB Cに下り、登頂成功を隊長に報告。

ここで序々に注意しておきたいことは、アルパマヨ (Alpamayo) が、もしプカヒルカの北峰を六〇五〇メートル
とした場合、決して六〇〇〇メートル以上の山でないこと。多分、五九八〇メートルとすれば余り間違いない高度
となろうということである。それにこの山をシッキムのシニオルチューにも比すべき、世界で最も美しい山の一つに
数えている人も多いが、それは西側からみてのことで、東面からでは決して美しくない。だからどうというのではな
いが、一応ご報告しておく次第。尚アルパマヨとは「土砂の流れ」という意味らしい。

プカヒルカ北峰登頂時間表

C III—頂上—C III

隊別	隊員名	月日	C III 5400m	引返点 5650m	大クレパス	ピナーク 5750m	主稜線	頂上 6050m	ピナーク 5750m	引返点 5650m	C III 5400m	C II 5150m
試登隊	甘利、中島、倉知	6/11	6.00	2.00	下上					3.00	5.00	6.00
第一 登頂隊	中村、中川、中島	6/12	5.30	9.00	(10.30/2.30)	3.15	4.45	6.15	9.00			
		6/13		9.30	(11.00/3.00)			6.45	9.00	9.30	11.15	4.00
第二 登頂隊	甘利、丸山、倉知	*	5.25	7.30	9.30		12.00	1.25	4.30		6.50	
							12.30	3.55				

第一隊 登り 12時45分 下り 7時00分=19時45分 第二隊 登り 7時00分 下り 3時00分=10時00分 (頂上待期を除く)

第二部 アポロバンバ北部

七月一四日、中村と中島は一足先に三井金属提供のジープ(但しガソリンはこっちもどっち)に乗ってラ・パス(ポリヴィア)をあとにスチエス(Stiches)に向った。その付近の偵察と馬の交渉のためである。

本隊は一五日、ポリビア・トヨタ販売のカミヨン(トラック)で出発。チチカカ湖(Titicaca, 3815m, 昔アイマラ族が戦いの時にあげたトキの^{トキ}声だという説がある)の東岸とコルデイエラ・レアル(Cordillera Real, 『壮麗な山脈』)の間を行くのだが景色は悪かろう筈がない。振り返えると、ラ・パス(La Paz, 3600m, 『平和』)に君臨するイリマニ(Illimani, 6480m, 古形は Illi Mamani, 『輝く鷹又はコンドル』アイマラ語。Bandolier は Hila-uma-ni [with much water] だとう。M.V. Ballivian は最も古い記録に Inri-llimani というのがあるが、意味は不明だという。NHKの人達は『永遠に』という意味だと教えられたというが。カステイヤーンではイリーマニと発音すべきであろうが、ラ・パスの人は皆スペイン流にイリマニと発音していた)が次第に地平線の上に小さくなっていく。

チチカカ湖畔にあるポリヴィアの一番西にある町、プエルト・アユスタ(Puerto Acosta, 『岸辺の港』)から今度は北上する。朝ラ・パスを出てウヤウヤ(Ulla Ulla, アイマラ語で、『野天の大きな囲い場』)についたのは夜の八時、約一二時間間のドライブであった。

乃木大将とステッセルが会見した満州の泥小屋のような家に泊る。翌朝は寒くてトラックのエンジンがかからず、陽の出るのを待った。東の山の裏にプチャ山群の一角が見えた。多分ウエランカヨック(Huelancalec, 5836m)だと思いが、あんな丸い山に登るんですかと、甘利には余り気が進まないらしい。兎に角行つて見なければわからないことに、ああだこうだと議論をするのは、私は大嫌いだ。

昼前にスッチエスについた。部落といっても二、三軒しか見えない。遠くから見るとモレーンの丘にころがって

る岩かと思つたのが、近づくアドベでつくった家だつたりする。

先発の中村が眠むような顔をダラシのない格好で、その家の一つから出て来た。食事がひどいので相当参つたらしい。朝はマイス(唐もろこし)のチラホラころがつているスープ、昼はパパ(じゃが芋)、夜は? なし、これでよく生きていられるものだ。

これから又ペルー領に入るので、パスポートを持たない運ちゃんがゴね出した。君はトラックの一部なんだからそんなものではなくても大丈夫だと、無理に運転台にのぼらせる。

東側にはもうアポロパンバの中央部が眼の前に迫つて来ている。スツチエス河をバチャバチャと車の儘渡るともうペルー領。驚いたことに幅の広い大きな道がずっと北方に続いている。軍用道路だろうといつていた。

午後早くチョコニヤコータについて。四六五〇メートル。今日から又半月ばかりここで頑張るのである。

七月一七日から行動開始。四隊に分けて付近の偵察を行い大体見当がついた。一八日は一日休養。一九日、甘利隊は東方に向い、中村隊は北方へ姿を消した。

甘利隊の行動

(Chaupioro, Salluyo,
Chocacota, Falomani Grande)

七・一九(晴) 甘利、中川、中島、マルティネス、フリーオ。BCをあとにチョコニヤコータ(緑湖)を経て氷河の末端にCI(五〇〇メートル)。

七・二〇(曇後雪) 甘利、中川、北氷河偵察。中島とマルティネスは国境稜上のコルからチョコニヤコータ峰(五六〇メートル)とイチコヨ(Tchicollo, 五五八〇メートル)に登った。後者は下からは山に見えるが、登ってみると稜上の肩に過ぎないので勘定に入れないことにする。

七・二一(晴) CIよりコルを越えてボリヴィア側に入り、CII(五二〇メートル)を建設する。

七・二二(晴後曇) 甘利、マルティーンネスの二人、パロマニ・グランデ(Palomani Grande, 5769m) 往復。中川、中島はC IIよりアポロバンバ山群の最高峰チャウピ・オルコ(Chaupti Oro, 6044m, アイマラ語で「中央の山」)に登る。氷河と雪稜の長い登攀、登りは七時間、下りは三時間。氷河上は軟雪、膝下まで潜る。ワカンをおいて来てしまつて残念だった。雪壁の各所にクレバスあり。一時間に一つ位、中には一メートル幅のものもあつた。東西に延びた細長い頂上。滞頂一時間。

七・二三(晴) 甘利、中川、中島の三人サユーヨ(Sallyyo, 5808m)に登る。直射日光ひどし。はじめ雪深く、急になると硬くなる。雪壁を攀じてトレス・ムヘーレス(Las Tres Mujeres, 「三人姉妹」、急な尾根筋にローソクのような氷峰が三つならぬ)とサユーヨのコルに出る。傾斜四五度の雪稜、青氷あり。頂上は庇、上は洗面器位の大きさ。帰りはアプザイレンの連続、夜、九時一五分、ヘトヘトになつてC IIに戻つた。

七・二四(晴) C II撤収、C Iへ。

七・二五(晴) C I撤収、B Cへ。

カカワイチヨ初登頂

七・二七(晴) 吉沢、中島の二名。十日前に丸山とベナンシオが偵察に入つた谷に入る。遠くからみると丁度真白い鳥が羽を上げたように見える格好のいい山。こんな山がよく残されていたものだ。湿地帯、澄んだ湖、沢登り、ガラ場、氷河、雪原、四〇メートル六ピッチの雪稜、そして頂上に立つ。午後四時。サユーヨ、トレス・ムヘーレス、チャウピオルコ、同北峰の大パノラマ。氷河を済ませ谷へ入つて暗くなる。ヘッド・ランプで疲れた足を引ずつて行く。八時四五分、B C着。甘利は二人の帰えりが余りに遅いので、捜索に出かける寸前であつた。一二時間と一五分を要す。

七・二八(晴)、七・二九(晴)、中川とマルティーンネスがカイエホン(Callejon, 5824m, 普通カリホン Calijon と書かれているが、これは誤り。『狭い谷間』の意味)の第二登を狙って出かけたが、マル公のおかげで登頂ならず。ビバークの練習に行ったようなもの。頂下五〇メートルまで行ったのだが、マルは急な氷壁におしげがついてしまった。日本の登山家は足は早いし、悪場でも大胆だとびっくりしている。

中村隊の行動

——チャウピオルコ北峰他——

七・一九(晴)中村、丸山、倉知、ボリヴィア人ポーヨ、ベナンシオの五名、BCをあとに北方に向う。アパチエタ・デ・イスカイクルス(Apacheta de Isaycruz, 4800m)をこえ、ジャングルへ流れていくヴィスカチャニ谷(Viscachani)を下り、オコルルニ谷(Occoruruni)との合流点にあるルスニ(Lusuni)で一泊。馬七頭に荷を積んだが慣れていないせいか直ぐグラグラになってしめ直し。馬は道を外れて文字通りの道草を食う。

七・二〇(晴)谷奥に見える白い山はプイナパタ(Puinapata, 5600m, プイナは峠の向側にあるボリヴィアの部落、パタは「山頂」)である。二時間で谷開け、二軒の家あり、アンコカラ(Ancocara)とごう。おばあさんの写真をとったら泥をひっかけられる。更に登ると又谷は一層開けパンパとなり、アルパカが放牧されていた。それから道は急に左へ曲り急登。アリエロ達は馬の足をいためるのでゴネ出したが、何とかなだめて登らせる。傾斜が緩くなって又平地、今度は馬が放牧されていた。岩の脛にリスがチョコロチョコロと走る。懸垂氷河が左手に、そして又右手に現われ、道はモレーンの上を通る。

国境峠の事前に平地があつて、そこに小さな湖がある。絶好のキャンプサイト(四九〇〇メートル)。振りかえるとカイエホンが谷の向いにそそり立っていた。アリエロには一週間後に又来るようにいって別れる。

七・二一（晴、ガス）チャウピオルコ北峰の偵察。砂地のコルから右手の尾根に続くガレ場を登り、雪の尾根に出たアンザイレン。北峰の前衛峰との間の広い雪尾根に達するには、一カ所非常に急なギャップを下らなければならぬ。ポーヨが全く初心者のために苦労する。広い尾根に出ればあとは前衛峰直下の壁状の急斜面まで簡単である。ガスが出て来た。前衛峰直下まで行き、大クレバスに阻まれ一応引返すことにした。

丸山具合悪し。ポーヨはこの病人の丸山をC Iに残し、峠向うのプイナへ行き一晩戻って来なかった。彼は登山家としてはワザも精神もゼロに近い。

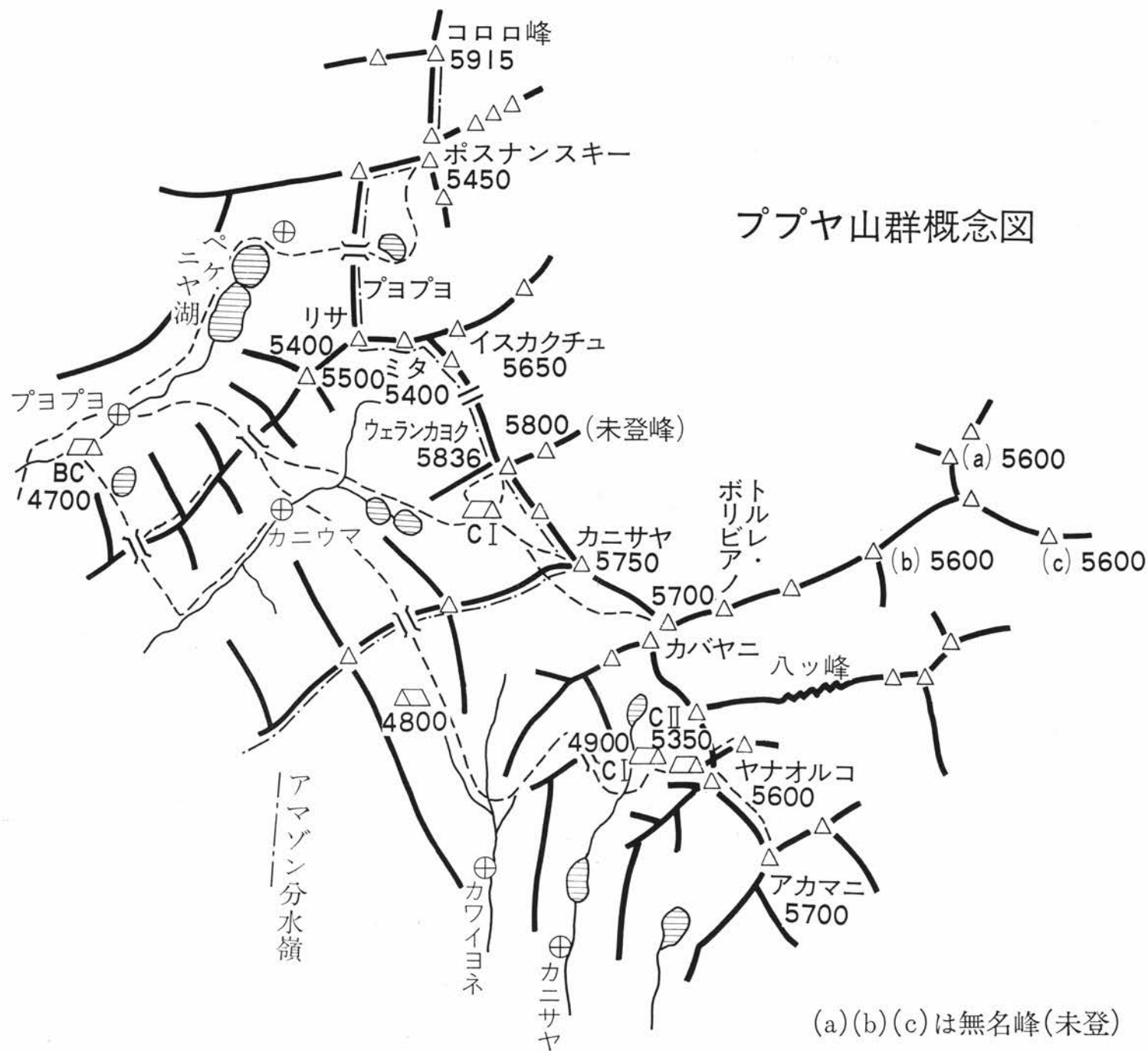
七・二二（晴）C Iから北峰では遠すぎるので、広い尾根の五五五〇メートルのところにC IIをつくる。ペナンシオをポーターに使ったが、歩き方も知らず、気力も乏しい、急斜の下りでは荷を持ってやる仕末。午後二時にC IIを建て、ペナンシオは途中まで倉知が送り、C Iに戻らせた。

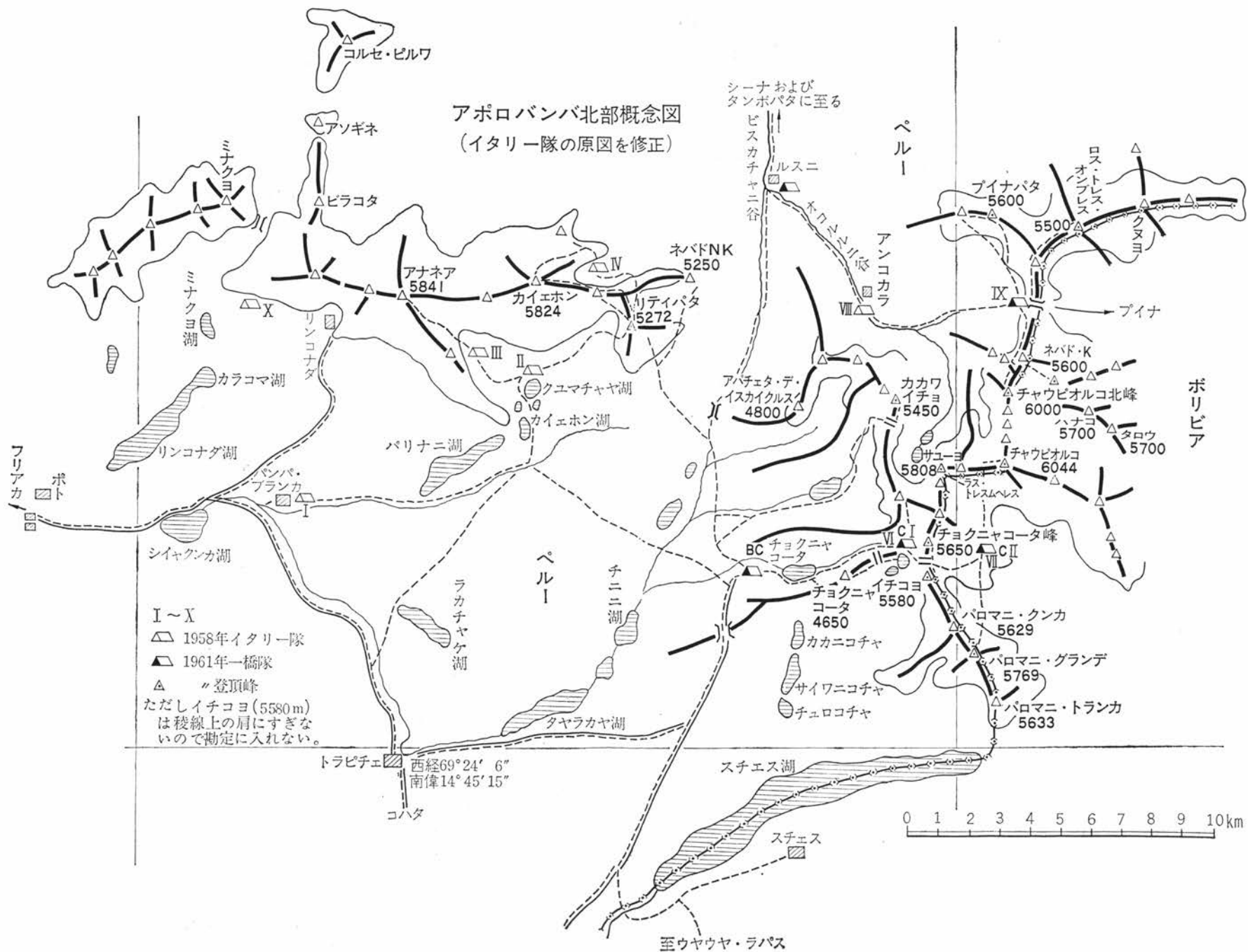
七・二三（快晴）C Iから一昨日の引返し点までは八方尾根のように広い尾根。直下は急だが前日のステップを利用、クレバスの直登はやめ、四〇メートル一杯左へ出てアンザイレン。そこから氷の大斜面がはじまる。

中村トツプ、ピトンを打ち、丹念にステップを切る。小クレバスでビレー、更に四〇メートルで露岩の左側に入って二ピッチ、スノー・バーを打ち込む。ここで倉知トツプ。露岩の上の前衛峰への最後の氷壁（五五度）を慎重にステップ、三〇メートル、ピッケルでビレー、中村トツプ二〇メートル、堅氷にステップ、前衛峰下の緩いところ出る。氷のテクニクが不慣れで、ステップが大きく過ぎ消耗ひどし。

前衛峰で一時間の休憩後、広い雪尾根を進む。北峰直下は急なリッジ、左側の斜面に移る。最後の雪庇と雪庇の間のリッジの消える部分、このステップ・カットに時間がかかる。

C IIを六時半に出て、野球場のように広々とした頂上に立ったのが午後二時一〇分。東側に続いている尾根上にある、五七〇〇メートルの白い峰（ハナコ及びタロウと仮称）。それは印象的であった。

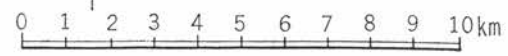




アポロバンバ北部概念図
(イタリー隊の原図を修正)

I ~ X
 ▲ 1958年イタリー隊
 ▲ 1961年一橋隊
 ▲ 〃 登頂峰
 ただしイチコヨ(5580m)
 は稜線上の肩にすぎない
 ので勘定に入れない。

トラピチュ 西経69°24' 6"
 南緯14°45' 15"



至ウヤウヤ・ラパス

下りはスノー・バーを有効に使用して快的なアプザイレン、C IIへは七時一五分に戻った。三時間と四五分。
七・二四(晴) C Iに戻る。

プイナパタ (Puinapata, 5600m)

七・二四(快晴) 丸山とポーヨ。丸山はC Iに来てからずっと具合が悪かったが、この日はじめて山に登る。この山はペルー領の方へ張り出しており、遠目には美しい。ポーヨはスリップして、二度丸山の確保で助かった。

ロス・トレス・オンブレス

(Los Tres Hombres, 5500m, 『三人兄弟』)

七・二六(晴) 中村、丸山、倉知の三人登頂、これが山名(仮称)の由来。サユーヨの東にイタリー隊の登ったLas Tres Mujeres 『三人姉妹』があるのから思いついた名前。頂上は三人が坐れる岩の台となっている。

ネヴァド・N・K (Nevado K, 5600m)

七・二七(晴) 丸山と倉知、花子峰の方へ登るつもりで出かけたが、悪い雪庇に妨げられ、結局Kの方へ曲ってしまった。Kは倉知のK。

七・二八(晴) 中村隊、国境峠C IよりBC帰着。

ネヴァド・N・K (Nevado N.K, 5250m)

この山はアポロバンバ北部では最も難しい岩登りの道場の一つであろう。イタリー隊もこれには登っていない。

八・二(晴)中川と倉知。昨日はトラピュチエ(Trapiche)に行き、カミヨンの交渉をしたがダメ。アナネア(Ananea)の部落まで行ったが、これも不調。七月三〇日に隊長等がプブヤへ移ってからもう三日目だ。いつになったら行けるのか、少しばかり心配になる。これからトヨタのトラックが来るまで五日はかかる。倉知はもう六日もここチョコニヤコータのBCにいたので、頭に來たらしく、さかんにポーターに当り散らす。

アシエンダから遊びに来ていた男の馬にサブザックをくくりつけ、ベナンシオを馬方にして夕方BCをあとにする。隊長の許可なく、難しそうな山へ行くので気がひける。

岩峰直下に入っている沢に入り、しきりに帰えりたがっていたベナンシオを解放してやる。ツェルトでビバーク、星が出て来た。

八・三(晴)五時起床、七時にならぬと陽が当らぬので猛烈に寒い。七時半出発。兎に角、頂上から東へのびる前峰への尾根のコルに登る予定で、ガレ場を登り、五〇メートル先にある側壁に突貫する。

壁下でアンザイレン、アイゼンは使わない。倉知トップで最初の一ピッチ。ロック・ハーケンでビレー。久振りの岩登りである。逆層でホールドとスタンスに苦労する。浮石多し。神経消耗、三〇度位の雪面にぶつかる。この雪壁を、左に右にと攀じて行く。雪質がいいので高度ははかどる。岩の傾斜したバンドで小休止。

それから可なり急な八〇メートル位の雪壁を登ってコルに達した。ここから頂上は見えないが、二時頃にはつくだろうと考える。コルの反対側にはパンパが這上って来ている。向側から取付いた方が遥かに楽であった。

コルから又逆層の壁にぶつかる。ガリーから右のスラブへ。ハーケンを打ち込むリスもない。次は急な雪のルンゼ、四〇メートルで岩壁につく。左へバンド依いに五〇メートルトラバース。

次に岩と雪の交った壁を七ピッチ、右に続く雪のバンドを少しいく。そして岩と雪の接触面に出る。雪面の傾斜は非常に急で、下の方は全然見えない。上はオーバーハング。仕方なく岩と雪の接点をいく、岩はポロポロである。ピ

ツケルとバイルで必死に登る。

倉知はおそいから戻ろうという。三時三〇分だった。中川トップで雪壁に登ると、一五メートルでバンドに達した。左にトラバース、岩にハーケン、倉知続く。その上が又ガラガラでホールドなし。雪壁に達してホツとする。

六メートル登って小さなコル。四時二〇分、そろそろ暗くなって来た。頂上までどの位かかるのか、改めてそのスケールの大きいのに驚いた。頂上からは何本かの岩稜が四方に出ている。その岩稜のいくつかを横切りながら登っている訳だ。リテイパタの方から続いて来ている雪稜が急になっている。陽がおちジツヘルが寒い。六〇度近い急な雪のルンゼ。頭上の岩をすぎると又雪壁。稜線に出た。五〇メートル先に頂上あり、六時三〇分、あたり薄暗し。一時間かかった訳だ。

完全に暗くならないうちに少しでも下っておこう。北東稜が楽そうに見えたのでそれを下る。ライトをつけ一〇〇メートルばかり下り、東に続く稜線上のピークの肩につく。

それから雪のルンゼを下った。八〇メートルで岩場。中川のライト薄くなる。アプザイレンの準備、倉知睡くなる。四〇メートルのメイン・ナイロン・ザイルと八ミリのサブザイルを用いることにしたが、ハーケンを打つのに苦労、工作に一時間を要した。

九時半、倉知先に下る。ザイルは下の雪溪まで届かない。右の岩場を下りると岩棚らしい。ライトは益々ボンヤリしてくる。いよいよ急な傾斜、そこで中川、空中に振られ、岩壁に左膝をイヤというほどぶつつける。まだ雪溪まで三〇メートルはあるらしい。一〇時だ、ビバークと決定。石を落とし、尻をのせる場所をつくり、ハーケンでジツヘルする。寒くて眠られない。だが風がないだけ幸いである。午前一時頃月が出た。

八・四（晴）七時メタをつけ、ミカンの缶詰をあたたためて食う。七時半出発、岩壁はさして急ならず、一ピッチで雪溪に達する。二ピッチ八〇メートル下るとガレ場、八ピッチ左へ下る。草付に出た。パンバ、尾根一つ越えてテン

トに辿りつく。

BCに向う途中でマルティネスとポーヨにあらう。アルファ米をたいて持って来てくれた。有難く頂だいに及ぶ。ベナンシオは岩の崩れる音を聞き、二人は死んでしまったと伝えたらしい。

ププヤ (Pupuya) への移動と偵察

七・二九(晴)ププヤへ行くためのトラックが予定の日に来ない。予め打合せておいたポリヴィア山岳会の無責任と無能さに呆れ、且つ腹が立つ。この儘無為に過す訳にもいかないので、甘利、中島、ポーヨの三名がトラピチエへ行く。こういう場合でもポーヨは鞍のついた一番いい馬にポイト乗って知らん顔。謙譲の気持ちなんていうのはミジンもない。四時間かかる。一ビアーへ五〇〇ソールレス(二、三日間)ということまで小型トラックが備えた。午後遅くトラピチエの人達が荷物の分量を見にBCに来た。彼等が戻る時、ポリビア・トヨタに「カミオン送れ」という電報を書いて渡す。これはトラピチエから無線でフリアカ或いはブーノ経由でラ・パスへ届けられるという。

七・三〇(晴後曇) 八時、カミヨネータで第一隊出発、吉沢、甘利、中村、丸山、中島の五名。あとはクジの結果残されたのである。

ウヤウヤにCAB (Club Andino Boliviano) のピーターがいた。一緒にププヨのBCへ来る。CABのカミオンは途中でエンコしてしまったとのこと。

いい加減に見当をつけて、パンパの上をまっしぐらに、トラックを走らせるのは気持ちがいい。ヒマラヤなどでは一寸味えないだろう。私は皆のガヤガヤいうのを少しも聞かず、一直線に車を走らせたが、この方が結局勝ちであった。

ププヨ部落の対岸、丘陵下の平地を第二BCとする(四七〇メートル)。ポツンと一つだけテントを建てる。さ

っぱりBCらしくない。

七・三一(晴) 第一回のププヤ偵察、それがどのような山群であるかという問題より以前に、それがあのかないのかという不安さえ持っていたと(中島記)。中島とピーターはプロプヨ峰の前にある岩山に登る。ピーターの足弱く、少しもはかどらぬので途中から追い返した。

この岩峰から更に一時間歩く。眼前にププヤの白い山波が展開。チャウピオルコ付近に比べて一段と峻しそうだ。五三〇〇メートル位の岩山の上に立ってスケッチ。茫然とこの大パノラマにみとれる。何故これほどの山が、今まで人の手に触れられずに残っていたのか。異常の興奮を感じながらBCにかけ戻る。

甘利もカニウマ(Canuma, 汚ない水)部落へのプンタ(峠)まで登り、これもその素晴らしさに感激して戻って来た。

八・一(晴) 九時、吉沢、甘利、中村、中島とカヒチャタ峠(Cajchata)に偵察に行く。一〇時大きなラゴ(Lago, 湖)が出て来た。峠のケルンについては一〇時半、アポロパンバの峠というのはダラダラ登りが実に長い。

左側の岩山に登ってみるとププヤの山群がずらり。知っているのは一番左のウエランカヨックだけ。それから右に顕著な処女峰がA、B、C、D、E、Fと六峰続いている。この山群は下のパンバからは前山に隠れてみえない。残されていた理由の一つもここにあると思う。土民調査によるとそれらの山名は次の如くなる。

(A) カサララ(Casarara, 5700m, 頭を切られた山)。 (B) カニサヤ(Canisaya, 5750m, 家のある汚ない土地)、われわれはこの山の頂上に乳首みたいなものが見えたので、『オッバイ山 Nevado Teva』という愛称をおくった。 (C) トルレ・ポリヴィアーノ(Torre Boliviano, 高度は不明だが五六〇〇メートル位か、槍カ岳のような黒い岩峰で、双眼鏡でみると狭い頂上に雪が載り、左側の稜線上には小槍、孫槍が二本立っている。その下の急な氷河は崩岩のため褐色に汚れていた。『ポリヴィアの塔』とはわれわれがつけた仮称である。この岩峰は反対側からだとも簡単に登れることがあとでわかった)。 (D) カヴァヤニ(Cavayani, 5700m, 峻しい碎石地)。 (E) ヤナオ

ルロ (Yanarco, 5600m, 黒山)。(F)アカマニ (Acamani, 5700m, 東の水、この山はフランカのタウイラフーに一寸似ていて、相当登り甲斐のある山に見える)。

レアルのイヤンプー (Illampu, 兄と一緒という意味) とアンコウマ (Ancohuma, 白い水) は遠いが流石に大きい。振り返るとコロロ (Cololo, 5915m) とヌブー (Nubi, 5710m) に続いて、アポロバンバ北部の山々が全部見える。峠の下のカニウマの部落が眼下に近い。足の下に化石層のあることを発見した。小貝のものが多し。

八・六 (晴) チョクニヤコータから中川他プロヨ着。兎に角、全員そろった。ポリヴィア山岳会の無責任な行動については一切省しておく。テントも四つ張られて、どうやらBCの格好がかった。今日はポリヴィアの独立祭(一八三五年)で村人は皆酔っぱらいになる。それでも一ビアーへ(二回の旅)二万Bs(七〇〇円)にしたら馬が集まって来た。

プチャ山群A隊の活動 (Canisaya, Cavayani, Huellacalloc)

八・七 (晴) 吉沢、甘利、丸山、中川、ポーヨの隊。モラーダ峠 (Morada) 越え、カニウマの上流に下り、ウエランカヨックの西南壁下にCI(五一〇〇メートル)を設けた。

八・八 (晴) 甘利、ポーヨ、カサララ峰の南尾根に挑んだが、ポーヨが足手まどいになって遂に放棄。

カニサヤ峰初登頂。丸山、中川。CIより氷河とガラ場の境目を登り、その頂上から氷河に移る。南東壁にとりつき稜線に出たのが四時五〇分。頂上(五・四〇一六・二〇)。ウエランカヨックとのコルに下り、CIについては翌日の午前一時。

カヴァヤニ峰初登頂

八・一〇 (晴) 甘利、丸山、中川。CI(八・三〇)CII(五・〇〇)更に上方偵察。

八・一（晴、曇）C II から主稜線上のコルに登り、南に辿って反対側の氷河に下る。氷壁を一〇メートルばかり下ると岩尾根に達し、これを捲いて氷河の主流に出る。雪は多いが風もなく至極のんびり。これを登り再び主稜線上のコルに出る。主稜は青氷で北東面にこれをさける。然しクレバスもあり、氷も硬い。ハーケンを打つのに苦勞する。再び主稜に出て頂上（二時半）。ガス出る。下りハーケン五本、帰幕七時。

ウエランカヨックの第二登

八・一三（晴、ガス、曇）吉沢、丸山、マルティーネス、ポーヨの四人。C I 八時半発。例によりポーヨは何も持たずにサッサと行ってしまう、囀なりつけて荷をかつがせる。ウエラン峰の西尾根（岩尾根）に登りつめる。北斜面には全然雪がない。全く面白いものだ。尾根を東に辿り、氷河に移り、それから長かった。危いところはないが全くウンザリする。ポリヴィア二人にラッセルをやらせたが、角度が急で（殆んど真直）、又囀鳴りつける。

私は五八〇〇メートル付近で完全にへばり入り込んでしまった。その上すっかりガスに包まれた。然し又最後の勇氣(?)を振り興こし、丸山のリードで歩き出す。不思議に疲労がどこかへ消えた。マルとポーヨが先に登って旗を埋めた頂上に、しばらく立っていたら、ガスを通してまだ高い（約一尺）ピークが雪庇の向うにあった。そこまで行く。その先はもうずっと低くなっている。ガスの中で写真をとって貰う。C I から八時間だった。

甘利と中川が西南壁の氷壁をアタックしている筈なので、大きな声を出して呼んでみたが、返事はなかった。然し彼等のためにとどころに標識旗を立てながら下って行く。

五八三六メートルの頂上は、五七才としては日本人の最高記録だそうだが、それにしても自分は、この辺が限界だとツクツク思う。いきの苦しいこと。

C I については夜の八時、甘利組が戻って来たのはそれからまだ四時間後だった。

八・一四（晴、曇）C I 撤収一一時半、前の晩に来た馬に荷をつけ、来た道をその儘引返し、プヨプヨのBCにつ



- S-1 急な雪の斜面のトラバース, 60m
- 1-2 氷のつまった岩の急なルンゼ, 50m
- 2-3 浮石の多い岩壁
- 3-4 40°-50°の氷壁にステップ, 40m
- 4-5 40m
- 5-6 左よりにややゆるい
- 6-7 45°の氷へき, 25m, クレバスで小さな穴をみつけてやっと三人集まる (2.00)
- 7-8 左上にややゆるい, 40m
- 8-9 氷底をこえる
- 9-頂上 ゆるい斜面

アカマニ峰ルート図
 コルディエラ・アポロバンバ
 ププヤ山群

いたのは五時であった。中村隊はもう戻っていた。

ププヤ山群B隊の行動

八・七(晴) 中村、中島、倉知の三人。人夫二名、馬五頭、内三頭荷物運び。モラーダ峠まではA隊と一緒。カニウマに下り、今度はカニサヤから西に出ているアマゾンとの分水嶺をこえ、平らなところで一泊(四八〇〇メートル)。

八・八(晴) アマゾン側は岩のゴツゴツした支尾根が沢山出ており且つ急である。第三の峠をこえ、カニサヤ湖につき荷を下ろす。C I (四九〇〇メートル) まで人手で荷上げ。

八・九(晴) C II (五三五〇メートル) へ。人夫二名、臨時のアイマラ一名を加えてボツカ。ベナンシオは全然ダメ。

アカマニ峰初登頂

八・一〇(晴) 三人。C II (七・一五) —— 頂上(三・〇〇) —— ビバーク(七・三〇) 見取図参照のこと。

八・一一(晴) ビバーク(七・〇〇) —— C II (一一・三〇)

アカマニの南にはもう雪をつけた峰はない。ヤナオルコの彼方、カヴァヤニの東稜の端れに五六〇〇メートル級の素晴らしい氷峰が三つある。

ヤナオルコ峰初登頂

八・一二(晴) 三人。C II (一〇・〇〇) —— 尾根合点(一一・〇〇) —— 頂上(一・一五—二・三〇) —— C II (六・〇〇) 頂上は雪稜の一部、東側三メートル下ったところに平らな岩場あり。

八・一三(晴後曇) C II (正午) —— カニサヤ湖(二・三〇) —— 八月七日の天幕地(六・〇〇)

八・一四(曇後晴) 八時出発、プヨプヨBC着三時。あとからA隊も無事到着した。全員集結。

結 び

山もこれで終った。本当に全部終ったのだ。ペルーのプカヒルカで一カ月。そしてこのアポロバンバで一カ月、山の中をうろつくこと正味二カ月。よくも全員無事で、今日まで生きのびて来たものである。

思い返せば色々なことが矢張りあった。議論もした。癪にさわったことは数えれば二十件以上もある。遠征とは何ぞや、ということを反省しなければならぬこともあった。だが十の処女峰を含む十七の山へ登れたということは、何といつても人間的なチーム・ワークのおかげであろう。それにしても私達を教え導き且つ蔭の力となって下さった日本山岳会の人達ははじめ多くの支援者に、心からお礼をいおう。これを忘れたらそれこそバチが当る。皆様どうも有難うございました。

現地で色々お世話になった方々へのお礼は別の機会に述べることにする。(終り)

一橋大学アンデス遠征隊登頂峰一覽表

昭和 36 年 (1961)

初登頂 10 座
第二登 5 座 } 計 17 座
第三登 2 座

山 群	月 日	山 名	高 度	初登の別	登 頂 者 名	山 名 の 意 味
コルデイエラ・ブラスカ (Cordillera Blanca)	6/12 6/13	プカヒルカ 北峰 (Pucahirca Norte)	6050m (19,850)	初 (1)	(1)中村、中川、中島 (2)甘利、丸山、倉知	赤い山 (クチャア語)
コルデイエラ・アポロバンバ (Cord. Apolobamba)	7/17	リテアパタ (Ritipata)	5272 (17,300)	2	中川、ボーヨ	雪の頂上
＊	7/20	チエコニヤコタ (Chochacota)	5650 (18,538)	2	中島、マルチャーネス	緑の湖

コルディエラ・アホロバンバ (Cord. Apolobamba)	7/22	パロマニ・グランデ (Palomani Grande)	5769 (18,928)	3	甘利、バルチャーマス	
"	"	チャウピ・オルコ (Chaupi Orco)	6044 (19,830)	3	中川、中島	中央の山
"	7/23	サユ、 (Sallyo)	5808 (19,056)	2	甘利、中川、中島	
"	"	チャウピ・オルコ 北峰 (Chaupi Orco Norte)	6000 (19,688)	2	中村、倉知	中央の山、北峰
"	7/24	プイナパタ (Puinapata)	5600 (18,374)	初	丸山、ポーヨ	
"	7/26	ロス・トレス・オンブレ (Los Tres Hornos)	5500 (18,045)	初	中村、丸山、倉知	三人の男(スペイン語)
"	7/27	ネバド・ネバド K (Nevado K)	5600 (18,374)	初	丸山、倉知	倉知峰
"	"	カカウイチ (Cacahuicho)	5450 (17,881)	初	吉沢、中島	鳥の山
"	8/3	ネバド・ネバド N.K. (Nevado N.K.)	5250 (17,228)	初	中川、倉知	中川、倉知峰
コルディエラ・ププヤ (Cord. Pupuya)	8/8	カニサヤ (Cansaya)	5750 (18,866)	初	丸山、中川	家のある汚ない土地
"	8/10	アカマニ (Acamani)	5700 (18,702)	初	中村、中島、倉知	東の水
"	8/11	カバヤニ (Cabayani)	5700 (18,702)	初	甘利、丸山、中川	峻しい碎石地
"	8/12	ヤナオルコ (Yanaorco)	5600 (18,374)	初	中村、中島、倉知	黒い山
"	8/13	フエランカヨック (Huelancallo)	5836 (19,148)	2	吉沢、丸山	

ペルー・アンデスの山々

藤 木 高 嶺

(隊員の顔ぶれ)

- 隊 長 川 村 大 膳 (44) 関学大文学部教授、史学専攻文博、学術調査担当。
副隊長 藤 木 高 嶺 (34) 朝日新聞大阪本社写真部勤務、登攀リーダー、取材担当、写真映画撮影。
隊 員 三 沢 一 三 (30) 後藤回漕店勤務、サブリーダー、記録係、輸送関係と録音取材担当。
同 田 中 外 治 (26) 田中電線勤務、サブリーダー、食料係。
同 南 井 英 弘 (25) 丸善石油勤務、渉外係、トランシット測量担当。
同 長 井 弘 光 (25) 武田薬品工業勤務、マネージャー、医療係、学術調査補佐。
同 野 村 晃 (24) 野村商店勤務、装備係。
同 小 川 仁 彦 (21) 文学部学生四年、装備係、氣象係。
同 横 山 助 成 (21) 商学部学生四年、食料係。
同 西 村 格 (28) ペルー新報社勤務、現地参加、現地渉外進行係。

1 ワスカラン峯（ペルー・アンデス最高峯）

ペルーの首都リマ市を一九六一年五月二十五日早朝出発、途中ワラスで一泊、ワスカラン山ろくのムーシヨ部落にテントを張って基地としたのが五月二十六日。このあたりから見るワスカラン峯はコルデイエラ・ブランカ山群の中で、一段と高く王様然としてそびえ、全く威圧されてしまった。ワスカランはこれまで世界各国の登山隊によって登られてはいるが、私達もこんどの遠征でワスカランを第一目標にしたことを誇りに感ぜずにはいられなかった。実際、周囲の山々が、たとえ未登峯であっても、スケールの小さい、小細工で登る、つまらぬ山に見えたものだ。

ムーシヨから中間にキャンプを一つ張って、延二十六頭の馬を使い、一・八トンの荷物をベース・キャンプ（四二〇メートル）に荷上げたのが五月二十九日。翌三十日、いよいよ登山活動を開始した。六月二日、第一キャンプ（五一〇メートル）へ荷上げを完了。ベース・キャンプにはときどき真つ黒な牛が数頭現われたが、これは人里離れた山奥で育てる闘牛用の牛と知って驚いた。ヒマラヤと違ってポーターがいなくても、アリエロ（馬方）と馬が利用出来るのは非常な利点だ。馬は人夫の数倍以上の荷をかつぐし、食料やテントの必要もないし、ましてストライキをやらぬ。しかしシエルパがないので、ベース・キャンプ以上は隊員達だけで荷上げをしなければならぬ。私達はテストの意味で、現地人のバルガス兄弟二人を使ってみた。

四五〇メートルが氷河の末端で、その周辺は無数のクレパスがあつて通過に困難をきわめた。第一キャンプから上は、アイス・フォールの連続で、なかなかルートが分らず、四日間延べ十二人の偵察隊員を出して、ようやく第二キャンプの設営地点をみつけることが出来た。第二キャンプは南峯と北峯のユル（ガルガンタと言ふ）から二〇〇メートル程下の五八〇メートルの地点で、アイス・フォールにとり囲まれた不安定な場所だった。登頂へのカギは、このガルガンタにいたるまでの高さ五五メートルにおよぶ巨大なアイス・フォールを、いかにして乗り切るかにかかっ

ている。第二キャンプへの途中、大きな計算違いが生じた。バルガス兄弟は隊員の倍もの荷物を軽くかつぐほどだが、巨大なアイス・フォールにハーケンを打って登る隊員が足をふみはずし、ほんの二、三メートルザイルに宙ぶらりんになったのを見て、肝をつぶし、荷物を置いて一目散に降り行ってしまったことだ。ベース・キャンプに逃げ帰ったバルガス君は、山にナランハ（オレンジのことを）を供え、なにやら呪文をとなえ、山のあたりが恐ろしいと言って、それ以後高所では全く使いものにならなくなったのは手痛かった。六月四日、第二キャンプ設置。

ヒマラヤとくらべてアプローチが短かいということは山に入りやすいという利点だが、逆に考えると高山病の影響を受けやすいという結果にもなる。つまり港に着いた隊員が、文字通り海拔〇メートルから、わずか三日間で、四〇〇〇、五〇〇〇メートルと登ってしまうのだから、体の高度順応が追いつかないのだ。そのために、ベース・キャンプから第一、第二キャンプと設置されると、人員配置をつるべ式に交替させ、高度に順応させるのに予想以上の日数を食ってしまった。ある者はベース・キャンプで、すでに高山病にやられ、頼りにしていた優秀な隊員が、最後まで使いものにならなかつたのは作戦上大打撃だった。六〇〇〇メートルのキャンプで食欲全くなく、睡眠のとれない隊員を、一気にベース・キャンプにおろすと、むしゃむしゃ食って、ぐっすり眠り、みちがえる程元気になる。酸素不足が、体に及ぼす影響のいちじるしさは驚くべきだ。はげしい人員交替には、超小型のハンディー・トーカーが大活躍だった。これは国産のパンコム・ハンディー・トーカーで、大阪市大の森本隊長から推薦されたものだった。

もう一つのペルー・アンデスの特徴は、温度差のはげしいこと。熱帯の氷山といわれるゆえんで、日中氷河上に立っていると、直射日光の下では、着ている黒いズボンがこげくさくなる程暑く、朝晩は零下三十度を超える寒さ。最高の温度差は摂氏で七十度を記録した。この温度差に体を調節するのが大へんだし、なにより問題なのは、目まぐるしく変動するアイス・フォールやクレバスだった。今朝、脚立をブリッジにして渡ったクレバスが、その日の午後には、もう渡れないということはしばしばで、あの固い崩れそうに思われないアイス・フォールが、轟音たててくずれ

去るといふ危険をはらんでいるのだ。六月十五日、シウラ・チコで三名遭難死したドイツ隊も、この温度差による氷壁の崩壊によるものだ。又現地で聞いた話だが、数年前ワスカラン北峯に登頂したメキシコ隊が、下山のルートをクレパスにはばまれ、十五日間閉じこめられて、遭難寸前をヘリコプターからのルートの誘導で、ようやく脱出出来たことも、なるほどとうなずけたものだ。

さて、六月五日第一次登頂隊員、野村、横山の二名が南峯（六七六メートル）を目指して第二キャンプをあとにした。しかし前夜くずれたアイス・フォールのため、ルートを見失い、ガルガンタへのルート偵察に終ってしまった。六月七日、第二次登頂隊員、南井、小川は南峯への途中で濃霧に登路を失って失敗。最高所のキャンプから頂上まで、約一〇〇〇メートルの高度差があり、しかも傾斜が急であることは、この高度ではかなり苦しいものだ。三分の一しかない酸素の中でスピードを要求されるのだ。六月九日、第三次登頂隊員三沢、田中が南峯を、第四次登頂隊員藤木、西村が北峯をめざして午前六時、第二キャンプを出発した。北峯組の私と西村隊員は、ガルガンタからの急斜面を南峯組と競争するように一歩々々よじ登ってゆく。正午、途中の肩（私達は大広間と呼んだ）に着いた。南峯組は急斜面にへばりついたまま少しも動かず、しばらくすると降りはじめるのが見えた。あとで分ったのだが、このとき三沢隊員が高山病にやられ断念したのだ。北峯は南峯より一〇〇メートルほど低いが、平均傾斜は五十度以上という南峯よりはるかにけわしい。二十歩登っては大きく息をし、また二十歩と、何百回も繰り返し、ようやく頂上直下一五〇メートルの垂直に近い氷壁に出た。当然アイス・ハーケンを使用すべき場所だったが、時間と疲労を考え、いちがばちが、アンザイレンのまま、ただ登りたい一心でよじ登った。前に出歯のように突き出たアイゼンのツアッケが急斜面に威力を発揮してくれた。頂上寸前、西村隊員がわたしに先をゆずってくれる。頂上に立つ。午後三時半。しかし私達は目のくらむ思いがした。右手北の方に、はるかにガスをすかして四つ五つのピークが重なって見えるではないか。下のキャンプから見える頂上は手前のピークで、ほんとうの頂上はさらに奥にあった。私はためらった。ここ

を頂上として引き返すか、そうしないと明るいうちに下山できない。いまいまいしいガスめ。しかし二人はだまつて、ザイルをひきずったまま並んで稜線を歩きはじめた。まるで夢遊病者のようだ。三つ、四つ、五つのピークを越えた。目の前に突然巨大な雪庇があらわれ、その先は断崖絶壁だ。ああここが頂上だ。ときに午後四時二十五分。

二人は感激に抱き合った。風が強く、推定温度零下二十五度。ガスの晴れ間に写真をとる。ピッケルには、ペルー・日本の国旗、関学の校旗、朝日新聞社旗を結ぶ。十六ミリでお互いに写しあう。五時、六六五メートルの頂上をあとにする。どす黒い青空の中にキラキラ無数に輝く星を認めた。まだ星の見える時間ではない。錯覚かも知れないが、これが真昼の星というやつかと二人はうなずき合った。神秘的な一瞬だった。急斜面の途中の大広間に出たときはすでに七時、まっくらやみだ。かつてアメリカ隊は月明りを利用して午後九時に下山しているが、私達には月も味方しないのだ。日本の空よりはるかに多い満天の星の数、この無数の星を消す南峯の山容をたよりに一步一步慎重にくだる。ガルガンタにたどりつく。このコルは、日本の山とはけた違いの広さ、ヘッドランプを頼りに一時間さまよひ歩き、いよいよビバークをする決心をしたとき、西村隊員がアイゼンで空缶をかけた。奇跡！目の前に踏み跡があるではないか。空缶は、登る途中二人で食べたゆであずきの缶だった。勇氣百倍、踏み跡通り進んだ。このあたりはクレバス地帯で、しかも落し穴が多い。登るときに踏みはずし、交互に落ちたクレバスが大きな口を開け、通れなくなっている。別のルートをさがしては又踏み跡をたどる。やがて第二キャンプの真上に出た。最後の六〇メートルの垂直の氷壁を懸垂で降り切った。時に午後九時十分。延々十五時間の戦いは終わった。テントにはいった二人は、あたたかいミルクを一杯のんで、そのままぶっ倒れてしまった。

十一日午前五時、第五次登頂隊員田中、小川がいよいよ南峯をめざして登って行った。南峯は四度目で最後のチャンスだ。急斜面を登る十時ごろから濃いガスにまかれ、前途をあやぶまれたが、巨大なクレバスに出あいながらもよく克服、午後二時二十分ついに頂上（六七六メートル）をきわめた。二人は飛び上って喜び、氷の上をころがり回っ

た。地元の人に教えられたように、砂糖とタバコとナランハを供え下山の途についた。

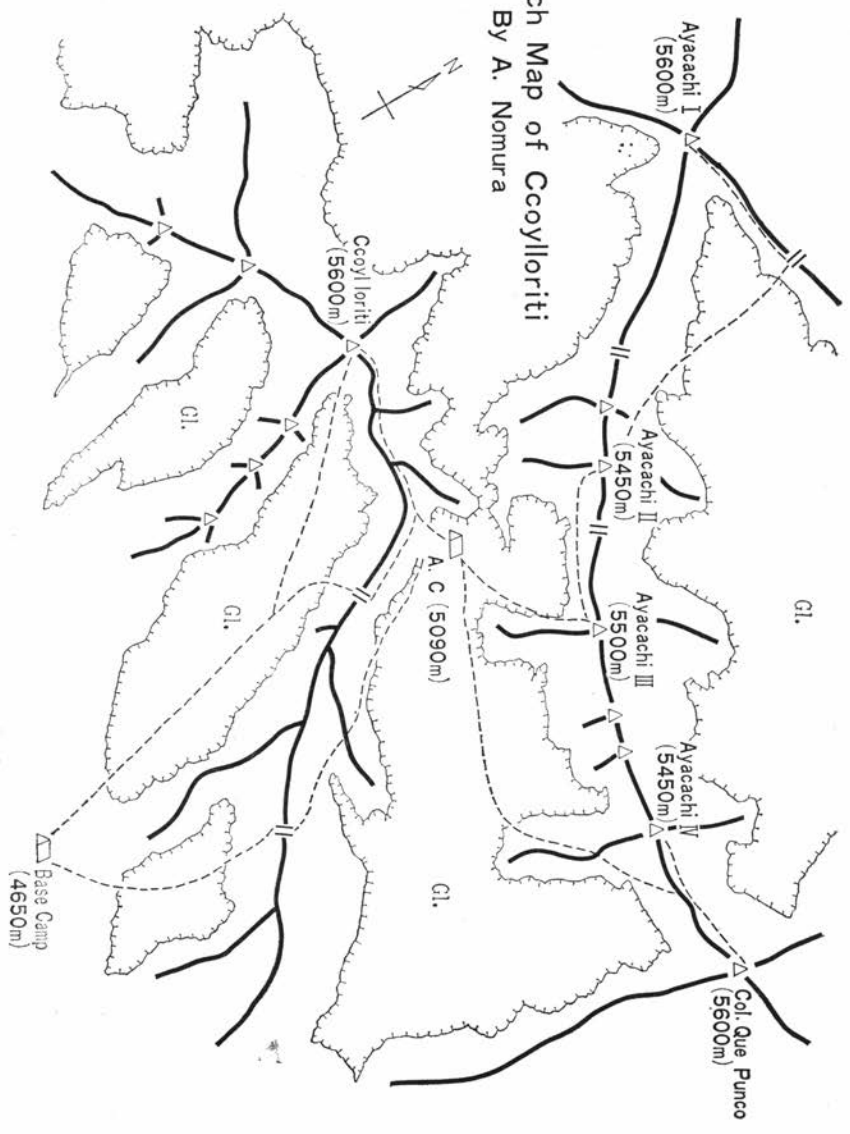
下山の途中、ガルガンタでサポート隊の野村、横山に会う。クレバス地帯で、先頭を歩いていた野村が落し穴のクレバスをふみはずし、ザイルに宙ぶりになって五メートルばかり落ちこんだ。疲れはてた体力をしぼってひっぱると、周囲がさらにくずればじめるので、危険で手がつけられず、羽毛服やテルモスをザイルに結んで野村隊員に届け、その間に二人が別のルートから向う側に渡り、両方からひっぱり上げ、一時間半も要して救出した時には皆抱き合って喜んだものだった。ここに南北両峰登頂という輝やかなしい記録を打ちたてる事が出来た。

2 コヨリテイ山群

コヨリテイ山群はペルー南東部にあるヴィルカノータ山脈の北部に位置をしめ、全長百キロメートルに達する広大な氷雪の連峯で、六千メートル級の山が数多く、しかもこの山群一帯は人跡未踏である。またインカ帝国終息の地とも云われ、すでにその近くで古代インカ時代と思われる遺跡が発見され、無数の彩色土器も発掘されている……以上が一九五九年度竹田隊の遠征のみやげ話で、私達がコヨリテイを主目標にしたわけで、登山と学術調査を併行させ、史学専攻文博の川村教授を隊長として出馬願ったわけでもあった。

先発隊が日本からリマ市に到着直後、ペルー山岳会、空軍省などをおとずれて調べた結果、コヨリテイ峯の存在することは事実だが、百キロに達する氷雪の連峯ではない。もっとスケールの小さい低い山であること。主峯はコヨリテイと地元では呼んでいるがアヤカチ山群ではないか。空軍省の地図には全く空白部になっている。考古学の権威バليون教授によれば、地理的にこのあたりはインカ遺跡の発掘される可能性があること、これは東大の泉教授も日本を出る時話してくれた。ところが、コヨリテイでは毎年六月氷河上でお祭りがあり、多勢のインディオ達が集まると言う牧師さんが現われ、写真まで見せてくれた。立派な教会まであるではないか。ある者はコヨリテイ山頂に十字架

Sketch Map of Ccoylloriti
By A. Nomura



が立っており、巡礼登山が行われているなどと言う。もしアヤカチ山群とコヨリテイ山群が同一ならば一九五九年の『アルパイン・ジャーナル』に記載され、主峯の一つコルケプンコはすでに登られている。私は全く迷ってしまった。そして結論としてワスカランを先に登り、コヨリテイを第二の目標にえらんだのだ。

六月二十三日、インカの廃都クスコ市に到着した。おどろいたことに、スペイン隊がコヨリテイ山群から下山したばかりだということだ。そしてこれからワスカランに向うとのこと。さっそくホテルにスペイン隊をたずねてみた。二週間で主なピークをことごとく登って来たという。先手をうたれた私達は大きなショックを受けた。ペルー山岳会の話では、スペイン隊はカイヤンガテに入る予定だったのだが、これを避けて何の前ぶれもなく、コヨリテイに登ったのだ。しかし私達は、前もってペルー山岳会のスターン会長やモラレス氏とも相談の上、ひそかにカイヤンガテ初登頂の計画を最大目標にしていたので、カイヤンガテを残してくれたスペイン隊に逆に敬意を表したものだ。あとで分ったことだが、ワスカラン北峯に登ったスペイン隊がスリップしてクレバスに落ちこみ、一人死亡一人重傷の事故を起したのは、私達が登った時よりも、さらに氷の状態が悪化したものと思われ、私達の無事を喜び、私達の計画がツイていると思つたものだ。

六月二十八日、クスコを出発。最初ティンキを基地とする予定だったが、スペイン隊に教えられた通り、さらに東に進みマワヤニという部落を基地とした。ここはクスコからキンセミルに通ずるトラック道路の中間で高度四一〇〇メートル、クスコからトラックで八時間だった。七月一日、二日両日にわたり、馬二十四頭を使ってコヨリテイのベース・キャンプ(四六五〇メートル)に入った。ここはマワヤニから真北に約十キロメートルで、わずか三時間の行程だった。しかもベース・キャンプ周辺には数戸の部落があり、教会まであるのに驚いた。立派な道も続いているし、アルパカの大群が放牧されている。山も予想以上にスケールが小さいが、氷河は発達していて、なかなか魅力のあるヨーロッパ・アルプス的な山だ。いたるところにスペイン隊の踏み跡が残っている。

七月四日、六日と二つに分れて最高峯コヨリティ(五六〇メートル)を目指した。スペイン隊も避けた急峻な氷河のダイレクト・ルートと稜線ルートをえらび、五時間半で全員登頂(隊長を除く九人)に成功した。頂上に立って驚いたことに、さらに北に大きな氷河をはさんで、五五〇メートル級のピークが五つ六つならんでいるではないか。そこで前進キャンプをコルケプンコ氷河の中央五〇〇メートルの地点に出し、七月七日、三沢、南井隊員が東端のコルケプンコ(五六〇メートル)とその隣のアヤカチIV峯(五五〇メートル)を、さらに七月九日、田中、野村、小川隊員がアヤカチI峯(五六〇メートル)、同II峯(五四五メートル)、同III峯(五五〇メートル)を次々と登頂、目ぼしいピーク全部を足下におさめた。このなかでアヤカチI峯は関学隊の初登頂だった。

私達一行には途中からヴィクトール・マヌエル・ドエニヤス君(25)というクスコ市警の巡査が同行した。クスコのゴンザレス警察長官が私達の護衛のために、特別に政府の命令で派遣してくれたもの。彼はクスコ大学の法科学生でもあり、かつてドイツ隊と山に入ったこともある山男で、しかも英語、ケチュア語が話せるので、大へん貴重な存在だった。ケチュア語の話せる巡査が来たために、部落のインディオ達はすっかりおそれをなし、おびえながらも、彼の言うことには絶対服従した。猟銃を持ってベース・キャンプ周辺を走り廻っては兎、カモ、パト(白鳥のような鳥)をとって来て、器用に料理して隊員を喜ばせたり、ある時はコンドルを撃って来て皆を驚かした。七日の夕方、二人の役人が馬でテントを訪ねて来た。何ごとかと驚いたが、国勢調査だった。私達もペルーの在留外国人としてこんな山奥で人口に加えられたわけだ。八日、ペルー新報の編集長である西村隊員が、休暇の都合で一人下山して行った。

私達は地図を作るという目的も持っていたので、トランシットレベル測量機でコヨリティ山群周辺を、丹念に測量して歩いた。二十キロもある機械を、稜線までかつぎあげるのは大へんだった。これは三沢、南井隊員が担当してくれた。私達は測量は素人だから、決められた法則通りに測量しながら、カメラのシャッターを切って行くもので、日本光学が特別にニコンの連動装置を作ってくれた便利なしるもの。南極やマナスルで使用したものと殆んど同じ。さ

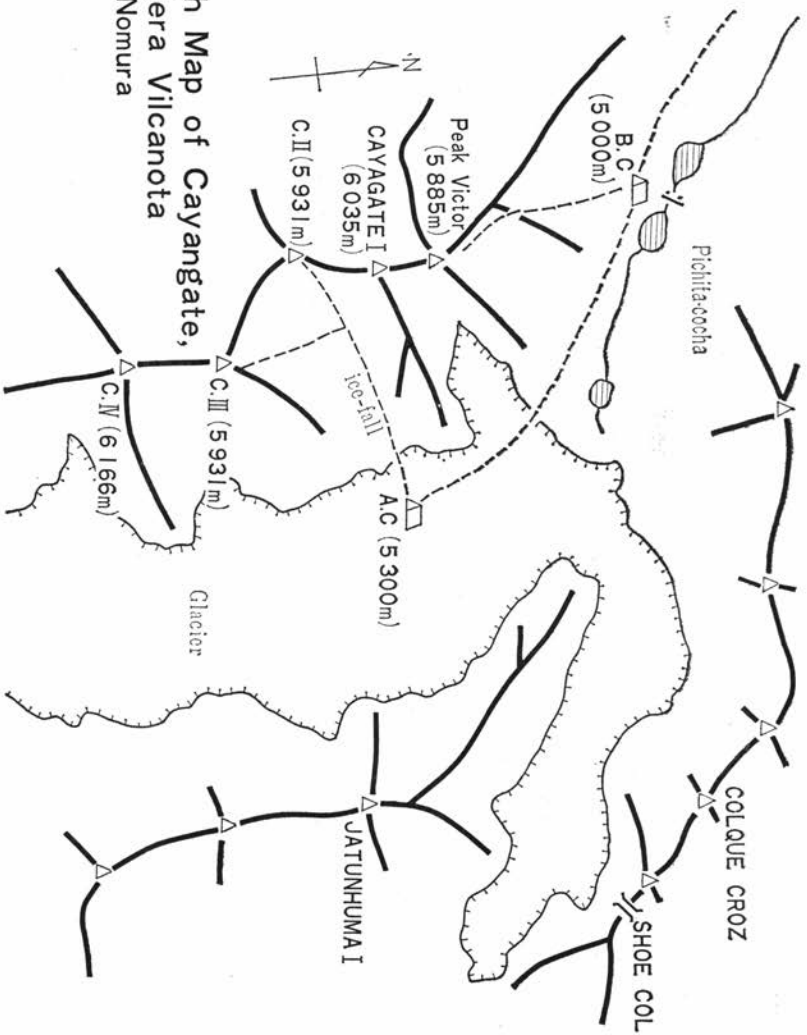
て山群を一気に踏破したので、予定を切りつめて七月十二日マワヤニに下山した。

3 カイヤンガテ初登頂

さきのコヨリテイ山群では予期していた学術調査の対象が全くなく、遺跡や土器類の破片すら発見出来ず、このため川村隊長はクスコ市を中心にインカ遺跡の調査や資料集めのために、七月十五日隊と別れてマワヤニ部落をあとにしてクスコ市に向った。川村教授には補佐役として長井隊員が同行した。したがってカイヤンガテへは藤木副隊長以下七人の隊員と、巡査のヴィクトールの八人になった。カイヤンガテは、これまでの資料によるとI峯からIV峯まであり、I峯(六〇三五メートル)とIV峰(六二六六メートル)は一九五三年八月すでにドイツ隊により初登頂されている。一九五七年のアメリカ、ハーバード隊は、その周辺の未登峰を数多く登ったが、カイヤンガテII峯、III峰は手つかずだった。いわば、けわしさのために残された未登峰でもあり、ドイツ隊、アメリカ隊、その他の外国隊がかねてからねらっていたピークで、南部ヴィルカノータに残された最後の山として知られていたものだった。

その西面は頂上直下から垂直な岩壁が露出し、全く手がかりもないので、とにかく東面に廻りこむ作戦で、マワヤニ部落を七月十六日に出発した。二十頭の馬とアリエロ(馬方)二人、インディオ数名が荷上げに同行、約一トンを運んだ。シギリーナ・コーチャ(青い湖の意)湖畔で一泊、十七日、ピチャ・コーチャ(ひもの湖の意)湖畔に到着、ベース・キャンブを設営した。ここは五〇〇〇メートルの高さで、湖にはパトやカモが泳ぎ、ハトンウーマ山群、ワイナ・アウサンガテ山群などにとり囲まれた、まことに眺望絶佳のキャンブ・サイトだった。カイヤンガテ山群の真北に位置するが、ここからは肝心のカイヤンガテはI峯の頭が少し見えるだけだった。

七月二十日、いよいよ最大の目標めざして全員で荷上げを開始した。氷河のツメ跡を思わせるガラガラの悪路を踏み越え、東側に廻りこみ、カイヤンガテ山群とハトンウーマ山群にはさまれた凹凸のはげしい氷河を南に進み、やが



Sketch Map of Cayangate,
Cordillera Vilcanota
By A, Nomura

てカイヤンガテII峰、III峰直下に出て、氷河上に第一キャンプ（五三〇〇メートル）の地点をみつけ荷物デポした。目前にもものすごいアイス・フォールがそびえ、この未踏の両峰は周囲のどのピークよりも手ごわく感じられた。翌二十一日の二回目の荷上げで第一キャンプを設営、田中、三沢の二人を偵察隊員として残した。第一キャンプから稜線にいたるまでの垂直に近い約四〇〇メートルのアイス・フォールは、全く手がつけられない程で、ここをなんとか乗り越切るためのルートをみつけたことが先決問題だ。二十二日、三沢、田中は、八時間かかってわずか二五〇メートルしかのぼれず、アイス・ブロックの落下もしばしばで危険を感じて引き返す。二十四日、野村、小川は十時間もかかって三五〇メートルのぼり、あと稜線までひといきというところで断念。

二十五日野村、小川両隊員がいよいよアタックをころみる。十時間かかってアイス・フォールをうまく乗り切ることに成功、その夜二人はやつと腰かけられるせまい氷のテラスをみつけ、ツェルトをかぶってビバークする。南十字星が美しく輝やき、寒い長い夜を慰めるようだった。疲労のためとうとうとして、大切なパンとクラッカーを絶壁に落してしまったのは致命的に思われた。翌朝、携燃でゆであずきのカンヅメ一つを温ため、二人で分けて食べ、ナイフリッジを慎重に進んだ。頂上直下の大クレバスを回り、二十六日午後零時四十分、ついにカイヤンガテII峰（五九三二メートル）の初登頂に成功した。頂上は雪庇におおわれ一人しか立てないので、交代でピッケルにペルー、日本の両国旗を結びつけてふりかざした。危険のために初登頂の感激はあまり味わえなかったという。朝から何も食べずフラフラになって下山してきた二人は、第一キャンプにたどりつくくと精根つきはてて、氷河上にぶつ倒れ、男泣きに泣いて喜んだ。三十五時間の苦闘でかち得た大記録にふさわしく印象的だった。

一日おいて二十七日、田中、横山両隊員がIII峰（五九六九メートル）をめざして出発した。前日の踏み跡をたどって正午前には稜線にたどりつき、ナイフリッジを一寸刻みに進み頂上直下に出た。ところが頂上からトラック大のアイス・ブロックがごう音をたててつきつきとくずれ落ち、一時は断念したが、勇気をふるって登りつめた。頂上はカミ

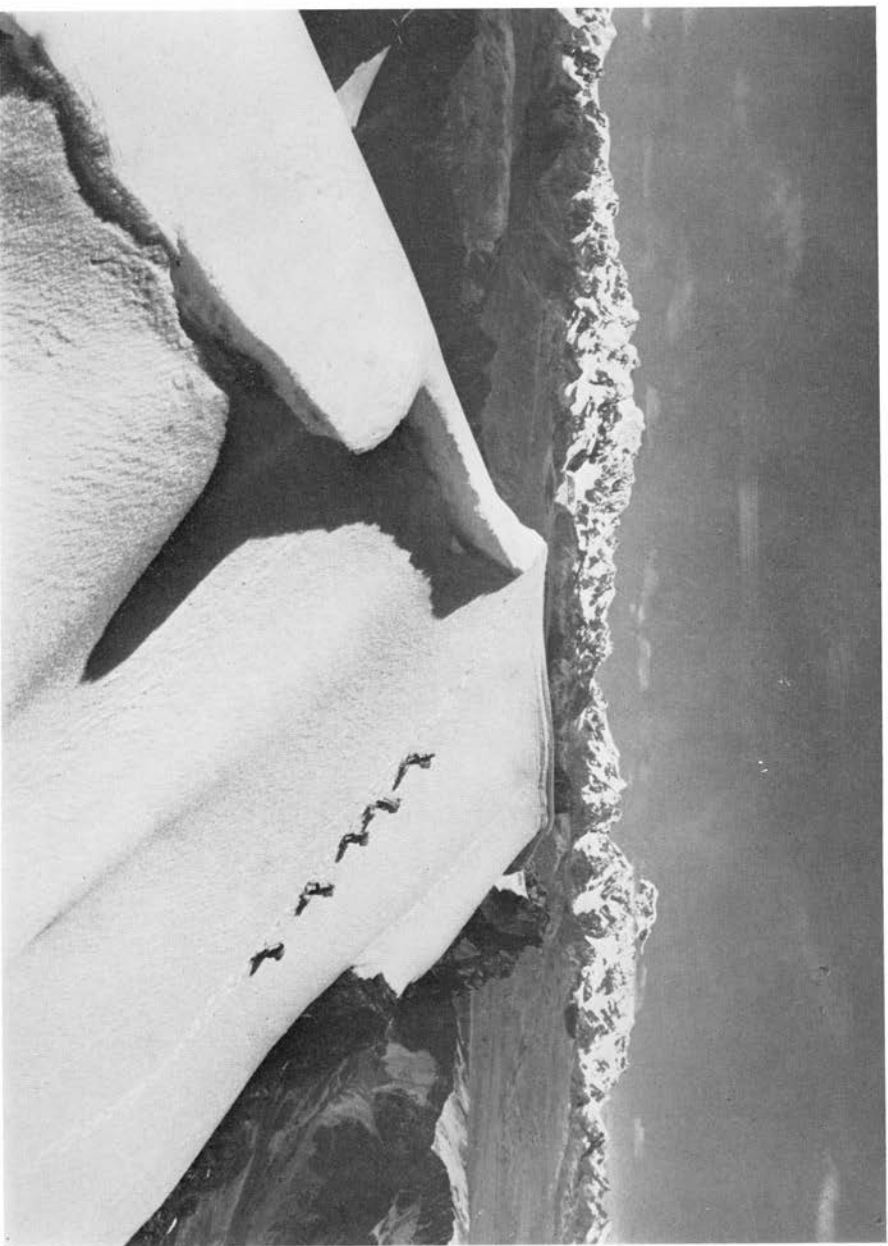
ソリの刃のようにきり立っており、到底立てない。手をいっばいのばしてピッケルを頂上に立てた。ピッケルが身代わりに立ってくれたようなものだった。こうして米、独の登山隊がかねてからねらっていた両峰に一步先んじてついに日の丸の旗をうち立てることができた。この成功をふりかえってみると、私達がワスカラン、コヨリテイ山群ですでに高度順応が出来ていたこと。氷河やアイス・フォールのスケール、技術面で、すでになれていたこと。すでに成果を挙げたあとだったので、カイヤンガテはもし失敗しても良い、ただベストを尽すだけだという無欲の登山。これが勝利をもたらしたのだろう。

ところで有終の美を飾ることが出来たもう一つの登頂が七月三十日になされた。藤木、三沢、南井の三隊員と、ヴィクトール巡査の四人が、ベース・キャンプから第I峰の北西面をめざした。この西面からのルートは、岩場とアイス・フォールの連続で、I峰に登ったドイツ隊も避けたルートだ。さて、コヨリテイ以来四十日間同行したヴィクトール君は、かねがね自分もどこかのピークに登りたいと私にもらしていたが、政府の命令で護衛のために同行している彼に、もしもの事があつては申し訳ない、国際親善上とりかえしのつかないことになるという理由から、私は許さなかつた。そして最後に彼にチャンスを与えたのだった。

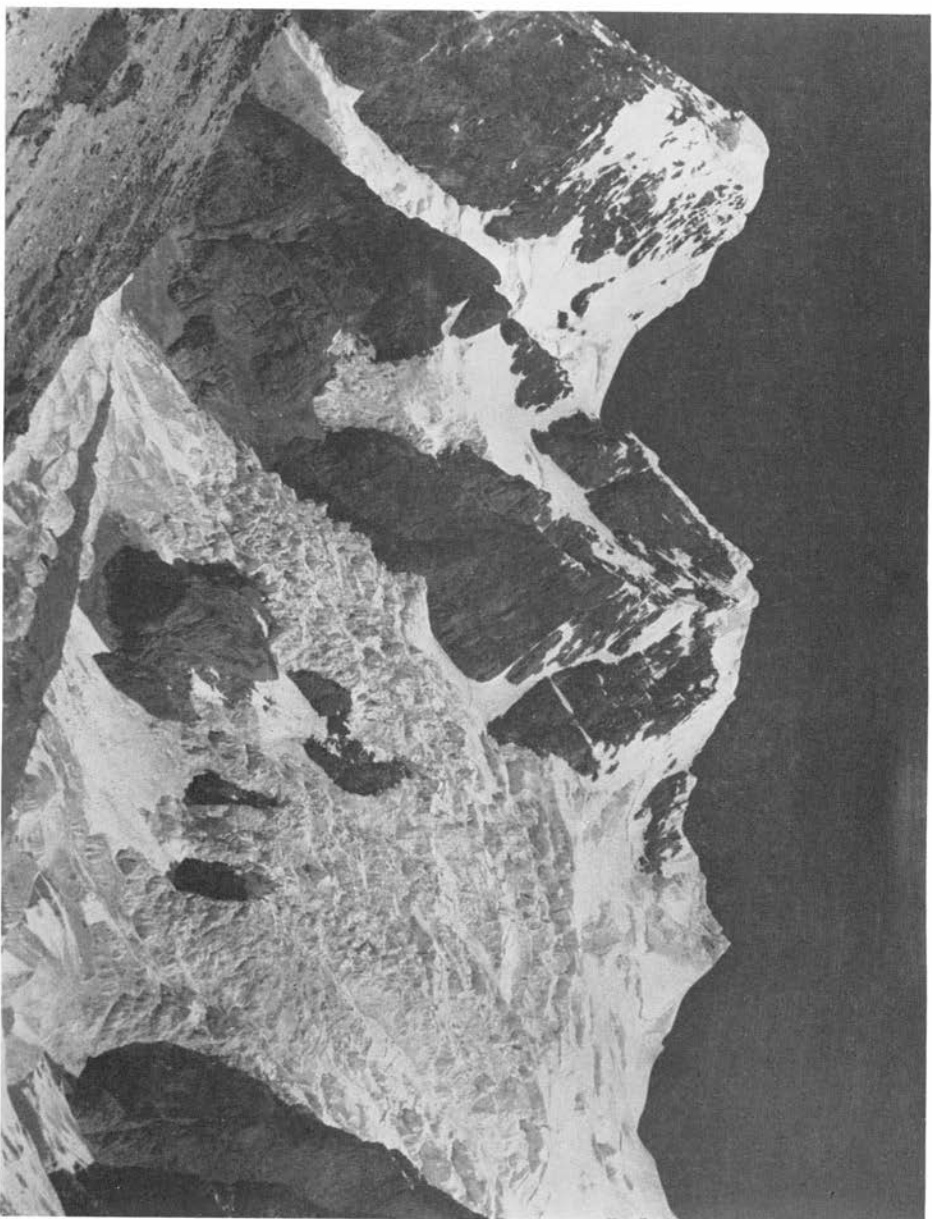
出発前夜、隊員から借りた装備一式を、まくらもとにならべて、はしゃいだ格好は、遠足前夜の小学生のようだった。ドイツ隊と山に入ったというだけに、技術面もまあまあだが、とにかく若い巡査だけに体力は大したものだ。午前五時にベース・キャンプを出発、前後からヴィクトール君をザイルで確保、いくつものオーバー・ハングのアイス・フォールを乗り切り、困難をきわめたが、午前十一時すぎI峰の北にそびえる無名のマイナー・ピーク（五八八五メートル）の直下に出た。まず三沢がトップで、ナイフリッジを馬乗りになつて進んだ。このピークは中天にヤリのようにそそり立ち、最後の四十メートルはきりたった急斜面で六十度はあるだろう。途中何度かためらいながらも登りきり、頂上寸前の浅いクレバスに身を沈めた。ヴィクトール君に花を持たせるため、三沢と南井が上下から彼を確



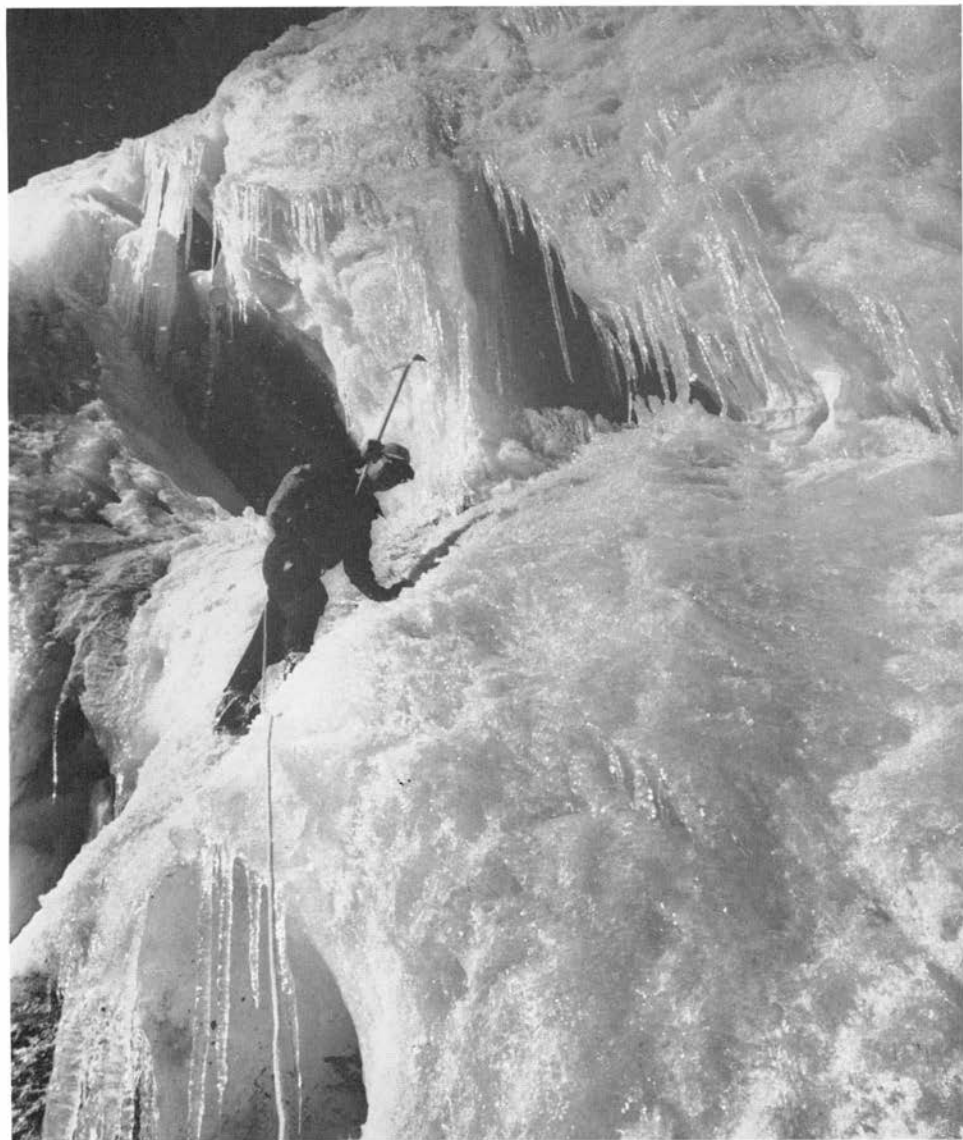
カイヤンガラのヴィクトール峰初登頂成功の一瞬、背後の一番高いのがゴルケクルス、左端がコイナ・アルパヨ
The first ascent of "Pico de Victor" (5885m), Cayangate, with Alpamayo (5980m) (left) and Corque Cruz (the highest) in the background. (by T. Fujiki)



コヨリテイの稜線めざして登る—背後はカイヤンガテ (左) とアウサンガテ (右)
Ascending to the crest line of Coylloritti, with Cayangate (left) and Ausangate (right) in
the background (by T. Fujiki)



カイヤンカテ II 峰、III 峰、IV 峰 (右から) と大アイヌ・フォール
Cayangate VI (left), III (center) and II (right) with the great icefall. (by T. Fujiki)



コヨリティ氷河末端のアイスフォールに挑む
Step-cutting in the icefall of the Ccoylloritti glacier. (by T. Fujiki)

保、一步一步慎重に進んで行く。やがて三沢の頭を乗り越え、頂上の雪庇の下に立つ。向う側に張り出した危険きわまる雪庇の上に進もうとする。おどろいて「パレ、パレ」「ストツプ、ストツプ」とさげふ。しかし彼は雪庇を知らないから更に登ろうと必死、六〇〇メートルでの綱引きだ。ようやく気がつき、ここが頂上だと分るとピッケルを高くふりかざした。ときに午後一時。感激のあまりヴィクトール君は、わめき、歌い、さわぎ、一向に降りて来ようとはしないのだ。二十分もしてやつとあきらめて降る。待ちかまえていた私と南井に抱きついて喜ぶ。

それから三人は交代で頂上に立つ。私達が頂上に立つても感激はホンの一瞬で、危険のためにあまり感激は味わえず、キャンプにたどりついてはじめて、この足があの頂きを踏んで来たのだと、しみじみ感激を味わうのにひきかえ、ヴィクトール君の感激ぶりを見て、国民性の相違とはいえ、うらやましくさえ思ったものだ。ところが下山の途中、クレバスに落ちこんだヴィクトール君が、前後からザイルで確保しているにもかかわらず、必死の悲鳴をあげ、それ以後さつきまでのはしやぎようはどこえやら、三日間も口をきかなかつたのは気の毒でもあり、おかしくもあつた。さて、この無名峰はあとで彼の名をとってピコ・デ・ヴィクトール、つまりヴィクトール峰と命名した。このこととはのちほどペルー山岳会長H・R・スターン氏もゴンザレス警察長官も喜ばれ、私はペルー山岳会の終身会員として特別の榮譽を与えられたものだ。

(ベース・キャンプとインディオのこと)

今度の私達の遠征で自慢出来ることの一つにベース・キャンプの食テン(食堂専用テントのこと)がある。燃料はすべて丸善石油のツバメプロパンを使用した。ベース・キャンプまではすべて馬が荷上げするという利点を利用して、一個二十五キロもあるプロパンのボンベを数個運んだものだ。プロパンボンベからガスレンジを五台もならべた食天は、ちよつとした家庭の台所以上に豪華なものとなつた。

食料はなんといっても皆の活動源だし、又前後四カ月にわたる長期間のために、これまでの他の遠征隊にはみられ

ないコリようだった。食料の殆んどは日本から持って来たもので、現地で購入したのは野菜、果物、肉類だけ。一千四百五十カローを基準として主食はアルファ米、パン、クラッカー、ラーメン等十種類、副食は百五十種、調味料が三十種、嗜好食は五十種というバラエティに富んだもので、現地でカモ、ウサギ等を撃つて食べるためには特に香辛料を十種類程用意した。

献立は食料系の田中、横山両隊員が割ばう学校に通って研究したり、神戸女学院のお料理の先生を新妻に持つ田中隊員が奥さんと二人で考案したりした。巻ずし、ちらしずし、すき焼き、水だし、丼もの、コロケ、ハンバーグからお好み焼き、ホットケーキもお手のもので、土用の入りにはマムシが食べられるといった具合。たくあんの缶詰に飽きてくると、キャベツの漬物までこしらえてくれたものだ。

ベース・キャンプの周辺にいつもむらがつてくるのが土人のインディオ達だ。生れながらハダシで一生風呂にも入らない。アルパカやリヤマを追い、荒地を耕やしてトウモロコシやジャガイモを作り、みじめな生活をつづけている。彼等がキャンプにやってくるのは、私達の捨てる空缶、袋類を拾うためなのだ。だからいつでもキャンプのまわりはきれいなもの、もし日本の山にもインディオ達がやって来たらさぞきれいになるだろうと笑った。

粗末な土器しか持たない彼等にとっては、空缶は食器や容器として貴重品なのだ。そこで私達も空缶を捨てずに、空缶を与えては荷物をかつがせたり、水を汲ましたり、鉄砲で撃ったウサギの料理をさせた。カイヤンガテのベース・キャンプではピースの空缶四個と大きなマス二匹と交換して傑作だった。彼等はハダシのまま氷河の上でも、サポテン畑の上でも走って行くのには全くあきれられる。その足の裏は象の足のようによく固く、登山靴より丈夫なのだ。馬にけられて大ケガをしたインディオに注射したことがあったが、アルコール消毒で腕をふく脱脂綿がよごれないのだ。隊員たちにビタミン注射をするときは、真っ黒くろによごれるのに不思議なことだ。食物のせい、乾燥しているせい、一生風呂に入らなくてもよいように自然に出来ているものだなと感心した。

木が一本もはえていないから燃料は何を使うのかと思つたが、これは牛の糞だった。乾燥した草ばかり食べた牛が、糞を乾燥地に落すのだから、まるで牛は固形燃料を落して歩いていようなものだ。私達も石を積んでカマドを作り、牛の糞を拾い集めてジャガイモを焼いてみたが、まず、くさくさなく、火力が強く、火持ちのよいのに全くあきれてしまった。ためにに巨大なヤツを一つ日本に持ちかえつたが、湿度の高い日本では威力を充分發揮出来なかつた。インディオ達も日がくると、トウモロコシから作つたチチャという酒を飲み、さびしそうなワイノ（民謡）を歌い、しいたげられながらも生活に甘んじている姿が印象的だつた。

無事山行を成功裡に終えた一行は、クスコ周辺のインカ遺跡を見学、インカ最大の遺跡マチュピチュの廃城をたずね、更に北のアマゾン上流キャバンバのジャングル地帯に働く日本人技師に会うことが出来た。先に六月二十四日クスコで行われたインカ最大の祭りインティ・ライミイ（太陽の大祭）の圧巻を見る事が出来たのは誠に幸運だつた。南部ペルーの旅行ではチチカカ湖をおとすれ、トトラ葦で作つた人工的な浮島に住むウルス族の生態を見る事が出来たのも貴重な体験だつた。ポリヴィヤに越境してチュワナコの遺跡も見学、さらにアレキッパ市、タクナ市を経てチリーのアリカをたずね、八月二十三日リマ市にひきあげて来た。

私達の遠征に当初から御協力、御支援を賜つた日本山岳会の皆様から厚く御礼申し上げます。

P 二九の西面

篠 田 軍 治

はじめに

P 二九のような山が、そう簡単に登れるものでないことは初めから予想されていたことであつた。最悪の場合は一ス・キャンプの設営もできないかも知れない。しかし、マナスルとヒマルチュリの間にある山だけに、今までに多くの日本人に観察され、ある程度のこととはわかっている。案外一回で登頂できるかも知れない。今度の遠征は偵察が主であつても、登頂の機会があつたら登頂もしたい。そうなると隊の構成をどうするかということが問題になつて来る。最初は隊長以下六名という予定だったが、偵察、登頂という二つの目的を達成するためには、もう少し隊を強化する必要があるということになつて、結局つぎの八名になつた。

隊 長 篠 田 軍 治 阪大工学部。

副隊長 住 吉 仙 也 川崎病院。

隊 員 尾 藤 昭 二 阪大武田外科 医療、食糧。

山本光二 大和銀行 会計、食糧。
 西川元夫 近畿日本鉄道 装備、通信。
 兼清喜雄 日立製作所 装備。
 山本信樹 日産自動車 装備、気象。
 小秋元隆邦 東京放送 報道。

仕事の分担に兼務が多かったのは、偵察の段階が長いと予想されたためである。住吉は唯一人のヒマラヤ経験者という意味で、医療の方の責任者から除いたのである。留守責任者にはヒマラヤの経験者を、というのが私の持論であったが、これは一方では隊を弱体化する怖れがある。その点、随分問題になるところであるが、結局、徳永篤司に事務局長になってもらって、私の持論通りになった。

阪大山岳会としては、この計画以外に田島汎の立案したサイパルがあり、P二九に絞られて来たのは一九五九年の初めの頃であった。しかし、本格的に動き出したのは一九六〇年の夏からであったから、登山手続、準備などはあわただしい中に経過し、一九六一年二月一七日のサーダナ号で尾藤、山本光、西川、兼清の先発四人が大阪市大、岳連両隊と共に神戸を出帆し、篠田、住吉、山本信、小秋元の本隊が三月一〇日エア・インディアで羽田を出発し、カル Катタに向った。

キヤラバン・ルートの選定

今までに手に入った資料*から、P二九を西北面からやろうということとは比較的早く決定した。西北面に入るにはキヤラバンの出発点がボカラになり、マルシャンディの谷に入るのは当然であるが、麓に近づくにはムシ・コーラの谷をつめるのと、トンジェ附近から入ると、それらの中間から入ると三つのルートが考えられる。

*慶応ヒマルチュリ隊の各位及び今西寿雄氏の御好意によるものが多かった。

インド測量局の地図では六七〇〇メートル峰からの尾根は南西に延びて、ムシ・コーラとマルシャンデイとの合流点附近に及んでおり、ムシ・コーラの源頭はマナスルとなっているが、一昨年の慶応隊の結果では、ムシ・コーラの源頭はヒマルチュリであつて、マナスルとムシ・コーラとの間には尾根があることがほぼ確実になつてゐる。

そうなると、この分水嶺の北に相当な川がなければならぬ。マナスル隊やヒマルチュリ隊に参加した数人の方の意見を総合すると、トンジェ附近にはそれらしい谷はなかつた。トンジェとジャガートの間あたりで、マルシャンデイの河原が開けたところに滝が落ち込んでいて、その水量が相当あるので、これがその谷に相当するとも考えられる。しかし、これでは少し南に寄り過ぎてゐる。今西寿雄氏のナムン・バンジャンからの写真から考えると、どうしてもマナスルから三本歯を通つてトンジェ附近まで達している尾根の南側に、相当な谷がなければならぬ。しかし、この谷は深いゴルジュになつてゐるものと想像される。こんな事情を勘案すると、トンジェから入るのには意外な困難が予想される。

*これはタールという茶店が二軒あるところであることが確認されたが、本谷ではないようである。

一方、ムシ・コーラの方はどうであらうか。もちろん分水嶺は越えなければならぬ。そうなつてくると分水嶺の北側が降れるかどうかが問題である。住吉は三月二十七日カトマンズからポカラに飛び、機上からの観察結果では、北からの氷河がこの分水嶺に突き当つてゐる形だから、相当な断崖が想像されると悲観的な意見になつた。私も小秋元、ピナヤと共に同じコースを三月二十九日に飛んだ。その時は住吉のときほど天気はよくなかつたが三千メートル以上はよく見えて、観察の結果では分水嶺の尾根と六七〇〇メートル峰の末端との間には相当な距離があるから、どこかにカール地形のようなものがあつて降りられるところがありそうに思えた。こうした事情と三千メートル附近の雪が例年よりも確かに深いように思われたので、最初の偵察隊は南斜面からということにしてムシ・コーラの谷に入れ

ることにした。

最初の偵察隊は四月四日午後、住吉、西川、ヒラ・テンジン、クンガ・ノルブ、パサン・ノルブと常備ポーター二人、ポーター七人計十四人で出発した。本隊は四月六日ポカラを出発し、九日クデイに到着した。この日、ナルマ、ダサダ、バグルンパニと一六〇〇メートル附近の尾根を通っている間に、六七〇〇メートル峰や分水嶺附近の地形を遠望して、六七〇〇メートル峰の続きは分水嶺（西尾根）とつながっていないことは確認されたが、トンジェ方面の岩峰は相当に峻しいことも明らかになった。そこでムシ・コーラの偵察隊を強化することにして、山本光、山本信を一一日に出発させた。

* 偏光フィルターや日立の干渉フィルターを双眼鏡につけて観察した結果である。フィルターを使わないと明瞭には見えなかった。

ポカラでポーターの集りが悪かったため、尾藤、兼清は一日遅れて出発し、一〇日にクデイに着き、一一日にはマルシャンデイ左岸の山をできるだけ高い所まで登るつもりで出掛けた。ところが彼らは住吉の手紙を持ったポーターと途中で出会い、ジャガートの対岸のチプラあたりから登るルートが有望なことが判明したので、装備その他を多少変更するために、夕刻クデイに引返して来た。そして翌一二日再びチプラに向けて出発した。西尾根の続きか、ダハレの裏山あたりに湖があって、これが登路と関係がありそうだということはカトマンズでの聞き込みで知っていたが、それが住吉の手紙でチプラから行けるらしいということになったからである。

尾藤隊はチプラの附近のサンジャブルに湖を知っている人があることを確かめ、湖がドウド・ポカリと言って牛乳のように濁っていて、神聖な所であることを知り、西尾根の支尾根へ向い四二〇〇メートルのコルに達して、湖へは岩峯を巻いて行けば、それほど困難ではないが、キャラバン・ルートとしては見込薄であることを確かめて、一六日ベース・キャンプへ帰着した。

翌一七日ベース・キャンプをムシ・コーラの合流点の附近まで移動し、一八日には篠田、尾藤、シエルパニ、ポー

ターニでムシ・コーラ左岸の尾根へ西尾根の偵察に向つた。ムシ・コーラをつめて、ツルベシの直下の竹橋まで来ると、ツルベシの茶店にシエルバが二人降りて来ているとの情報が入つたので、直ちに連絡すると住吉からの手紙を持つていた。

それによると、住吉は四九〇〇メートルの西尾根の^{*}コルに達し、目の前にマナスル、P二九を源頭とする大きな氷河（ツラギ氷河と呼ぶのが適當であろう）があり、その上流は大きなアイスフォール、下流は壮大な土かぶりの氷河となつて、六七〇〇メートル峰で大きくUターンして北に流れ、末端に大きな湖があり、それから下流では左折してトンジエ方面に向つており、このアイスフォールは困難ではあるが、ルートとして選べないことはないとのことであつた。

* いつの間にか「住吉コル」と呼ぶようになってしまった。このルートを見つけるのには相当苦心した。山本（光）は対岸の慶応隊のBC附近に登つてみて、このコル以外に西尾根を越えるルートのないことを確認した。

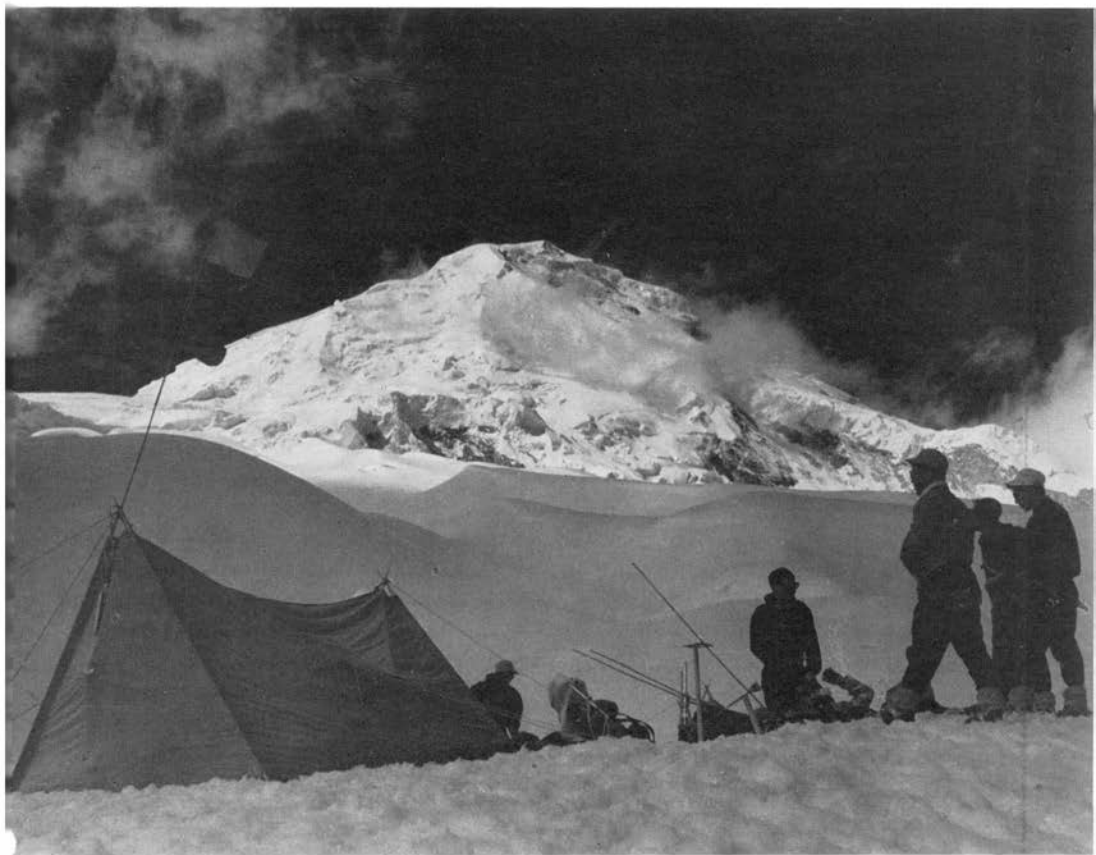
問題はこの氷河のモレーン上をベース・キャンプに選ぶとすれば、どのルートをとつてキャラバンを進めるかということである。距離的に考えてトンジエから入ることも考えられる。しかし、この大きな氷河が今まで未知であつたことは、トンジエ方面には入つた人がなかつたこと、換言すればトンジエ方面から入ることは非常に困難であることを意味する。ムシ・コーラからでも四九〇〇メートルのコルを越えてキャラバンを進めることは困難には違ひないが、不可能ではない。以上のようなわけで、キャラバンはムシ・コーラの谷へ進めることにした。一八日に住吉、山本光が帰つて来たので、一日準備して、二〇日に新しく雇つたポーター八名と共にキャラバンに移つた。二〇日ツルベシ、二一日ダハレ泊り、二二日ダハレの夫人の一寸したストが起こつたが、チトラ、カルカ泊り、翌二三日もポーターのストがあつたが、かまわず登つて三九〇〇メートルの、後に「雲上カルカ」と命名した所に達した。

チベット人によるコルの途中までの荷上げは二五日に終了、これと併行して隊員とシエルバも荷上げを続け、住吉、西川は一足先きにベース・キャンプの位置の選定に出掛け、本隊は肛門腫瘍のイラ・テンジンを残して、三〇日



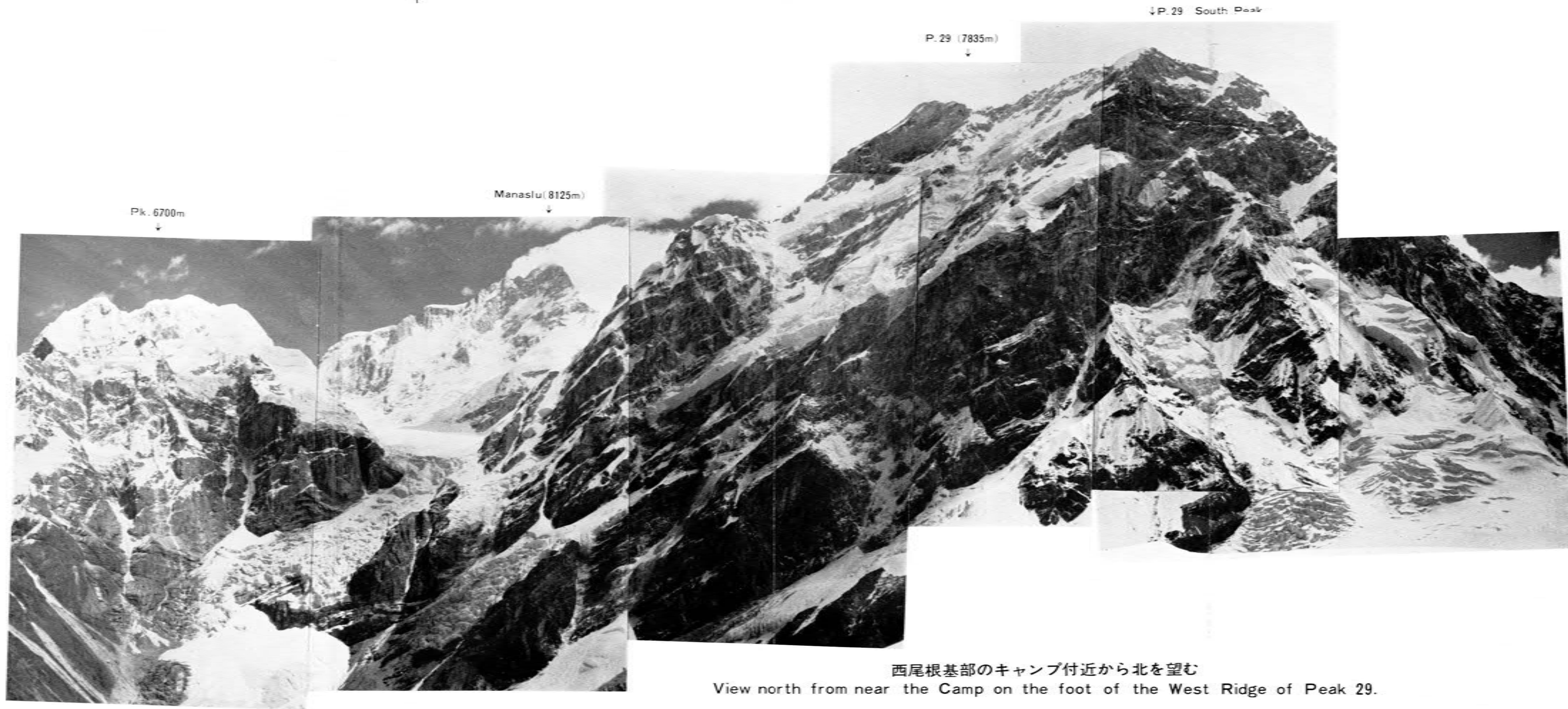
カイヤンガテのベースキャンプ夜景—正面はハトンウーマ第Ⅰ峰—

Cayangate Base-camp in the night, with Jatunhuma I (6094m) in the background.
(by T. Fujiki)

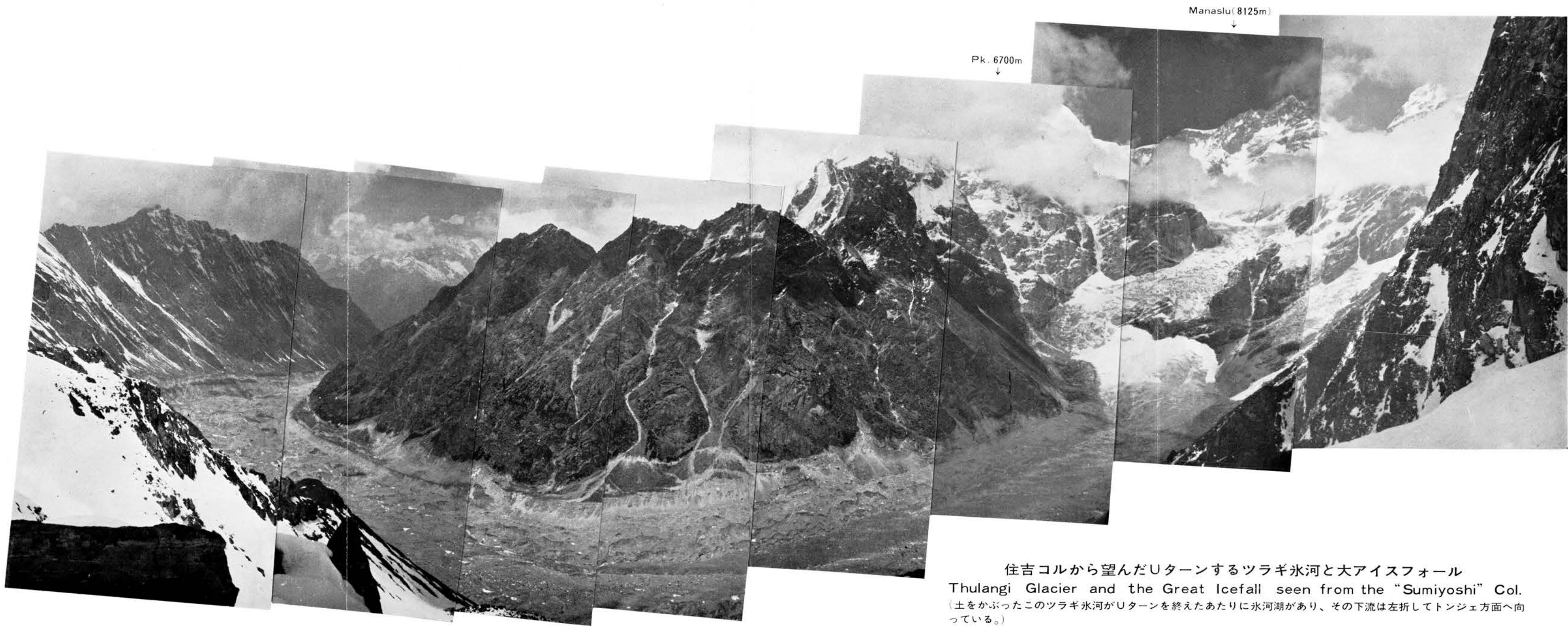


ワスカラン第1キャンプの夕暮れ—正面がワスカラン南峰—

Huascarán Camp I in the evening, with Huascarán South (6768m), the highest peak in Peruvian Andes. (by T. Fujiki)



西尾根基部のキャンプ付近から北を望む
View north from near the Camp on the foot of the West Ridge of Peak 29.



住吉コルから望んだUターンするツラギ氷河と大アイスフォール
Thulangi Glacier and the Great Icefall seen from the "Sumiyoshi" Col.
(土をかぶったこのツラギ氷河がUターンを終えたあたりに氷河湖があり、その下流は左折してトンジェ方面へ向
っている。)

には大部分が氷河のほとりのベース・キャンプに入った。

ベース・キャンプ

西尾根の雲上カルカに到着した日は、初めて全員が顔を合せた日であった。ポカラ滞在中にもパイロワから兼清が飛来したときも一応全員が揃ったわけであるが、兼清はすぐに同じ飛行機でカトマンズへ査証その他の用事で出発してしまつたので、落ちついて話をする暇もなかつた。ムシ・コーラの谷を登ってキャラバンを進めて来たときも、西川だけはアイスフォールの雪崩の観察をするために残留したので、やはり全員は揃わなかつた。

サーダナ号で出発した四人は、二月一七日神戸出帆、本隊は三月一〇日羽田発、そしてサーダナ号がカルカタへ入港したときには篠田、住吉、小秋元の三人はカトマンズへ出発した後であった。残りの隊員が荷物と共にパイロワ経由でポカラへ到着して、初めて大部分の隊員が揃つたが、兼清がカトマンズから戻つて来たときには住吉、西川は偵察に出発してしまつた後であった。

こんな具合で全員が揃うと急に賑やかになる。雲上カルカは南斜面で快適な所で、薪も多いのでキャンプ・ファイアは楽しいものであった。

これにくらべるとベース・キャンプの位置は条件が悪い。四月一七日に住吉がコルから初めて、マナスル、P二九、六七〇〇メートル峰の間から出て、大きなアイスフォールから土かぶりの氷河となり大きくUターンして北に向かい、末端に氷河湖をもつ幅約一キロのこの氷河を発見したときは、あまりにも蕭条として、絶えず上昇気流のために雪と霰を降らしているこの谷筋は、全く地獄のような感じがしたそうだ。その上にベース・キャンプは北斜面の燃料の全く無い地点である。ベース・キャンプとしてU字型の峡谷の陰というのは、標高は四三〇〇メートルであまり高いとは言えないが確かによくはない。しかし、雲上カルカをベース・キャンプ(BC)として、ここをアドヴァンス・

キャンプ（A C）と仮定すると、A CからB Cに戻るのに高いコルを越すことはいかにもまずい。こんなわけで、環境は悪くてもB Cはここに選ぶより外に方法は無かった。結果は予想した如く晴れた日でも午後は上昇気流による雪と霰、それが落ち尽すとまた強い日射、また雪と霰というサイクルを繰り返し、五月末の撤収の頃まで緑というものを見ることはできなかった。

西尾根の基部は断崖となつて南峰の近くに続いているので、登路としては問題外である。唯一の考えられる登路は、B Cから氷河を登りアイスフォールを越えて雪原状の所へ出て、マナスルとの間の鞍部へ出ることである。アイスフォールの落差は一五〇〇メートルほどで平均して三〇度を越える傾斜である。左岸は断崖になつており、とても登路にはならない。そうなると思えられるのは右岸だけである。右岸にしても非常な困難が予想される。住吉も暇さえあればアイスカッティングのトレーニングをやっている。

右岸にはのしかかるように六七〇〇メートル峰の末端が蔽いかぶさつており、そこからなだれが落ちる。またアイスフォールと土かぶりの氷河との境界が岩壁になつて切れていて、小さななだれが落ちる。前者をBなだれ、後者をAなだれと言うことにして、四月十八日以後偵察隊の西川を残留させて、雲上カルカから毎日コルへ登つてなだれの状況を観察させた。

このアイスフォールを初めて望見したときには、まだなだれはそれほど顕著でなく、土かぶりの氷河も上端附近までデブリはなかった。四月の末になると次第に活澗になつて来たが、それでも半日間にAなだれ三回、Bなだれは二日に一回程度であつたが、五月に入ると共に漸く劇しくなり、多いときにはAなだれは一時間に八回を越えるほどになつた。

寒さがゆるむと共になだれの発生場所も次第に高い所に移つて行き、時にはP二九頂上直下の岩壁の基部の末端の氷が崩れて、岩壁一面に幅二〜四キロ程度のものが落ちて来て、土かぶりの氷河まで達し、しかも幅一キロの氷河を

横ぎって対岸に達するようなものも何回か観察された。

Aなだれは、数が多いが小さいのが多いので、右岸を通れば避けられないことはない。しかし、右岸はBなだれをまともに受けることになる。その上にBなだれよりも一段上のところからなだれがおこる。また、北へ曲がっている氷河の上流には、兩岸のマナスルと六七〇〇メートル峰から絶えず落ちていくことが、音から推測される。右岸のアイスフォールの上部には、比較的緩い白い斜面が見えるが、そこは言うまでもなくなだれの通路である。

こうしてアイスフォールでの長期間の行動が、問題にならないほど危険であることが明らかになったので、あらためて左岸の岩壁の観察が進められ、二〇〇〇ミリ望遠レンズを使って所要所が細かく観察された。その結果は全く否定的で、その上に左岸は頂上直下からの大なだれを避ける方法がない。何れにしてもアイスフォールでの長期の行動は許されることが明らかになった以上、登頂行動を断念して、つぎの行動に移らなければならない。

そこで五月六日朝、隊員、シェルパ全員を集めて、隊の今後の方針、登頂活動を断念して今後に備えて氷河の奥とP二九頂上附近の状況を明らかにするために、六七〇〇メートル峰の試登を含む偵察と、トンジエ・ルートの開拓に全力を注ぐことにすると宣言した。

アイスフォールを登頂ルートに選ぶことは、当初から覚悟していたことであつた。しかし、現実にP二九のアイスフォールにぶつかってみると、あまりにも想像とかけ離れていたものであつた。あらためてハントの『エヴェレスト登頂』を取り出して、クランプのアイスフォールの写真を眺めた。エヴェレストのアイスフォールならば何とかして試みる気になるが、このアイスフォールは兩岸が切り立っており、あまりにも悪い所が多い。スイス隊に参加してエヴェレストへ行ったサーダーのアジーバが、後で語ったところによると、エヴェレストのは悪い所が短かいので何とかなるが、ここのアイスフォールは悪い所が桁違いに長いので、とても不可能であると言っていた。

六七〇〇メートル峰の試登と偵察活動

五月七日は休日にして、八日からまた行動を開始した。漸くBCに集結した荷物の一部を、また六七〇〇メートル峰試登のために移動させなければならない。八日には全員で氷河の左岸を降り、はじめて氷河湖の左岸をまいて、マルシャンディへ注ぐ支流の源流へ出た。このあたりへ来ると標高も三九〇〇メートル程度になって岳樺が現われ、新芽が出ている。荷物をデポして引き返す途中、湖畔の岩小屋の中にカルカの材料と思われる細い木材を見つけた。

これでこの谷にも、過去において人が入ったことのあることは明らかになったが、木材はいかにも古い。またこれより下流に人の入った形跡が見出だせない。今でも人の通れる道があるのかどうか、またこの木材をここに置いた人はどこから来たのか、何とも推定し難いのが却って無気味でもある。

後になって、このドナ・コーラの谷には猟師道があつて、マルシャンディ河畔のナジェに通じていることが尾藤隊によって確かめられたのであつた。

六七〇〇メートル峰の試登隊は、最初西川、山本信、アン・ナムギャル、アン・ダワの四人で五月九日出発した。

一二日に住吉、兼清、カルマオンチュウ、クンガ・ノルブの四人が応援に出掛け西川と兼清が交代した。以下は西川の手記である。

五月九日 晴後雨、夜晴

十時出発、氷河湖の下端から少し下った所が森林限界、その頃から雨が降り出す。日本の早春を思わす針のような雨に濡れて、石楠花や樺の木は新らしい芽をふくらませている。一五時、昨日荷下げして荷物をデポした所、広河原にキャンプする。(この日BCでは午後は霰と雪であつた。氷河湖のあたりから下が雨になっていた。)

五月一〇日 曇、雪、夕方晴

天気は曇っているが、下流のマルシャンデイの上空に少し青空がある。八時、トンジエ・ルート偵察に向う尾藤隊が出発、われわれも少し遅れて出発する。

六七〇〇メートル峰西面の氷河は、このキャンプのすぐ上で懸垂氷河ハング・アイス・リバーとなつて消えている。その氷河に達するには氷河の北側の草付きの岩稜が唯一のルートに見える。高度差一〇〇〇メートル。はじめ鹿道などを辿つて登つて行くうちに、どんどん高度をかせぎ、一二時三分氷河の下のガラ場、高度四六五〇メートルに達する。一〇時頃から降り出した雪がますますはげしくなる。ガスも濃くなり地形の判断もつき難いので引き返す。広河原キャンプ一五時帰着、尾藤隊は既に戻っていた。

五月一日 晴

今日は氷河上にキャンプを進めるためのボツカである。七時半出発。昨日ルートがつくつてあるので、足ははかどり、岩のガラ場を通り過ぎて一三時半、フンギからの氷河のセラック帯の下端の、あまり広くない雪原に達す。高度四九〇〇メートル、ここをキャンプ地にきめる。半時間ほどいて引き返す。広河原のキャンプへ一六時半に帰る。

五月二日 晴

広河原に来て今朝が一番良い天気である。アン・ナムギヤルだけが今日このキャンプに戻ることにして、他の三人は昨日見付けた四九〇〇メートルの雪原にキャンプRC2を進めることにする。朝、良かった天気も、四一〇〇メートルの高さにある大岩庇のところに登り着いた一一時頃には、真上に少し青空を残してガスに囲まれてしまった。

一四時半にキャンプ・サイトに着いた。アン・ナムギヤルはすぐ広河原に下る。一六時過ぎガスが晴れて来たので、キャンプの裏のこぶへ登る。六七〇〇メートル峰から出ている上下二段の氷河の合流点が、大雪原となつて足下に広がり、西へアイスフォールとなつて落ちている。上段の氷河は最後まで急峻なアイスフォールの連続で、奥はヒマラヤひだとなつて稜線につき上げている。下段の氷河は所々に緑色の断層を見せているが、大部分が雪原のように

見え、上段に比べれば坦々としている。しかし稜線へ出るには、これもまた容易でない。氷河のつき当りの壁にはヒマラヤひだが見られ、さらに上部には懸垂氷河がかぶさっている。唯一の登路は、あの三角形の北の一辺しかない。

五月一三日 晴後雪

下段の氷河にキャンプを進めることにする。七時半出発、一旦氷河合流点の雪原まで下ってそれを横切り、アイスフォール帯に入る。午後になると定期便のガスがやって来て、あたりを包んでしまう。ただでさえ視界のきかないアイスフォールの中で、二〇分もガスの薄れるのを待ったりして一四時、荷物をデポする。高度五二五〇メートル、折から降り出した雪の中を二時間かかってRC2に引き返す。キャンプには兼清が来ていた。

五月一四日 晴、午後ガス

休養のための停滞。

五月一五日 晴、午後ガス

山本はせきがひどく体の調子が良くない。兼清と二人でRC3を建設したらこれに入ることにして、八時半出発。トレースがあるので足はよく伸び、一昨日苦勞した氷の出ている急斜面も楽に通過できた。デポ地からさらに一段登った所に雪をならし、氷を削ってキャンプ・サイトにする。高度五三〇〇メートル、一三時、サポートの山本とアン・ダワはテントを張り終えてから下る。

五月一六日 晴、午後ガス

四時半に目を覚まして、ガタガタして出発できたのは六時半。キャンプ自体がアイスフォールの中にあるのだから、すぐ迷路的な上り下りに入ってしまう。今にも崩れそうなアイスビルの下を通ったり、悲壮な決心をしてからクレパスを跳び越えたりして一〇時、高度五四〇〇メートルのところの高さ二〇メートル余りの氷河の幅一杯にわたる氷壁にぶつかる。かなり手前にハングしているし、上の方に碎石を含んだ層があり、ここで二時間いろいろ手を尽し

たが、どうしてもこれを使い越える方法が見つからない。とにかくこれから先はラダーか縄ばしごなど、BCにある装備が必要なことは目に見えているので、一旦BCに引き上げて陣容を立て直すことにする。兼清は非常に疲れている。朝はすたすたと通れた所が、雪が腐って足場がきまらず難渋する。チョット油断して歩いていると、すぼつと腹までクレパスに落ちこんでハツとする。キャンプ帰着一三時半。

五月一七日 晴、午後ガス

一時RC2から山本とアン・ダワが登って来た。二時出発。四時半にRC2に戻り、荷物をまとめて一五時
広河原のキャンプへ四人揃って下る。

五月一八日 晴、午後ガス

山本と兼清を広河原に残して、BCへ六七〇〇メートル峰の増援方を頼みに出発する。BCへ着いたのが一時、
尾藤から隊長の発病を知らされ、午後大阪市大隊の遭難を知った。

このようにして六七〇〇メートル峰の試登は、稜線に達することもできなかった。何とかして稜線へ出て、P二九とマナスルとの中間の内院を観察しようという望みは絶たれたので、下の氷河の一段下の氷河の跡を登って稜線に出ることにした。山本、兼清の二人は、二日一時半頃遂にBC対岸のコルに到達することに成功した。この谷も上の方は氷河で、氷は意外に硬く、市販のアイス・ピトンは一回のハンマリングで二ミリ程度しか入らず、尖端が破壊したが、東京機器工業で特別に鍛造したものは威力を発揮した。

住吉はRC1まで行き、方針を指示して帰って来た。一つには若い層に自主的に行動させるため、また自分自身もツラギ氷河のアイスフォールに挑むつもりであったのだ。

六二〇〇メートル峰の登頂

西尾根の住吉コルから東に寄った方に懸垂氷河があり、それから少しP二九の方に寄った所にピラミッド形の白い峰と岩の峰とがある。西尾根のジャンクション附近に登れば、それから尾根伝いに簡単に行けそうだ。登頂を断念した今となっては、隊員の中には雪線以上の活動をほとんどしないで帰る者が出る怖れがある。何とかして全員雪線以上で行動させたい、それにはこれらの山が適当であろうと考えて、五月一三日、アジーバを連れて偵察に行ってみた。

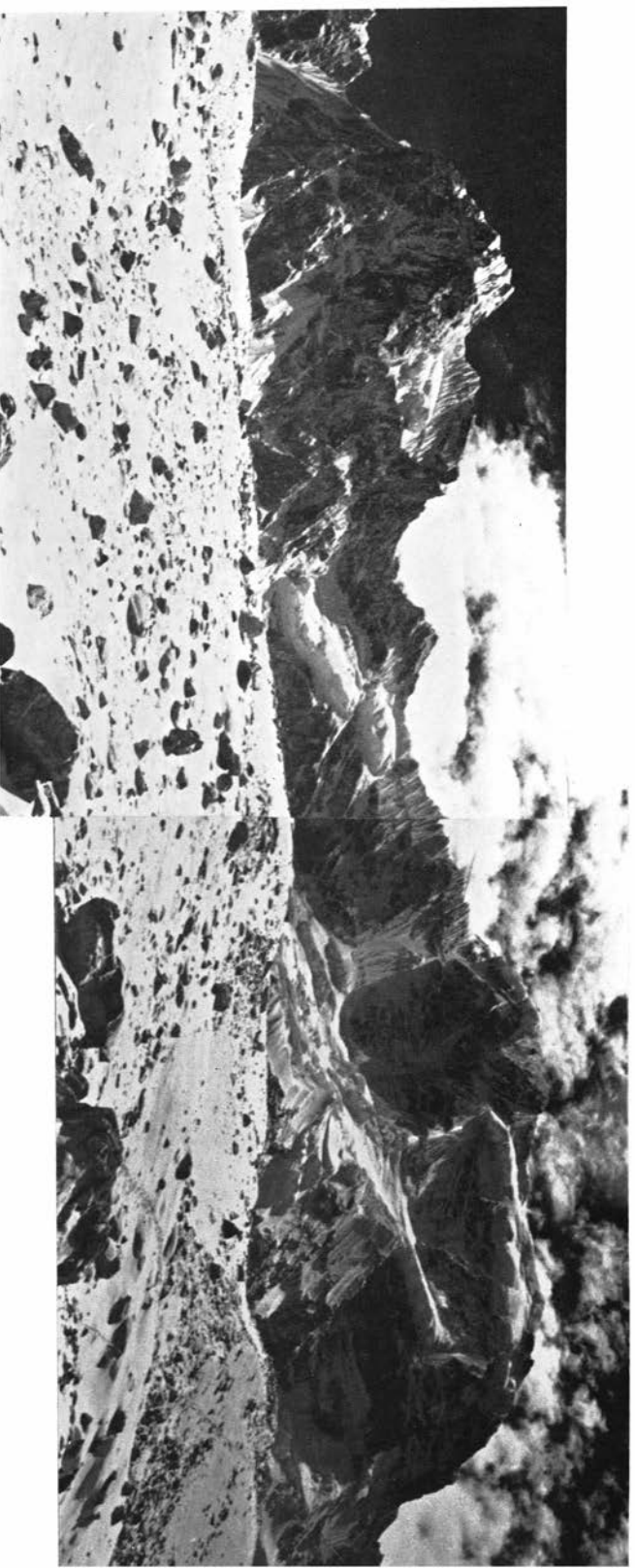
四八〇〇メートルほどのジャンクションから少し下った所まで登ってみると、岩峰とこれより少し高く六二〇〇メートル程度と推定されるスノー・ピークまでは広い尾根と雪原とで、至って簡単なように見える。

* 最初は六〇〇〇メートル以下と思っていたが、実際に登って確かめたところでは、六二〇〇メートル程度のことであった。

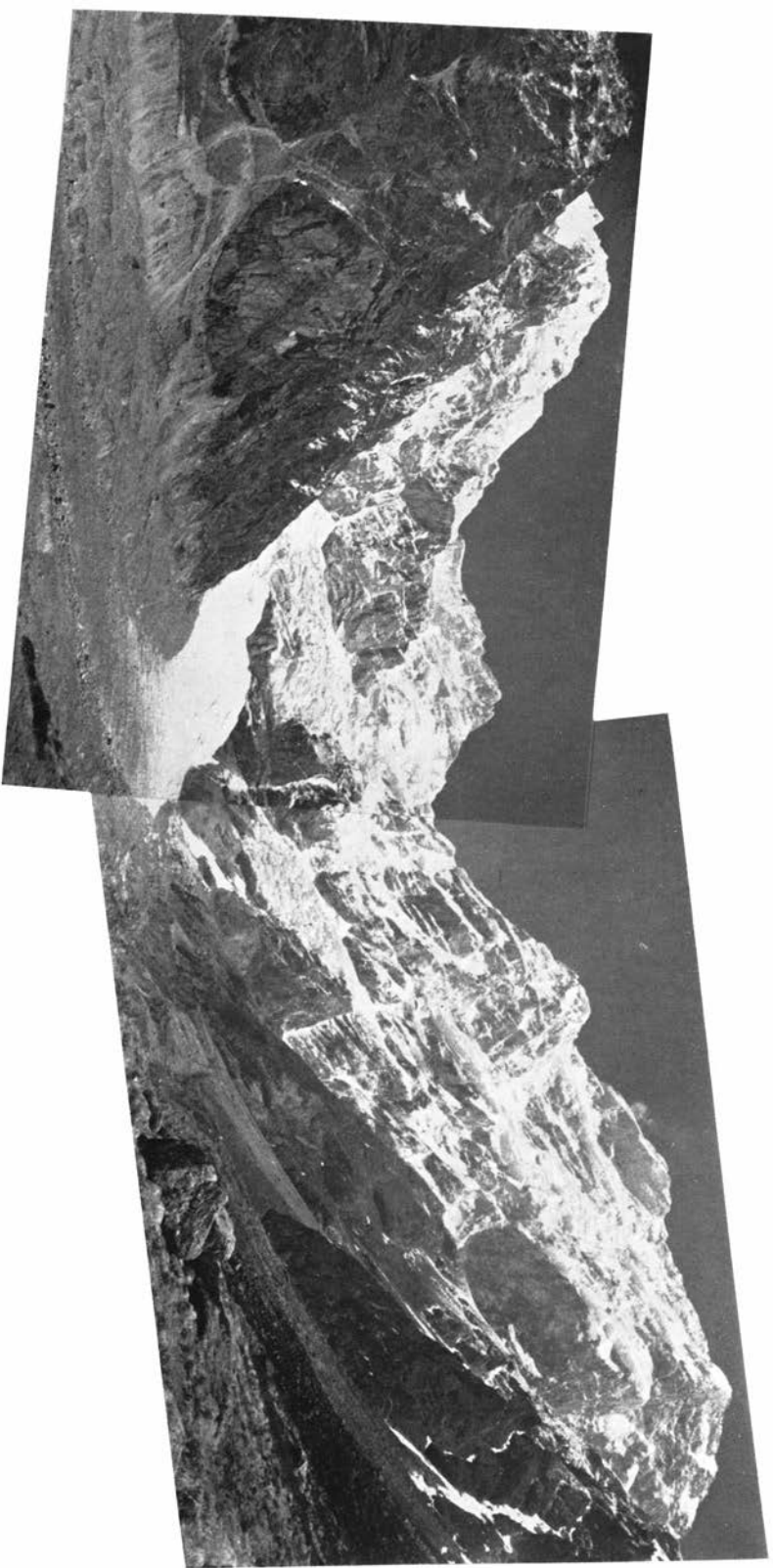
東の方の谷を見ると、おだやかな広い氷河が北へ向かって流れている。上の方はジャンクションの雪原に続き、下はツラギ氷河の附近で終わっているが、その間はずながついていない。ツラギ氷河と全く対照的な、セラック一つ見えない美しい氷河である。この頃からガスが次第に濃くなって来た。この地点にもう一五分遅く着いていたら、スノー・ピークもこの美しい氷河も見られなかったであろう。

五月一七日、住吉はパサン・ノルブ、アン・ダワを連れて出発、五〇〇〇メートル附近にキャンプした。一八日、山本光、パサン・ノルブも上のキャンプに入り、彼らは岩峰と雪峰の登頂を果たした。一九日、住吉、山本が帰り、二〇日、尾藤、小秋元、ダ・ノルブ、イラ・テンジンが出發、二一日、BCに戻って来た。

これらの登頂活動が今回の遠征の最高到達点であり、初登頂の唯一の記録になった。



P. 29のRC2 (4900m) から右に6700m峰、左に三本槍を望む。
Peak 6700m(right) and "San-bon-yari"(three spires)(left) seen from RC2(4900m) of Peak29.



ペーヌキヤンプから6700 m 峰、マナスル及びP. 29 (左から) を望む。
Peak 6700m(left), Manaslu(8125m)(center) and P. 29(7835m)(right) seen from the Basecamp.

その他の偵察活動

ツラギ氷河の奥は、氷河がUターンしているだけにわかり難い。これをはっきりさせるために多くの偵察行動をした。六七〇〇メートル峰の試登、スノー・ピークの登頂もそのためであったが、まだ資料が不足なので西尾根の続き、ウエスト・コルから分れて北に向かう尾根へも上ってもらった。五月二五日一〇時半、兼清、山本信はコルに達し二時までいて、ガスの晴れ間を見て写真撮影をした。二六日には尾藤、ペンバ・ノルプは左岸の山に登って六七〇〇メートル峰の観察をした。

ツラギ氷河の溯行には五月一日、篠田、住吉、兼清、アジーバで出掛けたが、相当に悪く、アイスフォールの下まで行くこともできなかった。これらの偵察行の到達点は地図に×印で示しておいた。

トンジェ・ルートの開拓

ツラギ氷河の末端は氷河湖を経て北流し、西に向きを変えてトンジェ附近でマルシャンディに注いでいることは地形から考えて明らかである。私も四月二六日雲上カルカ滞在中ウエスト・コルに行つて見た。西尾根はここで南北に分れるが、附近に幾つかの池がある。ダハレからも行けるが、チプラからチベット人がみそぎのために登るといふ神聖な湖、ドウド・ポカリはこの中のどれかであろう。ここからツラギ氷河へは越えられそうもない、また西尾根も基部からここまでの間に越えられるところは、住吉コルだけということが明らかになった。ここへ来て、住吉はいかにも好いルートを見つけたものであるということがはっきりわかった。

北へ分れた尾根は西に向きを変え、その向う側に川があることがはっきりわかる。トンジェまではそれほど遠くないはずだ。

ツラギ水河へムシ・コーラ側から入るルートは見つかったが、果たしてトンジエ方面から入れるかどうかは全く不明である。

氷河湖の標高とトンジエの標高、マルシャンディまでの距離を考えると、谷は相当な傾斜であって、深いゴルジュを予想しなければならぬ。

遠征隊がポカラを発する頃までは、この谷が滝になって、ジャガート対岸附近に落ち込んでいるのではないかという説が有力であった。しかし、今はジャガート対岸の滝というのは、ウエスト・コルを水源とする短かい川の末端であることが明らかになった。そうなるるとツラギ水河からの川は、相当な水量でマルシャンディへ注いでいるはずである。滝になっていけば、今までに対岸を通った遠征隊の中の誰かに発見されていなければならぬ。それが今まで誰にも見つけられていないということは、落ち口が非常に深いゴルジュになっていることを物語るものであろう。

とにかくトンジエ・ルートの開拓は下を向いての山登り、下降ルートの発見である。住吉より若い隊員は阪大山岳部の黒部下廊下、上廊下横断時に活躍した連中である。その中でも尾藤は新越乗越から下廊下への下降ルートを初めて試み、下向きの山登りの困難さを身にしみて体験している。なおまたヒマラヤ遠征には珍しい雪も氷もない夏山での行動である。こうした事情を勘案して山本光を加えて、シエルパとしてダ・ノルブとパサン・テンバの二名を同行させることにした。以下は尾藤の手記である。

五月九日 曇

六七〇〇メートル峰に向う西川、山本信らと共に湖の下端の台地にあるRC1(三七〇〇メートル)に下った。

五月一〇日 晴後雨

六七〇〇メートル峰に向う隊、谷を下る隊、それぞれの予備偵察に出掛けた。谷を下るわれわれは左岸を行くべきか右岸を下るべきかは、むずかしい問題であった。一応、右岸をシエルパを先行させると、湖からの沢と六七〇〇メ

トール峰の氷河末端からの沢との合流点を少し下った所で、彼らは早くも砂の上に裸かの足跡らしいものを発見した。さらに森林帯に入って間もなく、明らかな踏み跡を見つけた。それは漸次明瞭な山道となった。さらに人の泊った跡のある岩小屋と小屋掛けを見つけた以上、マルシャンデイに通ずる道のあることを確信するに至った。

人跡未踏の谷との予想を裏切り、容易に山道がみつけれられたことは、ネパールが徹底した山国であることを物語っていた。かかる平地のない所では、およそ人間が歩けそうな所はどこでも人の足に踏まれているのである。

五月一日 晴後雪

朝九時RC1出発、一気に下降してマルシャンデイ・コーラに出た。道は途中から竹橋を渡って左岸に移るようになっていた。六時ナジェ部落着。ナジェ（グルン・一八五〇メートル）の住民から聞いたところでは、(1)湖の名はニョー・ポクリ*（乳の湖）、(2)六七〇〇メートル峰の名はドナ・フンギ（フンギは肩）、(3)下って来た谷をドナ・コーラと言う。またナジェの住民だけがこの谷に狩猟に入るとのことである。谷の道も猟師道で家畜の通る道でないから、悪い所が何箇所もあったはずだ。ナジェの住民だけに知られた谷であり、ナジェは登山隊の来たことのない部落であるから、この谷が知られていなかったのも無理はない。

*この附近ではポカリと言わずにポクリと言う。

五月二日 晴

日本の五月のような快適さに休養。

五月三日 晴後雨

ナジェの部落民を一人ポーターに雇って、途中の道の補修工作を行なった。シェルパの道工作の腕前は立派なものだった。大木の切り出し、運搬、それを使って実に要領よく道を作った。左岸から右岸に移る竹橋の所で一泊した。

五月四日 晴後雨

八時出発、帰途本隊のキャラバンを通過させる際の諸問題を考えながらRC1帰着。

隊長の発病、大阪市大隊遭難と帰りのキャラバン

五月一四日の日記を見ると「今日は朝から胃の調子が悪く、何だか貧血の気味で九時の気象観測の後で、少しふらふらした。無理せずに一日休養」夜十時頃就寝、しばらくすると気持ちが悪くなった。住吉の毎日の古市氏宛の手紙によると「真夜中、就寝中の私のテントに隊長が顔面蒼白で来られ「吐血」とのこと。急ぎ私のテントに寝ていただき、真夜中のこととて小秋元（BC唯一の醫員）、シエルパを騒がせるのも困るし無意味なので、私一人で隊長テントの吐血処理、湯タンポ準備、止血剤等注射をしました。夜二時半頃やっと私もシュラフにもぐりましたが、隊長の年令を考えると夜明けが待遠しく、かつ今後のことを考えてなかなか寝つかれませんでした。

明けて一五日、隊長吐血は再度となく、気分も落着かれた様子で、やや愁眉を開いた次第です。それにしても十四日、予定（六七〇〇メートル峰偵察を続行中、私もそれに加わり、指揮する）を急変して、BCに私一人で帰って来たのが全く不幸中の幸いだった。」

一五日には尾藤、山本光も帰り、ドクターは二人になり、一六日にはどうやら日記を書けるようになった。病氣は胃潰瘍で吐血の量は住吉も驚いたくらい多かった。

トンジエ・ルートの開発に成功しているのです、このニュースはトンジエのチェック・ポストから無電で連絡することも可能だったが、二人のドクターの意見は心配するほどのこともないと一致したらしく、一七日のポスト・ランナーに托して、毎日の古市氏と留守隊長の徳永に知らせただけであった。しかし、リエゾン・オフィサーのロカが外務省に報告して、これがUPIの通信員に伝わって内地に報道された。このことは後にポカラへ着いてから知った次第である。この機会に御心配をかけた内地の皆様にお詫びする次第である。

市大隊の遭難のニュースは一八日午後と一九日朝のカトマンズ放送で聞いた。一週間ほど前から、なだれの中心が次第に上の方に移って行った感があつた時だけに、案じていたものが遂に最悪の結果になつて現われたという感じだつた。

隊長、大島、ギャルツエンの死という和最悪の結果である。大阪の留守隊にもヒマラヤの経験者がいないだけに、難澁を極めているに違いない。何とかして応援をカトマンズに送りたい。しかし明日出発して強行軍をしたとしても、カトマンズ着は二八日になる。これで果たして間に合うであろうか。しかし間に合つても、間に合わなくても日本隊の遭難であるから、隊員を派遣することを決意した。外科医であり、経験者である住吉は欠かすことができない、も一人は一番英語の達者な西川を出すことにした。

住吉が帰つて来て相談してみると、彼には医者として、また隊長は病気で自分は副隊長であるということから、すぐには承諾しない。しかし彼も私の頑固さに免じて遂に承諾し、翌二〇日午後新らしく開拓されたトンジェ・ルートを下つて行つた。住吉もアイスフォールに挑むこと、またトンジェで越冬することに執着をもつており、西川は初めてのヒマラヤというのに先発、先発で帰りのキャラバンだけは楽しみたいと思つていたのに、遂にキャラバンを経験することなく山を降つて行くのは、心残りの多かつたことであろう。彼ら二人はカトマンズで期待通りの活躍をしてくれた。また二九日、毎日新聞に打つた電報で隊長重態というのに、医者である副隊長がカトマンズに現われたというので、前日「篠田隊長重態」で賑わつた新聞紙上に快方に向かつたという記事が現われ、恢復させるための必要からか流動物を摂り出したというおまけまでついたが、事実はその通りであつた。この直後に一七日ポスト・ランナーに托した手紙も着いて、大阪の留守隊では徳永留守隊長の状況判断の適確さに驚いたのであつた。

住吉が去つて尾藤は急に責任重大になつた。医者であると同時に隊長の仕事もしなければならぬ。しかし山本光がよく補佐した。

RC1から少し下ると急に谷が開け、岳樺の多い徳沢を思わせるような所に出る。標高も三五〇〇メートルで石楠花も咲き、誰言うもなく樺河内となってしまった。私の病気も次第によくなったので、今日二三日は退院の日である。椅子に乗ってパサン・テンバとダ・ノルプに交互にかつがれ、尾藤が付添って樺河内に下った。体には全くこたえない。恢復したと言っても二〇メートル歩くのが苦痛であったが、樺河内に来た翌日には、もう二〇〇メートル歩いてあまり苦しくないようになった。六七〇〇メートル峰を眺めながら、病氣保養をする気持ちは今までに味わったことのない長閑なものであった。

二五日、山本光、アジーバらは谷を下り道の補修を行なうと共に、アジーバはトンジェ方面へ行って人夫を集めて来ることにした。こうしている間に残りの隊員と荷物が集結し、人夫も二九日には登って来た。

三〇日、帰りのキャラバンに入り、その日は右岸から左岸に移る竹橋のほとりで泊り、三一日午後、麥秋のナジェエ到着。途中の道は相当に手入れはしてあっても、行きのキャラバンのような大部隊では通過困難と考えられるほど悪い。やはり往路にムシ・コーラを選んでよかった。

ナジェエでは農繁期と橋の補修に人手をとられて、人夫がなかなか集まらない。漸く六月三日に出発できた。サタレの対岸まで来ると、日本隊になじみの深い竹の吊橋が落ちていて、思わぬ所で川留め。修理が出来上るのを待ち、ここにワイヤ・ロープを使った吊橋を建設中のスイス人アシュマン夫妻などに見送られ、雨上りのマルシャンディを下った。そして七日クデイに着き、漸く往きのルートに合し、一日ポカラ着、キャラバンを終えた。

ポカラに着いてみると、内地の大勢の方々から病氣の見舞状が来ていたが、はじめはどうして内地まで伝わったかわからなかった。

おわりに

偵察隊の توسطして来た写真その他の資料の整理がまだ済んでいないので、決定的なことは言えないが、P二九の西面に關する限り、考えられるルートはツラギ氷河だけである。しかし、このルートがプレ・モンスーンの時期には非常に危険であることは前述の通りである。

今後登頂を目指す前にはもう一度、東面を徹底的に偵察する必要がある。とにかくP二九は予想を遙かに上廻った困難な山であった。われわれは、日本人にこうした、新しい登山術の開発を必要とするようなむずかしい山が残されていることは、喜ばしいことであると思つてゐる。

この度の遠征によつてツラギ氷河が発見され、その周辺の地形が明らかにされ、氷河湖からマルシャンディへ注ぐドナ・コーラの谷も明らかにされた。またP二九西尾根の全ぼう、これと本峰との間の氷河、また西尾根から南へ出る尾根はヒマルチュリからの尾根とつながり、その下をムシ・コーラがトンネル状に流れていることなどを見出だすことができた。

登頂活動としては六七〇〇メートル峰の試登、西尾根の六二〇〇メートル峰の登頂程度で、著るしい成果は挙げることができなかった。

私にとって最も思い出になつたのは、ダハレから四九〇〇メートルのゴルを越えて、偵察をしながら未知の谷をキヤラパンを進めたことであつた。

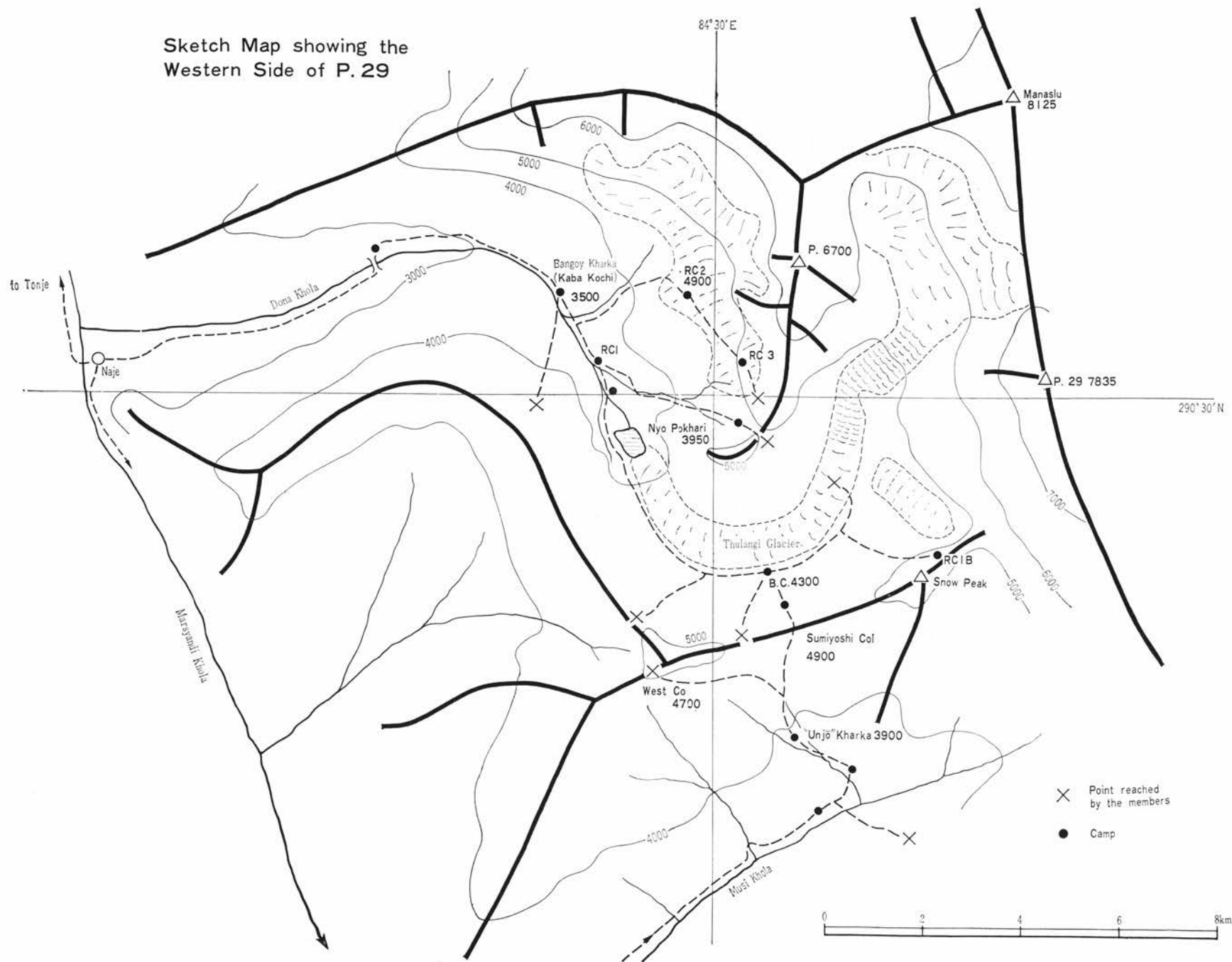
遠征に當つて東京では日高信六郎、楨有恒、村木潤次郎、松田雄一氏ら日本山岳会の各位、毎日新聞の古市美津雄氏、大阪では赤堀阪大総長を委員長とする後援会の各位のほか、関経連、工藤友恵氏ほか財界、日本山岳会関西支部の方々、実行委員会や準備委員会で活躍してくれたOB、現役の人たちに謝意を表する次第である。

附記

- (1) シェルパはアジーバ以下八名、リエゾン・オフィサーはパサデブ・ロカであつた。

(2) 現地民から聞いたところでは、P二九はツラギまたはそれに近い発音である。そこで氷河はツラギ氷河と呼ぶことにしたが、ナジェの極く一部の者は *Paem* と呼んでいるらしい。P二九にしてもツラギ(ムシ・コーラその他)、ツランギ(チブラ附近)、ツラニ(トンジエ附近) などがあるので、*Thulangi* としてみた。六七〇〇メートル峰も *Dona Phungi* としてよいだろうが、トンジエ方面では、この肩に相当する言葉は *Phungi* でなしに *Pulney* となる。またドナ・フンギは前山のこと、本当の六七〇〇メートル峰は *Cheaw Pulney* と言うのだという説もある(トンジエ附近)。なお樺河内の現地名は *Bangoy Khalka* らしい。

Sketch Map showing the
Western Side of P. 29



未踏の山 ランタン・リルン（一九六一年）

広谷光一郎

はじめに

大阪市立大学は、旧大阪商科大学山岳部時代から前後五回にわたり台湾、樺太、朝鮮等へ遠征隊を送ると共に、幾多の登攀を行って来たが、戦後綜合大学として広汎な分野の部員並びに先輩を持つようになってからは、一九五三年ヒマラヤ研究会を組織し、外地山岳の多角的な研究を進めて来た。そのかいあってか、一九六一年の母校創立八十周年記念に当って、大学、大阪財界のうしろだてが成り、先輩現役挙げての悲願が結実、ランタン・ヒマール地域に登山と調査を目的とした遠征隊を派遣することに決定した。

私たちの遠征計画の推移は、ヒマラヤ研究会発足以来、タルン・ピーク（七三四九メートル）、トゥインズ（七三五〇メートル）、ティルスリ（七〇七四メートル）等が上げられ種々検討されていたが、ネパール政府の内外政状況、私たちの経験上の問題等から漸次焦点がしぼられ、首都カトマンズに比較的近距离にあり、しかも最近十年間に六回の遠征隊が送られたが未だ部分的にしか踏査されておらず、又最近の二回が日本隊に依って踏査され、他の地域に比べ資料を得

ることが私たちヒマラヤ一年生には比較的容易であったこと等から、ランタン・ヒマール地域に決定した。

この地域は一九四九年テイルマン、一九五一年アウフシュナイター、一九五二年ハーゲン、一九五五年ランペール、一九五八年深田隊、一九五九年飯田隊等が部分的に踏査しており、登頂されたのはランペールのホワイト・ドーム（六八三〇メートル）、飯田隊のサルパチュム（六七〇〇メートル）他で主峰ランタン・リルン（七二四五メートル）は勿論、ツンガ最奥のランタン・リ（七三九メートル）、ポーロン・リ（七二八四メートル）等の七千メートル峰の殆んどが未踏峰となっている。

ランタン・リルンを最初に攻撃目標としたランペールは、隊の小規模が原因で他に転進、ついで飯田隊はリルン氷河登攀の困難性でサルパチュムに向っている。

私たちはリルン峰を偵察した深田隊、リルン氷河直下まで行き氷河状態をくわしく調べた飯田隊から偵察の状況を聴取し、両隊のもたらした貴重な写真をもとに計画を練ったが、未だ見ぬリルン峰攻略の計画は空を掴むようなものでもあった。

私たちのそのような計画の批判をランペールに仰いだところ、彼のこの山に対する可能性に就いての意見と、私共のそれが極めて積極的に一致するところを得た。即ちリルン氷河上部構造は不明な点が多いにしても、かならずや国境稜線に立つ見込みがあるということであった。

準備、出発

準備段階においての問題は資料の検討で、飯田隊、深田隊、ランペール等に連絡がとれたことは先に述べた通りであるが、それ等から得られた資料によると、ランタン・リルンの地形的特殊性を充分に考慮した登攀用具、露営用具、通信機、燃料、食糧の必要性が研究の対象となった。

そこで、これ等の問題については種類毎に業者の協力を得て試作研究を重ねられ、最終的には秋の富士山での試験を行った後再検討、改良を行い発注した。

他方ネパール政府への入山許可申請は、一九六〇年の五月末外務省から行われたが、既に内諾を得ての申請で、九月には許可された。

勿論このような順調な歩みの中には、内外関係者の並々ならぬ協力のたまものがあつたことはいうまでもない。入山許可内諾に前後してのシエルバ雇用問題、遠征資金の調達、学術調査方法の研究、出国交渉手続等の仕事の山積の中に、その年の十月、大阪市大ヒマラヤ委員会からメンバーが決定された。

隊長	森 本 嘉 一 (41歳)	ターナー色彩(株) 会社取締役。
副隊長	広 谷 光 一 郎 (28〃)	(株)黒竜堂武威工場勤務、医博博士。
隊員	大 島 健 司 (26〃)	関谷産業(株)本社勤務(インド駐在)。
"	藤 本 勇 (25〃)	世界長(株)勤務。
"	近 藤 哲 也 (24〃)	近畿建設事務所勤務、技士。
"	伴 明 (21〃)	大阪市大山岳部チーフリーダー。

以上いずれも日本山岳会々員。

年明けてからは準備に拍車をかけると共に、最終的手続きもすませ、二月十七日隊員を二つに分け、広谷、藤本、近藤、伴の四名は神戸港から出発、三月十四日カルカッタに着いた。

船中は大阪大学P二九隊、全日本山岳連盟ビッグ・ホワイト隊らと同行し、愉快的な船旅を送ることが出来た。三月二日、後始末を済ませた森本隊長、大島の二名が離日し、船組より一足先きにカルカッタに到着した。

カルカッタでは通関業者であるG・R・バルワラが三隊を一手に引き受けたためか、大量の荷物の陸揚げ、運輸の

面に負担が大き過ぎ、二週間の足止めをくい、全員カトマンズに合流したのは三月二十七日であった。

私たちはグアネスウエアールにあるボド・ラナ氏の離れ屋を宿舎にして、キャラバン編成の仕事に従事した。

ヒマラヤン・ソサエティに絡む諸問題

カトマンズのヒマラヤン・ソサエティ事務所を訪れたのは三月二十一日、カルカタから先着した森本隊長と大島、ギャルツェン・ノルプである。シエルパ雇用交渉は約一年前から始つたのであるが、ギャルツェンとの交渉の見通しを明かるくしたのは、一九六〇年の同志社大学アピ隊であった。私たちの森本隊長と親しかつたアピ隊長津田康裕氏は、デオ・ティバ隊との予約以外に未だ交渉のなかつたギャルツェンをして、私たちの隊に加わつて貰うよう話をうまく纏めて下さつた。その後の再三にわたる交渉は、カトマンズの正垣幸男氏及び当時社用で渡印していた大島が中心となり全て順調に進み、ギャルツェン自身にしても彼の性格からして、未知の地域への憧れを抱いていたようであつた。

通りに面した事務所には机が二つ、正面の壁にマナスル登頂記録映画のポスターがデカデカと貼つてある。アクト・ディレクター二名、ヴァイス・チェアマンのウルケンと早速交渉に入り、ギャルツェンがダーズリンから連れて来たシエルパ一人について、話合いが始められた。

ヒマラヤン・ソサエティとしても一応の線は持つていたようで、コックのラクパ・ツェリン、シエルパのアン・ダワ四号については、ヒマラヤン・ソサエティ名簿に記載されていて文句なくパスしたが、問題は記載されていないパ・ノルプ、ミンマ・ツェリンであつた。

パ・ノルプは名簿のミス・プリントを強く主張して納得させ、ミンマ・ツェリンについては彼の代役であるギャルツェン・ミクツェンを断り、ギャルツェンと親しい間柄にあるヴァイス・チェアマンのウルケンに頼み込んで内諾さ

せた。

ローカル・ポーターは登録済みの者、未登録の者を含めて五名選んだが、これについては所属云々は問題にならなかった。そこで譲歩して一人当り五〇ルーピー（印度）のアドバンスを支払うこととし、その代りオーデイナリー・ポーター一〇八名については三・五ルーピー（印度）を五・二五ルーピー（ネパール）にし、アドバンスは規定の四日分を二日分とした。要求コミッション一〇〇ルーピー（ネパール）は規定がないことを理由に支払わない方針を取った。以上により未登録の者は新規にヒマラヤン・ソサエティの要員となり、これに必要な費用（写真代その他〇・二五ルーピー）は私たちが負担することになった。

三月二十一日、ラジオ・インディアはヒラリー卿のアマ・ダブラム試登を非難した。即ちマカルーに行っている筈のヒラリー隊が、アマ・ダブラムでシエルパ一名を雪崩で負傷させたことから表面化したもので、外務省でもおだやかな空気ではなかった。またヒラリー隊はヒマラヤン・ソサエティとも交渉が決裂しており、クムジュンで彼が組織したシエルパを使用したことを盛んに報道し、非難していた。

こうした事件発生により、ヒマラヤン・ソサエティも態度を硬化し、今迄の低姿勢からその後の交渉が面倒なものとなり始めた。

先ず持ち込まれた問題は、前日一応解決を見た筈のミンマ・ツェリンに就いてである。またポスト・ランナー雇用問題についても、規定に従って月二〇ルーピー（印度）を支払うよう言ってきた。隊としては、一切を解決していた問題だからと手紙で連絡し、翌二十四日の最終話し合いに移行することになった。

ミンマ・ツェリンの拒否理由は、彼が前々からヒマラヤン・ソサエティの斡旋に応じなかったこと、また今回も他の隊とナムチエへ行かなかつたこと等であった。隊としては何の手落ちもないのに、ヒマラヤン・ソサエティとシエルパとの問題をたてに私たちの希望に応じないとは何事だ、彼を罰するなら他の方法で処置し、今回の私たちに對す

る遺憾な態度の謝罪を求めた。

だが謝罪せず、そこまで言うならプライベートに連れて行くようにと述べた。こうなると話は決裂の一步手前である。プライベートに同行させるならアドバンスは支払わないと突込み、それなら今後すべてヒマラヤン・ソサエティを通さず勝手に処置してもよいのかとまで主張した。結局理屈がかなってすべてのことが私たちの思惑通りに決つた。

ポスト・ランナーについては、ランタン・ヒマールの地域的近さから専属の者を雇用せず、ポーターの中から優秀な者を見付け一日五ルーピー(ネパール)で使うこととした。この問題については後日BCまで連絡の手紙を寄せ、アドバンス問題、賃金問題等について譲歩を要求して来たが、最後迄受け付けず話はそのままとなつてしまった。

以上でヒマラヤン・ソサエティ問題の結着を述べたが、ここに考えられることは、この交渉に関してギャルツェンが真剣に力添えしてくれたことで、ダージリン・シエルパ間における彼の立場が非常に難しいことがわかると同時に、彼としてはヒマラヤン・ソサエティの正会員となり、所属のシエルパを握つて、テンジン・ノルケイと袂を分ける心境であつたことが覗えるのである。

私たちの雇用したシエルパは次の通りである。

Sirdar, Gyalsen Norbu (41)	(Darjeeling)
Cook, Lakpa Tsering (40)	(")
High Porter, Ang Dawa IV (35)	(")
" Pa Norbu (35)	(")
" Mingma Tsering (27)	(")
Local Porter, Sonam Tenzing (56?)	(Phorhe)

” Pasang Kame (26?) (Nanche)
” Norbu (27) (Kathmandu)
” Pasang Tharke (23) (Kinde)
” Kancho (22) (”)
Liaison Officer, Shri Krishna Amatya (28)

キャリバン

三月三十日、待ちに待った日がやって来た。森本隊長の日記にはこう記してある。

▲五時起床、六時頃から前庭に続々とポーター連中が集ってくる。ヒマラヤン・ソサエティの幹部連立会いの下に番号札と共に荷物を分配、例の二本の色帯を付けたワイヤーバンドボックス、古い二度目のお勤めのキャンパスバッグ（ヒマルチュリ隊）、背負子に付けたプロパンボンベ、米や粉の袋、ジュラルミン梯子……とさまざまの荷物をポーター達はうまく背負紐で前額にささえて担ぐ。

午前八時、ギャルツェンの命令一下、一路カカニの丘を目指して出発した。隊員六名、シエルパ五名、ローカル・ポーター五名、ポスト・ランナー二名、リエゾン・オフィサー一名、ポーター一〇八名、総重量三・五トンの大編成である。

一年三ヵ月かかってやっと山登りが始まった。また何をか言わんやである。▼

翌朝カカニからの展望は実に素晴しかった。朝靄の中にバラ色に染ったマナスル、ヒマルチュリ、P二九、ガネツシュの山々を仰ぎ見て感激の言葉すらない。思えば再びこの丘に登って来て、亡き友の冥福を祈ろうなどは夢にも思えぬ一瞬であった。

キャラバンはこれより丘を一気に下り、谷間の主要な町トリスリ・バザールに入る。この辺からいよいよ登りである。山腹を上り下りしながら川に沿った山道の旅が続く。この街道はチベットに抜ける街道で、昔は隊商が群をなして通った旧道だそう。チベットとの国境には検門所が置かれていて聞いているが、奥地に入るに従って、村落もチベット化され、ラマ教の祈祷の旗やチョルテンが村々の入口に見られるようになった。

キャラバンは常に七時頃ポーターが出発、隊員、シエルパ、ローカル・ポーターは朝食をすませて八時前に出る。途中、シエルパ達が先頭に出て、ローカル・ポーターが少し間をおいて続く。彼等はキャラバン中の炊事用具と食糧の一部を持ち、隊員は軽装で各自自由に歩く。十五時頃先頭のギャルツェンとシエルパがテント場を選定して止る。三十分位して隊員が着くと紅茶が沸いているという寸法、ポーターは十五時頃から十七時頃迄に着く。

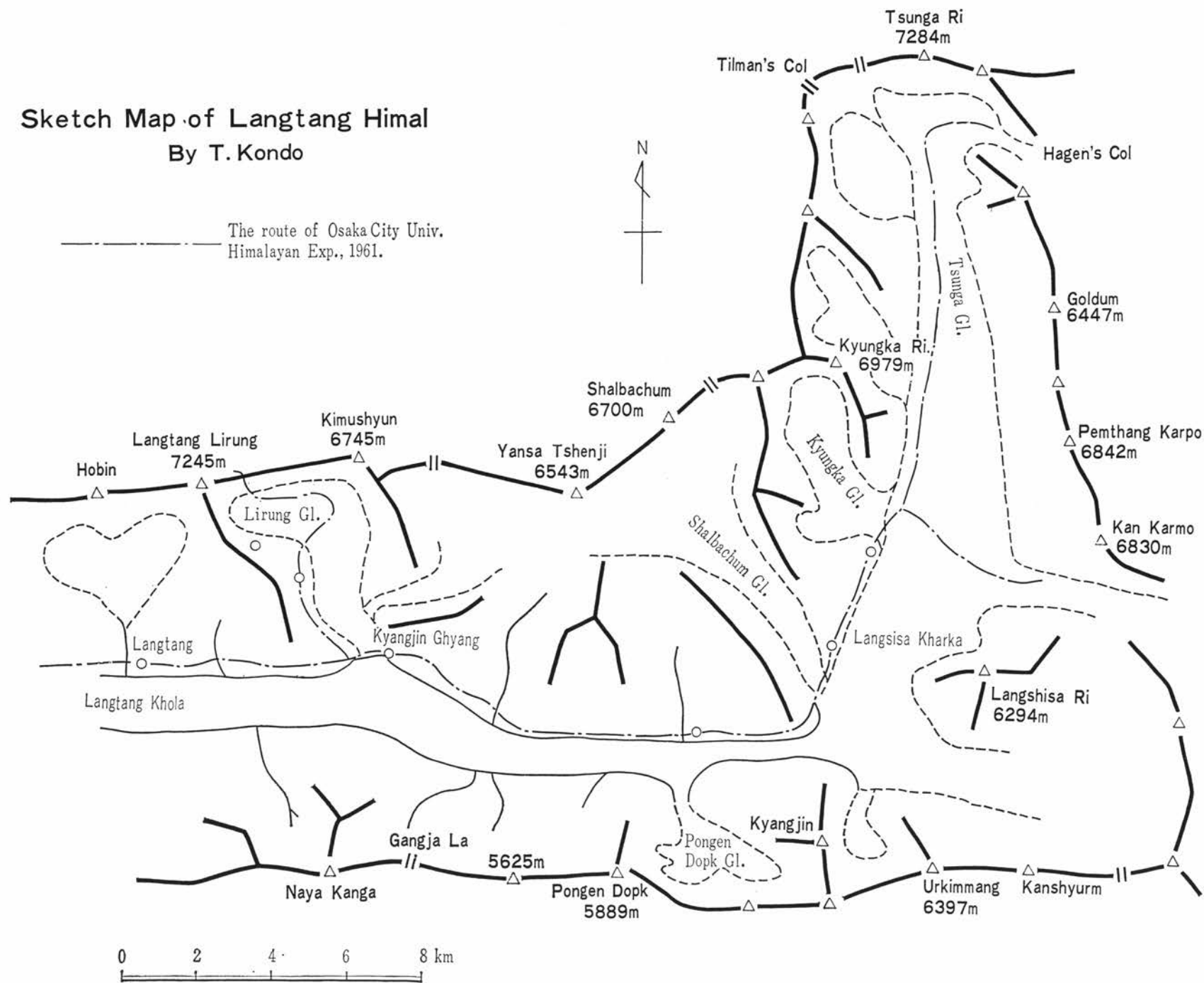
四月四日、ドンチェ手前のテント場から少し登り尾根の端を捲いたら、チョルテンの横から、目指すランタン・リルンが顔を出した。トリスリ河の源流、チベット国境の山波に続いて一段と高く、約六五〇メートルのリルン西稜の岩峰が雪をかぶり、三つの突起を東に越えて純白のランタン・リルン西面と南稜がクツキリと見える。西稜は南面がきつく、何処からも取付けそうにない。

私たちはその日、キャラバン六日目にランタン谷との合流点シャブルベンシーに着いた。シャブルベンシーは、トリスリ河の右岸からランタン谷が入り、立派な釣橋がかかっている、これを渡った本流側に三十戸程の部落がある。ランタン谷の入口は非常に狭い谷となっていて、この地方の住民も通過しないらしく、道はこれより大きな尾根を越え、シャルパガオンに抜けランタン谷に入る。ヒマラヤの登山史に有名なティルマンが初めて紹介した「世界一美しい谷」、ランタン谷は広く、奥深く、しかも明かるい緑の色がひときわ鮮やかに光る谷である。出発以来八日目、私たちはランタン部落に到着した。日本隊を迎えるのは三度目とあって、私たちは大歓迎を受け、その夜は一同部落の有力者の家に招かれ、ロキシやチャンを大いに飲まされ御機嫌であった。ギャルツェンの音頭でシエルパや村娘

Sketch Map of Langtang Himal

By T. Kondo

----- The route of Osaka City Univ.
Himalayan Exp., 1961.



たちの踊りが催され、その嬌声が夜遅くまで山峽にこだましていた。

四月八日、カトマンズのポーター達を解雇した私たちは、ポーターを編成替えし、一部の荷物をランタンに残し、最後のキャラバンに移った。

ランタンから道は次第に氷河の容相を現わし、谷筋の真正面に美しいヒマラヤ巒を飾り付けたキャンジュンが見えてくる。約二時間程でスイス人の住むキャンギヤング・ゴンパに着く。ハインツ氏は人の好きそうな紳士で、つい数週間前ここに来たとか、大いに歓迎される。ガスがかかって視界がきかなくなつたが、ゴンパから左に折れリルン氷河最末端に入る。地面が褶曲して、至る所に巨大な岩石がごろごろしている。約二時間登り、水場のあるBC予定地に到着する。

隊員用テント(一)、シエルパ用テント(二)、リエゾン用テント(一)、キッチン用テント(一)、食堂用テント(一)を張り、個人用具が支給され、慌ただしくBC設営が終つた頃、外には雪が降り出した。

夜、隊長は全員を集め明日からの計画を話した。

(一)約十日間のリルン偵察期間を持つこと。

(二)近藤隊員、アン・ダワ四号他二名は一週間の予定でツンガ氷河を踏査し、第二次計画の準備を行うこと。以上がその概要である。

第一期登攀

四月九日早朝、近藤らのツンガ上部偵察隊が出発した。ポスト・ランナーが第一便BC設営の報を持って下山した。

リルン峰偵察の第一段階は(一)氷河取付き位置の決定、(二)ラクパツェ・ピークからの氷河上部構造の観察、(三)南稜偵

察、(例)リルン西面取付点(ランタン部落側)の探查、等から始められた。

各パーティに分れての四日にわたる偵察の結果は、南稜及び西面取付の可能性が殆んどないことが明らかとなり、一方氷河の取付、氷河上部ルートの見通しが出て来た。

然し、リルン氷河突破ルートに就いての、幾つかの資料で得た一応の計画も、現地での偵察で、その峻しさが通りでないことを知ると同時に、登頂への道はリルン氷河を直登する以外にないことを知った。

リルン氷河は、高度約六五〇〇メートル附近から張り出した氷雪が、六〇〇〇メートル附近の台地で押し固められ、その下部にある「インゼル」に依って二分され、更に五二〇〇メートル附近で合流している。従ってインゼル下部の合流点附近は、二つの力のバランスで常に激しい変化をしている。私たちは偵察を重ねた末、インゼル直下の五〇〇〇メートル附近にあるアズキ岩上部迄直登し、そこから右俣に入り上部台地(雪原)に到達することに努力した。

南稜、西面を諦めた直後、一部の隊員、シエルバは氷河取付地点にC I(四二五〇メートル)予定地をみつけ荷上げを開始し、偵察隊がリルン・アイスフォールに取付いて、第一期の登攀が始ったのは四月十三日である。

取付点から急峻な氷壁にぶつかり、この壁を通過するために、アイスフォール工作隊は苦勞した。

アイスフォールは急峻であるばかりか、氷河の左右からの押出しで非常に変化が激しく、大小無数のセラック地帯には固定ザイル、縄バシゴ等を多数使用した。好天に恵まれC II(五〇七〇メートル)設営に成功したのは四月十六日であったが、その時の模様を森本隊長は次のように日記に記録している。

▲四月十六日、大島、伴、ギャルツェン、アン・ダワ四号の第二次工作隊は、個人装備を持って七時BCより、広谷以下の第一次工作隊の設営・ボツカ隊と共にC IIへ十三時半着、カマボコ型テントを設営。高度五〇七〇メートル。広谷隊は荷上げ設営を終えてC Iを経て十七時BC着、四時間ご苦勞さんである。森本、近藤はローカル・ボー

ター三名をつれてCⅠに入った。ハンディ・トーカー交信、好調、お互にテントの中から「モシモシ」が出来るので便利なことこの上ない。「明日は縄梯子をかける。」「今晚のメシは何の御馳走か？」などなど……四台共同調だからCⅡとCⅢ間の会話をCⅠで盗聴するのも又一興である……▽

私たちは万事が好調に運んで、第二次工作隊は四月二十日、CⅡとCⅢ間の開拓に成功して下山して来た。CⅡからの登路は、CⅡから右上部の氷河へ約一時間で出ることが出来るが、それから上部は常時変更せざるを得ないこと、即ちスケールの大きいクレバス群が多く、それに加えて激しい移動性を持っているからである。

CⅢは上部台地(雪原)の入口辺にあり、丁度インゼルの頭の裏側になり、その位置からはキムシユンの吊尾根迄約四、五百メートルである。隊長は第一期の計画をCⅢ建設までとしていたが、CⅣ、CⅤの必要性からCⅣ、CⅤ位置の決定まで行動を延期することにし、第三次工作隊の編成が成った。

「さあ交代だ。」CⅠとCⅡ間の荷上げに従事していた第一次工作隊は、第三次工作隊として四月二十日CⅢ(五六〇〇メートル)に入り、その後近藤隊員の応援を得てCⅣ(六〇〇〇メートル)、CⅤ予定地の設定と登路の偵察に時を過ぎた。四月二十一日、第三次工作隊広谷、パ・ノルブはCⅢから雪原を横断、南西端の巨大なアイスブロックから右に廻り込み、国境稜線から出来た傾斜約四十度の大斜面に取付き、ややトラバース気味に登る。雪面は連日の好天で軟かく、場所によっては膝までもぐるラッセルが要求されることしばし、長いトラバースの末、午後一時過ぎ国境稜線に至り、稜線上に馬乗りとなって初めてチベット側をのぞき見た。

直下は約二千メートルの断崖となり、その下に曲りくねった氷河があり、広大なチベット高原に続いている。三、四十キロメートルは離れているであろうか、梯形をした山塊からの入り乱れた氷河の右端に、ゴサインターン西端がキムシユンの蔭に消えている。

リルン主峰は、直ぐ前に覆いかぶさった岩峰により見ることが出来ない。南側はるか下にCⅢが確認され、この地

点が、国境稜線とキムシエンとの吊尾根にかかる附近にあることが明らかである。

眼前の岩峰を乗越すことが不可能なことより、稜線への出口をもう少し上部にすることに決め、下る。約二十分引返し、見上げると、先程の岩峰の約二、三百メートル上部に出られる氷のクラックを見出し、この地点に登攀用具をデポした。

翌日、第三次工作隊は、昨日決めて来たC IV予定地にザイル工作と荷上げをかね、登った。C IVは高度六〇〇〇メートルで、雪原西端のアイスブロックをまたいだ右肩に位置し、C IIIから比較的近距离であるが、上部大斜面突破の拠点となる筈である。

四月二十三日、応援に登って来た近藤とバ・ノルブ、ミンマ・ツェリンは過日のルートをトレースし、国境稜線の道を切り開いた。

昨日の用具デポ地点から左にそれ、直登約十メートルのクラックをつめ、稜線に立つことが出来た。稜線上には二つ三つの岩峰がみられ、頂上迄は比較するものがないためか非常に近く見られる。やせ尾根での氷塔乗越しの危険性が考えられるので、クラック下の小さな台地をC Vとし、これより張り出した雪庇の下に沿ってトラバースし、更に上部の稜線に出る見当をつけることに成功した。

すでに第一期の登攀の目的は果たされた。高度の影響が隊員にもシェルパにも出始める。各キャンプに連絡が取られ、四月二十四日、全員B Cに下ることが隊長から指令された。

森本隊長の計画は二日～三日の休養の後、第二期登攀に入ることになっていた。しかし思わざる不運が待っていた。それは天候の悪化である。

今迄の好天はくずれ、連日ハッキリしない天気が続いた。休養を三日予定していた隊長も、これではと一日一日延し、いつの間にか二週間がたった。

ラジオ・インディアの気象通報と、ギャルツェンの長年の勘をにらみ合せた隊長は、五月八日大挙して出発、第二期登攀計画を実行した。

私たちは第一期の行動、荷上量から計算して、第二期計画を次のように設定している。

(一) C IIIをアドバンス・ベースとし、C V (アタック・キャンプ) の設営に全員 (隊員、シエルバ) が当ることに
より、C IVを使用しない。

(二) C Vから第一次登頂隊を出し、登頂不可能な時は稜線上にC VI予定地を決めて下ってくる。

(三) 通信機連絡を有効に使い、第一次隊の失敗を確認すると同時に、第二次登頂隊は行動を開始し、C VIに仮泊し、登頂する。

(四) C III入りに関しては、長時間にわたる待機によって、ルートがこわされている可能性が大きい故、漸次補修しながら全員交代性でこれに当り、目的を達成させる。

(五) BC、CIにローカル・ポーター五名を二分し、待機させ、BCのリエゾン・オフィサー、K・アマツェア氏には、登攀の経過を定時通話をもって連絡報告する。

第二期登攀

隊長森本、隊員広谷、藤本、近藤、伴、ギャルツェン・ノルブ、ラクパ・ツェリン、アン・ダワ四号、パ・ノルブ、ミンマ・ツェリンら計十一人の一行は、快晴のリルン氷河を直登した。二週間振りの行動なので皆元気で楽しそうだった。森本隊長は次のように記している。

▲五月八日、朝から素晴らしい快晴、七時過ぎ出発準備、ローカル・ポーターのソナム・テンジン (一九三四年からエヴェレストへ行っている古強者) がラマとなって、門出のお祈りをする。小高い所で「一寸法師石楠花」をどんどん燃やし、お

米をふりまきながら長いお祈りが始まる。

私たちもリュックを担ぎ、時々米を天にまいて和唱する。

七時半出発。C I 九時二十分、下のアイスフォールはセラックが溶けて、大分細くなっている。固定ザイルもはずれているところが多い。シエルパ五人が一つのザイルでルートをなおしながらゆっくりと行き、隊員は三人ずつ二本のザイルにつながって登る。中央部のスノウフィールドにはどこも凄いでブリで、全然形が変わり、赤旗もなくなり、まったく新しい所ようだ。十時四十分頃今迄に見た最大の雪崩、稜線直下のアイス・ビルディングの一部がこわされたらしい。スノウフィールドは敬遠しアイスフォール沿いに直登して、途中から上のアイスフォールに出る。十一時頃からうろこ雲が始め、十二時頃から雪、C II 着十四時。狭いテント場にC I から荷上げしたカマボコ型テントをもうひと張り、向い合せとする。限られた場所だけに、ちよつと外に出るとクレバスに落ちそうで危いことである。

五月九日、朝のネパール放送のニュースで、インド隊のアンナプルナ第三峰登頂が五月七日成功した由、やはり刺戟される。慌ててもはじまらないが……。今日は八時半と十時半まで晴、午後は例によってパラパラと雪。

天気予報は相変わらず「雷と雪」、C II の唯一つの娯楽品「碁」のトーナメント、シエルパ連中は雪だるま作り、雪だるまと言っても彼等の作るのはハヌマン、即ち猿の神様。▽

森本隊長の記録はここで切れているが、これは後日遭難現場で発見されたものである。

五月十日、晴れのち曇小雪。C II 出発九時三十分。前夜来の降雪でラッセル深く、急なキムシユン岩壁直下のリルン氷河河岸を、深くえぐりながら迂曲を重ね、C III を目指した。

シエルパはトップ交代を続けながら強引にC III に登る。私たちも二つのパーティーに分れ、それに続く。第一期のルートはすでに変り、わずかな足跡をたよってシエルパ隊は三時半頃、私たちは四時過ぎC III に着いたが、このC III

の位置は第一期の時ちよつとした問題があった。

第一期の時、第三次工作隊が四日間滞在し上部の登路を開拓していたのだったが、その時二度もアイスブロックの襲撃を受けた。

丁度隊長も一泊していて、テントに吹き込む爆風に一瞬ギョッとさせられた。でもこの地形から考えてみれば、納得のゆく安全地帯でもあり、隊長はこの大雪原が駄目なら、この山には幕営地はないよ、とまで言っていた。

第二次工作隊が、この地点に初めて登ってキャンプ・サイトを選定した関係上、後でこの話を聞いた大島、ギャルツェンはひどく気にやみ、相談の結果第二期にはテントの位置を少しずらすことにしていた。

即ち第一期の時は大雪原の入口にテントを設営していたのであるが、今はその最南端にいるのである。CⅢは約十五平方メートルの雪を踏みならし、入口を向い合せにし、便利に設営された。

夕食後降雪もやみ、静かな夕暮れのあかりの中に、遠くうっすらと雪山の美しく輝いているのが印象的であった。これは明日の快晴を約束するかのようであった。食後、隊長はテントに全隊員とギャルツェンを呼び、明日からの登頂計画を発表した。

第一登頂隊として広谷とギャルツェン、これを支援するは伴、パ・ノルブ、ミンマ・ツェリン、第二登頂隊は大島と近藤、これを助ける藤本、アン・ダワ四号。

明朝は早めに出発して全員でCⅤに荷上げし、第一登頂隊を残し、CⅢに帰る。いつも賑やかなテントも一瞬緊張する。

私は十時過ぎセイロン放送を聞いて寝袋に入った。すでに隣りの大島隊員、向う隣りの森本隊長は深い眠りについていた。何となく寝苦しい夜だった。午前二時頃、私は小用のためテントの外に出た。風一つない。山は静かだ。満天の星空でリルンの頂きにも無数の星が輝いている。雪山はあくまでも壮大であり、かつ静かで眠ったように白く動

かない。明日はうまくゆくぞ！

睡眠剤を飲み、私もいつか深い眠りに落ちていた……。

事故発生

(事故発生月日) 一九六一年五月十一日

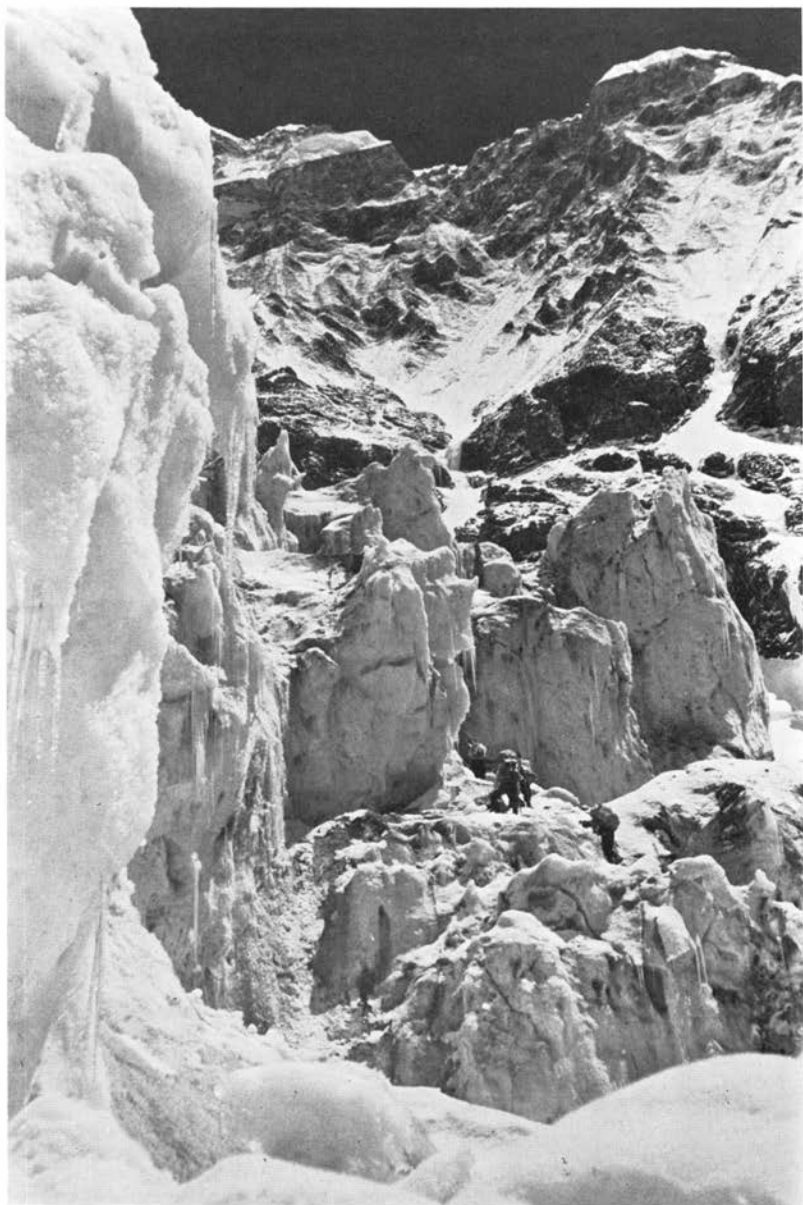
(事故発生時間) 午前四時四十五分(藤本隊員により記録された)。

(事故発生場所) 高度五六〇〇メートル、リルン氷河上部大雪原中の第三キャンプ・サイト。

地形 リルン氷河は、高度六五〇〇メートル附近の稜線直下より出来た傾斜約四〇度の雪原より形成され、これは一旦約二〇〇〜三〇〇メートルの断崖により部分的に切断され、その下部の東西約一〇〇〇メートル、南北約八〇〇メートルの大雪原に続いている。これより氷河は大雪原の南端にある岩尾根により左俣と右俣に分流し、更にその下部の高度五〇〇〇メートル附近で再び合流し、変化の激しいアイスフォールを形成しつつ本流となり、ランタン谷に落ちている。

事故現場は、このリルン氷河の上部大雪原(東西約一〇〇〇メートル、南北約八〇〇メートル)のCⅢであるが、図に示すように大雪原は殆んど傾斜なく、しかも雪原の中央部附近には高さ約二〇メートルの小山が東西に走り、小山の南面にはクレバスを形成しているところもあった。

CⅢの位置 CⅢは雪原の南端(直下はクレバス群となり、岩尾根によって出来た漏斗状のルンゼとなつて右俣に落下している)に位置し、約三〇〇メートルの距離をもつて岩尾根の頭が見られる。テントは約一五平方メートルの雪面を踏み固め、三角形の頂点の位置に三人用ウインパーテント二張、五人用カマボコテント一張が入口を向え合せにして張られ、図の第二テントには藤本、近藤、伴、第三テントには森本、広谷、大島、第四テントにはギャルツェン・ノルブ、パ・ノル

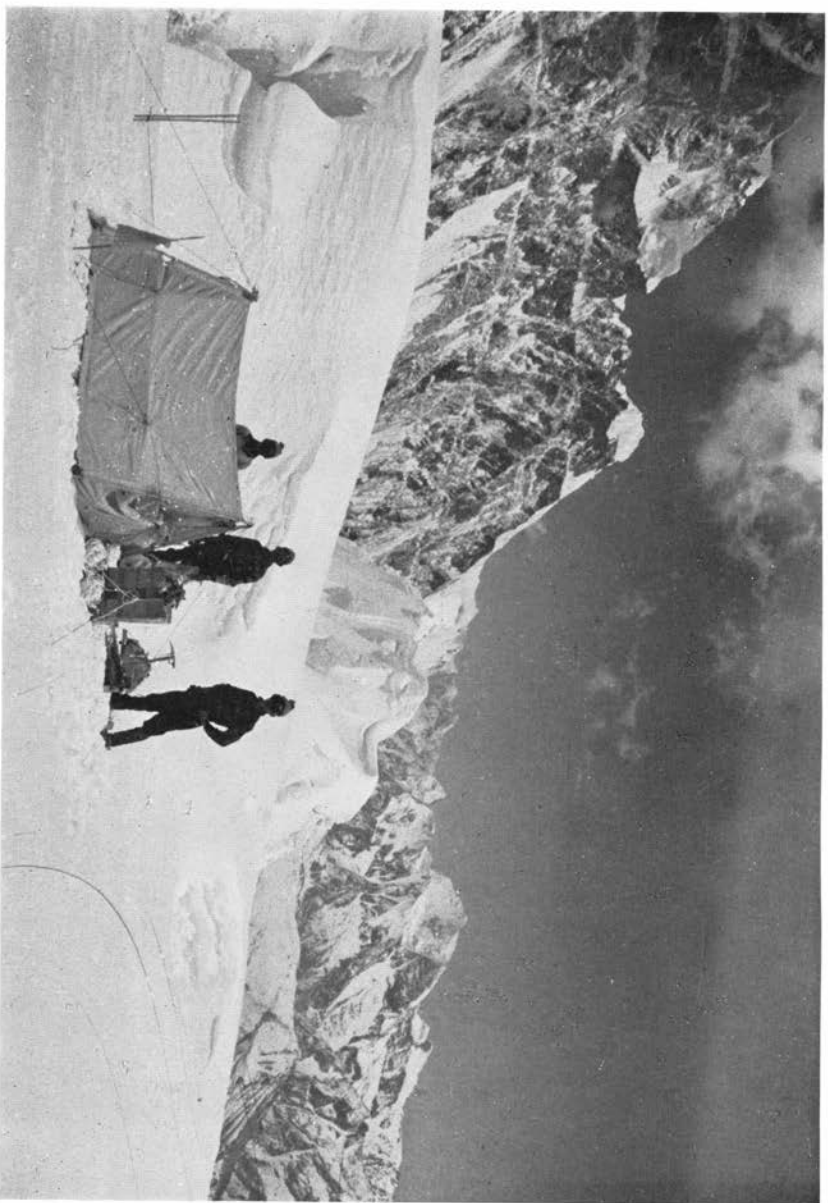


リルン氷河の第1キャンプと第2キャンプの間のアイスフォール
The icefall between Camps I and II in the Lirung Glacier.
(by K. Hirofani)

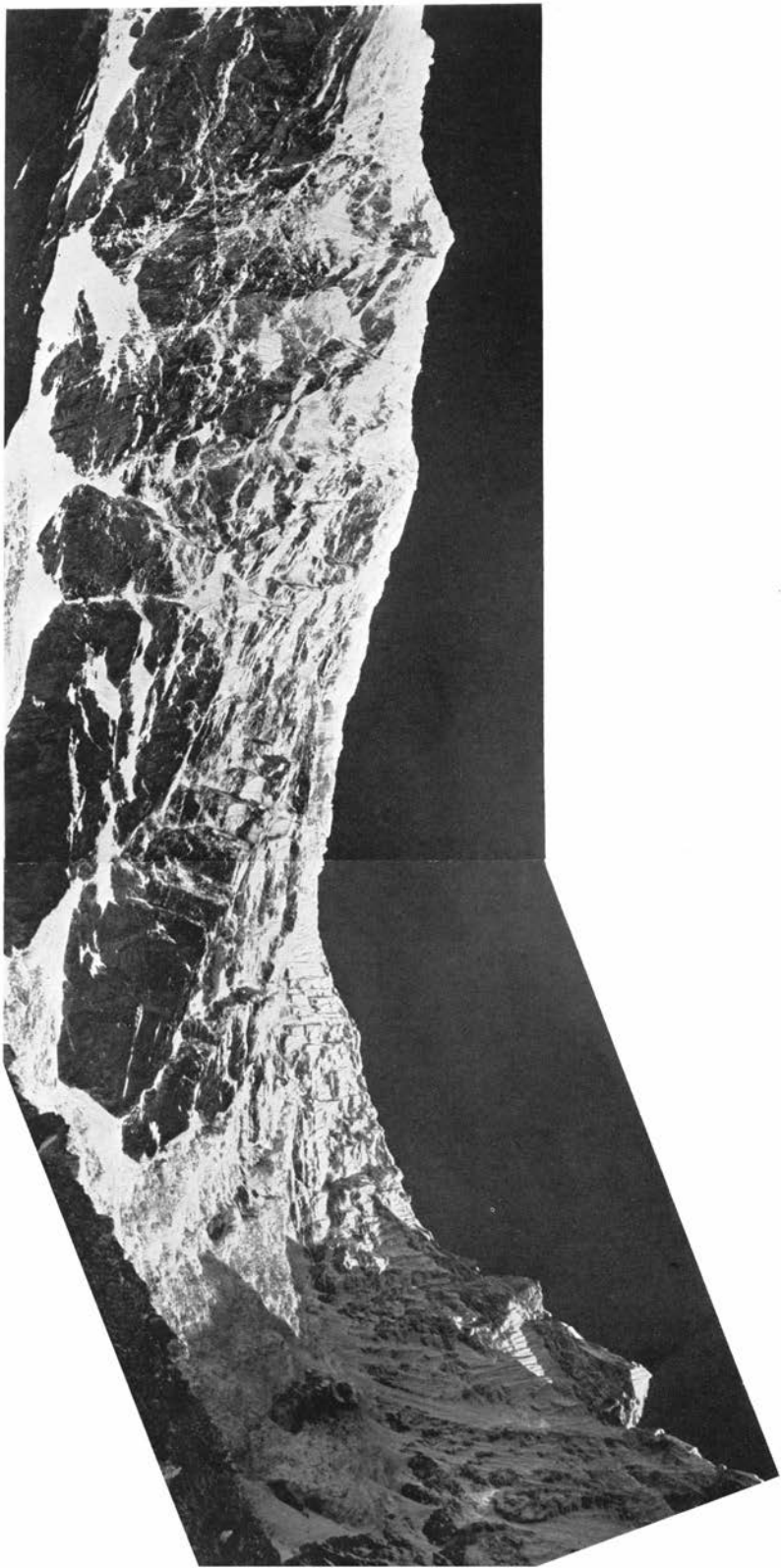


ランタン・リルンズの第1キャンブと第2キャンブ間の氷河台地で休むローカル・ポーター
Local porters resting on a glacier terrace between Camps I and II, Langtang Lirung.

(by K. Morimoto)

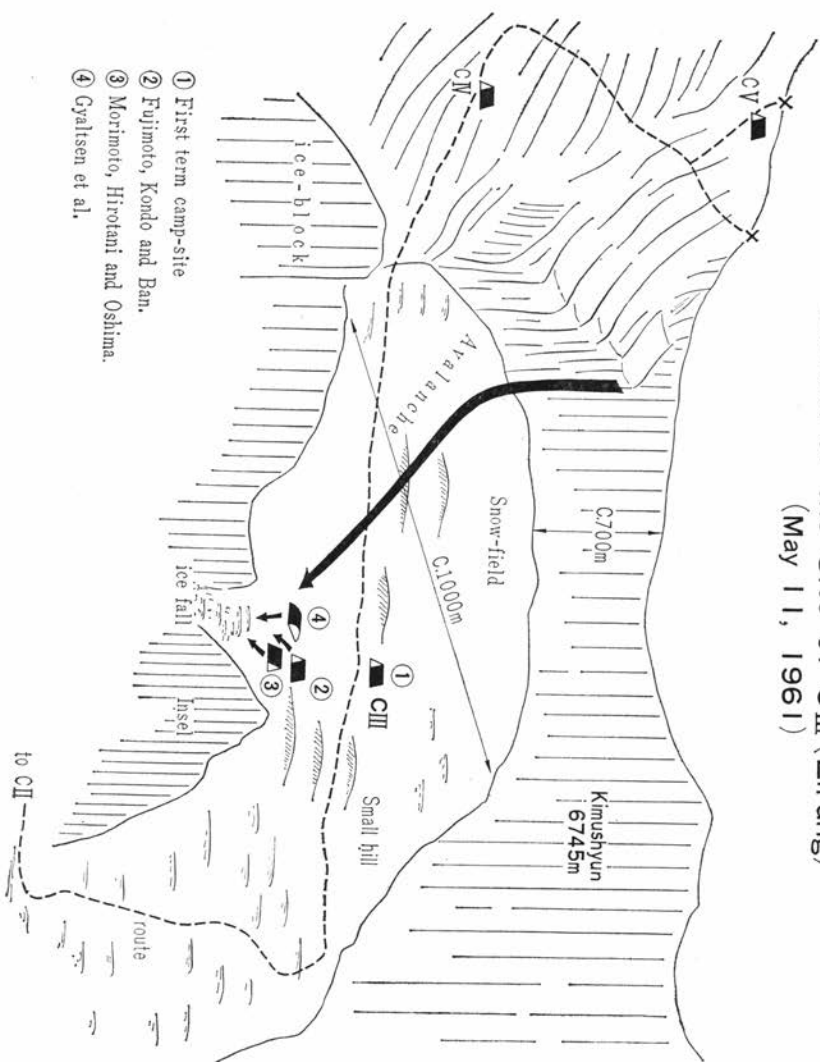


雪原上の第3キャンプ。左からアン・ダワ4号、ガルツェン・ノルブ及び伴明
Camp III (5600m) on the snow field (April 19, 1961) (left to right) Ang Dawa IV, Gyaltzen Norbu
and Akira Ban. (by K. Ohshima)



リルン氷河のベースキャンプから見たランタン・リルン (左) とリルン・アイスファール (右)
Langtang Lirung (left) and Lirung icefall (right) seen from the Base-camp (4000m) on the Lirung Glacier.

Sketch of the Site of CIII (Lirung)
(May 11, 1961)



ブ、ラクバ・ツェリン、アン・ダワ四号、ミンマ・ツェリンが夫々身体を交互にして睡眠していた。なおテントの位置より南側は、約三〇度の傾斜をもってクレバス群に続いている。

第一テントは第一期登攀時（四月十九日～四月二十四日）のキャンプ・サイトであるが、第二期時に移動した理由は次の通りである。

第一期登攀時四月十九日、大島、藤本、ギャルツェン、アン・ダワの四名はCⅡから登路を開拓、最終の荷上げをかねCⅢを大雪原の入口に設営し、下山した。その後四月二十日、森本、広谷、伴、パ・ノルブが入幕、事実上のCⅢ設営を完了したが、夕方四時頃爆風と共に小数の小氷塊の襲撃を受け、翌日テントの周囲にブロックを積むことを相談した。四月二十四日、広谷、近藤、パ・ノルブ、ミンマ・ツェリンの四名が睡眠中、未明再度の小規模の爆風を受けたが、ことなきを得ている。しかし、二張り張っている一方のテントのパ・ノルブは、小さな氷塊を体にかけていたし、又他方のテントの直ぐ横に約八〇立方センチの氷塊が転がり来ているのを、翌朝発見した。四月二十四日、指令で下山する際、相談の結果再度の氷塊の襲撃によるテント及び器具の破損を考慮して、テントをたたみ一カ所に集めて置いた。このような二度もの爆風と氷塊の襲撃で、危険性を感知した私たちは、森本隊長以下隊員及びギャルツェン・ノルブ、パ・ノルブ等と相談の上、氷塊の到達距離を計算に入れて、第二期登攀時には雪原の南端にテントの位置を定めることにしていた。五月十日、CⅢサイトに先着したギャルツェン以下シエルバ等は、上記検討の結果を忠実に実行し、雪原の最南端に三張りのテントを設営していた。

事故発生直後の状況 午前四時四十五分、爆風を受け眼ざめた。直後強烈なショックと共に全員雪崩に流され、第二のテントにいた藤本、近藤、伴は約五〇メートル流されテント外に投げ出された。なおテントは破損して附近に飛散していた。第三のテントにいた森本、広谷、大島はテントごと（多分）流され、約一〇〇メートル下部にあるクレバス中に落ち、広谷のみテント外に放り出されクレバス中に埋没、約十五分後に救出されたが、他は同テントと共に

行方不明であつた。第四テントにいたギャルツェン・ノルブ、ラクパ・ツェリン、パ・ノルブ、アン・ダワ四号、ミンマ・ツェリンは雪崩と同時にテント外に放り出され、ラクパ・ツェリン及びミンマ・ツェリンのみクレバス上部の雪面にたたきつけられ、他はクレバス中に落下、アン・ダワ四号、パ・ノルブは埋没を免がれたが、ギャルツェン・ノルブは頭部を雪中に埋没していた。約一五分後救出され人工呼吸を受けたが、既にこときれていた。テントは著しく破損してクレバス上部に引っかかっていた。生存隊員、シエルパの負傷の程度は次のようであつた。広谷Ⅱ左顔面、腰部打撲。藤本Ⅱ異常なし。近藤Ⅱ異常なし。伴Ⅱ軽度の打撲。ラクパ・ツェリンⅡ背部打撲。アン・ダワ四号Ⅱ異状なし。パ・ノルブⅡ胸部強打。ミンマ・ツェリンⅡ胸部強打、肋骨骨折。

なお雪崩発生直前の状況を、ラクパ・ツェリン及びミンマ・ツェリンから聴取すると、次のようであつた。遭遇した雪崩の起る数分前、ギャルツェン・ノルブはこれを感じ（テントに吹きつけた比較的弱い風）し、すぐ横に寝ていたミンマ・ツェリンを起し、ベンチレーターから外部を観察させている。この時のことをラクパ・ツェリンも知っていたとのこと（炊事のため雪を溶かしにかかっていた、うとうとしていた）、ミンマ・ツェリンは観察の結果危険性のないことをギャルツェンに伝えた。従つて数分後爆風が襲来した時、ギャルツェンのみ寝袋から出てベンチレーターから外部を観察していたらしいが、脱出することが出来ず事故に遭遇したと考えられる。（事故直後全員が寝袋に入ったままであつたのに、ギャルツェンのみ寝袋から出ていたことがこれを裏付けている。）

CⅢの広谷と大島は、事故発生直前に雪崩による爆風であろうと話し合っているが、森本隊長は知っていないようであつた。

事故後の経過 生存隊員及びシエルパによつて約一時間半、行方不明者二名の捜査を行ったが、氷塊は固化する上シヤベル、ピッケルその他の器具が見当らず、捜査は困難を極め、生存隊員及びシエルパの疲労も激しく、また寒気が厳しいため一旦捜査を中止し、散失した装具、食糧を集めたのちミルクを沸かし、高所用食等を与え、重傷者の応

急処置の後、再び捜査に従事する。隊員、シエルパの精神混乱状態より決断を下し、ギャルツェン・ノルプの埋葬を行うことにし、近藤、ラクパ・ツェリン、アン・ダワ四号はクレバス中に降り、遺品をはずしてクレバス中にギャルツェン・ノルプを埋葬した。重傷者を除く他の隊員、シエルパはその間行方不明者捜査を続行していたが、発見出来たものは少数の遺品と装備類であった。その後全員集って三名の冥福を祈っていた時（九時二十分）、突然稜線直下のアイス・ビルディング崩壊による雪崩を再び受け避け避難したが、多大の危険を感じ即刻下山することを申し合せた。散失した登攀用具を集めたものの、ピッケル（二本）、アイゼン（一足半）の不足による下山時の危険性を考え、全ての残存装備、食糧を放棄し、寝袋及び少数の個人装備のみを持ちC IIに下山する。

元気なアン・ダワ四号を完全装備させ、重傷者を間に入れ、昨日登ったルートを静かに下った。C III出発九時三十分、C II十二時三十分着。

夕刻五時、ハンディ・トーカーによる定時通話がベースキャンプとの間にとられ、BCにいるリエゾン・オフィサーに事の一切を説明、C IIから下部のアイスフォール突破が現在の装備では不可能であること、従ってローカル・ポーターに予備のピッケル及びアイゼンを、十二日早朝に荷上げするよう連絡した。四月十二日午前九時過ぎ、ローカル・ポーター三名が要請通り荷上げして来た。重傷者を間にはさんでC IIを後にし、BCに着いたのは夕刻であった。

冥福を祈る

BCに下山した私たちは、ただ茫然としては居られなかった。何から手を打つべきか、検討の余地はない。折返して登って来ている筈のポスト・ランナーと連絡を取り、一刻も早くこの知らせを送らねばならない。私たちは相談をまとめ次のような計画をたてた。

(一) ツンガ氷河踏査計画を放棄する。

(二) BCでの後始末は五月十三日から四日間とし、五月十七日にはBCを撤収、キャラバンを編成して、予定通り五月二十三日にはトリスリ・バザールに到着するようにする。

(三) 関係各方面への報告書、連絡、報道発表等は隊長代行者、広谷をして一本化させる。

報告書の作成、キャラバン編成日程、ポーター雇用交渉、梱包作業、不要装備・食糧・燃料の処理等、仕事に追われてまたく間に日は過ぎていった。

五月十五日、昨日ポスト・ランナーを迎えに下ったバサン・カメが、早朝彼等を従えてBCに帰着した。手紙の束の中に主なき手紙数通、自然と涙がこみ上げてくる。用意した便りを持って直ちに下山、カトマンズに急行するようたのむ。私たちの報告は四日後にはカトマンズに着く筈である。内地への電報も五月十九日晩には着く筈である。ポスト・ランナーによる誤報を恐れて、彼等には何もしゃべらぬよう嚴重に念を押しした。

昨日からソナム・テンジンが、夜を徹してラマ教の経文を彫ってくれた五〇センチ四方の石碑を、BCとCIの間の小高い丘に担ぎ上げた。この丘の前方にはリルンの頂きが聳え、後方にはホンゲンドプケ、ナヤカンガ等の高峰が望み見られ、つい先月迄は深々と雪が覆っていたのに、今は花が咲き蝶が舞っている。沢山の石を集め、二メートル位築き上げ石碑をはめ込んだ。石碑には Mr. K. Morimoto, Mr. K. Oshima, Mr. Gyatsen Norbu/Died/11. May, 1961. OCCUHE. (JAPAN) と記されている。彼らの好きだった酒をかけ、タバコをそなえた。隊長の愛用したハーマニカで亡き先輩の愛唱歌を吹奏した。シェルパたちはラマ教のお経を唱えながら、墓の周囲をグルグル回った。今日まで涙を隠していた者も、この静かな葬式に臨んで目がしらを拭っていた。おりしも夕陽に染った峰は、永遠の眠りについた三人をじっと見つめているかのようであった。

下山の足どりは重かった。壮大に聳えるリルンの主峰をふり返り、あの部落この部落で、そしてまたこの曲り角

で、愉快に話し合った友はもういないのだとしみじみ思う。真紅の色も鮮やかだった石楠花はいつしか枯れ果て、青とした緑だけが強烈な初夏の太陽にさかえていた。

そ の 後

五月二十三日、キャラバン最後の日である。前日のテント地、ベトラワチから約二時間でトリスリ・バザールに入る。先発した藤本とK・アマツユア氏はトラックの手配、彼の厚意でネパール政府のトラックの交渉が成立し、二十四日午前中に配車すると伝えられた。年令的に話が合い、しかも苦勞を共にして来た彼の私たちに対する処置は寛大であり、立派なものであった。

バザール下手の空地に、私たちの最終キャンプが設営されると、まずポーターの解雇である。ランタンから一人の落伍者も出さずに、ここまで荷を運んでくれた彼等は、みんな愉快な剽軽者ばかりで、冷静さを失いかけていた私たちを、いつも笑わせてくれたものであった。

午後四時過ぎジープが着き、朝日新聞デリー支局長の秋岡氏が尋ねて来られた。夜晩く、デリー大使館の松田書記官、通産省ネパール駐在技官恵下氏、共同通信社清水氏も急行され、その夜は今後の処置問題、ギャルツェン弔慰金問題等について協議し、善処を計った。隊長とマネージャー大島を失って、途方に暮れていた私たちにとっては、各々の暖かい心情が大きな支えとなったことは言うまでもない。

翌日カトマンズに着いてからは、屋台をひっくり返したような多忙さであった。報道関係とのインタビュー、肋骨骨折、或いは疼痛をうったえるミンマ・ツェリン、パ・ノルプ、ラク・パ・ツェリンの政府要人立会いによる診断、ギャルツェン弔慰金問題にからむヒマラヤン・ソサエティとナジャールマン・シンの問題、紛失物とパッキング・リスト作成の問題、荷物梱包運送の問題、シエルパ賃金問題（紛失物の件等）等である。

五月二十七日、二十四日日本を発つたOB泉隆次郎氏が、蝶理株式会社ボンペー駐在員光間氏と共に到着した。なつかしい顔である。内地の状況を聞き胸がつまる思いの中に、事の一切を報告し、すべてを泉氏が統率されることに決った。

ギヤルツェンの弔慰金については、ヒマラヤン・ソサエティと再三にわたる話合いがなされ、彼等としてはヒマラヤン・ソサエティから未亡人に渡す心積りであり、私たちとしては直接未亡人に渡す方針であったため、話が難行した。ナジャールマン・シンと泉の最終会談に入って、交渉はようやく日の目を見た。即ち、私たちはナジャールマン・シンを仲介人として、一旦ヒマラヤン・ソサエティに弔慰金を渡し、その金は私たちに再び依託され、ダージンでテンジン・ノルケイ立合いのもとに未亡人に渡し、受領書のコピー一部をヒマラヤン・ソサエティに送付するという方法である。

負傷シエルバの問題に関しては、規定通り補償金を支払う手筈になっていたが、政府の医師立会いによる診断の結果は、快癒しているという以外に異常が見とめられないことが説明され、解決に至った。

帰国準備のあわただしい中にも、泉救援隊長のユーモアな弁舌で、隊員たちは久しく忘れていた笑いを取りもどした。

五月二十九日未明、私たちは遭難を知って応援にかけつけて下さった阪大P二九隊の副隊長住吉氏と共に、ジープを馳って朝霧のカカニの丘に向った。思いつきの出のカカニの丘の夜明けは、モンズーンに入ったというのに晴れわたった空だった。はるかランタン・リルンが、多くの山々の間から山容をのぞかせて白く輝いていた。未踏の山、ランタン・リルンの登頂は天災の前に失敗に終り、隊長以下三人の尊い命を失った。いまもなお五六〇〇メートルのリルン氷河の中に眠っている亡き人々の冥福を祈りたい。

ジュガール・ヒマール主峰の直下まで（一九六一年）

梶 本 徳 次 郎

スウェン・ヘディンの中央アジア探検記を読んで、未開の高地へ行きたいとおもいたったのは、中学一年生の秋、もう二十八年も昔のことであった。少年の頃の、ひたむきな夢であって、パイオニア・ワークができるならばヒマラヤやアンデスの高山はもちろんのこと、南極や北極の果てであつてもよいと考えていた。山登りの好きな人は、誰でも同じことであらう。

一九六〇年の春、日本山岳会関西支部ルームでは、偶然にも組織と母体とを異にした三つのヒマラヤ計画が熱心に進められていた。いずれも翌一九六一年春のもので、その一は大阪市立大学のランタン・リルン（隊長、森本嘉一氏）。次はピーク二九へ行こうという大阪大学（隊長、篠田軍治氏）。更に私どもの計画が重なっていた。三隊のプランナーは前支部長や支部委員として、ながく共通の仕事をしていたので、遠征の初心者である私の隊は、諸先輩および前二隊から多くの便宜と指導とを受けることができた。不幸にも大阪市大隊は森本、大島両氏逝きて、いま私どもはお礼のこたばを直接伝えることはできないけれども、その好意を忘れることはあるまい。

計画と編成と準備

この計画は、具体的なものとしては一九六〇年四月に、大阪府山岳連盟の総会に関西登高会から提案したヒマラヤ登山計画、目標はカンチエンジュンガ山塊のタルン・ピークにはじまっている。その頃ジュガール・ヒマールへは東海地区山岳連盟登山隊（隊長、伊藤久行氏）が登山をしていたので、やがて成功の報らせがあるものと考えて、はじめから候補地に入れていなかった。それは先蹤者の努力に対する私どもの礼讓でもあった。

六月上旬、「ジュガール・ヒマールは不成功におわった。頂上まで約五〇〇メートルを残して標高六六〇〇メートルの地点から惜しくも後退した」という趣旨の電報があった。全日本山岳連盟の理事会は、連盟は翌年も引続いてジュガール・ヒマールに登山隊をおくるという決定をして、大阪岳連へ通告をしてきた。伊藤隊長は連盟の指示によって、ネパール政府から一九六一年春の登山の仮許可をとってかえった。

連盟の一九六一年度の海外登山は、東京都と大阪府両岳連の競願になっていた。九月某日、荒川東海地区岳連会長のお世話で、尾関連盟会長はじめ山岳連盟主脳と、東京、大阪の関係者とは名古屋に集って、帰国した伊藤隊長、岩瀬副隊長以下の方々からジュガール・ヒマール登山の実情と、次年度への意見を聴いた。（その報告の内容は、本誌前号・山岳第五十六年掲載、一九六〇年のジュガール・ヒマール登山について——伊藤久行氏——にひとしいものであった。）

名古屋会談の結果、大阪における主唱者であった梶本は、武内大阪岳連会長はじめ大阪方の意見をまとめて、次の計画は東京、大阪合同隊でやろうという決心を本部に伝えた。さらに一カ月後に、全岳連理事会と同海外遠征審議会とは、熟慮の上で大阪案を認めて、梶本を一九六一年度の隊長に任命した。

幾年もの間、よく考え、四月から具体化を急いだ計画は三転四変して、十月になってやっと本ざまりになった。

隊の編成は、隊長とドクターを別にして、東京都四名、大阪四名の計十名。隊員は各山岳連盟加入の会から推薦された名簿によって、東京岳連は同連盟の理事会が仮ぎめして隊長に呈示し、大阪岳連は隊長の指名したものを同連盟理事会が承認した。海外登山に経験の深い日本山岳会や一部の大学では、既に隊員の選び方についてひとつの定見が出ているけれども、連盟というむずかしい全国組織では、登山そのものの成否に関する要素とともに、つねに連盟間の行政的なかねあいも重く見られるようであった。出来上った理想にいきよに近づこうと努めてみたが、やはり前者の轍を踏んで経験を積みかさねることになった。

あとで、この計画を後援してくださった読売新聞社と日本テレビ放送網株式会社から、記者一名とスチール撮影とテレビ撮影各一名の専門家が特派された。

隊は総勢十三名で、全日本山岳連盟一九六一年ヒマラヤ登山隊と呼ぶことにした。

隊長	梶本徳次郎(四〇歳)	全日本山岳連盟理事、関西登高会(株式会社山晴社役員)。
副隊長	中野満(三五歳)	東京・鵜翔山岳会(中野テント店経営)登攀担当。
	野村哲也(三三歳)	大阪・関西登高会(府立河南高校教諭)涉外担当。
隊員	赤山伸夫(三二歳)	大阪・関西山岳会(大阪府農林部水産課勤務)会計担当。
	番場宏明(三一歳)	東京・山岳巡礼クラブ(県立大宮商業高校教諭)装備担当。
	小泉順太郎(三〇歳)	大阪・関西登高会(住友電気工業会社勤務)食料担当。
	山田隆保(三〇歳)	東京・三共山岳部(三共株式会社研究部勤務)涉外担当。
	塚崎義人(二九歳)	大阪・関西登高会(清瀬療養所外科・医学博士)医務担当。
	浜田啓司(二八歳)	大阪・清風高校山岳会(清風高校教諭)装備・梱包担当。
	森田格(二六歳)	東京・昭和山岳会(東京管林局経営部勤務)食料担当。

隊員 野 沢 正 英（三五歳） 読売新聞社・大阪 スチール写真担当。

” 高 木 真（三四歳） 日本テレビ放送網 テレビ写真担当。

” 茂 野 徹 太 郎（二七歳） 読売新聞社・東京 渉外・記事担当。

隊員は登山と併行して、ジュガール・ヒマールおよびバレピィ・コーラとインドラワチ河付近で、登山とキャラバンの往復において、各々の専門について資料を蒐集し、医学と自然地理と人文地理の調査をおこなうことにした。

その分担は次の通りで、また計画全般について文部省の後援を受けることができた。

A 医 学 調 査 登山に際し高度病、風土病、身体の環境順応等について観察を試み、さらに原住民の生

活用式、衛生状態についてもできるかぎりの資料を集める……………塚崎担当。

B 自然地理学および人文地理学調査

1 氷河の調査、岩石採集、村落形態と交通、風土、部落民の習俗の観察……………野村、番場、浜田担当。

2 植物採集ならびに植物の立体分布の調査……………森田担当。

3 昆虫採集ならびに昆虫の立体分布の調査……………山田担当。

4 淡水魚採集ならびに魚類の立体分布の資料蒐集……………赤山担当。

C 記録文化映画ならびに写真の撮影……………野沢、高木担当。

遠征の予算は、旅費、装備、食料およびシエルパ等の人件費のすべて、装備、食料等で現場寄贈を受ける予定のものをも含めて、一名当り百万円、十名で合計一千万円と概算をたてた。隊員は五十万円宛を負担、各自は個人あるいは所属団体、勤務先、労働組合等の好意によって調達し、十二月末と出発直前とに分納することができた。残りの約五百万円相当額は、読売、日本テレビ両社の後援および産業界、公共団体等よりの御寄贈、連盟加入団体ならびに個人の多くの方々の醸金によって円滑に支弁することができた。御好意に対し深く感謝している。

十月に決定したメンバーは、これまでの分担に従って準備を急いだ。隊の特性に従って事務局は東西に開設し、東京事務局は高橋定昌（全岳連理事長）、大阪事務局は大賀寿二（大阪岳連理事）の両氏が引受けられた。

十一月になって、はじめて東西の全隊員十名（報道関係三名は未定であった）が、大阪郊外の隊長宅に集った。この日、初めて顔を会わした同志もあったが、すぐに二日徹夜で作戦をねり、分担をきめて東京組は夜行でかえった。

十二月上旬、再び大阪へ全員召集、数日全くの徹夜で討議と計算をくりかえした。休暇は遂に時間切れ、休養をかねて六甲山へのハイキングは計画倒れにおわった。まだ全員が勤務をもっていて、準備に専念できるものはひとりもいなかった。社会人のきびしさである。

出発までに全員でトレーニングをかねた小さな登山をしたと思ったが、もうそんな時間はなかった。

一九六一年一月。正月の短かい休暇を全員はスキーをはいて、上高地ホテルの冬小屋に集合した。徳沢園、浅間温泉へと一晩ずつ会議の場を移し、内定していた報道側の隊員も加わってチームの懇親をはかり、松本で解散した。

一月五日、中央線の列車の中で、ネパール政府は日本登山隊にジュガール・ヒマール登山を許可した（カトマンズ特電）という小さな記事を発見、これで本当に遠征できるのだと大よろこびをした。

一月六日よりまた東西に分れて準備。東京の官庁関係の渉外は主として山田が担当し、郵船航空会社の協力と文部省中島体育官の熱意によって、十分な外貨割当を受けることができた。

東京で集荷した物資は大阪へ移送し、二月上旬に関西大学の体育館を借用し、所属団体の多くの会員の献身的な努力で、二百三十個約八トンの装備と食料との梱包をおわった。

出 発

一九六一年二月十七日、梶本隊長以下十一名は英印汽船・サーダナ号で神戸港を出帆。香港、シンガポール、ペナ

ンに寄港。三月七日、梶本隊長と野村副隊長はラングーンで下船。貨物の揚陸および通関交渉のために翌日空路カルカタへ先発した。三月九日、読売・竹下特派員はデリーより飛来して、不馴れなわれわれを助けてくださる。

三月十日、高木、茂野二隊員は機で羽田を出発、その日の二三時五九分にカルカタ到着。三月十四日に、サーダナ号はカルカタ入港、中野副隊長以下は下船して宿舎リットンホテルに全員十三名が揃った。

翌十五日に野村副隊長と茂野は、シエルパ交渉のため空路カトマンズへ先行し、三日目の朝早くに有利な条件でシエルパの契約をおわったという電報をよこした。

三月二十四日、隊長はカトマンズの宿舎コロネーション・ホテルの中庭で、エヴェレストの山麓から出向いてきたシエルパ（ローカルポーター兼ポストラランナーを含む）十九名を引見した。

サーダー パサン・プタール2号 (四八歳)

コック キリケン・シエルパ (四七歳)

シエルパ アン・ドルヂェ (三八歳)

” ミンマ・ノルブ (三五歳)

” イラ・ツェリン (三〇歳)

” アイラ・ウンデー (五〇歳)

” ツェリン・タルケ (四五歳)

” アン・ギャルブ (三五歳)

” テンジン・ギルミン (三六歳)

” アン・ノルブ (二二歳)

” アン・ギャルツェン1号 (二四歳)

シエルパ アン・ギャルツェン2号 (二二歳)

” ラクパ・ギャルプ (二五歳)

ローカルポーター兼ポストランナーとして

ダブー (四七歳)

” ナワン・グンデー (四〇歳)

” ツェリン・ナムギャル (一八歳)

” ペンバ・ギャルツェン (不詳)

” タツシー (二六歳)

” アン・パサン (不詳)

ネパール政府からはリエゾン・オフィサーとして、P・K・シルスター君(二四歳)が任命されてきた。

カルカッタの貨物通関は日本三隊で協議をして、すべてバルワラ商会に取扱させた。日本総領事館の御協力にも拘わらず予想通りの難行で、陸揚げ完了までに約十日間かかった。貨物はトラック二台に満載して、ネパール国境に近い町パトナに陸送した。そこから大阪市大隊と共同でインド航空一機を丸一日チャーターして、パトナとカトマンズ間を四往復させて、両隊の全貨物を三月二十六日に空輸する契約をしたところ、スローモーなインド人の運航と国境付近の悪天候に災いされて、第一、二便で大阪市大隊の全貨物と、われわれの三分の一が着いただけで、あとは遂に欠航してしまう。毎日I・A・Cのカトマンズ事務所へ催促に出かけたが要領をえない。

三月三十日、早朝ポカラへ飛ぶ大阪大学・篠田隊長と小秋元氏をカトマンズ飛行場に見送る。正午、大阪市大隊はランタン・リルンに向って元気よく出発した。宿舎ラナ家へ梶本と赤山が見送りに出向いたとき、森本隊長以下は送別の料理を行儀よくにこやかに待っておられた。ギャルツェン・ノルプは「ジュガール隊の成功を祈る」といって握

手。これが森本、大島、ギャルツェン三氏との永別であった。

四月一日と二日にR・N・C航空のチャーター機で、パトナから最後の貨物と隊員とが到着。翌三日、すぐに通関をおわり、その貨物と共にトラックでプラバーホール（王宮の隣にある貴族の古い劇場、W・H・O駐在の正垣氏の幹旋で借用）に移転した。隊員は大劇場の豪華な二階でゴロ寝、シエルパ達は前庭の芝生でキャンプをした。

四月四日、殆んど二十四時間の徹夜で七トンの装備と食糧とを、キャラバンのために一個三五キロ宛に再梱包した。官庁、知人への出発の挨拶廻り、事務の処理、内地への便り等、全員実に忙しく働いた。最後の夜、梶本はオーストリア学術登山隊の会食に招かれ正垣氏宅で歓談した。さらに夜更け、隊長と副隊長とは、やっと開梱されたおみやげを携えて、外務省登山係シン氏の自宅を訪問、かえりには恵下氏宅へ挨拶に立寄り、暗闇のオールド・シティを抜けて深夜の宿舎へかえった。

キャラバン

四月五日の朝、ホールの庭に二百人のポーターが集ってきた。隣りは王宮で日本ならば二重橋前出発というわけだろう。キャラバンの総勢は日本人十三名、シエルパ十三名と見習六名、リエゾン・オフィサー一名にポーターを合せて二百三十三名になった。コースは一九五八年の深田隊、昨年の伊藤隊と全く同じで、ポーターは三五キロ宛の荷物を担いで、チベットとの国境に近い根拠地まで十一日間、毎日一八〜二五キロ位歩いて行く。サンクー、ナワルプー、チョータラの町を過ぎるとチベット人の区域にはいり、八日目のテンパタン部落で人影は消えた。

第一日の夜サンクー郊外で雷雨に見舞れただけで、このキャラバンは終始快晴に恵まれた。前半の低地では暑気と炎天にあえいだが、毎日毎日、見るもの聞くもの、すべてが珍しい人文と自然とのつながりで、新しいよろこびと希望との連続であった。四月十五日の正午、土語でボンバゼルと呼ぶベースキャンプの予定地に着いた。

プルビ・チャチュンブ氷河を溯る

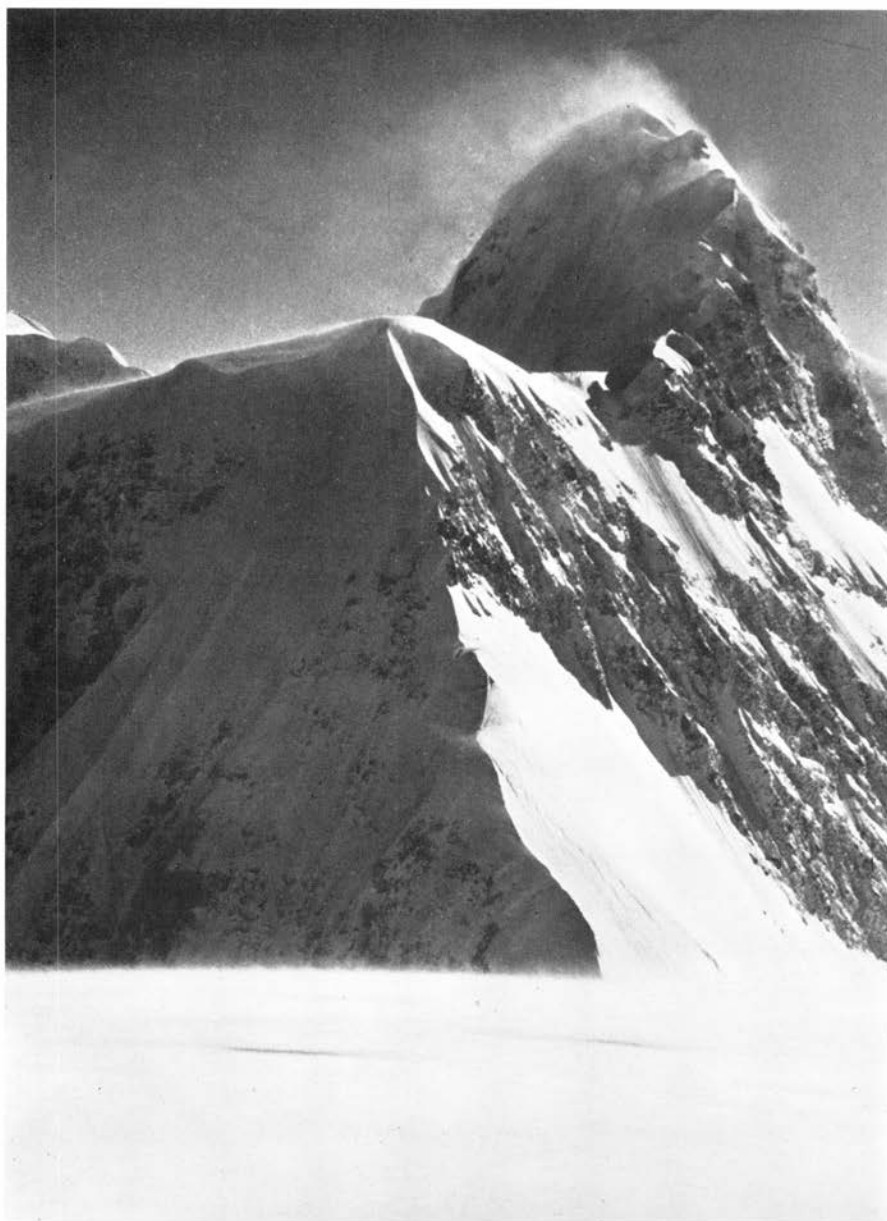
ベースキャンプは標高四二〇〇メートル、穂高の涸沢に似た台地はまだ半ば雪に埋れていた。昨年マッキンレー（明治大学隊）へ行った高木隊員を除いた十二名の日本人には、富士山よりも高いはじめての高度で、既に軽い頭痛を訴える者もあつた。対岸には処女峰プルビ・チャチュ（六四四〇メートル）が、けわしい氷河と三千メートル近い岩肌を垂直に見せ、おそろしいような巨体をすえていた。

主峰ビッグ・ホワイト・ピーク（七〇八三メートル、土語ではロンボ・ガンと呼ぶ）は、ベースキャンプからは見えない。ここからプルビ・チャチュンブ氷河を約二〇キロ溯ったチベット国境に連なる山稜の、まだその奥にあるという。防寒服を着た全隊員はメステントに集まって、日本で作成した登山計画を再検討した。インドの通関・輸送で遅れた日程をとりかえすために、翌十六日からすぐに攻撃をはじめることにした。前半のコースは、これまでのイギリス二隊、日本二隊の記録をよく検討していたので概略は判っていた。

BCから頂上近くまでには六個のキャンプが予定され、テントや炊事具、登山用具は一〇四〇キロ、食糧は一一六〇キロ、写真材料は六〇キロで、合計二二六〇キロの荷上げ量が計算された。

隊員十三名とシェルパ十三名とが登山にあたり、ローカルポーターは第三キャンプまでの荷上げを手伝わせること、登山経験のないリエゾン・オフィサーはベースキャンプに常駐して、キャンプの警戒と管理にあたり、テントから四百メートル以上離れぬように命じた。

四月十六日、中野副隊長、小泉、山田、浜田、高木とシェルパ六名とは、偵察をかねて氷瀑の末端へ器材を運ぶ。第一キャンプ予定地まで一気に荷上げをするのは遠すぎるので、氷河へ降る中間の台地上にゼロ・キャンプを設けて中継を図り、野村副隊長以下はシェルパ及び選抜した十五名のポーターを率いて荷上げをはじめた。



ギャルツェン・ピークの頂上から望んだジュガール・ヒマールの主峰ビッグ・
ホワイト・ピーク

The Big White Peak(7083m) seen from the summit of Gyaltsen Peak
(6705m). (by T. Kajimoto)



フルビ・チャチュンツ氷河を登る—後の山はフルビ・チャチュエ
Ascending on the Phurbi Chyachumbu Glacier, with Phurbi Chyachhu(6440m) in the background.
(by M. Nozawa)



ハイパスの第5キャンパスからレティヌ・ピークを望む―遠景はエヴェレストとローツェ

Ladies Peak (6000m) seen from C5 on the "High-pass" with Mt. Everest and Lhotse in the background
(by M. Nozawa)



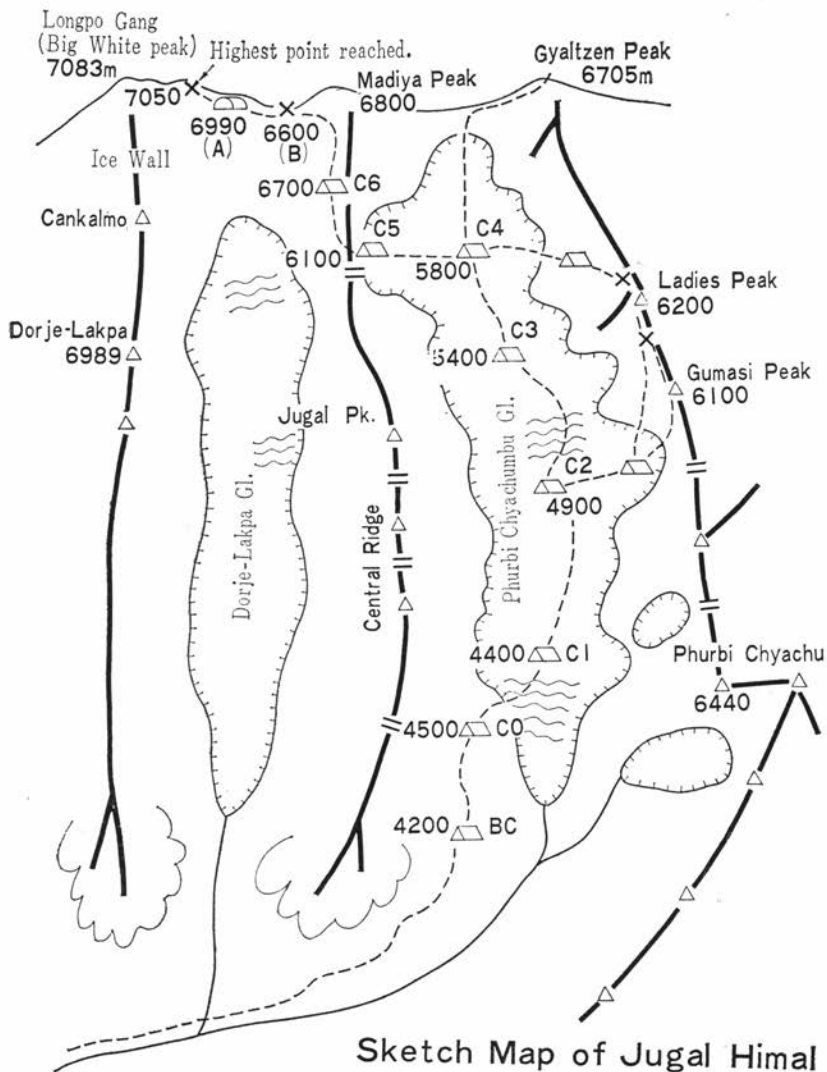
キヤルツェン・ピークの頂上にて—梶本隊長（左）と2シエルパー

T. Kajimoto, Ang Dorje and Ang Gyaltzen II on the summit of Gyaltzen Peak on May 11, 1961.

(by H. Bamba)

ジュガル・ヒマール主峰の直下まで

Bird's-eye View of Main Peaks



(A) The point where our attack members spent two nights (May 12,13,1961.)

(B) The point where the former Japanese party retired in 1960.

四月十七日、最初の氷瀑は中心を避け右岸の岩壁に、二百五十メートルのナイロンロープを固定して突破した。岩登りはシエルパよりも隊員が数等うまい。隊長以下五名のサポートで、中野副隊長、森田、三シエルパの五名が、初めて氷河上の第一キャンプに泊った。

第二と第三キャンプの中間の氷瀑は、五年前にイギリスのフォックス隊長等がナダレで遭難した難所であった。われわれは二日間の注意深い観察の後、四月二十四日に隊長、森田、サーダーと三シエルパの五名で第三キャンプに進んだ。C3は氷瀑上の安定の悪いアイス・ビルディングの屋上であって、いつも不安であった。四月二十五、六日隊長と森田は、C4へ続く氷の迷路にコースを作って、C1で休養をしてきた中野副隊長に引継いだ。

四月二十七日、中野副隊長、サーダー、テンジン・ギルミンの三名は、森田以下三名の援けで五八〇〇メートルの氷河の広場に第四キャンプを設けた。野村副隊長の指揮する荷上げは、漸やくC2に集まりかけていた。

四月二十九日天皇誕生日に、第五キャンプに進みたいという希望は、荷上げの都合で一日遅れた。この頃から夜より朝にかけて快晴、午後は吹雪という天候の悪いクセがついて吹雪の襲来は毎日すこしずつ早くなって、ランタンとジュガールの山城ではそのままモンスーンにつづいてしまい、あとで隊が頂上近くから後退する主な原因をなしてしまつた。

BCからC5まで、先登の隊は僅か十五日間で急進したので、補給の速度は追付けなかつた。悪天候の周期がきて交通が途絶えると、集積のできていないC3以上は孤立状態になって、展開直後から食糧と燃料の節約が必要であつた。C5のすぐ上には中央山稜へつづく約二百メートルの氷壁があつた。ピッケルで足場をきりながら固定ロープをとりつけるのに、不足の資材を下から運び上げる日と、嵐の日とが続いたので八日間を費してしまつた。登攀を始めから快調の隊が、はじめて経験した大きな焦慮であつた。五月五日、母国では男の節句の日。登頂を祝つて天高く掲げようとして携えた鯉のぼりは、雪嵐の第四キャンプでわびしく黒と緋の尾を垂れていた。

第六キャンプに進む

五月八日の午後、半ば雪に埋れたC5のせまいテントで、隊長、中野副隊長、赤山、小泉、森田、野沢、高木の各隊員と、サーダー、パサン・プータル2号の九名が、登頂のための会議を開いた。野村副隊長ほか五名の隊員は、輸送任務のためC4以下のテントに分散していた。今朝、C5にいた尖兵達は氷壁に固定ロープをつけおわって、C6の方向へ道をつけたので、いよいよ最後の攻撃に移るときがやってきた。

会議の決定は、明九日に小泉、森田、サーダーの第一隊は、中野副隊長以下四名の援助でC6に前進し、その翌日は頂上を往復する。もし第一隊が成功すれば、翌日は第二隊として中野、赤山、テンジン・ギルミンを、さらに第三隊に隊長、塚崎、アン・ノルブと、それに続くことのできる人員ということで、攻撃終了日を五月十五日と予定する、ということであった。C5には中野副隊長以下四隊員と三シェルパとが残り、隊長以下はC4へ降りた。

五月九日朝七時の定時交信で、C5の無線電話は「強風のため上には動けない」と伝えてきた。十時頃ちよつと青空が見えたけれども、やがて風と吹雪の定期便がやってきた。登頂計画は一日延期されて、下のキャンプだけが補給のため交通をした。食糧を再計算して計画の縮少と再配分とを、無電と手紙とで各キャンプに指示した。

五月十日、第一隊は氷壁を越えて中央山稜を登ったが、ドルジェ・ラクパ氷河側の新雪と氷とに悩んで、ついにマディア・ピークに続く国境線に到達することができない。第六キャンプは六七〇〇メートルの稜上で、ナイロン製のミッド型テント一張であった。塚崎ドクターと野沢、高木を保健と報道の仕事のためにC5へ派遣した。

あと三十三メートル

五月十一日（小泉隊員の日記）。四時アラームで目覚めると夜明けは快晴。六人用テントに森田、小泉、サーダー

の三人だけでは寒い。中央山稜のドルジェ側の棚にある第六キャンプを、頂上めざして七時に出発した。稜線上はアイス・ビルが階段上にあつて進めないで、左よりに軽いラッセルをして国境線に向いトラバースをした。とつぜん先頭のパスンが、四メートル程の浅いクレバスの底に墜落した。負傷はないと思つていたが、あとで強い捻挫になつた。今日は偵察におわつてしまい、吹雪の中をC6へ引返した。C5から中野副隊長、赤山、テンジン・ギルミン、アン・ノルプの四名が登つてきて、隊長からの指示を伝えたので、今日の経験を話して作戦をたてた。夜間登攀の意見も出たがシエルパは夜の行動を嫌つた。明日の第二回目のアタック隊は、赤山、小泉、森田の三隊員。中野副隊長とサード以下の三シエルパはサポートにまわることに決定した。

五月十二日（C5へ登つた茂野隊員よりの手紙を、午後三時半にシエルパがC4に携えてきた。）

「梶本隊長殿。本日七人編成で頂上アタック。野沢さんはシエルパ三人が主稜線に出たのを十一時半に目撃、四人のサーブは同四五分にコルを通過したそうです。コルから頂上までは三時間で行ける見込の由。本日中に登頂はまちがないが、C5まで帰幕はむずかしいかもしれません。委細は五時の交信、それでわからなければ七時、場合によつて（帰つてこなければ）茂野はC5にとまり、あすの取材にそなえたいと思います。三時、C5にて、茂野。」午後五時、六時、七時にC5とC4とは交信「塚崎ドクターはC5へ帰らない。強風のためテント外では立つておれない。登頂成功して全員C6へ帰っていると信じています。」

アタック隊赤山、小泉、森田の三名は、マディア・ピークと主峰のコルに登り、昨年の伊藤隊の引返し点を過ぎ、午後の吹雪の中を登りつづけて、五時、六九〇メートルの稜線にピッケルで小さな雪洞をつくつて、防寒服のままでフォースト・ビバークをしていた。夜の頂上は、まだ遠く高いところに聳えていた。

五月十三日（再び小泉隊員の日記）。長い夜が明けた。昨日のルートを伝つて国境線へ出た。チベット側を覗きこむと、瓦を積んだような岩肌の上に雪庇がはりだしていた。稜線は危なくて登れない。トップを交代しながら一歩

ずつステップを切つて、ネパール側の傾斜四〇〜七〇度の氷雪の壁を登った。九時頃からガスがかかりはじめて、豆粒のようなC7のテントが見えなくなった。十一時頃には風雪がはげしさを増し、吹雪の合い間にちらっと見える頂上は、もう殆んど高さが無い。直線距離で二百メートル位だ。トップのステップが、すぐに消えてしまうほどの吹雪になっていた。やや安全なテラスに三名が集り思案をした。「このまま行こう」という意見もでた。今朝からの速度を考えると、吹雪の頂上までまだ五〜六時間はかかるだろう。頂上付近でビバークは必至である。やつてやれないことはない。しかし、吹雪の中のむずかしさ、七千メートルでの初めての経験、隊全体の余力など、いろいろのことを考え合せて、無理のできる状態ではないと判断した。もういちど各自が、自問自答。しばらく寒い時間が流れた。「よし帰ろう。」ビッグ・ホワイト・ピークは非情の山であった。航空自衛隊から借用してきた高度計は七〇五〇メートルを示していた。頂上まであと高さ三十三メートルであった。

後退、吹雪の壁の降りでは、ステップ毎にたいへん疲れた。午後四時にビバーク点に辿り着き、埋った雪穴を掘り出して、もう一晚、着衣のまま苦しいビバークをした。翌十四日はC6と5を経て、C4まで下った。

ギヤルツェン・ピークの頂上

五月十一日（梶本隊長の日記）。今日は登頂の日である。すべての準備と展開とはおわってしまった。私は天に聳える未踏の頂きに初登するわれわれの選手を見ながら、国境へ登ってみようと思いたち、第四キャンプに待機していた番隊員と、アン・ドルジェ以下五名のシェルパを引率し、午前八時にテントを出発した。そしてロープで結びあった二組は、殆んど休むことなく六時間のラッセルをつづけてチベットとの国境に達した。吹雪の定期便がやってきたので、雪穴を掘って夕刻まで待ち、落伍したシェルパ一名をコルに残して、日没前の晴れ間にギヤルツェン・ピーク（六七〇五メートル）の頂上に立った。一九五五年のジャクソン、一九六〇年の日本東海隊につづいて、いま私どもは

この氷雪の頂上の三番目の登攀者になった。謎の国チベットはコーヒー色の果てしない高原であった。

頂上に日の丸とネパール国旗と岳連旗とをたて、その下に日本アルプスや大陸の戦場に散った山仲間の写真と遺骨とを金色の壺に納めて埋めた。主峰の頂きは北西二キロにひとときわ高く、はつきりと見えたが、登頂のしるしを認めることはできなかつた。午後七時、C4にかえる。一日に九百メートルの登降はすこし過労であつた。

グマジ・ピークの登頂

五月十々十三日、第二キャンプに待機していた野村副隊長と山田隊員、ツェリン・タルケ、イラ・ツェリンの四名は、レデイスの氷河に前進キャンプを設けた。南側からレデイス・ピーク（六二〇〇メートル）を攻めたが、サポート隊のかなしさ、ハーケン類が不足して頂上近くから引返し、ブルビ峰につながる国境稜線の上に六一〇〇メートルの無名峰を発見したので、転じて五月十三日、その白いドーム状の頂上に登りグマジ・ピーク（GUMASI ネパール語で円い峰）と命名した。

退却

五月十四日、登頂隊に退却を命じた。「必要な最少限の荷をもつて下山。最後尾は中野副隊長指揮。全員のBC下山は五月二十日——」五月十八日、午後二時、ラジオでランタン・リルン登山中の大阪市大隊遭難の放送を聞いた。判読できぬままに誤報であるように神に祈つた。

六月一日にカトマンズへかえり、隊員は飛行機と汽船とに分れ、六月中旬から七月末にかけて帰国した。

（附記）ジュガール・ヒマール主峰は一九六二年五月三、五日に、全日本山岳連盟第三次登山隊が登頂、全員が三回にわたり反覆して頂上に立つという見事な成功をおさめた。その概要は本誌次号に掲載される。

マッキンレー登頂記

交野武一

一、発端

母校明治大学開校八十周年（一九六〇年）に際し、学校当局から海外遠征登山の誘いを受けたことから発足したマッキンレー登山は、結局、明治大学創立八十周年記念事業の一つとして、「アラスカ地域総合学術調査団」という名称のもとに、考古学・民俗学・地理学の三部門からアラスカ州のほぼ全域に亘り調査することになり、マッキンレー登山は地理学班の中に包含されて行うことになった。山岳部としては、もとより一本立ちの登山隊として行きたかったが、すでに一九五九年度の海外登山の外貨は割り当てずみになっており、内部的にも登山隊だけの遠征では学校も資金を出ししづる様子もみえたので、形はどうともあれ、海外の登山・氷河のある山登りを経験できる機会を逃すべきでないと言うことになり、国を出るまでは学術調査隊の衣をかぶって準備をすすめねばならぬ不利・不便を承知の上で実行に踏み切った。隊員の中に、南極観測隊に参加した地理調査所の鍛冶晃三技官を加えて、「氷河流下の観測」を盛りこんだのも右のような事情からである。調査団全部に対する学校からの資金は五〇〇万円、外に読売新聞社の後援費五〇〇万円、合計一千万円の頭金をもって計画は進められた。然しながら計画がすすむに従って、これでは資

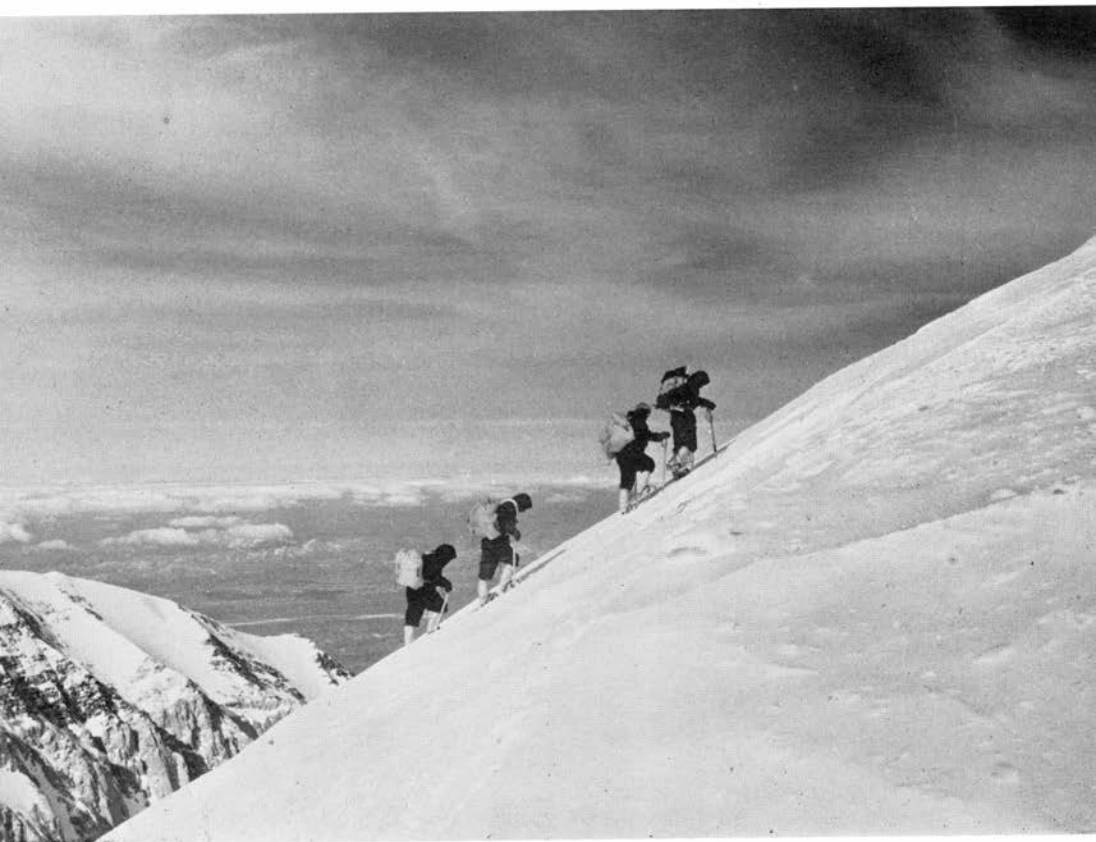
金が不足であることが判明し、登山に関する直接費は登山隊自身で造らなくてはならなくなった。だが経費の全額を募金に依らないで行けることは、恵まれた隊であったと言えるだろう。

われわれが隊を出すことに決定したその頃、早稲田大学のO・B吉阪隆正君達も、時を同じくしてマッキンレー登山を計画しておられることを知った。そこでわれわれとしては国内的にも募金その他の事柄を処理するための不利を避ける上からも、また彼の地に渡ってからの行動上の思惑からも、一つの隊として行き得ればと吉阪君達と話しあつた。当時すでに吉阪君達は、現地に関する新しい諸資料を入手しておられて、当初われわれの計画の樹立には大いにたすかった。何はともあれ早・明がマッキンレーの登頂を争うかの如く世間からとられることは避けたかった。

こんなことを気にするのはわれわれの思い上がりかもしれないけれど、野球のリーグ戦のつづきみたいに考える向きがないでもない。登山史をひもとけば、アルプスではマッターホルンをめぐり、国内では槍ヶ岳の北鎌尾根の初登攀をめぐつて、二者が相争つたかの如く伝えられている。われわれははるばるアラスカまで行って、その二の舞いを演じたくはなかった。国内でこそ早稲田だ明治だと言つても、彼の地に渡つてしまえば、日本登山隊の一語で片付けられてしまうにちがいない。若し二隊が別行動をとつたとしても、万が一事故がいずれかに起つた際には、一方の隊は自らのスケデュールを中止しても救援に赴くべきは当然のことである。この隊を一つにまとめる問題について難色を示したのは、夫々の後援者である。そのいずれもが報道関係とあつて、期するところあつての後援であるから、二隊を一隊にまとめるよりはむしろ、一隊を中止させたかと言ふのも無理からぬこととは考えるが、われわれとしては全く嫌な想ひであつた。別にこのようないきさつが糸を引いた訳ではないと思ふが、帰国してから、早・明が登つたとか登らないとかが一部の世間の話題になり、はてはウォッシュバーン氏から問い合せまでいただいた。とも角も初旅を無事に終えたわれわれにとつては、実に後味のわるい想ひであつた。

結局、早明両隊の行動については、日高日本山岳会長の御助言によつて、明治は地理学班登山隊としてマッキンレ





マッキンレー南峰頂上直下を登る隊員

The members ascending the hard snow slope immediately below the summit of Mt. McKinley South Peak (May 14, 1960)

機上から見たマッキンレーの南西面

South-western aspect of Mt. McKinley from the air (March 30, 1960). (by S. Takahashi)



マッキンレー南峰頂上の幕営

Establishing a tent on the summit of Mt. McKinley South Peak (May 14, 1960)



マッキンレー南峰頂上に立つ

The summit of Mt. McKinley (May 14, 1960)

ー山に登り、早稲田はヴァンクーバーからカナダを縦断しての自動車旅行を旗印として、余力があつたらマッキンレー山に登ると言うことになり、面目はたてられた。然しながら両隊員の中にはあきたらない者もいたのは止むを得ないが、後事は万事両隊長の間で判断処理することになった。

マッキンレー山の登山については、ナショナル・パーク・サーヴィス（米国政府機関）に申請することになっており、その届出の書類には救助隊をきめて、登山隊長と救助隊長は契約書を作って提出することになっている。人数の少ない早大隊の救助隊として、明大隊の一部の者が申請された。このような事柄は両隊長間で処理されたのであるが、いずれも後援者に対しては当初言えないことであつた。何んと言つても、異国の山中でお互いに頼りあえることは強味である。

二、準備

わが部がマッキンレー山（六一九一メートル）に登山の目標を定めたのは、アラスカ・レンジの初登頂の山をねらうよりも、むしろわれわれの実力で登り得るだろう山であると言う点であり、日本人として初めての山であると言うことで、或る程度の登高慾はみだされるからである。準備に際してあれこれと渉獵したアラスカ関係の書物の中で、吉沢一郎氏が第二次大戦中に出された「北の山・南の山」のアラスカの稿の終りに「米国との間に今日の様にモヤモヤがなくなつたら、アラスカの処女峰へ太平洋を斜めに横切つて行く事も面白いと思う。多くのアメリカ人からは、支那の属国位にしか思われていなかった日本から、ハウストンやウオッシュバーンやG・ブラウン等を向うに廻して、アラスカの巨峰を征服する事なども、一面から考えれば米国人の認識を改めさせ、日本の国威を宣揚させる一手段としては持つて来いの方法ではないだろうか」と記されているが、すでにマッキンレー山は米人によって何回も登られた山ではあつても、われわれにとつては充分に意慾を燃え上げ得る未知の巨峰であつた。

準備にとりかかって何より面喰ったのは、輸送の仕事とその方法である。登山そのものの資料はウォッシュバーン氏がAACの年報に記され、またジオグラフィカル・マガジン等にも記されてあったし、パーク・サーヴィスの刊行物で事たりたが、日本からの荷物を輸送する確実な資料をつかむまでの不安は、計り知れないものがあつた。この問題は結局、交野、高橋が先発してシアトルに赴いて、それから先の船便と陸揚げしてから、登山基地までの陸運が確認されるまでは全く不安であつた。第四十九番目の州になつたばかりのアラスカについて、特に交通、冬期間の輸送はまことに不便、不確実である。今日ノース・ウエスト機によれば簡単であるが、調査団全体の五噸に余る資材の航空運賃は、登山隊の背負いきれるものではない。

装備、食糧を定めるに先だつて登路を決定しなければならぬ。マツキンレー山開発の大先達であるウォッシュバーン氏からの指示には、東南面の未登路を登ってみないかとあつたが、われわれは一九五七年以来数隊によって登られた、カヒルトナ氷河からのウエスト・パットレスを経て登るルートを探ることに定めた。

装備、食糧については部として初めての経験であるから、将来にそなえて無駄は承知の上で、出来る限りの重装備をもって万全を計った。吉阪君達から重巡洋艦装備と言われたが、これは、いささか早大隊のお役にもたつた筈である。また偶然のことではあるが、行きちがいに登って遭難事故の生じたアメリカ二隊の救援にも、いささかお役にたつた訳である。

装備の中で唯一つわれわれなりに工夫したのは、アザラシ皮を滑走面の真中に張りつけた短スキーであつて、これは三五〇〇メートル位までの氷河の登降に非常に役にたつた。その他はマナスル隊や南極越冬隊のものを指針として調度をそろえた。食糧は二カ月間の氷雪上の生活に充分耐えるように工夫して行つたが、乾燥した酷寒地帯の生活には可なりちぐはぐなものがあつた。

アプローチを飛行機で入る登山の場合に、何よりも重要な装備として携行すべき無線通信機を軽視した訳ではない

が、無線通信の扱いと心得のある隊員を持たないわれわれは、止むを得ず、定時飛来を約束した飛行機との空地連絡をサイン・ボードで代替することにした。パイロットも、かつての登山隊でサイン・ボードを使った隊もあると言っていた。然しながら、現地に行つて基地から百マイル山に入った氷河の中に幕営して、吹雪かれて先ず感じた不安は、事故の起つた時の連絡をいかにすべきかと言ふことであつた。勿論、われわれはアンカレッジにおいて、アラスカ電信電話会社のフィールド社長の御好意で、波長登録済みの強力な無線通信機を貸していただいて携行した。だが、そびえたつ岩稜にさえぎられた氷河地帯の中では、通信ができなかつた。無電中継基地までさえぎるもののない四五五〇メートルの第三キャンプでは働らいたが、寒冷に弱いトランジスタ式の無線機は、天幕の外でのわずかな交信で音が消えてしまつた。幸いわれわれの後にやつて来たアラスカ隊の携行していた小型の無線機のお蔭で、下山時の基地との連絡がとれた。小型のものは保温がしやすいけれど、これとても〇―50位のテント外での交信は、二十分位で声が消えて働かなくなつてしまつた。幸いに登頂前後に見舞われた荒天つづきの間も、また登山中においても事故がなかつたから良かったものの、若し事故が生じたとしたらと考へてみると、寒々とした心持にならざるを得ない。

マッキンレー登山、つまりマッキンレー国立公園内にある高山岳に登る場合には、米政府機関であるナショナル・パーク・サーヴィスに登山の申請をした上で、現地において装備全般について点検をうけ、更に飛行機を使用する場合には、着地点及び物資投下の地点の指定を受けることになつてゐる。

飛行機の契約については、ウォッシュバーン氏から前もつてパイロットのドン・シエルダンを推薦されていた。シエルダンは今日アラスカきつての名プッシュ・パイロットであり、特に氷河上に着陸することでは斯界での腕達者で、マッキンレー山についての第一人者である。彼はアラスカ鉄道沿線のタルキートナでエヤー・サーヴィスを営んでゐる好漢である。飛行機を操つるために生れてきたような人間である。

一九五九年九月にOB後藤大策が商用で北米に赴くついでに、諸々の現地調査を依頼した。後藤はアンカレッジの

G・木村氏を介して、シエルダンにタルキートナからベースキャンプまでの輸送・物資の補給を予約し、ポストンに廻りウォッシュバーン氏から登山に参考になる各種の写真、等高線の入っただけのウ氏作製の五万分の一マッキンレー山周辺の地図を入手して来た。これらに依つて登山のルートを決出し、キャンプの数を定めることが出来た。出発を間近かにひかえた時にウ氏から大変な依頼をうけた。それは一九五一年にマッキンレー山南峰に登頂の際に、山頂に樹てた竹製のポールが、一九五七年に登つた連中が行つた際に、そのポールを樹てた位置が北にずれてポールが曲つていたので、われわれにそのポールを、すでにドン・シエルダン気付で送つてある特殊テープで補強の上、指示通りの角度から写真をとつて来いと英・和両文の説明のついた写真を添付しての依頼があつた。

隊員の決定——山岳部としての海外登山の経験はマナスル隊に参加した大塚博美だけである。当然大塚を隊の責任者として隊は編成されるべきであつたが、勤務先の都合によつて——雪男調査隊に参加のため——駄目になり、一九五九年もおしつまつてから、OB交野武一(52)を隊長として、同じくOBから金沢恒雄(29)、高橋進(29)、藤田佳宏(27)の四名に、学生から東真人(24)、小林孝次(22)、三室喜義(21)、土肥正毅(21)の四名、外に第二次南極地域観測隊に参加した地理調査所技官の鍛冶晃三(32)を加えて、九名が隊員に決定された。

ここで問題になつたのは後援者である読売新聞社、日本テレビ、東映から夫々報道及びカメラマンの参加の申出があつたことである。時すでに装備、食糧ともにパッキングにかかつていた。装備、食糧の追加よりも、問題はポーターを雇えぬ現地で、これらの連中のサポートをどうするかと言うことである。結局、まず登山に協力することを約束して貰つて、隊としては彼等の同行を承知した。そして読売新聞社から報道記者として片柳英司(31)、同写真部員鈴木金次郎(36)、日本テレビ映画部高木真(32)、東映撮影技師松田忠彦(33)の四名が加わることになり、登山隊は十三名になつた。隊としては、登山に経験のないこれら四名の特殊任務の連中を連れて登るのは、頭痛の種であつた。だが然し今回の登山の結果から断ずれば、彼等四名——片柳記者は不幸発病第一キャンプから下山——の頭が下

がるような協力がなかったら、成功したかどうかとも思えるほど、テント間の輸送、登山隊のサポートについて示された努力に、心から敬服の念を禁じ得ない。広い社会生活に経験のある連中の加っていたことは、吹雪にとじこめられて若い隊員の心持が滅入りがちのキャンプ内でも、笑いの種がまかれる。おそらく、報道・映画の製作という任務をはたしながら、彼等ほど登山行動に挺身協力した人達はないだろう。

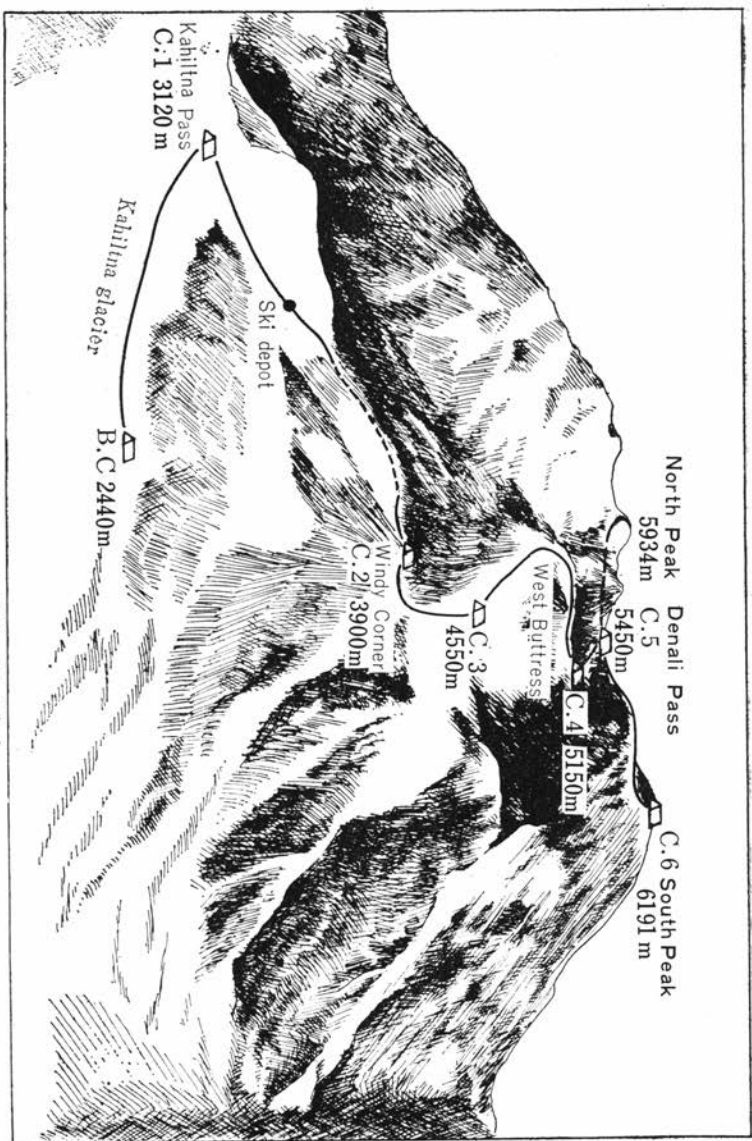
三、登山行動

一九六〇年三月一日に横浜をでる三井船舶の明石山丸で荷を送り出し、三月十八日に明石山丸シアトル入港予定の知らせを受けて、三月十六日に交野、高橋はシアトルにおける通関処理、及びアメリカ国内における海・陸輸送の手配、確認、現地調度品の手配等のためにノース・ウエスト機で先発した。

四月五日、アンカレッジに本隊到着。G・木村氏宅に落ちついて、隊員は夫々分担して現地調度物品の買付にあたり、隊長はG・木村、L・ラーソン氏の案内でエルメンドルフのアラスカ空軍基地に司令官C・F・ネクラソン氏を訪ね、登山中に不慮の事態が生じた際の救援をお願いして承諾を得た。

四月七日。国を出るまでは止むなく学術調査隊の衣をかぶって、歯がゆい思いをつづけていたが、アラスカに来てしまえば、マッキンレー登山隊として迎えられ、身も心もすっきりした思いである。午後九時、アンカレッジ駅からアラスカ鉄道にのりこんで、街灯一つなく黒く凍てついた深夜のタルキートナに着いた。空輪を引受けてくれたドン・ジェルダンに迎えられて、フェアビュー・インとロード・ハウスと言う旅舎に分宿。

四月八日。隊は宿舎をシエルダンの格納庫に移した。ここしばらく降りつづいているという雪は、いくらか小止みになったが、空はひくい。早朝、シエルダンは装備点検をする国立公園管理事務所のレインジャーを迎えに、マッキンレーパークに飛び出した。隊員総がかりで荷をほどき、空輪向きに整理する。午後、シエルダンが伴って来た二名



Route Map of Mt. McKinley

のレインジャーによって点検を受けた。装備、食糧の点検はすこぶる綿密なものであったが、われわれの重装備についてびっくりしたようで、特に高所用の天幕をほめていた。だが履物については、マッキンレーでは皮靴よりも甲皮に空気をつめてインスレーションをほどこした防寒ゴム靴を推奨していたが、われわれが持参した軽く作られた毛皮を内側につけた高所靴を手にとつて、ぬらさないようにと注意を受けた。着陸地点は学術調査隊のおかげで、国立公園区域内である三一二〇メートルのカヒルトナ・パスに許可された。

これで万事OK、あとは天気まかせ、隊員の心持も落ちついた。

タルキートナは、人口二〇〇名たらずの小部落である。昔時ゴールドラッシュ時代には、探鉱者が群がってにぎわったと言われるが、今は二軒の旅舎、一軒の雑貨店、チエホフの小説にでも出てくるような木造家屋のたたずまい。シストナ河は凍てついて河原は白く広がり、この辺のヘムロックの林はかなり深く所々にムーズかキャリブーの糞がちらばっている。晴れば北に八〇マイルの彼方にマッキンレー山が眺められると言う。格納庫にひろげられた登山隊の荷物を見に、村人が二人三人とやって来る。誰れもが全く素朴で、人なつっこく「こんな寒いのにマッキンレーに登るなんて気狂いさだだ」と皆んなが言う。けれどわれわれの日本製の装備にはおどろいたらしく、「ほんとうに日本製か」とか、「いくらか……!」と目を見はっていた。フェアビュー・インは男世帯の旅舎で、酒場もあり午後になると村人が集って来て玉を撞き、カードを遊び一杯を楽しんでいる。すこぶる気前のいいインの親爺は、缶ビールをさかんにふるまってくれた。

住民は白人が主だが、アラスカ・インディアンやエスキモーもいる。アラスカ・インディアンは州政府で生活を保護しているから、金も物もやってはいけないということを除けば、人種的な差別もなく、厳しい自然の中に仲よく助けあって生活している。

四月九日午前九時、小雪はやんだが空はひくい。パイロットのシエルダンは、片目をつぶって右手の人差指で輪を

つくり、天候好転、出発準備の託宣をうけ、第一便に交野は最少限の露管用具と十二名一日分の食糧を持って飛び立った。この日シエルダンの予報ははずれて午後から再び降雪。第二便は中止した。隊長塔乗の第一便機は雪面のコンディションがわるく、予定の三一〇〇メートルのカヒルトナ・バスに着陸できず、一段さがったカヒルトナ氷河上二四〇〇メートルの地点に着陸した。

四月十日正午頃晴れ上って、二便、三便と空輸はつづけられ、十二日にベースキャンプ設営を了した。ベースキャンプ(BC)からの眺めは、東の方ノース・フォーク・カヒルトナ氷河の奥にマツキンレー山の西壁が聳え立ち、西はカヒルトナ氷河の向うにフォーレーカー(五三〇三メートル)がのぞまれる。BCの辺りで氷河の幅は二〇〇〇メートル。ノース・フォーク・カヒルトナ氷河上にアイスフォールがみられるだけで、広々した雪原である。

四月十四日、第一キャンプ(C1)(三一〇〇メートル)へ隊員はスキーで登り、荷は空輸した。第六便が薄暮C1に着陸する時に、左翼を雪面に突きこんで脚を曲げて横転した。だが、われわれの携行した修理材料を工夫して使い、とも角離陸できたのは幸いであった。この時若し修理が不能であったら、翌日から十一日間も荒れ狂った吹雪のために、隊の前進に大きな支障を生じたにちがひなかった。このために第七便で荷とともに運ばれる管の交野は、氷河入りの第一夜につづいて、またもBCにとり残された。十七日の小晴れにC2建設と小量の荷上げを、三九〇〇メートルのウインディ・コーナーまで行っただけで、アリューシャン沿いにやって来た低気圧のために、山は荒れに荒れた。けた外れに多い降雪で何度も天幕は埋められた。天幕は食堂用を除いて、前室を備えていたが、前室は雪が吹きこみ溜り、大小の用をたす時はまことに難儀であった。更に外にでて用を足すことは、外に出ただけで尿意がなくなってしまうほどであった。寒冷地の雪中天幕生活では、天幕内で大小の用を足せるようにすべきである。われわれはいつ晴れるともわからぬ吹雪に備えて、大型の雪洞を退避用に掘った。四十一日間の登山期間中における最大の試練であった。

四月二十七日。吹雪もおさまってC2建設に向う。C2はウエスト・バットレスの直下三九〇〇メートルの地点で、ウ氏がウインディ・コーナーと名づけた所。われわれはここを前進キャンプとした。風雪十日間のおくれを取りかえすために、ここで登攀隊と輸送隊に分け、登攀隊は高橋が、輸送隊は交野が受持つことにし、二十九日に登攀隊はC2に入る。そして登攀隊は必要最少限の装備・食糧を持って、更に前進することにし、カメラ、報道班を主力にした輸送隊は、ひきつづいてC1からC2へ、そしてC3へのピストン輸送にあたった。気温はさすがに春の近づくのを示すように、入山当時C1-20から30。位であったのが、C2(三九〇〇メートル)でもC1-20。位まで昇って来た。

五月二日。早大隊がカヒルトナ・パスのC1に到着。吉阪君達と話しを交したとたんに、異境の山に登っている想いが薄れて、何んだか立山かどこか内地の冬山のような感じになる。C2までは同じ天幕場。旅立ちの時には一緒に登ろうと言ったものの、ここまで来ると特に二十日余りも先に入って、追いつかれたわれわれの隊の特に若い隊員の中には、あせりもみえ、言葉には現わさないが先を急ぐ模様が目だってくる。早大隊からも何んとも言って来ない。そしてC3の手前でわれわれは予定通りにウエスト・バットレスに路をとり、早大隊は南壁にルートをとって、ここまでBCから一本の線でつづいて来たトレースは、右と左に別れた。

五月三日。登攀隊はウエスト・バットレスの氷壁の真下、四五五〇メートルの地点にC3を建設した。そして、五月四日に斜度、三五度から四五度の氷壁に三〇〇メートルのザイルを固定して登路を確保した。この氷壁の登攀が登頂できるか、できないかを決定するものと言ってもいいだろう。——下山の際にアラスカ隊の申入れで、彼等に撤収を約して残した三〇〇メートルの固定ザイルは、早大のサポート隊にも、アメリカ二隊にも使われて、その後起きたアメリカ隊の遭難の救援に際し役にたった訳である。——C2から先の行動については、高橋の良識にゆだねた。

五月五日。高橋、藤田、三室、土肥の四名はC4への登路偵察に向った。九時三〇分に出発。携行品は三食分余の

食糧と非常用幕営用具。氷壁を一時間半で登り、それから吹きさらしの岩稜づたいに南・北峰間のデナリイ・パスを掛けて、その直下のC4建設予定地に十二時半着。登路偵察の足をのびしてデナリイ・パス(五四五〇メートル)についたのは十五時三十五分。北側からのブリザードは激しくなってくる。気温は降り〇—〇。の寒暖計の目もりはつまってしまっている。頂上までの標高差七〇〇メートル。すでに北極圏に近いこの辺は白夜のはじまりで、二十三時頃までは薄明るい。図上においてもデナリイ・パスから先の南峰頂上までの稜線上の登行は、さして困難とも思えない。四名とも体力の余裕を確認して南峰に向った。寒さは厳しいが、ブリザードもはずまって、一九時五〇分、四名は南峰山頂六一九一メートルに達した。四名が、この日C2からC3に入った金沢、東に途中まで出迎えられて、C3に帰投したのは五月六日一時三〇分。登路偵察の足を伸しての予期せざる登頂ではあったが、ともかく明治大学八十周年記念事業の一つの目的は達成できたのである。この頃前進基地であるC2への荷上げは完了し、C3の天幕の増設、そして荷上げにかかっていた。南峰登頂達成で隊全体の気持も楽になり、落ちついた心持で、全員の南峰への再度の登頂と北峰登頂に向った。

五月九日。久しぶりに全員でC4に入った。——報道関係の鈴木、高木はC3から下山。——十日、十一日、猛烈なブリザードに見舞われた。C4は六人用一張り、二人用一張り。六人用の天幕が人の重量で辛うじて支えられている有様で、二人用はつぶされた。風の間を記念に持ち帰る岩さがしに出て、何年か前に登ったアメリカ隊の残置食糧品を発見した。ちょうど高所用食糧の内容が、食慾のおとろえないわれわれの胃袋をみたしきらないものばかりであったので、この肉製品、乾果物等の残置品を発見した時は、まるで宝物のように有難かった。ここまで登ってくる間に若い隊員二名を除いて、特に目立って高所でうけると予想されていた人体の変異が目だたなかったのは、数次にわたる停滞で自然に高度に身体がなれてしまったからだろう。——酸素は病人治療用として航空飛行用に使われる酸素吸入器を持参した。——デナリイ・パス直下の広い雪面はかたくしまっていて、アメリカ隊の記録にはここでは雪洞

を使用したと記されている。

五月十二日。デナリイ・パスにC5を建設し高橋、小林入幕。

五月十三日。午前中ブリザードが激しかった。C5に入っていた高橋、小林は十五時ブリザードの止んだのを機会に北峰に向い、十九時、北峰山頂に達し、二十一時C5に帰投。

五月十四日。南峰再登頂。(交野、鍛冶、藤田はC3から食糧不足分の荷上げ)。ウオッシュユバイン氏の依頼により竹竿の補強をして、二人用のナイロン天幕を南峰山頂に張り、高橋、小林を残して他はC4に降る。

五月十五日。第二次登頂隊はC4を撤収してC2に降り、山頂に一泊した高橋、小林は天幕を記念に山頂に残してC3に降る。そして十六日、交野、高橋、藤田、小林、松田はC3を撤収し、先にC2に降った隊と合流して吹雪きだった中を強行してC1に降った。何故こんなに強行したかと言うと、十七日に迎えの飛行機を約束していたからである。

われわれがC3の撤収をしている時に、下からK2やヒドウン・ピークに登ったP・シェーニングの隊が登って来た。当時、すでにアラスカ隊は同じ所にキャンプしていた。ウエスト・バットレスの直下に一時、早・明二隊、アメリカ二隊の天幕が目のとどく間にちらばって、歌声こそはひびかないけれど、人間臭が漂ってきた思いがした。

十六日から降りだした雪は激しくつづき、迎えの飛行機も来ず、待つ身の四日間無線機は働かず、食糧の先が見えてくると、登頂達成で肩の荷がおろされた想いの心に、新たな不安がもち上ってくる。軽装備で登ったアメリカ二隊のことも気にかかる。特にC3ですでに高山病の隊員がいたアラスカ隊。

十八日の夜になって、白夜の空に吹雪が少しづつ切れて、青黒い空がのぞけるようになった。と爆音がひびいてくる。だがこれは迎えの飛行機ではないらしい。夜を徹して各種の爆音が空を騒ぎ廻しているよう。物を投下する様子もない。きつとシエルダンの飛行機では駄目なので、エルメンドルフ基地から救助空軍がさがしにやって来てるので

はないかなどと勝手に考えていたら、十九日の夜に入つて、からつと晴れ上つたら三台の軽飛行機が着陸した。てつきりわれわれの迎えにと思つたらおどろいた。降りて来たモレナー氏(K2ヘシェーニングと同行した)からアメリカ二隊の遭難を知らされた。すぐ登ると言う。一緒に行けと言われても、雪は止んだばかりで、C2に登る途中雪崩のでそうな所もある。聞けば前夜から空をかきまわした爆音は、彼等のために救助空軍が動員されて、救助物資の投下を行つていたその音だと言う。タルキートナの軍の中継基地には、シアトルから、又はアンカレッジからの救助隊も集つていふと言う。吉阪君と相談した結果、われわれの隊に救助に協力する余力のないことを説明して断つた。今回の登山に際して全然予期しない判断、処置に心をゆさぶられた事柄であつた。われわれは救助隊を運んでくる飛行機に入れかわりに乗つて、深夜、白夜の中に青白くマッキンレー山の山肌を振り向き振り向き、タルキートナに戻つた。もう下界は春、機上カヒルトナ氷河の末端をはずれると、機内に吹きこむ風のあたたかさが感じられる。

幸いアメリカ二隊の遭難者も救助された。ただ救助に従事した民間飛行士と、同乗のかつてマッキンレーに登つたと言う士官が、ウエスト・パットレスにぶつかつて二人とも亡くなつた。

一カ月余り前には、まだ深い雪にとざされてたタルキートナは、あわい緑りにつつまれて、ツバメがとんでいた。格納庫の前の草原に荷をひろげて、乾したり、たたんだりしていると、はるかにマッキンレー山、フォーレーカー山が黄色をおびて、明るくはてしなく澄んだ空の下に輝いている。初心のわれわれは無事に山神のお恵みにあずかり、歴戦の勇士は傷ついて山を降る。久方ぶりに土の上になつて、われわれはあらためて、はかり知れない自然の前に、人間の弱さを身にしみて感じ帰途についた。

附記

アラスカに赴く際に現地における問合せ先について。

- 一' 一般事情——Chamber of Commerce, 304 G. Street, Anchorage, Alaska.
- 二' アラスカ山系の飛行機チャーター——Don Sheldon, Talkeetna, Alaska.
- 三' アラスカ鉄道——The Alaska Railroad, Anchorage, Alaska.
アラスカ鉄道は非常に親切に相談にのってくれる。
- 四' アラスカ山系の登山事情については、
 - (a) Mountaineering Club of Alaska, c/o Jones Brothers, 700 5th Ave., Anchorage, Alaska.
 - (b) Anchorage Mountaineering Club, President: Mr. John H. Johnston, Star Rt. A, Box 1730-c, Spenard, Anchorage, Alaska.
- 五' マッキンレー国立公園内の登山については、
United States Department of the Interior, National Park Service, Mount McKinley National Park, McKinley Park, Alaska
ここから刊行されている“Climbing Mount McKinley and other High Mountains in Mount McKinley National Park”は欠くことのできない資料だが、紙面の都合上掲載できないから、必要の向きは右へ依頼されたい。
- 六、なお明治大学山岳部機関誌「炉辺・第七号」(一九六二年三月刊行)には、本登山の詳細な報告が掲載されているから、参照されたい。
- 七、マッキンレー山周辺の地図は、B・ウォッシュバーン氏作製の五万分の一、色刷りの立派なものが、“The Mountain World, 1961-62”の附録として刊行されている。

マッキンレー登山

—新しい一般ルート^の提案—

吉 阪 隆 正

I

登山という行為そのものが、本来はそれから出発したものと私は考える。それは人生の一つの生きかたでもある。一つのと私はつけ加えたことが、私にとっては、それが最上なのと思われるし、それなくしてはとさえ考えられるのだ。

それは喜怒哀楽の波にもまれて終る短かな人生に、一つでも二つでも喜びや楽しいことの方を追加することなのだ。忘れられたり、知られずにいたものを発見して皆の宝とすることなのだ。あるいは、より簡便にその喜びや楽しみを得るみちを見出して、示すことなのだ。

私たちの過去の山歴に関して、その計画や行動、また今回のマッキンレーの山行が、何らかそうした意味を認められるならば、私たちにとってこれ以上の満足はないだろう。

II

今私はこの報告をアンデスの山麓で書いているが、かつて一九五二年のアコンカゲアへの遠征は、国内の沈滞してしまつた気分の一掃を求めて、戦後の最初の海外登山を実現したのだ。そしてキリマンジャロへは日本女性の海外初遠征というみちを開きたかつたのだ。

南米の時は山へのアプローチに驃馬アイブを使った。アフリカの時には自動車を用意した。今度のアラスカでは飛行機が登場した。これらは直接山行とは別だが、思わぬ人々の間に歓迎されて、新しい経験として生きる喜びを多くの人に与えてきていると思う。

さて、アコンカゲア、キリマンジャロと各大陸の最高峰を訪ねて見ると、北米や大洋州の最高峰もということになる。ましてや赤道直下のキリマンジャロの次に、極圏に近い最高峰となるとマッキンレーが話題にのぼる。そしてまた一方にはニュージールランドのマウント・クックと。南米とアフリカの続きとして、後者は女性だけの隊で、前者を男性が、そして男性としてはなるべく身軽く動き、しかもできれば新しいルートを登ることによって、何かを加えようといった話になつたのは、もう三年程前である。

着々と一歩ずつ何かを登山界のために貢献して行こうと考

ていながら、実はその逆に国内において相次いで遭難者を出してしまった。しかも大量の貴い命を犠牲にするようなことが生じた。マッキンレーもマウント・クックの計画も、そんな中で苦悶しつつ育てられたのだった。

たまたま明治大学の八十周年記念事業にアラスカ学術探検隊の話が、ちょうど時を同じくして出発し、その一部にマッキンレー山への遠征が計画されたので、同登山隊長の交野武一氏とは、同じ日本から同じ山へ行くのだからと共同遠征の相談をしたのだった。山の仲間としてはこれは賛成だったにもかかわらず、諸般の外的条件は、これを退けざるを得なくしてしまつた。資金調達や報道上の関係で止むを得ないとはいうものの、これははなはだ心残りである。各大陸最高峰めぐりの最後のエヴェレストの時には、こうした小さなセクショナリズムや競争から何とか抜けた形に持つて行くことを、一つの新しい試みにしたいと今では考えている。

結局、山へ行ってしまつてから、日本隊といった一つに、山の仲間としては実質的にしようというところで妥協したのだつた。そしてこれはあとから考えると、見事に成功したといつてよいだろう。

III

さてマッキンレー山から帰つたいま、山行のいろいろなこと

を考えなおして見ると、私たちの行動は必ずしも予期したことを実現はしなかったが、また予期しなかった成果を生む結果にもなったともいえる。それは新しいルートを開発しようという計画につながるのだが、私たちのほつたルートは、その前年にアメリカ隊のプライテンバッハ氏らの登つた新ルートとかなり近い線を、新しいものとして登る結果になったことだつた。困難の度合からすれば、プライテンバッハが述懐しているように、二度あのみちをのぼりたくないという程、先の方が困難であつたらう。

しかしまた私たちの通つたみちは、あとから考えればマッキンレー主峰への一般ルートとして、最短最安全なルートをワセダルートとして開く結果になったともいえる。今後の一般登山ルートとして推薦できると自負するものである。

このことは、従来のウォッシュバーンによる一般ルートを辿つて、着実を旨として登山した明治大学の隊と比較してもいえることなのだ。ウォッシュバーンのルートでは、少なくとも二カ所に相当な長さのフィクスド・ロープを必要とする。そしてなおこの一つでシアトルの隊の遭難があつた。私たちのルートならば、おそらく一カ所だけで済むことだろう。

ここでの報告は明治大学の報告との重複をさけるため、同一ルートの部分は簡略にしておく。そしてワセダルートのことについて特に詳しく述べるようにしたいと思う。

鬼頭万太郎、寺谷昌恭、今村俊輔、菊島芳彦、山本晃の五名は、一九六〇年三月末に海路をシアトルに渡り、それからプリンスのマイクロバスに一切の装備食糧をのせて、カナダ經由アラスカ・ハイウエーを走って、四月二十七日アンカレッジに着いた。私は飛行機でアンカレッジに直行して一行を待っていた。

早速タルキートナのドン・シェルドン氏（山中へ私たちをパイパーで運んでくれるパイロット）から電話があつて、土曜日に国立公園のワードを呼んで置くから、その日の汽車で来るようにとの連絡（週に二度しか走らぬ汽車）。また明大隊は昨日一七、〇〇〇フィートまで登ったとか、ベースキャンプは一〇、二〇〇フィートの所に造るがよい、などとつけ加えて、山が急に近くなり皆の気分をいよいよ盛り上げる話をして来た。

二十九日、明日は汽車に乗るのだと、夜になって個人装備などを点検していたら、まるで私たちの前途を祝福するかのようになりにオーロラがあらわれた。それはまず北斗七星のひしゃくから、洗礼でもするように星をパッと四方にまいたような姿からはじまり、その星が尾を引いて白い光を残す。それがまるで風にでもゆれるうすもののようになびき出し、かすかな五色の色縞を見せる。一時間余りもこのうすものの幕はあちらにな

びき、こちらにゆれていたが、やがて次第に北の方へ流れて、北極星の中に白いぼやけたアーチ状の雲のようになって消えて行った。流れ星が時々この間を、随分長い時間をかけて横切つて行く。

案の定、快晴に恵まれてタルキートナに到着、早速装備の検査を受ける。そして翌五月一日から、山に向つて飛行機によるピストン輸送がはじまった。寺谷、山本君を送つて空は曇り、氷河の上と地上とに別れ別れの一夜が過ぎる。午前は晴れても午後はあらしというのが独立峯の性格だ。翌朝も早くから残りを運んで貰つて、一人宛氷河の上に立つ。

国立公園内には着陸してはいけないといふので、その境界の八二〇〇フィート（明大隊のベースキャンプ）に一応下りたが、荷物だけは一〇、二〇〇フィートの所へおとして貰つて、早速に氷河をつめる。

天候の見透しさえあれば、八二〇〇フィートは最低の必需品だけにして、大部分の荷物は一〇、二〇〇フィートへ直行させて、身軽になつてベースキャンプに入るのがよい方法だろう。

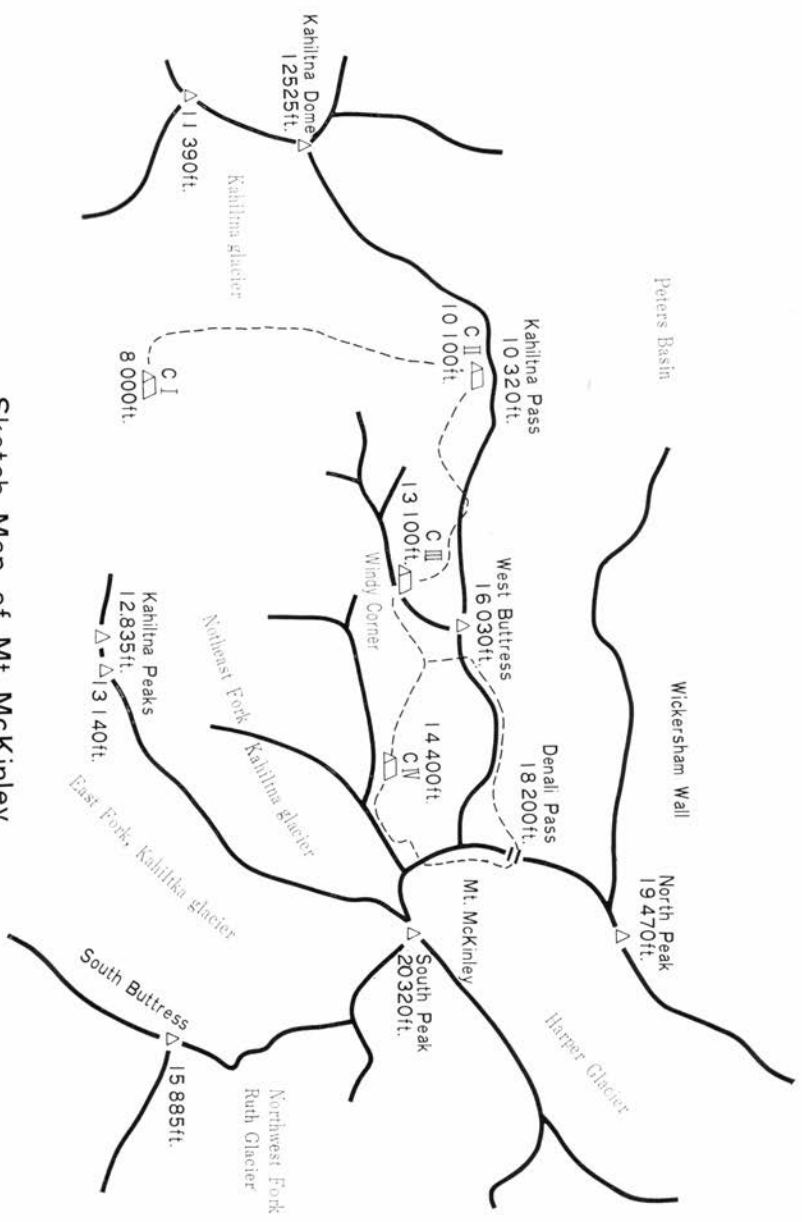
一〇、二〇〇フィートの所は特に平らで広く、風当りも少ない。しかし、雪が深いおそれは多い。

次の前進キャンプは、いわゆるウィンディー・コーナーの手に前に張るのが常識だろう。明大隊も私たちもそこに一つ設けた。かたつむり式キャンプ前進を行っていたアンカレッジの隊



南西から望んだマッキンレー山

Mt. McKinley seen from south-west (May, 1960) (by S. Imamura)



Sketch Map of Mt. McKinley

も、やはりここを一時の泊りとした。

ここは穂高の溜沢を連想させるようなカールになっている。南から吹きつける季節風が、西のバットレスに沿って抜けみちを探し、山を廻る所がウインディー・コーナードが、このカールの中は音だけでは比較的静かである。

この次のキャンプあたりからが、私は新コースと考える。西バットレスの南面沿いにのぼって行くと、主峯の直下にぶつかるのだが、そこにまた二キロ四方位の平地がある。この平地は、後の遭難救助の時の物資投下場所としては有効に働いた。シアトル隊は時間節約のため、登山用品をここに投下して貰って登って行った。高度に馴れた者ならベースキャンプから一気に、この平地まで来てもいいかも知れないが、天候のことを考えるとキャンプ間の距離が遠すぎてちよっと危険でもある。

BCが一〇、二〇〇フィート、C1が一三、二〇〇フィート、この平地の奥が一四、八〇〇フィートと地図では読める。おそらくこの方面から直登することが今まで利用されなかったのは、南からのもの凄い風をさけたいという気持が強かったからだろう。

主峯を含む将棋の角のような形の山塊の西側の稜線の下、ここに私たちのC2を張ったわけである。そしてこの西南稜を真直に頂上に向けて行こうというのが計画であった。おそらく途中でもう一泊の用意をすればよいだろうというのが見透しであ

ったし、ピヴァークの程度でもよからうと考えたのだった。今から考えれば（そしてそれは途中にちようどキャンプを設けることのできる平地があることがわかったから）、もう一つC3をつくって、ゆっくり進めばよいといえる。そしてこのことがあるから、主峯への一般路として、ワセダルートが将来とも有望なものとなるだろうと信じるのである。

V

しかしそれは今だから云えるのであって、当時現地であった時は、別の気持であった。明大がしっかりとロープもフィックスして、何回も荷上げに往復した西のバットレスから、デナリ峠へのみちは、シアトル隊の人がいみじくも評したように、ハイウエーのように立派なものであった。この極北の山では人間が何か工作した所だけが、私たちの生命の安全を守ってくれる所なのだ。

私たちの前にあったのは未知の世界である。おまけに南風が吹き出すと全く行動はできない。五月十日、山本はC2からC1に引上げて来た時に、鬼頭の次のような手紙を携えて来た。

「今日六時出発、三名全員で出かけました。結果は一昨日行った所より上の尾根の岩の取付点（オッパイ岩の一段下）近くまで、時間は約三時間半。

上に行けなかった原因。

1 猛烈な強風のため体のバランスがとりにくい（かなり急傾斜）、同様の理由のため雪のプロックと小岩が飛んで来るため危険（山本がプロックに当ってスリップしたがケガはなかった）。

2 朝六時の出発では温度低く、強風のためコンディション悪く、岩場に取り付くまでに体の疲労が激しい。

また手足とも感覚は完全になくなるし、羽毛服を通して風が入り込むため、出発時間をおくらせたとしても、強風の場合は危険が多い。

3 南面はやはりかなりの傾斜のため、見透しとルートを見つけるのにコンディションのよい方がよい。

しかし風がなければかなり快適な登山となることは、以前の隊長の見透しと全く同じで、晴天一日を待って登山した方がよいのではないかと考えます。云々」

ここに出て来たオッパイ岩とは、私たちの命名で、飛行機で着陸した地点から主峯の方を眺めると、南壁が全面的のしかかったように仰がれる。その南壁の白い雪の肌のためてじわの中に、二つ乳のように丸くもり上った岩があった。位置からしてもオッパイ岩といいたい所から、いつの間にかそう呼ばれるようになっていた。シアトルのプライベートンバッハのグループは、私たちの着陸点から直接このオッパイ岩の方に向けて登ったらしく、最後に向って左のオッパイの端を伝って登っている。岩

場としては、この辺は一致しているのではないかと考えられる。

その岩場にとりつくまでに、五月の八日には今村と山本、十日には今村、鬼頭と山本、そして十二日には今村と鬼頭が試みて、プライベートンバッハのテント跡らしいものを一六、〇〇〇フィートに見している。

これら何回かの試みで、氷河の上にラッセルをしてみちをつくってしまおう方が、却って岩場よりは早く楽であることもわかり、十三日には寺谷、菊島がこのみちつくりのぼっている。かつて七時間余りかかった所を三時間位でのぼり、一時間位で下っている。

そして十四日朝六時、今村、寺谷、菊島、鬼頭と二人宛ロープにつながって、上まで行くことになった。

二時間余で岩場にとりつき、第一段は三時間ばかりで越えた。白っぽい風化しかけた花崗岩の岩肌は凍りついている。雪の斜面は風にたたかれて青氷りに近くなっている、ステップを切るのがもどかしい。更に岩と氷の間を縫うようにして五時間、足もとを見ると自分の足場の下には直接八千フィート下の氷河が見えるような所が続いている。

午後四時岩の最上段に出た。ここにはかなり広い所があり、C3をつくってここまで荷上げをしたなら、頂上へは翌日かなり楽に行けるのではなからうか。一八、〇〇〇フィート位の高

度に当るだろう。

これから上には稜線とおぼしき所まで、白い斜面が続いて雪庇が終りになっている。このあたりから彼らはかなり高度の影響と疲労を感じ出して、ついに二十二時白い斜面にツェルトザックを出して、暮れやらぬ北国の白夜にビヴァークをしたのだった。

ずるずると下へ下ってしまふような具合の悪い姿勢で四人はツェルトに頭をつつこんで、しばしまどろんだ。しかし呼吸はたちまちツェルトの幕にふれると白い結晶となり、風の吹く度にこれらはらわれて、ツェルトの中で吹雪を生じるのだった。カサカサに乾いた雪である。ぬれると知らない寒い世界である。

菊島の頭痛も、今村の吐き気もどうやらこの休養にもならぬ休養でおさまって、翌朝はきわめて元気に簡単に稜線に出たのだった。稜線は広い肩のようになって、北に向ってゆるやかにマルドロ氷河の方につながって下っている。頂上は右手に聳えている。その中間にいくつかの小さなピークが、あるいは青氷の頂を、あるいは赤茶けたような岩肌をあらわしてそそり立っている。しかし全体が主峯の大きな白いマントをかぶっている。

北峯はこの稜線からずっと白く続いた斜面が、デナリの峠の所で急に曲げこわれたような形で、黒々とした岩肌を眼下に見

せている。

はじめの予定では、山本と私は西バットレス經由で彼らをこの所で迎えることになっていた。だから彼らは頂上へ行くのはあと一般ルートを踏みなおすだけだし、先ず私たちのいると予想されるテントまで下って一休みしようと考えた。ところが具合の悪いことには一日ずれてしまったことと、私たちのテントがその前日不在にしている間に吹きとばされるという事件があったため、この予定の行動が不可能となった。結局西バットレス經由で全員が再び午後にはC2に集ったのだった。

早速翌日には、もう一度西バットレス經由で頂上を踏んでこようという声は皆の中に強かった。しかし一行の大部分は前夜のビヴァークで手先足先または耳に若干の凍傷を起していた。

時間が経っていないのでその程度を判断しかねた。それと、西方から波のように打ちよせる雲があらわれていた。私は一旦ベースキャンプに下って様子を見ることを決めた。

皆は不服のようであった。しかしそれから三日間吹雪の中に閉じこめられた時少しづつ諦めた。更に吹雪あけの日に遭難救助のヘリコプター群が飛来した時、気持はすっかり落ちついていた。私たちが頂上へ行こうとした日、もし行っていればシヤトル隊、アンカレッジ隊とも一緒に頂に立ったことだろう。しかし、そのあとで何が起っていたかを考えると、頂上に向わなかったことが幸であったとも思えるのである。

シアトルの遭難救助隊は四十名近い者が集って一〇、二〇〇フィートのベースキャンプは時ならぬテント村を出現した。空軍の演習かと思われる程の飛行機やヘリコプターの群が飛来して、救い出しに当った。私たちは上の状況を知っているというので、その参謀本部の相談役になって、一刻も早く怪我人を下ろす作業の手伝いをした。そして担架にのせられたディ氏と相前後してタルキートナの飛行場に下山してしまつたのだつた。

軍のヘリコプターに乗せられて、カヒルトナ氷河沿いに約一時間を下ると、一月前には残雪の中にあつたタルキートナはずっかり緑に芽ふいていた。その新芽の香りを嗅いだ時の喜びは今までに味つたことのないものだつた。ここは生物の生きられる世界だという感がひしひしと胸に迫る。それにひきかえて考へて見て、はじめて、あの山中が全く無機の世界であつたことが思われるのだつた。

天候のよい時は、何か大変楽々と歩き廻れる雪の世界ではあるが、いったん荒れ出せば、どこにも生命を保つ方法のない世界に急変する。僅かに十分な装備をととのえて設営した根拠地が、唯一の避難場所なのだ。こんなに簡単にそうした無人境へ飛び込める山を他に知らない。

おそらく羽田を立てて十数時間で、この氷河の上に立つことも将来不可能ではあるまい。マッキンレー主峰はとも角、その周囲をとりまく三、四千メートル級の岩峯群は、まだ誰も登っ

たこともなく、千メートルから二千メートルの絶壁を聳えさせている。その山懐でゆっくり合宿などできる日の来ることを祈りたい。

それにしても装備の十分であることは何より必要と思われるので、ここに私たちの装備からノートその他をつけ加えて置く。

器 具

一、テント

登山計画表からテントの数は五張と決つた。その内訳は三人用ウインパー型テント三張、二人用ミード型テント二張である。このうち三人用ウインパー型テントは、東洋高圧(株)合成繊維室の御厚意によりコロン(ポリ尿素繊維、未市販)の生地を分けていただき作ることが出来た。生地は、100D/34Fシリコン防水をしてでき上つた時の重さはボディが三・二kg、ポール(三本継、ジュラルミン)が二・三kg、ベッグ(ジュラルミン)一・八kgであつた。

このテントは高度八一〇〇フィートの着陸地点、一〇、二〇〇フィートのベースキャンプ、一三、一〇〇フィートの第一キャンプで使つた。外気とテント内部の温度の差は、風、日光、高度等の要因に比べてデータが不足したので各要因別に分類して、その差を比べることはできないが、それでもテント内

火気を使用しない場合に外気と常に四一〇度の差があった。ナイロンより比重の軽い困産のコリロンが高所テントとして快適に使えたのは幸いであった。

二、器具袋

当初の計画では、器具食糧の大半は飛行機からベースキャンプ附近へ落とし、先に着陸した者が拾い集めることであった。そのためにはどのような梱包をなすべきかに迷ったが、結局、小型飛行機に積んで小さな窓から落とせる程度のズタ袋(40cm×45cm×50cm)を沢山用意した。袋の生地は勿論強くて軽いものが良いので、倉敷レイヨン(株)の御好意でビニロンを使った。われわれは実際にはエアードロップをしなかったが、この程度の小袋ならば荷上げの際背負子に容易に附けられるし、食糧の何日何人分かのレーションを作る時も過不足なくつめ込むことができた。

三、ワカン

マッキンレー山の管理事務所からは、是非スノーラケットを用意するように連絡を受けていたが、われわれにスノーラケットはどうもなじみが薄く、はきこなせる自信が無かった。そこで管理事務所へ提出すべき器具リストには、Japanese Snow Racket などと書いてワカンを持参した。実際に氷河上の深い雪の上では、このワカンは効果を表した。同じ時期に登ったシートル隊や救助隊の人々は皆スノーラケットを使っていた

が、われわれにはワカンの方が登り易かった。パイロットのシエルドン氏も「俺も使ってみたい」と言っていたが、お世辞ばかりではななさそうだ。(寺谷昌恭)

食糧

今回の登山における食糧計画の最大の課題は重量の点であった。

一、ヒマラヤとことなり、隊員だけで荷上げをすまさないければならず、体力のロスを考えると重量の大幅の軽減を考えなければならぬ。

二、登山基地からベースキャンプまでは、輸送はすべて空輸に頼らねばならず、輸送費軽減のためには、食糧を軽くすることが唯一の方法である。

三、今後の軽遠征隊の派遣を考える時、費用削減のためには、食糧のウェイトを軽くすることが大きな要素を占めること。

右のような観点から、今回の食糧計画を重量点からしぼり、梱包も含めて一人一日当りの消費重量を一キロに押えた。

外装は従来ヒマラヤ遠征に使われていたカートンボックスをやめ、六人二日分の食糧を市販のポリエチレン袋でパックし、それを五袋ずつビニロン布袋にッキングした。これにより、従来よりも約六キロの重量をへらすことができた。

また個々の食糧包装にも注意を払い、二幸食料研究所などの御好意により、可能なものはすべてポリ袋にパックして軽減をはかった。

結果的にみて、所期の目的は達せられたばかりでなく、好評を得、同時期に登っていたアメリカ隊員達にも重宝がられた。

(菊島芳彦)

輸 送

われわれの車がアメリカ大陸の西端の港に船から陸揚げされた時、これから四カ月の間無事に行動を共にしてくれるだろうかと、いささか不安の眼を持ってながめやった。そして今こうして筆を取っている時、日本の工業の発展のすばらしき、特に車輛に関する技術の向上、工業力のすばらしさに感心せざるを得ない。

アラスカのマッキンレーを登る一つの手段として、人員及び荷物を、その山麓まで何らかのものを使ってはこび込まなければならぬ。その一つとして日本の自動車で行ける所まで行ってみようという考えがあった。

幸いにもわれわれはプリンス自動車の援助によって車を得ることができた。この車は、日本では小型車としては最高の技術のものなのである。特に注文によって作ったのではなく、一般のオーナー・ドライバークや、また商業用に使用されている車

である、プリンス・マイクロバスである。

プリンス・マイクロバス。この日本で普段使用されている車を、どのようにして登山に結びつけなければならぬかということはわれわれの考えることである。馬力やその他の車の性質上、道のない所は走るわけにはいかないし、車の性能以上の坂のある道は通るわけにはいかない。しかし、山へのアプローチを短くすることは可能である。そこでわれわれは、車を山の中に持ち込むわけにはいかないが、山の麓の町までは車で行くことはできるといふ考えにいたった。そしてわれわれの登るべき山はアラスカの中央にある。ではどこから、この車を出発させるべきかという考えがでてきた。どうせやるなら、やりたい所から車を走らせようということになり、出発点を定めたところ、それはなんとアメリカのシアトルである。

アラスカのアンカレッジとシアトルの間は、幸いにも自動車道路で結ばれていることはいるが、それはなんと五千キロの道である。しかし、その間を走らないことには山には登ることは不可能である。

事実われわれは走り、約十日の日数を持って山へと飛込める場所にたどりついた。

そして登山後も、この距離の何倍もの距離を走り廻り、北米大陸の西の端から東の端まで動き廻ってしまった。しかし、これで終るのではなく、この間に自動車自体の故障は、たいして

起らなかったというのを特に述べたいのである。

山と車、山に行くには、どの道歩かなければ登れないのは当然であるが、ここで山に入る前にスタミナを消耗しない一つの手段として、今まであまりに車というものに眼が向けられなかったのではないだろうか。

車に関しては非常に知識が必要であるが、そうかといって動かすためには専門的なものは必要としない。

一台の車が十人の人間と荷物二トンを運ぶことができるとしたら、これによってじゅうぶん一つの登山遠征隊は、どの方向へでも進むことが可能である。ところがその他の機関を用いるとすれば、汽車や飛行機にしる、非常に手続きやその他でめんどうなことが起る可能性がでてくるであろう。

車を主とした一つの遠征隊においては、自動車に関して専門的な知識を有する者が一人ないし二人いれば、それでじゅうぶんであり、他の者は運転者か大名的な乗客でことはたりののである。

車は私は一つの国であると思う。しかも、常に移動しうる国家である。車の中では日本語が通用し、常に日本の食物を口に運ぶことができるのである。

こうなれば日本にいる時の状態を保つことは容易であり、スタミナの問題は全然他に消耗される場所がないために心配はないと思うのである。

次に、登山に要する器具や食糧はわれわれと常にいっしょに動いているのであり、われわれの背に背負っている時と同様に、失ったりすることもないわけであり、必要性を感じれば、ただちに調べたり、使用することもできるわけである。目的地に着くと同時に、登山という行動にうつる可能性もじゅうぶんにある。

金銭的にもまた車は非常にわれわれを助けてくれるというのも一つの特徴であろう。われわれは幸いにも世界で一、二の道路の発達している大陸に出かけたのである。そして目的の一つとして、その大陸を車で走り廻って来るということもあつたが、山に登る必要品として車に注目してもよいではないかと思う。車を使用することによって、登山ということのみでなく、その計画が非常にユニークなものになるのはたしかである。

(山本 晃)

(附記) 本登山については既に吉阪隆正著「原始境から文明境へ—アラスカ・カナダの旅」(相模書房)が刊行されている。(編者)

西部カラコルム紀行（一九六一年）

島 澄 夫

（日本側メンバー）

島 澄 夫（二八才）東大農学部研究員（隊長）

竹 内 正 巳（二四才）中央大学学生

（パンジャブ大学側メンバー）

ハッサン・パドルディン（二二才）学生

カーン・タリク（二二才）学生

（ハイ・ポーター）

アリマダッド・カーン（二五才）

シャバン・アリ（二二才）

（但し右のパンジャブ大学生二名は夏季休暇の都合で、数日のキャラバンに同行しただけで帰国した。）

カラコルム入り

私たちがのをせた双発のオンボロ機は、ナンガ・パルバートの白い谷間を縫って、一路ギルギットに向って頼りない飛行を続けて行った。

羽田を発ってから二カ月、その間私たちはパキスタン国内の各大学や研究所をまわり、私の専門である農業技術の視察研究を行って来た。八月末、パンジャブ大学での夏季ゼミナールも終り、私たちはいよいよ待望のカラコルム入りに踏み切ることになった。大学側の色々な骨折りで、フンザ王国入国の許可を得た私たちは、二人のパンジャブ大学生をともなつて、九月五日ラワールピンディの飛行場を飛び立ったのだった。

ラワールピンディをたつ前、私は、カシミール省に向いて、フンザ王国の首府バルティット以北への入境を、再三再四要請したが、役所は軍事上の問題を楯にとつて譲ってはくれなかった。止むなく私たちは、バルティット以南のバツラ山城南西部を踏査することにした。この地域は私の知る限り、一九四四年、レピッチをリーダーとする独塊隊（註一）を始め、一九五六年（註二）と一九五九年（註三）にシュナイダー隊の入境を許している。従つて局部的には未踏の地域を探査することが出来るにせよ、その大部分は独塊隊のトレースになることは止むを得ぬことであつた。

しかし、この地区が一九五五年、一九五七年に行なわれた京大隊のカラコルム、及びスワート・ヒマラヤ探検域の、云わば盲点にあたる関係上、私たち日本隊としての入域には、大いなる意義があるもののように思われた。

ギルギットで飛行機を捨てると、私たちはすぐ知事に会い、

Batura II (7730m)



Batura (7785m)



バルタール氷河からバツラ峰を望む。
View of Batura Group seen from the Baltar
Glacier

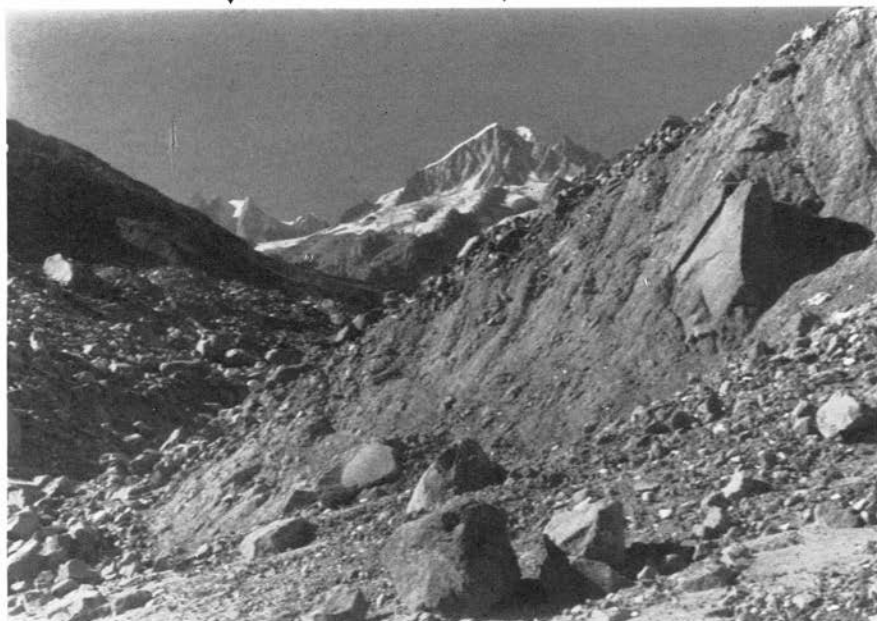
Teigni (7200m)



バルタールのベースキャンプ
Base camp of Baltar

Swat Marao(6300m)

Kuti Dorkush



ククアイ氷河からクティドルクシュを望む
View of the Kukuar Glacier.



バツラ峰南壁の威容
The great south wall of Batura Peaks.

ジープやクワリー達の手配を頼んだ。知事のラーマン・カーン氏は実に親切に私達の世話を引き受けてくれ、ギルギットに着いた翌日には、すぐ出発出来るように手配をしてくれた。

九月八日、ジープ二台に約四〇〇キロの荷物を積み込むと、私たちはギルギット河に沿って、チャルト村目指して出発した。このギルギット河はバツラ山群の北から、西にバツラ氷河東にヒスパール氷河の水を集め、フンザ河となり、途中ナルタル及びボラダスの溪谷を統合して、ギルギットを南下し大インダスに注ぎ込んでいる。私たちの最初の目的は、チャルトからボラダス溪谷を遡り、ダインタール氷河に入ってその地形を探ることになった。

ダインタール氷河へ

チャルトからはジープを捨て、徒歩で入山しなければならぬ。私は早速ナギール王に電話連絡し、チャルト村の領民をクワリーとして使用する許可を取った。

翌九月九日、一六名のポーター、それにギルギットで雇った二人のハイ・ポーター、私たち四名、総勢二二名は、ボラダス谷の中腹につけられた細い路跡を頼りに、長い列をつくって進んで行った。ふりかえると頭上には、名峰ラカポシが陽光にキラキラと水の肌を映しながら、私たちを見下ろしていた。

午後五時、キャラバンの最後部がトルブドダス村に入る。標

高二五〇〇メートル。村はずれにテントを張る。ヒマラヤ第一夜に結ぶ夢はまた格別だ。月もあがって、遠くラカポシを青白い夢の中に誘い込んでいた。

トルブドダスからは山路を西にとり、ダインタール溪谷に入る。ポーター達は三〇キロに近い荷をゆすり上げながら、二尺にも満たない断崖の路をへずって行く。

ダインタールの部落は標高三二〇〇メートル、人口およそ百名程で、谷あいの乏しい田畑を耕して、ひっそりと住みついていた。私たちは部落の中の比較的綺麗そうな住居を見つけ、その住人から二ルピー（邦貨五五〇円）で借りうけ、ここをベース・ハウスに決めることにした。次の日、氷河を偵察し、その末端に恰好な草地のキャンプ・サイトを発見したので、翌十日、部落民を雇って、ここにベース・キャンプを設けた。標高三九〇〇メートル。この氷河はサト・マル（六二九三メートル）、ドルクシュ・ガールの稜線に続く、推定五〇〇〇メートル程の谷から落ちて来る比較的小規模な氷河なので、長駆すれば一日で谷に出られる筈だった。

ベース設置の翌日、私たちはビバーク用の装備を持って、氷河をつめて行った。しかし、実際に氷の中に足を踏み入れてみると、縦横無尽のクレバスと無数のセラックにさえぎられて、まるで迷路を行くようなものだった。四五〇〇メートルの地点で大氷瀑に行手をばまれ、退却を決意する。いったいに八月、

九月の氷河は、雪崩の心配が少ないかわりに、氷の状態が極度に悪くなっている。とくに比較的降雪の少ない西部カラコルムでは、ポスト・モンスーン期の入山は、こうした意味で好条件とは云い難い。ハイ・ポーター達も、「且邦、五月か六月ならどんな谷でも入れますよ。今は雪がノー・グッドだ」と、口をそろえてしきりに退却の弁解につとめていた。

バルター氷河へ

ダイントールの部落民一三名を集め、ベースを撤収する。ダイントールの我が家で一泊したのち、再びキャラバンを編成して一路バルター氷河へ向う。トルブドダスを経て、二日目にバル部落に着く。この村はかなり大きく、戸数も百を超えている。もっとも、この地方の村々は各々独立したものではなく、春が来て雪が消え始めると、大部分の村人が山深いダイントール、トルブドダスの村々へ出稼せぎに行き、冬の到来と共に山を降り、バル村に帰って来ると云う。耕地の狭隘さが、こうした二重生活を要求するのである。(註4)

バル部落から二日目、九月一六日、キャラバンはククアイ氷河の分岐を過ぎて、バルター氷河に入って行った。トルタールから東へ一〇キロ程のところ、約二〇人あまりの羊飼いが四・五軒の小屋を建てて住まっていた。標高四〇〇〇メートル。ポーター達の話では「ダッペ」と云うところらしい。氷河

の舌端にかかった、この小さな小牧場に、点々と草をはむ羊のむれは、青い氷の山々に包まれて、美しいヒマラヤの詩情をかなでていた。目の前には七七八メートルのバツラ主峰が、青白い氷の鎧を身にまとって聳立していた。ベース・キャンプの夜、バツラにかかる月は、物凄ほど青かった。時々落ちる氷雪崩が、殷々と月の谷間に木魂し、巨獣の咆哮のように寝ている私たちの天幕をゆすぶった。

翌一八日、私たちは羊飼いの三名をポーターとして雇い、C1建設に向った。バツラの南西にはしる尾根、私たちのBCの丁度東側に、ティギ・ガモック(七二〇メートル)が美しい稜線を描いてそびえていた。ハイ・ポーターの話では、一九五九年のドイツ隊がこれにアタックしたが、雪崩の襲来に会い敗退したと云うことだ。バツラ南面のあまりに絶望的な壁に比べ、このティギ峰はいかにも食指の動きそうな、緩傾斜の氷河をその広い胸壁から落していた。たった二名の、しかも充分な装備もたぬ私たちにとって、登頂の採算は予期し得なかったが、とにかく出来るところまで試登することに決めた。CIは四二〇〇メートルの地点を、氷の棚をけづってサイトとした。竹内がサイトの下の方でポリ袋と空缶を拾って来た。二年前のシュナイダー隊のものに違いない。翌日、私たちはCII建設に更に乗上へ登った。しかし、数時間におよぶクレバスとセラックとの苦痛に満ちたかくれんぼも、すべて徒労に終ってしまった。約四七

〇メートルの地点で、全く手のつけられぬ大クレバスに遭遇してしまったからだ。私と竹内は一時間近くも、割目の淵を行ったり来たりして突破口を探したが、結局のところ、「二・三〇メートルのハシゴが必要だ」と云う以外には、他に良い結論は得られなかった。

私たちは氷の迷路につけた標識をたどって、夕刻近くへトへと戻ってC Iに帰った。翌二〇日ベースに帰り、次の日は一日停滞することに決める。ダイントールから連れて来た二頭目の羊を血祭りにあげる。今晩は羊肉のシチュウだ。

ククアイ氷河へ

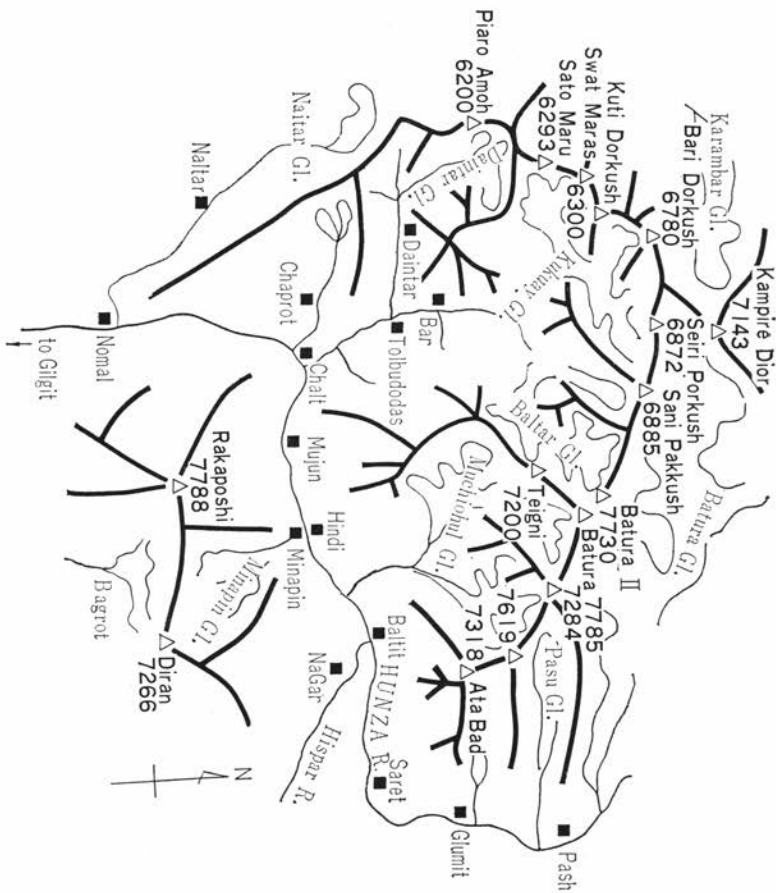
九月二三日、ダッペの羊飼いい〇名ほどをかり集め、再びククアイ氷河へとキャラバンを開始する。ククアイ氷河はトルタールで、このバルタール氷河と別れ、西にサト・マルー(六二九三メートル)、スワート・マラオ(六三〇〇メートル)、東にサニ・ドルクシュ(六八七二メートル)、バリ・ドルクシュ(六七八〇メートル)につき上げている全長約二〇キロにおよぶ、かなり広大な氷河である。トルタールでキャンプを張る。白砂の河原で満月を仰ぎながら羊肉を頬ばる。トランジスタターのダイヤルを廻らすと「白鳥の湖」が流れて来た。ソ連放送だ。名曲に耳を傾けながら、ジョニー・ウォーカーの盃を重ねる。

翌日。キャラバンの指揮を竹内にまかせ、私はハイ・ポータ

ーのシャバンとクリーリー一人をつれ、ククアイ氷河の東側の偵察に先発した。氷河がクティ・ドルクシュ峰に突きあたる地点で、私たち先発の三人は、ツェルトをかぶってピバークした。

翌朝、同行のクリーリーをそこに残し、シャバンと二人で谷の東側にまわり込んで見た。ここは、東のバツラ山群から連らなる巨大な西尾根に囲まれ、云わば、バツラ南面の奥院 (inner sanctuary) と云ったところで、従来の記録を見ても殆んど紹介されていない。サニ・ドルクシュ、バリ・ドルクシュ、ドデ・ドルクシュなどの名を持つ美しい峰々は、神秘的な氷河に包まれて、不思議な魅力と尽きぬ登高欲を充分にそそるものであった。しかし現実の問題として、残り少ない食糧を抱えた、隊員二名、ポーター二名の弱小パーティでは、どう算盤を弾いても、拱手傍観以外に手は考えられなかった。これら七千メートル級の山では、少なくとも十日以上の登攀日程、四張以上のキャンプが必要だったからである。しかし、折角ヒマラヤくんだりまで来て、一つのピークすら踏まぬようではどうにも寝覚めが悪い。そこで私たちはククアイ氷河の分岐点から真直に突き上げている、クティ・ドルクシュに登ることに決めた。六千メートル程度のこの山は、サト・マルー側から入っている小さな氷河に、容易なルートを蔵しているように思われた。私たちは、一昨日のピバーク地近くにベースをかまえ、九月二五日登頂作業を開始した。

Sketch Map of Northwest Karakorum



ベースの標高は三五〇メートル。一日に千メートルの高度を稼ぐとして、登頂に三日、下山に一日、計四日と云うギリギリの日程を組んだ。従って、荷物はテント一張、食糧四日分のラッシュ・アタックの方式に切り替えた。

まず、サト・マルー氷河に入り、右にまわりこんでクティ・ドルクシユ直下のルンゼに取りつく。この氷河のルート工作は、予期した以上に手間がかかった。荷物の極端な軽量化をはかったものの、四名各自の担荷はやはり二〇キロ以上になってしまった。重荷をつけたままの氷刻みは、高度の影響もあって、お世辞にも快適とは云えない。ルンゼの傾斜も思ったよりきつく、とくに上部では壁状になっていて、尺取虫よろしく、相当なルート・ファインディングを強いられる。おまけに、体を動かすたびに背の重荷がグラグラゆれて、壁から剝がされそうになる。夕方近く、辛じてルンゼの落ち口に出る。落ち口は長さ五メートル、幅五〇センチ程の狭い棚になっていた。時間も遅いので棚の斜面をけづりC I サイトを作る。標高四五〇〇メートル。足下には今登った来たサト・マルー氷河が、ククアイトと合流し、銀蛇のようにうねって、ラカポシのかなたへと消えて行った。夜九時。やっとキャンプ作業を終え、狭いながらも今夜のねぐらが出来る。素晴らしい月光が、氷河を青白く照らし出している。ラカポシが手にとるようだ。景色は天下一品だったが、寝心地は快適とは云い難かった。一たび寝返りを打

とうものなら、翌朝は遙か下に細長く光っているサト・マルー氷河の中に、寝込んでいることになるからだ。

翌日、アンザイレンして更に急傾斜の壁状ルンゼに取りつく。四〇メートル・ザイルで二ピッチ。距離は短かいが重荷と息苦しきには相当のアルバイトを強いられた。その上は、見渡す限りの広い氷原だった。標高五〇〇〇メートル。二日で一五〇〇メートル稼いだわけだ。午後二時、上部氷河の末端近くの岩の上にC II を建設する。稜線上にあるため凄風あたりだ。

翌二十七日朝。サポートの竹内・アリ隊と別れて、私とシヤバンは二日分の食糧とツェルトをサブにつめ、主峰(八〇〇〇メートル?) に向けて氷原を登りつめて行った。ピークへの最大難関は、高距一〇〇メートルに達する、上下四段の滝をもつ大アイスフォールにあった。無数のクレバスが無気味な口を開けて、私たちを迎える。F 3 までは正面のクラックを、ピッケルをふるって突破することが出来た。ルートそのものはさほど困難なものではないのだが、呼吸が苦しく二メートルも続けては登れない。食欲は全くなく、紅茶だけの昼食も早々に、再び登攀を続ける。最後のF 4 はかなりの悪相なので、正面攻撃を遠慮し、左側のカールを迂廻して落口に達する。しかも、そこから更に巨大な氷壁が、私たちの頭上にのしかかっていた。これも、氷のクラックを利用して高度を稼ぐ。四ピッチ目がかぶっていてすこぶる悪い。胸がつかえて身体が宙に出してしまう。

あと三メートル足らずで壁は終るのだが、ここで一時間以上もまたついてしまう。アイスハーケン三本を叩き込み、振り子で辛じて乗り切る。

標高五七〇〇メートル。ここから上は更に広大な氷原が、ピークから流れ落ちていた。時計は五時に近かった。大氷瀑に取りついてから七時間経過している。氷の割れ目に入り込み、頭からツェルトをかぶる。やがて陽がかけると、予期以上の寒気と頭痛が、私たちを襲って来た。頭痛で涙がポロポロと流れる。シャバンがガタガタ震るえながら、一生懸命、私の膝をさすってくれる。どうにも耐えられないビバークだったが、それでも私はグレランの威力と、この召使の素晴らしい献身のお蔭で、僅かな仮眠をとることが出来た。

待望の朝が来た。しかし、それは霧の朝だった。私たちはドロップを二粒口に放り込むと、ツェルトをたたみ始めた。考えて見ると、昨日から採った固型物と云えば、このアメ玉ぐらいなものだ。重い足に重いアイゼンをつける。昨日見たとき、南西に走る岩尾根がルートになりそうだった。しかし、その基部に達して、私の足は釘付けになった。緑色に凍結した氷面は、鏡のように滑らかだった。最大傾斜六〇度はあろう。かてて加えて、一〇メートル先もさだかでない灰色の世界は、私たちのファイトを打ちのめすに充分だった。力まかせに打ちおろしたピッケルの第一撃は、氷面に幽かな亀裂をのこすのみだった。

私たちは、しばらく考えた後、斜面の北側にまわって見た。しかし、そこはザクロのようなクレバスの巣窟だった。私たちは主峰をあきらめた。今は時期が悪い。氷が最悪の状態になっている。私たちは、そうした気休めをくり返さざるを得なかった。私たちは右手の前衛峰に向った。深雪のラッセルと雪庇切りをくりかえして、九時二〇分霧のピークに立った。高度計は五八〇〇メートルを示していた。深い霧の中で、私たちは記念撮影もそこそこに、逃げるように下山の途についた。疲労と倦怠で骨抜きにされた私たちは、殆んど確保なしにクレバスの間を降りて行った。例の大氷瀑も懸垂で難なく降りた。「難なく」と云うよりも、「不注意」と云った方が当たっている。とにかく、注意して行動することが、この時ほど億劫に思われたことはなかった。

氷瀑を降り切ると、間もなくアリが迎ええてくれた。

「サラーム・サーヴ」(よかった。旦那)

テントに帰った私たちの胃袋は堰を切ったように、その巨大な食欲を訴え始めた。思い出したように、雲の切目から暖かい陽光がさし込んで、テントの中を明るく陽気にした。

下 山

翌朝、天候の悪化が予測されたので休養せずにすぐにC IIを撤収する。C I上部の嫌な壁状レンゼを、スタックカットで慎重

に降りると、苦心して作ったC工の台地に降り立つ。暗い雲が次第に厚みを増して行く。翌日、ベース・キャンプに向うころには、みぞれ混りの白いものが、ちらつき始めた。ふりかえるクティ・ドルクシュも、サト・マルも、真白な新雪におおわれていた。カラムには、十月の声と共に冬が訪れ始めていたのだ。シャバンがパール部落にポーター達を呼びに行つて来る三日間、私たちはベースをククアイの羊飼部落に移し、彼等と共に生活した。一緒に木登りや、綱引き、それに石投げなどをしたり、彼等の不潔だけを除外すれば、気のよい愉快な連中だった。やがてパール部落民一〇名の到着と同時に、撤収にとりかかる。一カ月以上も過して来たククアイ氷河ともお別れだ。

パール、トルブドダス、ナサブールを経て、チャルトに帰りついたのは三日後の十月二日、午後五時過ぎだった。チャルトのレスト・ハウスは、相変らず静かな林の中にポツンと立っていた。庭のコスモスは一面の花盛りだった。ハウスのコックがニコニコしながら私たちを出迎えてくれた。ポーターに賃金を支払い、キャラバンを解散する。ポーター達は札束を握りしめ、私たち二人に拳手の礼をすると、三々五々林の中に消えていった。

翌朝私たちは、バルティットに行く準備をした。ジープでおよそ六時間、フンザ溪谷の奥深くに二千年来の静寂をたたえ

て、フンザ王国の首府バルティットが私たちを迎えてくれた。私たちはそこで町を見物したり、王様(ミール)始め王家の人々と親しく語らったり、楽しい数日を過ごすことが出来た。

後 記

——フンザ・ポーターに触れて——

このたびの私たちの踏査行は、學術調査としてその規模も小さく、またパンジャブ大学との合同隊として二人の学生が参加したため、リエゾン・オフィサーはつかず、現地交渉はすべて私たちが行った。しかし、このカラム、とくにフンザ、ナギール王国の住民は、非常に開放的(女性を除いて)且つ友好的で、しかも夫々強力な支配者(ミール)の厳然たる統治下にあるため、ミールの承認さえ得られれば、ポーターの雇用、物資の調達などは、ハイ・ポーターの通訳を通して、何の問題もなくスムーズに交渉することが出来る。また、彼等フンザ・ポーターは非常な体力の持主で、キャラバン中彼等の強靱な筋力には、その勇敢さと共にしばしば目を見はるものがあった。

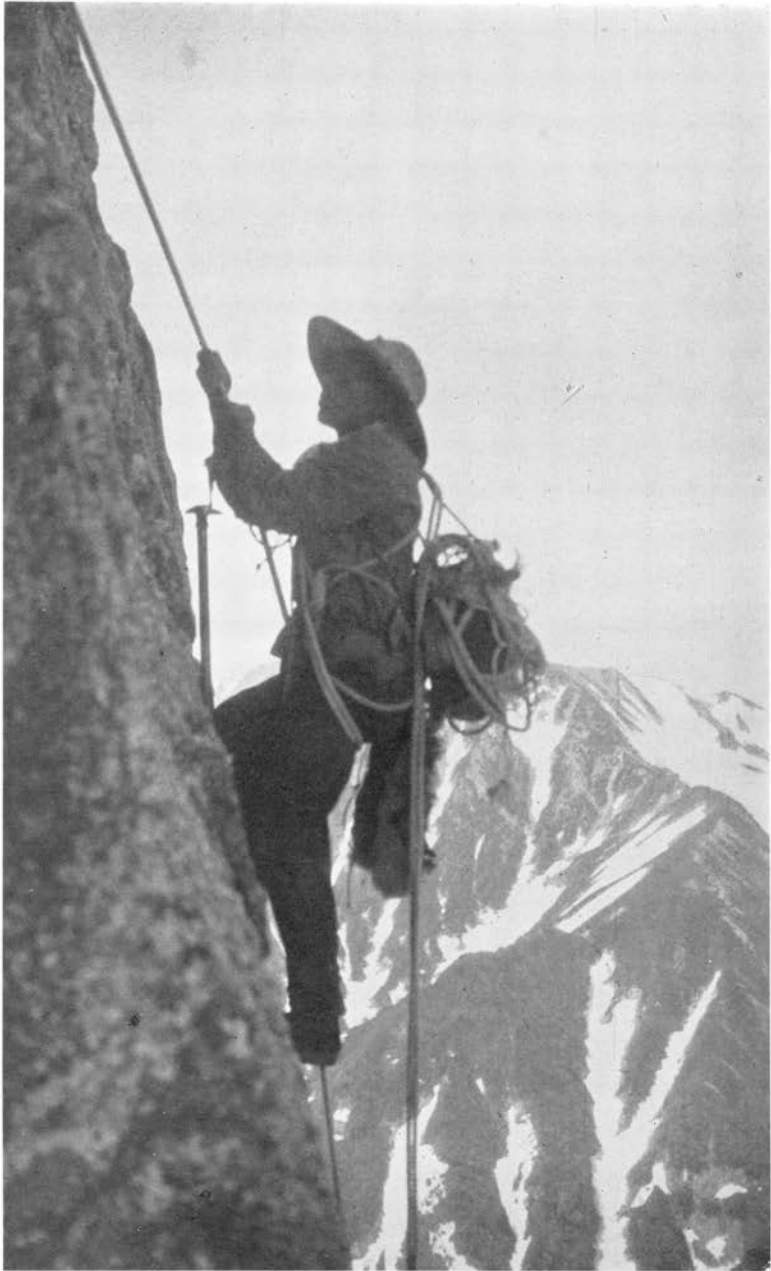
「私は、フンザの住民ほど、岩登りにかけて天性足がしっかりしているものに、会ったことはない。……………忍耐強く、しっかりして信頼がおける。……」と『ヒマラヤ』の著者ケニス・メイソンも述べている(註5)。こうしたフンザ、ナギール人の中から、幾度かポーターとして外国遠征隊に参加し、登山経路を体得したものが、現在、いわゆる High Altitude Porter

として、ネパールのシェルパに劣らぬ活躍をしているわけである。彼等は、いわゆる「遠征ずれ」していかない故か、その仕事振りは実に忠実である。しかし、未だ登山の啓蒙化が、ネパールほど行き渡っていない現在、経験的にも、技術的にも、今一步の感は否めない。最近、パキスタン政府も登山や観光開発に目をつけ、カラコルム・クラブ、その他の登山学校の開設など、組織的な動きが抬頭し始めているので、今後の遠征には更に大きな期待を望むことが出来るのであろう。

すぐれた天稟を持つフンザ人が、登山に関する、より合理的且つ組織的な訓練を経たとき、彼等が刮目すべきクライマーになることは、想像にかたくない。そして、それはとりもなおさず、将来のカラコルム登山の一大発展の原動力になることでもある。

文献

- (註1) Rehisch, H., W. Pilewizer, "The Mountain World 1955", London.
- (註2) Paffen, K.H., W. Pilewizer, H.J. Schneider, "Erdkunde, X." Bonn 1956.
- (註3) Schneider, H.J. "The Mountain World 1959/1960." London.
- (註4) 拙著「秘境フンザ王国」二見書房
- (註5) ケニス・メイソン「ヒマラヤーその探検と登山の歴史」(田辺・望月訳) 白水社



剣岳ハツ峰第二峰を降る佐伯宗作（大正13年7月10日 馬場忠三
郎撮影）

The late Sōsaku Saheki, Japanese famous guide.

劔岳「源治郎尾根」の由来と

当時の思い出

馬場忠三郎

大正の末期と言えば、名のある頂は殆んど登りつくされて、日本の岳界も、残されたより困難な未踏の尾根や人跡も稀れな溪谷を求め、又は新興のスキーを使用しての積雪期登山や岩登り等によって、新生面を見出そうとする傾向にあった。その当時活躍したパイオニアやガイド達も、終戦を前後する頃に次々と故人となつて行つた者もあつて、世の流れとは言え心残りのことだ。

劔岳の源治郎尾根の由来も、その名付け親とも言うべきこの私が、当時を思い返しながら、この辺で筆を執らせて頂き、何時、誰が、どうして命名されたかを明かにしておくことがよからうかと想う。

源治郎尾根は又源次郎尾根とも書かれ、山案内の源次郎か、大工の源治郎のどちらの名から付けられたかの二説があるの

で、その真実を伝えて世の誤解を後世に残さないことが、山岳界にとってあなたがち無意味でもなかるう。

富山県下新川郡平沢村の山男沢崎源次郎は、二十才を過ぎて間もない大正の半ば頃、斯界の先覚者なる田部重治、木暮理太郎氏と偶然の出会いから毛勝岳から劔岳へ案内した。彼は見たところ小柄ながら、重い荷物を背負つての雪深の登降や溪谷渡りがうまく、岩場も猿のように伝わるのに感心したそうだ。この山歩きにたけて剽悍そのもののような源次郎であつたからには、劔岳の谷に其の名を残した名ガイドなる大山村の宇治長次郎や、芦峠寺の佐伯平蔵と並んで、劔の三羽鳥として、その名を留めさせたかと思ふ。

一方、芦峠寺の佐伯源治郎は代々大工で、山小屋造りの面で山に縁を持ったようだ。彼は豪胆で意志の強い性格だった。彼が劔沢から芦峠に降る途中、別山から雄山詣りを私と二人でしたが、鉄棒を片手に黙々と歩いていくことが思い出される。

大正十三年七月のこと、私は佐伯宗作をつれて、劔岳八ツ峯に入った。この八ツ峯は、その前年の大正十二年八月に学習院の岡部長量君が最初に試登したと言われ、次いで馬場が二番目の登攀者となつた。折柄、劔沢の小屋は新設工事中で、夏山シーズンを迎えようとして最後の仕上げを急いでいた。その大工の棟梁が山男ならぬ源治郎だった。彼は、この小屋を建てた記

念にもと祠ほこらを造って劔岳の頂にまつるべく、丁度、私がハツ峯に足跡を残したのと日を同じくした七月十日に、祠を背負って平蔵谷を登って行った。その途中でルートを誤ったのか、右手の雪溪に折れ、尾根に取付いて劔の頂上に達したのだった。

劔沢小屋の創設工事は、床板がまだ仮並べの未完成で、芦峠第一の大力をもって聞えた大男の佐伯福松が、劔沢の下から製材された材木を肩にして、幾度となく運び上げていた。

私は、この山行に、高田の月岡スキー店に注文したケヤキ材、二本溝、三尺五寸の特製短スキーであちこちを滑り廻ったり、ハツ峯周辺の未だ人間の感触を知らぬ尖峯を求めて登ったりした。三高の高橋健治君が後年訪れて名付けたクレオパトラ・ニードル峯も私が初登攀に恵まれた一つである。こうして未完の劔沢小屋で源治郎と数日の寝起きを共にした。この頃が日本で試みられた夏スキーの初期時代のようだ。それからスキーと共に薬師岳を越えて、槍沢を滑って上高地へ下りて行った。

明けて、大正十四年の夏山期を迎えた七月に入って間もなく、明大山岳部の馬場をリーダーとする一行三名は、佐伯宗作をつけて未だ未開の鐘釣温泉から小黒部谷を遡って、小窓、三窓を経て別山北平（劔沢）小屋に歩を運んだ。

たまたま小屋の外で、京都三高の今西錦司、渡辺漸の両君

が、今日初登攀したのだと言って、長次郎谷と平蔵谷をはさむ中間尾根をスケッチしているところだった。

（三高の黄金時代を築き上げた西堀栄三郎、今西、高橋の諸君をリーダーとする山岳部の面々とは、越後関温泉のスキー合宿を同じ宿舎でやっていたので、よき山仲間となっていた。当時、岳界をリードしていた慶応山岳部も亦同宿で、この頃の関温泉は山スキーを嗜く学生達のメッカとなっていた。）

三高の両君は、私に尾根を指さして説明してくれた。さて、その尾根の名は？ 私はうなづきながら、あの尾根の上部は、昨夏、源治郎がルートを間違えたとは言え、その一部に最初の足跡を印したのだから、「源治郎尾根」と名付けたらよかろうと提唱した。

日本の山や谷は、人名をとったところが少なくない。三高山岳部報告第五号に、大正十五年夏に登った高橋健治君が「源治郎尾根」の名で、その紀行を発表している。以来何時とはなしに、その名で呼ばれるようになった。

あの日、あの小屋で折よく三高と明治の顔合せを見たことから、大工の源治郎も劔岳にその名を残すことが出来ようとは、何んたる運者であつたらう。若し機会を得なければ「三高尾根」と命名されていたかも知れない。

昭和十六年八月も半ば過ぎて、劔岳の頂上でスゲ笠姿の源治郎と私は、幾年振りかで偶然に顔を合せた。彼は劔沢の小屋番

をしていたようだ。源治郎は昭和二十三年十二月に七十四才で他界している。二世源治郎は山と縁をきって、富山で土建業をしているとか。

さて、ここで、立山、劔山塊を舞台として数々の岳人のために生涯をかけ、その案内最中、雪を褥しよに悲しく永眠した二人の名ガイドについて書添えて見たいと思う。

前述の劔沢小屋新設資材の運搬を担当した佐伯福松は、村随一の力持ちで知られていた。彼の温和な性格は、多くの岳人に好感を持たれていた。私も彼を連れて、立山周辺の春山、夏山を歩いたことがあった。

その福松が昭和五年の一月に、金沢四高OBの窪田他吉郎、田部正太郎両君等五名と共に、厳冬の劔岳の登頂を夢見ながら、この劔沢小屋で就眠していた。数日来続いた吹雪に加えて、その夜も雪が音もなく降りしきって、益々その量を増して行った。夜はいよいよ更けて、突如鶴ガ御前の支沢から押出した不慮の新雪表層雪崩が、劔沢を越えて対岸の小高い丘に建てられた小屋にまでのし上げようとは、誰が予測したであろうか。数年前に福松自身が汗水流して運んだ柱の下敷となつて、一行六名が共にこの世を去ろうとは如何なる因縁であつたらう。

また八ツ峯の初登攀者として聞え、立山群峯を縦横に足跡を残した佐伯宗作は、芦峠で若手随一のガイドとして知られ、狩

猟の名手でもあった。大正十四年の五月、春山スキーに立山温泉に入った時、山の彼方に熊が見えたと言つて、山行もそっちのけ、私達をも置きざりにして、さっさと熊追いに掛けてしまった。彼の忠実な愛犬は、腹を雪につけて直滑降をやつてのけ、スキーの後について来る。

越中の生んだ下世出の名ガイド宗作も、一瞬の突発的事故に遭つて、あえなく散つてしまおうとは、世の無情をしみじみ感ぜさせられる。

昭和十年の五月初、慶応の中村知一君一行を案内して立山よりの帰途、地獄谷の雪穴に落ち込んだ同僚の若きガイド豊太郎を救出せんと穴に飛び込み、亜硫酸ガスの中毒で身代りとなつてしまったのだ。山男が山に生き山に逝くのは慣いかは知れないが、惜んでも惜しみきれない。

その年の秋、中村君は大阪からわざわざ私の自宅を訪ねて、宗作の最期について報告してくれた。私も、宗作の立派な往生に対して涙を新たにし、冥福を祈つた。

宗作は遭難死の前、昭和十年の冬には海外遠征のはしり、京大山岳部西堀、今西両君等に従つて、朝鮮白頭山へ行つた。

二世の宗弘君も第一次南極観測隊に加わり、昭和基地設営を担当して、立山男の本領を發揮した。

登山技術指導者講習会

金坂 一郎

近年における登山の普及の急上昇にともない、施設が拡充されるとともに、登山者の技術習得の便宜も昔とはくらべられないほどになった。あるレヴェルのクライミングを行うためには、以前よりははるかに短時日の練習によってこれが可能となっている。

こうした登山界の進み方がある一方、遭難も激増している。登山者の数がふえれば、遭難の数もふえる道理ではあるが、遭難の質そのものも低下しているという現象は、けつして登山の進歩とはいえない。いわば、命を粗末にしたというケースの遭難がふえているのである。スリルを追う若者たちといえども、好んで怪我や死を求める者はあるまい。それが事故に至るのは、事故予防についての欠陥があるからである。

その欠陥のよって来るところを、われわれは基礎技術の不徹底と見た。登る方法と同時に、身を守る方法を、登山の初期か

らしっかりと身につけること。どちらか一方がおろそかになつたとしたら、登山において立派な成果をもたらすことはできない。身を守ることだけにきゅうきゅうとしていたら進歩は望めないが、登る方法のみを追求しているときは、技術上の不具者を生じ、いずれ遭難に陥ることは、火を見るよりも明らかである。しかしながら、こうした自明の理にも気のつかない登山者が多いというのが現実の姿である。

こうした観察にもとづいて、今回の講習会が計画された。登山の基礎をしっかりと習得するならば、一方において明日の大きな発展も期待される。基礎がしっかりしてこそ、その上に大きな構造が可能なので、今日の第一級の登山はすべて、コッコツと地道に山を歩いて来た道につながっている。もちろん、この講習会によって海外登山隊の隊員級の登山者を、いっきに養成するなどといったら飛躍があろう。わずか一週間の講習会においては、できることとできないこととのけじめが大切である。しかしこの講習会の指導方針にもとづいて、将来大きく発展する人達を期待するのは無理ではなからう。

会場は三月の西穂高と定められた。技術訓練を主とするならば、夏の堅い雪渓を利用するのが便利である。しかし登山全般を取りあげるならば、冬山のきびしさをある程度うかがえる三月の三千メートル級の山の方が適当で、雪崩による重大な支障を避けるため西穂高が選ばれたわけであるが、この地区ならば

登山技術指導者講習会

また信濃支部による強力な支援も期待できるからである。

隊の編成は原則として、各県の本会支部または山岳連盟から選ばれた二名の受講者に対し一名の講師をつけた。講師はそれぞれ登山団体において、後進の育成に多年の経験を有する優れた登山者ではあるが、プロフェッショナルな教師ではない。短時間に多数の登山者を指導するような仕事に慣れた者は少ない。だから教課内容を受講者に教えこむというよりは、むしろ講師みずから登山者としての模範を示し、受講者は体によってこれを感得するといった点に重点をおかざるをえない。したがって多数の講師を要する点、また山小屋やテントの収容能力の面からも、全国を三ブロックに分けて、三年計画によって実施することになった。

本計画は始め、浜野、金坂、藤平、日下田の四理事による小委員会において企画、実行されたが、その後日本山岳協会の設立にともない、第二回以降は本会に設けられた登山技術研究委員会の所管事項となった。講習会費用は、受講者の松本到着以降解散までの一切を本会において負担したが、日本体育協会より多額の補助金を得ている。

実施の概要は下表の通りである。

期 日	チーフ・リーダー サブ・リーダー	マネジャー	ドクター	連絡員	講 師	リ	ィ	ダ	ィ
						ラ	ィ	ダ	ィ
昭35・3・19～25	金坂 一郎 日下田 実	徳久 球雄 山野井武夫 住吉 仙也	小里 頼忠 二木 計臣 小林 巖 早乙女緩次 井口 謙司 浅輪 幸久	高山忠四朗	日高信六郎	相沢 裕文 竹田 寛次 梶本徳次郎 (山野井武夫) 山本健一郎 熊谷 義信 芳賀 孝郎			第一回
昭36・3・19～25	三田 幸夫 日下田 実	高橋 進 川上 隆 山野井武夫 田村 扇一	小里 頼忠 中野 和郎 百瀬 寿雄	高山忠四朗 浜野 正男 加藤 泰安 折元 秀穂	日高信六郎	相沢 裕文 竹田 寛次 酒井 敏明 大蔭 正芳 片桐理一郎 熊谷 義信 芳賀 孝郎			第二回
昭37・3・18～24	浜野 正男 片桐理一郎	川上 隆 山野井武夫 宮本 貴文	小里 頼忠 二木 計臣 百瀬 寿雄	日高信六郎 高山忠四朗 山崎 安治 金坂 一郎 梶本徳次郎 村木潤次郎	日高信六郎	相沢 裕文 竹田 寛次 酒井 敏明 大蔭 正芳 山本健一郎 広谷光一郎 田辺 寿			第三回

受 講 者	北海道計良幸作 浅田光一 千葉島 澄夫 田久保勇治 青森 作見 徹 田島昭三 秋田 島山陽一 保坂隆司 岩手 出堀宏明 矢羽々昭夫 山形 音山信二 菅原 求 群馬 黒川 篤 須田淑人 宮城 寺島公也 佐野秀彦 埼玉 野井 篤 相沢鎮夫 福島 近藤 暉 仲西昌寛	静岡 佐野 仁 生井伯典 石川 上田鉄一 森 孝雄 奈良 松本国男 藤井利一 滋賀 吉田 孝 石井 澄 和歌山 藪田武人 東条純一 兵庫 山本義弘 定行吉信 富山 井上 晃 山口得美 福井 高村利幸 中村幸一 大阪 高山京二 相馬慶造 長野 井口謙司 瀬戸先穂	東 眞人 年森 靖 阿部 盛明 海老沼 清 江上 康 太田 晃介 甘利 仁朗	百瀬 孝 (住吉 仙也) 塚本 茂樹 石島 襄二 篠原 敏弘	田中 敏男 長尾 佛夫 西川 益男 菊島 芳彦 阿部 盛明 東 眞人	三室 義義 本多 昭一 清水 英雄 中島 宏 大屋 悌二 海老沼 清 江上 康 太田 晃介 甘利 仁朗	岡山 洲崎 明 大村正行 香川 谷沢桂三 高知 川村早雄 熊本 竹下 聖 鳥取 田中潤一 福岡 中村正義 林 国昭 宮本次夫 坂本 直 西尾彰二 徳島 加藤勝康 光野 明 広島 福田豊治 長安 浄 寺西義夫 藤田喜徳 愛媛 宮崎治芳 今井政幸
-------------	---	---	--	--	---	---	---

実 技	講 義	新瀨 佐藤俊彦 藤井 信 坂本 阿部重男 加島清美 茨城 大和道輔 佐藤 樸 東京 年森 靖 田中敏男 石川 昇 居樹敦雄	山梨 浅川瑞穂 齊藤 実 京都 堀田真一 西根栄次 三重 栗本克行 水谷親稔 自衛隊 神村明德 中野博夫 若浦義弘	高津頼重 十亀茂樹 山口 山根良房 岡本 敏 大賀茂正 長崎 伊東秀明 石川勝也 大分 伊東 亨 西 諒 長野 矢崎源市 太田秀春 自衛 徳本富士夫 隊 遠山安夫 台湾 周 廷旺	挨拶(日高) 講習会的主旨 (金坂) 登山技術座談会 (梶本) 遭難対策座談会 (日下田) 海外登山 (金坂) 雪 崩 (金坂) 反省会(日下田) 講評(金坂)	挨拶(日高) 講習会的主旨 (三田) 確保、登山技術 (日下田) 冬の危険 (加藤) 海外登山 (三田) 露管用具 (片桐) 遭難対策(折元) 反省会(日下田) 講評(折元)	挨拶(日高) 講習会的主旨 (山崎) 登山について (浜野) 積雪期露営 (村木) 積雪期登攀技術 (梶本) 積雪期登山の 危険(金坂) 海外登山(金坂) 反省会(片桐) 講評(浜野)
--------	--------	--	---	--	--	--	---

登山技術指導者講習会

行動記録	登山	登山
<p>第一日</p> <p>(午後) 浅間温泉集合 開講式 準備会 浅間―(自衛隊トラックにて)― 中の湯―上高地村営ホテル (夜) 座談会 (登山技術)</p>	<p>西穂高 焼岳</p>	<p>登降、綱の取扱 高所露営 (根本) (竹田) 制動確保(金坂) 滑落停止、制動確保、歩き方 雪崩の判断 (金坂)</p>
<p>第二日</p> <p>同上 浅間―(自衛隊トラックにて)― 沢渡―上高地村営ホテル</p>	<p>西穂高 焼岳</p>	<p>高所露営 高所露営 わかんじき 雪洞(田辺)</p>
<p>第三日</p> <p>雨天のため 上高地停滞 (午前) 長野県警特別参加者と懇談 (午後) 座談</p>	<p>同上 上高地―西穂高山荘 (滞在中) 部交代にてテント泊 (午後) 山荘裏にて実</p>	<p>同上 同上</p>
<p>第四日</p> <p>上高地―西穂高山(山荘滞在中) 部交代にてテント泊 (午後) 山荘附近にて講義と実技 (夜) 座談会 (登山技術)</p>	<p>同上 西穂山荘泊 A西穂高B 焼岳往復 (夜) 講義 (海外登山)</p>	<p>談会(遭難防止と対策) (夜) 講義と討論(確保及び登山技術一般) 西穂山荘泊(昼間) 山荘上部ゲレンデにて実技(確保) (夜) 講義(冬山の危険、海外登山)</p>
<p>第五日</p> <p>同上 全員西穂登山 頂 (午後) 各班ごと懇談 (夜) 講義 (冬山装備)</p>	<p>同上 西穂山荘―上高地村営ホテル (午後) 討論(遭難対策)</p>	<p>技 (夜) 講義(積雪期の登攀技術) (雪) 同上 (午前) 一部は独標附近にて実技 一部は山荘附近にて輪かん実技 (午後) 雪洞研究 (夜) 講義(積雪期登山の危険性) 同上 全員焼岳往復</p>
<p>第六日</p> <p>西穂山荘泊 (悪天候のため行動中止) 山荘附近にて雪崩、風速気温、</p>	<p>同上</p>	<p>同上</p>

第七日		
雪庇等の観察研究 (午後)反省会 省会 (夜)自由懇談 上高地—中の湯、閉講式(自衛隊トラックにて)松本駅前解散	(夜)反省会 上高地—沢渡 閉講式 同上	反省会 (夜)講習 閉講式 上高地—沢渡(自衛隊トラックにて)松本駅前解散

以上のように、本講習会は終始登山の基礎を掘り下げることにしぼったが、受講者の大部分はその主旨を理解してくれたものと信じる。ある程度予想はされていたことであるが、受講者の冬山以前の基本的な勉強は多分に甘いように見受けられたが、講習会の指導方針を理解することによって、みずから進み方をつかんで頂けるかと期待している。そういったわけで、講義や実技による直接的収穫は別として、講習会の本当の成果は今後に期すべきで、現在のところ判断のしようがない。

本講習会の主たる対象は受講者であること論をまたないが、われわれには別の副次的なねらいもあったのである。つまり講師団が一週間というもの現実にあいつどい、ともに一つの作業に協力することによって、互いに知りあい、他流を学ぶとともに

に、本会の若手会員の中に一つの団結ができたことである。この講師団をもって直ちに登山隊を編成し、大学単位くらいの隊では手の出せないような規模の山にあたる。こうしたことを考えるのも夢ではなくなったような気がする。受講者の中からこれに加わるような人が現れてくれれば、なお申分ない。

以上報告を終えるにあたって、本計画の実現に多大の協力を惜しまれなかった講師諸氏、信濃支部、松本自衛隊、安曇村、その他の方々に深い感謝の意を表明したい。

積雪期登山技術指導者講習会

Leaders' Institute of Winter Climbing held by the Japanese Alpine Club.



確保練習

Demonstration of the limit of ability in an old-fashioned belaying



綱さばきの練習

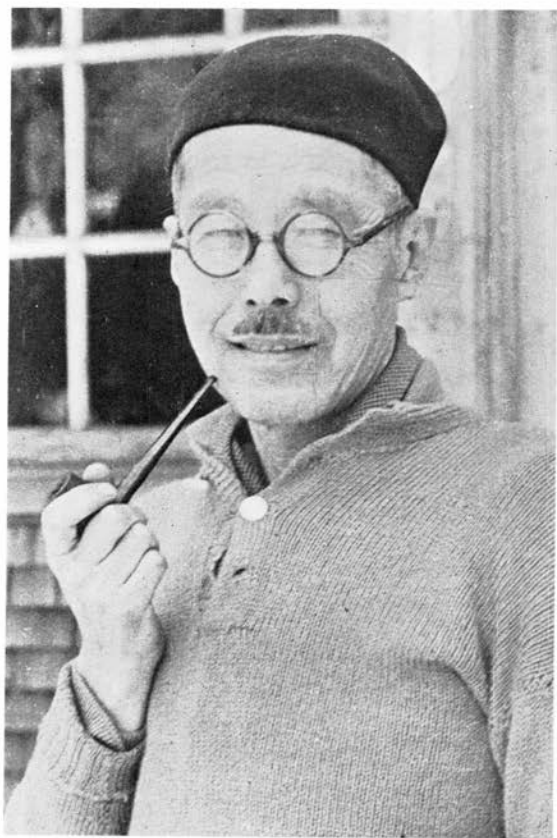
Practice in roping



西穂高の稜線にて
Along the ridge of Mt. Nishi-Hodaka.

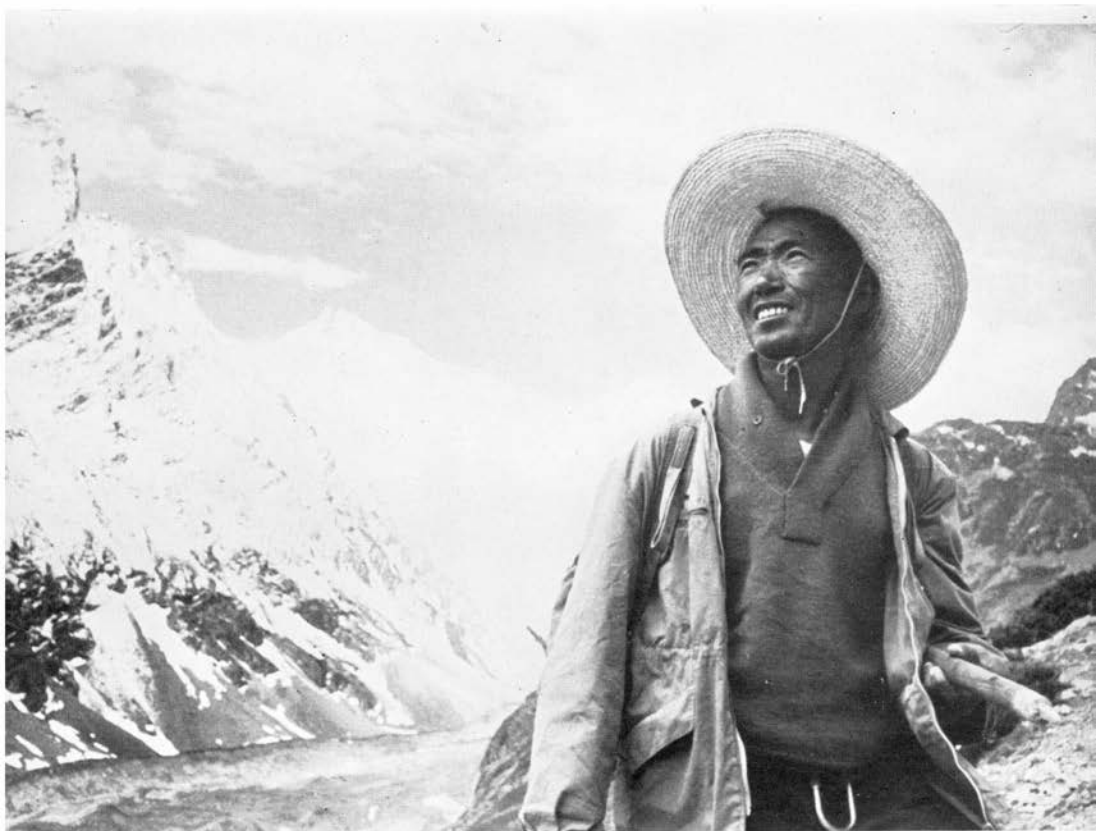


わかんじきによる焼岳行
A climb up Mt. Yake by way of practice in
snowshoeing. (by K. Kimura)



山崎春雄氏
Haruo Yamazaki
(1886~1961)

(photo by T. Fujishima in March, 1950.)

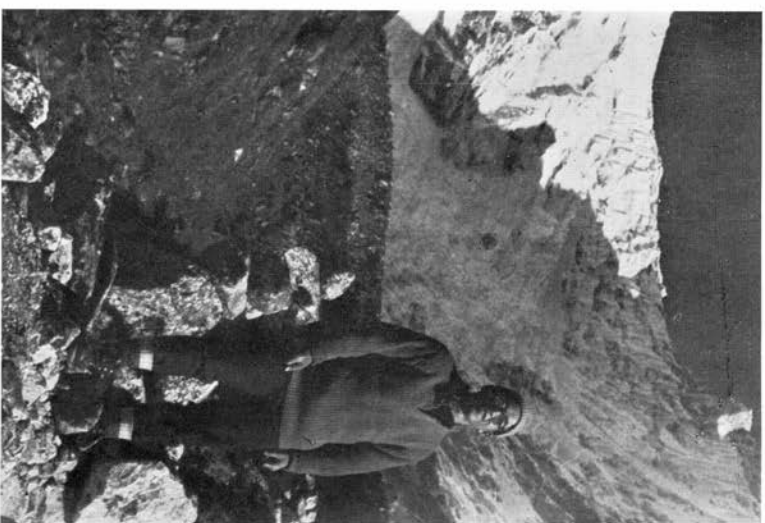


ガルツェン・ノルブ氏
Gyaltsen Norbu (H.C.No.145)
(1918~1961)

(Photo by Y. Matsuda in 1956, with Manaslu in the background.)



森本嘉一氏
Kaichi Morimoto
(1919-1961)



大島健司氏
Kenji Ohshima
(1934-1961)



リルン氷河の雪崩で逝った森本嘉一、大島健司及びガルツェン・ノルブ三氏の墓碑

The tombstone of K. Morimoto, K. Ohshima and Gyaltsen Norbu establishing on the moraine of the Lirung Glacier.

追悼

山崎春雄氏（一八八六一—一九六一）

山崎春雄先生の追悼を書くには、僕は個人的にすこしちかすぎる立場ではないかと思う。先生は専門の領域では特筆に値する業績は残さなかったが、教養の高さという点では一流であった。そういう先生を語るには僕はかならずしも適格でない。先生の無二の親友であった太田正雄博士（木下李太郎）か児島喜久雄さんが筆を執れば、先生のほんとうの面目が躍如とするに違いないが、ともに先生より先に故人となつてゐるから、いまとなつては致しかたもない。もうひとりの同年配の親友であつた吉井勇氏もすでない。

先生が二年間の外国留学を終つて、新設の北大医学部の解剖学教授として札幌に赴任したのは、大正十年の七月であつた。翌年の四月には、第一期生が予科から学部に進んだので、先生の北大での講義は十一年の四月からはじまつたわけである。明治十九年の生れだから、三十七才の小壮教授であつた。その年

の四月に、偶然僕が北大予科に入学したのが、先生と僕との交遊の機縁である。交遊といつても、ふたまわり年が違ふ子弟の間柄であるが、はじめに僕を先生のお宅に誘つたのは、中学の同窓で写真の上手な須藤勇君だつた。

北海道に來られるまでの先生は、スキーも山登りの経験もなかつたようだ。スイスのチューリッヒ大学に遊学してゐたのだから、二年間アルプスは毎日眺めていたわけだが、登るといふことには考え及ばなかつたらしい。また、おそらくその暇もなかつたろう。しかし山の写真はたくさん撮つてこられた。最初お訪ねしたのは、そのアルプスの写真を見せていただくためだつた。後年の円山の山崎家は、本州からの山の客で、先生もグリーンデルワルドでは定宿にしていたパンション・ゾンネンベルグほどの賑いを呈したのだが、この萌しはすではやくからあつて、桑園時代のお宅にも、いつとはなしに山の常連が押しかけるようになっていた。そのうちでも、僕より数年以上級の松川五郎さんと僕などが旗頭だつたようだ。北大在学中に家庭をもつた山県浩君のごときは、親子三人で数ヶ年円山のお宅の二階を占領していたくらいだから、よほど居心地がよかつたらしい。こういうふうな山の連中が心おきなく出入りしたのは、奥さんの功德が大きかつたことも間違いない。人嫌いで、学会その他の集会にはほとんど顔を出したことのない先生が、また山に行く若者たちにはおどろくほどの愛情を示したものであ

る。卒業後、解剖教室の助手になった中野征紀君などは、まったく先生の誘掖によって、学究としても山岳人としても成長したといつてよい。

とにかく、われわれ若い連中との接触によって、先生の山にたいする興味が深められたことはたしかだった。たちまち山の本の涉猟がはじまったので、やがて先生の話題には、ドイツやオーストリアの登山家やアルプスのことが大きな比重を占めるようになった。話ばかりでなしに、実際にスキーや山登りをされるようになり、ついに昭和二年には、ふたりのスウィス人と共同で、ヘルヴェチア・ヒュッテを作るところまで発展しては、病はすでに膏盲にいたるといふものである。

先生のその後の山歴は、藤島さんの一文につきているから、ここには先生の人の一面を伝える挿話をひとつふたつ書き誌しておこう。先生は地位や名声には恬淡としておられたが、昭和七年から九年までと、十四年から十六年までの二期を医学部長に推され、その他の期間も長く大学の評議員をしておられたことをみても、同僚の先生に対する信望のほどがうかがえる。先生の本領はつねに正論をはくということであった。先生には所信を貫くという一徹なところがあり、とくに道義的問題になると、節をまげないモラリストだった。北大の佐藤昌介総長が逝去されたときは大学葬が営まれたが、佐藤博士は札幌農学校の一期生でクリスチャンであったから、遺族の意志をくんで葬

儀もキリスト教でやることになった。これは国立大学の大学葬としては前例のないことであつたが、このことをきめた大学の評議会で、それに反対して神式によるべきであると主調した評議員があつた。そのとき山崎先生は、キリスト教によることが、佐藤博士の霊に対する儀礼としては最高の、そして唯一の方法であることを熱烈に力説して、狭量な国粹主義を反駁した。その結果、結局はキリスト教に落ちついたということがあつた。

もうひとつのエピソードは、昭和三年の冬に秩父宮殿下の御来道のとぎのはなしである。このときは、先生が「山岳」四十八年に、「ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父宮殿下」と題する一文にも書いておられるが、北海道でのスキー旅行には学生だけと行動したいとお客様の御希望があつたために、始めて殿下をお迎えする道庁当局も北大本部も当惑したのであつた。ヒュッテの収容人員がわずか十名なので、殿下のパーティに警官がはいる余地はもろんなかつたが、客人の意志の尊重よりも、自分たちの責任というところの方を第一義的に考える習慣のある道庁当局が考えたことは、宮様の隊の前後に、スキ―のできる警官二十名ずつの警備隊をつけるという奇技なものだった。佐藤総長にしても、宮様を学生だけに任せきつて、雪に埋もれた山小屋に送るといふことは、われわれの想像以上に不安であつたに違いない。しかし、この計画は、山崎先生の苦

心と努力によって実現しなかった。先生の文に「すべての無知から来る俗慮の介入を拒否して、殿下と学生だけの隊を編成する」という最高原則は、あらゆる障害を強力に排除してその目的を達した」とあるのは、その間の消息をいったものである。警備隊には、スキー部と山岳部の現役部員をあてるということ、道庁とも折合いがついたのである。本来気楽なスキー行に、本隊とか警備隊とかおおげさな名前がついたのも、おそらく空前絶後だろう。あの『山岳』の一文は、短いながら先生の非凡な教養が、はつきりとうかがえる名文である。

先生の本業の解剖学のこととは、本誌ではすこし筋違いであるから、詳しくは触れないが、先生の大学での講義は独特の風格のある名講義だったようだ。講義にはノートやテキストはいっさい使わず、教室には解剖学名集 (Nomina Anatomica) を一冊もつてくるだけで、しかも流れるように流暢なものだったそう。しかし先生の講義の口調は、すこし沈みがちの重い調子であつたらうに、講義の内容が、人間の骨とか筋肉とかいう巨視的な基礎構造についてであつたから、なかには無味乾燥と感じるものもあつたらうし、先生の講義の滋味を掬うことのできなかつた学生も少なかつたであらう。僕は学部が違つたので、先生の講義をきく機会はなかつたが、仄聞するところでは、黒板に描く先生の解剖図はじつに見事なものだつたらしい。これは先生の特技といつてもよかつた。若いころから得意

だつた絵画が、解剖学の講義に一段の光彩をそえることになつたのである。

先生には若いころにいくつかの研究論文があるが、北大に移つてからは、学会にもあまり顔を出さず、論文もほとんど発表しなかつた。もちろん助手や研究生の研究指導はされたから、先生の指導のもとに学位をとつた門下は少なかつたが、先生自身はついに博士号はとらなかつた。自分の研究についてあまり積極的でなかつたのは、先生の生来の気質のあらわれか、あるいは先生になにか考えるところがあつたためか、その辺の消息はつまびらかでない。しかし先生の明哲な頭脳を知るものにとつて、先生が学問上に多くの業績を残されなかつたことは、惜しかつたような気もするのである。

先生は東大の明治四十三年の卒業生であるが、解剖学者のなかでは、先生より一、二年先輩の西成甫、長谷部言人両博士ともっとも親しかつたようである。多くの知友のなかで、とくに先生の親友とよぶべき人は、冒頭にあげた三人の学者文人と、榎有恒、松川五郎の両氏であつた。

先生の遺稿はきわめて少ない。しかし文藻の豊かな先生が、若いころから晩年にいたるまでに、友人に書き送つた書簡はけつして少なかつたはずである。もしそれらの書簡が一本に編まれるとすれば、機知と諧謔にあふれた興味津津たる文集となるであらう。(一九六二・七・五) (伊藤秀五郎)

*

ながい病臥のすえ、一九六一年十月、山崎さんが逝かれたことは、北海道大学の山仲間にとって慈父を失ったような大きな悲しみであったに違いない。東京の知友たちにも大きなショックであったし、会としては在籍三十年に及ぶ古い先輩会員を失ったのは淋しいことである。

山崎さんの入会は昭和六年二月(会員番号二二八九番)、紹介者は伊藤秀五郎、榎有恒、松方三郎の三名、四十五才のときである。これは、その三月ヨーロッパへ出かけるについては、JACの会員である方が、都合よいと考えられたからとも推察される。渡欧後は、はたしてそのたよりにある通り「一寸シベリア旅行の疲れを休めるとの口実でグリンデルワルドにやって来たのですが、すっかり根が生えて一ヶ月以上も暮してしまいました」ということになり、榎氏以来のガイド、サミュエル・ブラヴァンドと、アルプスの峰々をむさぼるように登られたのだ。会報第十号の「瑞西だより」は榎氏宛の通信から、私が書抜いたものだが(全文をのせなかったのが、いまとなつては惜しまれる)、山崎さんがアルプスの山と人の中で、いかに楽しい月日を過ごしたかよく出ている。帰国歓迎の集りで「老いらくの山恋い」と言われて、ご本人はうれしそうだったのを思い出す。

たしかに山崎さんの山は、老いらくと言わないまでも、中年

からの山であった。学生時代から若い頃は文学芸術を愛する青年であったことは、木下奎太郎、児島喜久雄の両氏が終生の心友であったことから、うかがわれる。

「木下奎太郎(太田正雄)」とは中学、一高、東大を通じての同窓であり、親友であった。山崎は中学以来造形芸術を理解する点では太田正雄の尊敬する友であり、彩管に於ては彼をぬきんでるものがあつた。太田正雄が画家になることを断念するに至つた理由には、山崎が彼よりも画が上手であつたにもかかわらず、画家にもならず医学を志したことがふくまれていた程である。山崎は又、北原白秋や吉井勇や長田秀雄等にとつても画才の所有者として多くの影響を与えたようである。

これは「日本耽美派の誕生」(野田卯太郎著・昭和廿六年一月・河出書房刊)からの引用であるが、同書のあちこちに山崎さんの名がみえ、人名索引では当時の新しい文芸運動の重要な役割を演じた中にあげられ、若い頃の山崎さんを想見させるものがある。そういう山崎さんが、スキーや山登りに熱を上げるようなことになつたのは、大正十年(当時卅五才)熊本から札幌へ転じたのが動機で、北大文武会スキー部の山班の人々(松川五郎、植田守、井田清、伊藤秀五郎等)からスキーを吹込まれたのが、病みつきのはじまりという。それからずっと、札幌附近、中央高地、日高の山などを、主として積雪期に、頼もしい、よい若者達と大いに歩かれた。ひらけすぎない自然の

姿をまだ多分に保っていた北海道の山が、手近にあったからであらう。本土の山へはあまり足が向かなかつたらしく、檜穂高縦走、スキーでの白馬岳といったところにとまっていたようである。詳しい登山歴は、北大山岳部報から探し出してもしないことにはわからない。私は昭和九年一月十勝吹上温泉から、快晴にめぐまれた上ホロカメットク、フラノ、十勝の三山に山崎さんと共に登った。相川正義、中野征紀、田中晋雄、初見一雄の諸君が一緒だったが、帰途私が右足骨折というへまを演じ、一行に大迷惑をかけた。骨折直後山崎さんに応急処置をしてもらったところ、通りがよりの人が、ソナナ処置では駄目とやり直してくれたものである。あとで「医学部の大先生が骨折の応急処置ぐらいのこと……」と伺ひを立てると、言下に「僕は生きてる人間には用がないから」と大笑された。解剖学が山崎さんの専門だったのである。骨折が北大病院で完全に元通りになったのに気をよくして、翌十年一月には、山崎さんが或いは吾家よりも愛情をそまがれたとおもわれるヘルヴェチア・ヒュッテに数日の生活を共にした。芯からの山好きだっただけでなく、広い深い教養の持主だった山崎さんとの山小舎の幾夜か、今でもいかにたのしい想出となっていることか。ともに山を歩いたことのある者の心に、いつまでも印象の残るような、山崎さんはそういう人であった。

JAC会報や「山岳」への寄稿は多くないが、昭和六年十一

月会報第十号に「瑞西だより」、昭和二十七年一月第一五九号に「ヘルヴェチア・ヒュッテの二十五年祭」、「山岳」第四十八年に「ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父宮殿下」の三稿がある。いずれも山崎さんの人柄がしのばれる、味わい深いものである。これらの外に雑誌「山とスキー」や北大山岳部々報への寄稿も数多いこととおもわれるが、手許にないのでこゝでは触れない。

一九五七年四月、スイスからブラヴァンド来朝、ともにアルプスの峰々をあるいた面々が喜んだのはいうまでもないが、二十六年ぶりの再会に山崎さんのうれしそうだったことは、たいへんなものであった。その直後軽い発作が起り、東京で休養後帰札されたきり、山崎さんは東京でわれわれの仲間に加わる機会なくして逝かれた。いつも遠くに離れていたからでもあるのか、私には山崎さんがまた学会にいつか上京してこられるような気がしてならない。

山崎春雄氏略年譜

明治十九年（一八八六年）二月四日前橋に生る。独逸協会中学・一高・東大を通じ木下太郎と親交を結ぶ。また三宅克巳画塾にて児島喜久雄と知る。

明治四十三年十二月東大医学部卒。

大正二年一月熊本医専教授、狩猟を始む。八年三月——十年六月欧州留学、独逸へ入国出来ず、スイス・ベルンに滞留した

るも、アルプスに登山を試みることなし。十年五月北大医学部教授、この冬よりスキーを始む。

昭和六年三月欧米出張、アルプスの山々に大いに登る。十二月帰朝（四十五才）。昭和七年—九年及び十四年—十六年の二期医学部長。二十三年北大退職。同名譽教授。二十五年札幌医大教授。三十三年退職。三十六年十月二十一日病歿（七十五才）。

（一九六二年七月記）（藤島敏男）

ガルトツェン・ノルブ Gyaltzen Norbu

(H.C. No.145) (一九一八—一九六一)

ガルトツェン・ノルブと日本隊との関係は、一九五五年秋、第三次マナスル登山先遣隊にサーダーとして同行したことに始まる。彼を推薦したのは、当時ダーシリン在任のヒマラヤン・クラブ書記のヘンダーソン夫人であった。シェルパの選択は登山隊にとって重要な仕事であるが、ことにサーダー（シェルパ頭）の選択はその中心をなすものである。彼はこの年の春、フランス隊のサーダーとして、マカールの登頂に成功した業績を挙げており、その手腕は既に世に認められておったのみならず、シェルパの事情に精通するヘンダーソン夫人は、彼の人柄

を高く評価して推奨したのであった。果たして彼は、先遣隊によって、ヘンダーソン夫人の推奨に価するサーダーであること認められ、翌年の本隊も同伴することになった。今日、わたしたちの間では、シェルパのリストも一通りは調製されているが、マナスル登山の当初から第三次に至るまでは、主として記録による選択に頼る他に途もなく、このようなときにヘンダーソン夫人の懇切な助力は、何にも替えがたい奇与であった。夫君と共にダーシリン在任四十年にも及ぶ夫人の、シェルパに対する知識と経験は他に比なく、彼等の信望を集められておった。英国隊はもとより、各国登山隊の同夫人に負うところは、まことに大きいものと思う。ことにヒマラヤ登山に経験の浅いわが国にとっては、同夫人の寄せられた好意はシェルパ問題を容易ならしめ、爾後もその恩恵にあずかっているとと思う。

一九五六年三月二日、私はカトマンズでガルトツェンと始めて会った。彼は十九名の約束のシェルパたちを連れて、借りた郊外のタパ氏別宅に、先発隊と共に待っていた。中背痩きすで微笑を湛えた柔和な彼と会って、ふと立山で死んだ佐伯宗作にどこか似ていると思った。体つき、ものごしが似いたのであるが、それは一見して山に年季を入れた姿であった。第七次エヴェレスト登山隊のとき、ノース・コルまでの荷揚げに活躍し、隊長ティルマンの推薦でタイガーズ・バッジを受けたほどのこの人物は、いかにも謙虚であって私の心を強く惹きつけ

た。私は彼をサーダーであると同時に、隊員の資格で待遇することにした。これは彼にとつてのみならず、他のシェルパにとつても大きなよるこびであり、また励みともなった。他の十九名のシェルパたちも、それぞれにヒマラヤ登山の経歴をもっており、元氣激刺たる連中で、彼の指揮のもとに欣然として働いた。三月十一日、四〇〇名に近いポーターを連れてマナスルへ出発したが、出発にさきだつて私は彼に、ポーターや住民との紛争は彼等の中で処理せず、直接私に訴えること、及びキャラバン中は特にポーターに事故を起さぬよう注意し、悪場では補助繩などを使用して援助することを指示した。シェルパとポーターとの紛争は一度もなかったが、サマ部落で登山の阻止を受けたときも、スッパや隊員に事を委し、シェルパたちはその紛争に巻き込まれることはしなかった。ポーターの中には山路に慣れぬものも多く、そのため足下の危険な艮路や吊橋では必ずシェルパたちは補助繩を張ったり、代つて荷を運んだりして助けた。ポーター・サーダーは彼の兄のパスン・プタールであったが、彼はいつも卒先して協力し、すべての悪場をこのようにして無事に通過した。この大部隊の運営が事故なく進行したのは、彼の努力に負うところが多かった。ベースキャンプより登山への行動は、キャラバン中とは異り、隊員とシェルパとの協力によって進められた。この行動により天候のゆるす限り、日を追うてキャンプは上へ延びていった。また空氣の稀薄による

困難も登るに伴つて加えたが、堅実な歩みは些さかも渋滞しなかつた。ベースキャンプ以上は行動の便と危険防止のため、数人で一隊とし、各々に隊員一名が加わつてリーダーとなつた。この登山への前進はほとんど休息もなく一カ月も続いたが、シェルパの眞骨頂は遺憾なく發揮され、弱音を吐くものなどは一人もなかつた。ガルトツェンの強い意志が、その部下に滲透していたのであつて、それは誠実ということであつた。今西寿雄君と共に、第一次登山隊として成功した彼のよるこびと満足とはいうまでもない。かくして彼は八〇〇〇メートル級登山二回の記録をもつ、唯一人のシェルパたる榮譽を得た。

彼は其年九月、日本山岳会より招かれてペンバ・リータ夫人と息子ラクパ・ノルブを伴つて来日し、約一カ月間滞在した。はじめ東京の雑沓に些か疲労したようであつたが、至るところ温かく迎えられ、旅に慣れるにつれ、元氣を回復、日光、鎌倉、大阪、京都、奈良などを遍歴し、敬虔なラマ教徒である彼は寺院に詣で仏像を拝するのを好んだ。そして謙虚な虚飾なき人柄は、皆人に愛好されたのであつた。このよるこびの中に、さらに勲六等旭日章を授与せられ、また東京都名誉都民に推薦された。

其後わが国よりのヒマルチュリ隊、雪男探検隊、アピ隊、デオ・ティバ隊等にサーダーとして同行し、一九六一年、大阪市立大学ランタン・リルン登山隊と同じくサーダーとして同行

中、五月十一日未明リルン氷河上、第三キャンプにおいて、隊

長森本嘉一、隊員大島健司両君と共に雪崩のため遭難死した。

享年四十四才であった。まことに痛恨にたえないことであり、

三君の靈に対し深く哀悼の意を表するものである。森本隊長と

は出発前会ったが、既に心はヒマラヤの高峯にあるかのように

元気であった。ガルツェンとは幾月の間毎日苦勞と喜びを共に

したこととて、感慨の深いものを覚える。ペンバ・リータ夫人

は四人の遺児をかゝえ、卒然として一家の支柱を失った今日、

今後の養育について思案に控えていることを聞き、昨年

八月、日本山岳会内にガルツェン遺児援助資金募集委員会を設

け、十一月に至る三カ月間募金を行った。この企に対し広く全

国より同情を寄せられ、三六〇口、一〇〇〇人を越え総額九二

三、六一一円の贖金を得た。募金は駐印松平康東大使に託し、

遺族に贈った。(横 有恒)

*

ガルツェン・ノルプの名が私達日本のヒマラヤの仲間知られるようになったのは、一九五五年春、サマ問題解決のために渡印された西堀、成瀬両氏がダーシリンヘシエルパの交渉に立寄ったときにはじまる。

事実、ヒマラヤン・クラブの書記ヘンダーソン夫人からパサン・ダワ・ラマを第一候補に、ガルツェンを第二候補に推薦される迄、私達の頭にガルツェン・ノルプの名はなかったのでは

る。

前年アビで超人的な活躍をし、その後マカルーヘサーダーとして出かけていることは知っていたが、当時としてはガルツェンがこれ程優秀なサーダーであるとは、知る由もなかったのであった。そして幸か不幸か、パサン・ダワ・ラマがダウラギリを希望したので、私達はガルツェンをつれていくことになったのである。

こうして、第三次マナスル隊の先遣隊である小原隊に参加した彼は、私達の期待を裏切るようなことはなかった。前年あれ程反対したサマの部落の人達をも納得させ、マナスル登頂への最大の難関を見事に解決してくれたのであった。

迎えた一九五六年の第三次マナスル登山での活躍は、今更ここにくどくどと述べる必要はないと思う。四〇〇人のポーターを操縦して、二日間を短縮するというキャラバンをやったのけ、サマの問題を解決し、高処ではローカル・ポーター・サーダーとして参加した彼の兄パサン・プタールとのすぐれたコンビによって、見事なシエルパのチームワークを発揮せしめ、そして自らも八一二五メートルのマナスル山頂に、今西隊員と共に初登頂をなしたのであった。こうしてマカルー、マナスルと八〇〇メートル峰二座登頂の輝かしい記録を持つことになったが、この記録は一九六二年の現在に至るも、シエルパとしては未だに彼のみである。

こうして一九五六年の秋に、日本山岳会と毎日新聞社の招きにより来日することになったのである。羽田に着いてからの彼は、各地で大変な歓迎をうけたが、謙虚ななかにも愛嬌のある彼の態度は、日本のすべての人々に好感をもたれ、日本・ネパール・印度の間の親善に大きな役目を果たしたのであった。

議事堂をチャールトンと間違えたり、地下鉄に驚いたり、デパートのエスカレーターでは、上へ行った階段はどこへ行ってしまふのかと彼らしい疑問を抱いたり、滞日中のエピソードを拾い上げればきりが無い。私も多田等観先生と一緒に、彼を日光に案内したが、東照宮で修学旅行の中学生に遇った時には、日本の教育制度にすっかり感心し、仏教国としての日本を再認識したようであった。

丸の内東宝劇場で行われた「マナスルに立つ」の試写会では、レディース・アンド・ジェントルマン……と堂々と挨拶をし、居並ぶ私達を臨然とせしめたことも忘れることは出来ない。勲六等旭日章授与、東京都名誉都民の鍵授与……。全国民から寄せられた心暖まる歓待には、彼もすっかり感激したことだろう。そして日本隊となら、どこ迄も協力して、全国民の期待にこたえたいと、堅く心に誓って帰国したに違いない。

一九五七年は、こうした彼の希望を充たすような日本からの登山隊がなく、彼も失望したに違いない。そこで、この年の初夏には、インド登山学校のアドヴァンス・コース隊についてナ

ンダ・デヴィに向い、秋にはフランスのジャヌー偵察に協力、冬から翌年春にかけては、トム・スリックのイエティ隊に参加してアルンの源流にでかけている。

ダーズリンからの彼の手紙にも、日本山岳会の次の計画を期待する声がしきりに聞かれた。そして、その目標ヒマルチュリは、彼がマナスル山頂から次の目標とはっきり決めた山でもあった。日本山岳会の次期計画が、ヒマルチュリであることを知った時の彼の喜びは、想像以上であったらしい。

こうして一九五八年秋には、金坂隊に随ってヒマルチュリを偵察し、東尾根からのアプローチに希望を見出すことが出来たのであった。

そして迎えた一九五九年のヒマルチュリは、彼にとつてはマカルー、マナスルに次ぐ久し振りの本格的登山隊であった。中でも、マナスルで共に苦勞した村木さんが隊長であり、親しくしていた私も参加するというので、彼の熱の入れ方は大変であった。このためにシェルパも彼によって集めうるベストメンバーを選び、これに加えて、ローカル・ポーターとして、彼をしただって集って来た若いシェルパを配し、この指導と監督を実兄のパサン・プタールにまかせるといふ、マカルー以来の彼一流のシェルパ編成であった。この隊は、隊員も若い張り切ったメンバーが中心であったことから、極めてスツキリした、気合いに充ちた隊を編成することが出来たのであった。

不幸にしてこの年は天候も悪く、七四〇〇メートルに達して引返さざるをえなかったが、この時の思い出は尽きない。ヒマルチュリには数々の難問が控えていた。山麓のナムルー部落の村人達は、登山に対して必ずしも協力的でなかった。これに対しガルツェンの頭腦的作戦は見事であった。ゴムバに寄付を申し出て、日本隊の仏教徒であることを裏つけたり、夕食前に多羅菩薩の説教を行うことにより、日本隊がヒマルチュリの山にお参りに来たこととして説得したり、彼の卓越した頭腦作戦なくしては、スムーズに山に入ることすら出来なかったかも知れない。

東尾根の前衛峰の下降では、思わぬトラブルでビヴァークする一幕もあったが、この救援に対しての彼の涙ぐましい努力も、私にとっては忘れることは出来ない。二日振りに救出されて握手を交わした時には、彼は涙を流して喜んでくれたのである。この直後に、ニマ・テンジンの急死というアクシデントに遭遇したときすら、涙を見せなかったことからみても、彼がいかにサーブに対して忠実であり、主人を支配してくれていたかが分るのである。

ニマ・テンジンの死は、若いシェルパに対して大きなショックであった。即日登山を捨てて下山するというようなムードも、なきにしもあらずであった。が、そこは彼の腕の見せどころである。喪に服した三日間の休養の後は、若いシェルパの士

気をすっかり回復させ、再び頂へのファイトをみち溢れさせたのであった。サーダーの行くところ、彼の部下はどこ迄も黙々として荷を上げようとするファイトがあった。これは彼のすぐれたサーダーシップ以外の何ものでもあるまい。

このように彼は後輩の指導には常に意を用いていた。若いシェルパを檜舞台に出すために、積極的にローカル・ポーターとして起用し、養成を怠らなかつた。若いシェルパには、サーブに対しての礼儀、躰が、最近地におちたのを嘆き、英語の教育等についても、特に意を用いていたようであった。ダージリンでのガルツェン一家は、こうして若さと希望に満ちた頼母しいグループであった。

こうした反面、彼は先輩を常に尊敬し、礼をつくすことも忘れなかつた。かの老雄ダワ・トンダップも、寄る年波はあらそえず、最近第一線から敬遠され勝ちであったが、ガルツェンは、彼のすぐれた登山歴と、シェルパとしての立派な態度に常に敬意を表し、ダージリンでは彼の一家の面倒も見、どの隊にも必ずといっていい程彼を同行させ、しかも機会があれば、登頂隊にも意識して起用していたのであった。「ダワ・トンのようになすくれたシェルパが、年をとったからといって相手にされなくなるといふことは、シェルパ族としての恥である。そのためにも老先きの短かいダワに機会があれば登頂させて、その花を咲かせてやりたい」といふ暖かい心遣いには、私達も常に頭

の下がる思いであった。

一九五九年という年は例年になく天候の悪い年であった。このため私達もヒマルチュリの高処で、しばしば風雪に見舞われて困難することがあった。風雪といえ、彼は一九五四年のアピ登山の折、ルートを見失なって大変な苦勞の末、一人で帰還したという経験の持主であるだけに、気のくばりようたるや一通りではなかった。赤旗の間隔が長いと感した場合には、自らキャンプ地からカートン・ボックスの空缶をもっていつて、その途中にたてるといふ程の慎重さであった。第五キャンプへ帰着する直前に、物凄い風雪に遭った時には、さすがの彼も顔色がなかった。この時に私が自信をもって誘導して第五キャンプへ帰着して以来、彼の私に対する態度が一変したことをみても、風雪に対していかに気をつかっていたかが解るような気がするのである。後日、同志社大学のアピ登山隊にカルカッタで会合した時の彼の第一声が、「赤旗は何本もってきたか」「五〇〇本あり」「OK、アピは大丈夫」という挨拶があったことは、有名な語り草にもなっている。

ヒマルチュリでは、第四キャンプから先では、ゲンディー、ダワ・トンダップ、アン・ダワIV号といったベテランのシェルパが大いに活躍したが、ゲンディーのようなしっかりしたシェルパでさえ、ヒマルチュリ東北壁の氷壁には頭を下げていた。「自分達は第五キャンプ迄はいくらでも荷を上げるが、それか

ら上は勘弁して貰いたい。第五キャンプから上はひとつサーブの力で登って貰いたい」というのである。しかしガルトツェンは違っていた。彼には頂上に立とうとするフアイトがあった。サーブと共に登頂したいという執念が彼にはあったのである。彼はその隊にも大抵の場合メンバーの資格で招かれていたが、このような登攀意欲のある点が他のシェルパとの大きな違いであった。

一方彼は登山を科学的に行なうことを常に考えていた。「二六、〇〇〇フィート以上の山は酸素を用いて登るべきである。」これも彼の持論であった。エヴェレスト酸素不要説となえたパサン・ダワ・ラマとは、この点で大いに意見を異にしていた。しかし強氣のパサンはエヴェレストで失敗したが、ガルトツェンは二つの八〇〇〇メートル峰を登ることにより、彼の説の正しいことを実証したのであった。このほか高度馴化を考慮した荷上げの作戦、頂上攻撃前に全員をB・Cへ休養に下ろすことなど、多年の経験からえた彼一流のすぐれたセオリーをもっていた。

ヒマルチュリ登山の最中に、内地からイエティー・エクスペディション派遣のニュースが入った。彼は直ちに参加を申し出たが、彼は前年の経験から、ソロ・クーンブのランポチェ谷をイエティーの穴場として考えていた。彼の意見はその後大いに採り入れられた。勿論彼のサーダーとしての参加は、この隊に

とつての前提条件でもあった。

エクスペディションが終り、ダージリンに帰ると彼は常に次の遠征のことを考えていた。私のところへも、しばしば手紙をよこした。そしてこのような時には、私がヒマラヤの蝶のコレクターであることを知っていて、「これはナンダ・デヴィの高山蝶です」といったように、彼の参加した山で捕えた蝶を送ってくれるのであった。これを見ても、彼がいかに細かくこうしたことに気をつかっていたかがわかるのである。

イェティーが終ると、今度は引きつづいて直ちに同志社隊についてアピにかけた。そして一九五四年にギリオネ隊と同行した時の貴重な経験をいかして、五月十日に見事登頂を果したのである。彼のアプローチにおけるルートの提案、B・Cに入ってからすぐれた作戦等において、同隊への貢献は大きかった。

この年の秋に日本から初の婦人登山隊が、パンジャブのデオ・ティバにでかけた。同隊の細川沙多子隊長の要請もあって、この時には長女のニマ・ラモを同行した。テンジンの娘たち、クロード・コーガンのチャー・オユー隊に招聘されたこともあったりしたので、負けずぎらいのガルツェンも、娘を同行したいという気持になったのかとも思われたが、彼はテンジンの考え方とは違っていて、ニマ・ラモを女流登山家に仕込もうというよりも、父の職業を理解させたいという気持からであ

つたらしい。カルカッタで同隊の隊員達に紹介した時も、私は、これを登山家にするつもりはないのです。しかし父が山を相手にどんな苦しい仕事をしているか、もう教えておかねばならない年ごろと考えて連れてきました。可愛がってやって下さい」とみんなに紹介したそうである。そしてこの時も、終始なごやかな中に、デオ・ティバの登頂に成功して帰ってきた。彼にとつてはデオ・ティバに登頂したことより以上に、別な意味で嬉しかったに違いない。この時の幸福そうなガルツェン父娘をみて、それから半年後におきた不幸なアクシデントを、誰が想像することができたらうか。

マナスルに登頂した直後から、彼は現在脚光を浴びている華やかなシェルパの職業が、いつまでつづくかと常に心を痛めていた。その頃からは訪れる登山隊の規模も小さくなり、シェルパも小人数しか働かないという隊が多くなってきた。従って、その頃からぼつぼつと失業するシェルパもでてきた訳である。これに加えてネパール政府は、ダージリンのシェルパを締めだそうとしたので、彼の心配はなおさら大きく、老後の生活の安定ということを常に考えていた。日本へ来た時も、多田等観先生には常にこのことを相談されていたらしい。将来、ダージリンにできるかも知れない在印日本人クラブの、別荘の管理人とあったようなことが、彼にとつては一つの大きな希望でもあったらしい。そして一人息子のラクパ・ノルプは、是非とも日本

で教育して、エンジニアにしたい、というのが彼の生涯の念願でもあったらしく、デオ・ティバ隊の隊員にもよくそのような相談をもちかけていたようである。

この頃から彼は日本隊専属のサーダーになってしまった。ネパール政府の作ったヒマラヤン・ソサエティの問題では、ダーズリン・シェルパということで、いつもトラブルをおこしてはいたが、彼は万難を排して日本隊に参加していた。これに対しどの隊も、勲六等をもつ彼をメンバーの資格で招待して、彼の好意にこたえていた。

こうして一九六一年のブレ・モンズーンには、大阪市立大学のランタン・リルン隊に参加することになったのである。一九六一年五月十一日未明に、同峰の第三キャンプを突如として襲った雪崩事故については、今更ここにとり上げて説明することもないが、ガルツェンをよく知っているだけに、このニュースを聞いた時のショックは大きかった。悲しみというよりも、「馬鹿野郎、どうして死んでしまったんだ」と呼びたい気持ちで一杯であった。そして、つくづくと彼の輝かしい山歴をふりかえってみて思うのであった。彼は風雪の試練は随分とうけているが、雪崩らしい雪崩には殆んどあつていない。皮肉なことに今回の事故は、何か彼のこうした弱点をつかれたような気がしてならないのである。ヒマラヤの氷河雪崩のスケールは、ベテランの彼の判断をも誤まらせたのであろうか………こ

の点を思うと残念でならないのである。

現在ダーズリンの彼の留守宅には、未亡人ペンバ・リタ・シェルパニが未だ幼ない彼の子供達を相手に、静かに喪に服しているそうである。そしてマカルーでクックをつとめたことのある彼女は、「日本からの要望があれば、シェルパやサーダーを斡旋することができる」と、けなげな知らせもよこしている。一方十八才になる長女のニマ・ラモは、デオ・ティバ隊に参加した中村さんの世話で、カルカッタのインド旭ガラス会社に事務員として就職し、弟妹たちの面倒をみるために働いているそうである。今後共暖かい眼でながめていきたいものである。

ガルツェンを失なつたことは、日本のヒマラヤ登山隊にとつて大きな痛手であった。恐らくここ数年の間は、彼のようなすぐれたサーダーは、あらわれてこないかも知れない。しかし彼なき後、生前彼が養成した若手シェルパは皆一人前に生長して、若手サーダーとしても活躍できるようになってきている。彼の意志を継いで、彼の果たせなかつた夢を実現する者もでてくることだろう。今は亡きガルツェンの冥福を祈りつつ。

(37・8・1記)

ガルツェン・ノルブ略歴

一九一八年 誕生。

一九三八年 第七次エヴェレスト隊に参加、ヒマラヤン・クラ

フコ Gyalsen VI の名前が、H.C. No. 145 として登録される。なおエヴェレストでは八〇〇〇メートル・ラインに達し、その功によりタイガーズ・バッジを授与された。

一九三九年 カラコルム（シプトン隊）。

一九四一年 ペンバ・リタ・シエルパニと結婚。

一九四六年 バンダル・ブンチ。

一九四六年～五三年 E・シプトンがカシュガル総領事として赴任の際、実兄ラクバ・テンジンと共にサーバントとしてカシュガルへ。この間一九四七年、シプトン、ティルマンに従いムズターグ・アータに登山。

一九五三年 ダージリンへ帰る。

一九五四年春 アビ隊（ギリオネ隊）にサーダーとして参加

（以下各隊ともすべてサーダーとして参加）。

一九五四年秋 マカルー偵察（フランコ隊）。

一九五五年春 マカルー登頂（フランコ隊）。

一九五五年秋 マナスル偵察（小原隊）。

一九五六年春 マナスル登頂（榎隊）。

一九五六年九月～十月日本山岳会の招待により来日、マナスル登山に協力した功により叙勲六等、授旭日章。東京都名誉都民の称号を授けられた。

一九五七年夏 ナンダ・デヴィ（インド登山学校アドヴァン
ス・コース隊）。

一九五七年秋 ジャスー偵察（フランス隊）。

一九五七年冬～五八年春 アルン源流雪男探検に参加（スリッ
ク・ジョンソン隊）。

一九五八年秋 ヒマルチュリ偵察（金坂隊）。

一九五九年春 ヒマルチュリ（村木隊）。

一九五九年冬～六〇年春 雪男探検隊（小川隊）。

一九六〇年春 アビ登頂（津田隊）。

一九六〇年秋 デオ・ティバ登頂（細川隊）。

一九六一年春 ランタン・リルン隊（森本隊）に参加。五月十

一日第三キャンプに於て雪崩により遭難死す。享年四十四才。（松田雄一）

*

（編者附記） なおガルツェンの名前について編者から松田雄一氏へ質問したところ、つぎのような返信に接した。

扱ってお問合わせの Gyalsen 発音の件ですが、ガルツェンの方が正確な発音に近いのですが、我々マナスル隊は毎日新聞がガルツェンとして、当初より取扱ったいきさつもありましたので、ガルツェンとしております。この点は「マナスル」の正式報告の時にも確認しました。多田等編先生によれば、Gyalsen ≡ 勝幢、Norbu ≡ 摩尼の意味だそうで、勝利ののほりという名で、大変縁起のよい名前だそうです。多田先生のチベット名は Tuting Genssen というのだそうです。

すが、このゲンツェンはラサの標準語であり、ギャルツェンと全く同名の由です。だから正式にはゲンツェン・ノルブですが、これがシエルパ語になるとなまってギャルツェンになるそうです。英語のつづりも *Gyalzen* というのが多く、げんにシエルパもギャルツェンといっています。ギャルツェン・ノルブは自から *Gyalsen Norbu* とサインしています。

森本嘉一氏（一九一九—一九六一）

一九六一年五月十一日午前五時四十五分、ランタン・リルン第三キャンプ（五六〇〇メートル）において雪崩のため、大島健司隊員、サーダー、ガルツェン・ノルブ両君と共に遭難死亡、彼の肉体はここで終止符を打ったが、彼の残していった山に対する不屈の精神は、大阪市立大学山岳部の歴史と共に、いついつ迄も語り引継がれていくことでしょう。

ランタン・リルン遠征の計画が一九六〇年二月初旬に決定、発表されてより、翌六一年三月二日勇躍神戸港を、再び故国にまみえることなき運命の迫っていることを露をも知らず、元気一杯、家族や山友達の激励の声に五彩のテープを切って夕闇の

海上に消えていった一年余りというものは、はたの見る眼も、あれほどまでにと思われる程の東奔西走でした。全く研究と準備にあげくれた毎日でした。立案から出発迄全く森本君一人でなされたといっても過言ではありません。

O・B、現役はその時々彼の助手を勤めたに過ぎませんでした。このことは彼の死んだ今、殊更彼の功績を讃えるためでもなく、ましてや彼の責任を云々するためでもありません。今となつては彼に余りにも大きな負担をかけ過ぎ、彼を酷使したることについて全く申し訳けない思いで一杯です。

人一倍のハニカミヤ、人前に出てハツタリを言ったり、ハデな行動をすることの嫌いな彼、出発前に沢山の報道関係者から写真のポーズをいろいろ要求される度に苦笑していた彼、モ一、カンニンシテと逃げまわっていた彼の朴訥な姿が今も目に浮かんでまいります。

彼が今度の遠征で正式に隊長と決定発表された時、各新聞社から彼の横顔といったものを聞かしてほしいと問われて、私はハタと返答に困ったことを思い出します。これといつて特徴のない男、逸話のない山男、華やかさのない同窓、それだけに地味で山岳人の理想像といったものを持っていた男、バックポーンが一本シッカリ通っていた男、所謂頼もしい男でした。彼が出発する時、何か先輩の一人として注意を与えようと思ったが、さて改めて彼の顔を見ると何も言葉が出ませんでした。

それもその筈、自分なんかより数等まさった細心さと、統率力を持った彼を前にしては、彼から教えられるものはあつても、彼に教えるものは何一つないことに気付いて、ただだまって彼の手をシッカリ握っていました。

最後にひとことシッカリヤツテコイヨといったら「気持ちのよい山登りをやって来ます」と云う彼の力強い言葉が、未だにジーンと心の底に焼きついたように残っています。

隊員全部が年代こそちがえ、すべてその時代のチーフリーダーばかりだし、商大の卒業生と云うよりも、商大山岳部を出ましてネ、と口癖のようにいっていた彼を隊長に、「すべてツと云えばカーの気心の解った信頼の持てる山仲間ばかりだから、チームワークには全然心を使う必要はありません。大阪人の土根性で登って見せます」と自信の程をひらめかしてくれた心強さ。

それだけに遭難第一報を耳にした時の驚き、頭の先からスーッと血の気が引く思いでした。

山に生き山に死んで行った心の友、森本君よ……山で死ぬ本望だなど云う奴は、本当に山を知らない人々が洩らす言葉であり、慰めの言葉にすぎません。山は登るためにあり、それには周到な準備と細心の注意をもつてするならば、といつても口癖のように云っていた彼、彼も矢張り自然の無慈悲な猛威の前にあえなく屈したのか。

不可抗力の一言につきる今度の不測の事故は、彼にとつては全く残念だったでしょう。彼のことだ。「アレ！俺はコンナ処に埋っている。隊員達は？ シェルバ達は？」と、今頃はラントン氷河のクレバスの奥深くでコンナことを口走りながら、他の者たちを気づかっていることでしょう。

森本の馬鹿ヤロー、何故お前は死んだのだ。お前とは、山でだけは死なないとアレ程かたく約束していたではないか。

穂高岳の中又白に作った我々のお墓——これは我々山仲間達が山で、或いは戦争で亡くなった人々と共に我々生存者の名前も一枚の銅板に刻んで、岩盤にはめこんだもの——ヒマラヤから帰って来たら皆んな揃って、賑かに元気な雪焼けした顔で報告に行こうと約束していたのに、今年はお前の墓参りに行かねばならぬようになったことは断腸の思いです。

思いのみ先走って、筆がつかぬジレッタさをもどかしく思います。

この度の遭難事故で多数の皆様におかけし、また世間をお騒がせしましたことを深くお詫び申し上げますと共に、海外遭難事件がかくも短時日の間に一応結末の運びとなりましたことは、内外を問わず沢山の人々から寄せられました心暖たまる御注言や御親切な御援助の賜ものと、ただ感謝の念で一一杯でございます。有難うございました。

(泉 隆次郎)

森本嘉一氏略歴

大正八年一月二七日誕生。

昭和一六年一二月 大阪商科大学（市大前身）卒業。ヒマラヤ

遠征当時、ターナー色彩株式会社常務取締役、山岳部時代に冬

の鴨綠江源流の踏査もやった。「山岳」第三六年第一号参照）

昭和二三年二月 日本山岳会入会（会員番号三三四六）。関西

支部委員。

大島健司氏（一九三四—一九六一）

私が初めて大島君に会ったのは、市大へ入って山岳部のルームへ新入部員の申込みに行った時だった。眼鏡をかけ、まだクリクリ坊主の頭をして学生服をきちんと着込んだ彼は、私の目からも初々しくまた可愛らしくもあった。この時彼も入部の申込みにきていたのであった。彼が卒業した春日丘高校時代の友人の話によると、高校時代は別段特定のクラブにも属せず、といてガリ勉型でもなかったようである。私は何故彼が山岳部へ入ったのか、その動機は判らなかつた。その後別段聞く機会もなく終ってしまったので、このことは結局判らずじまいにな

ってしまった。

フレッシュマンの夏山は剣の真砂沢合宿であった。最初の日の粟巣野からの行程は苦しかった。皆重荷と暑さにバテてしまったが、彼だけは元気でキャンプサイトへ着くと、バテて動けなくなつたものの荷物をとりに、今きた道をひき返していった。この時、えらい奴だなあという印象を強く受けた。

その年の冬山は梅池から白馬まで登る予定で、リーダーと私と彼の三人は先発隊で森上から梅池までラッセルした。雪は音もなく降り続き、森林地帯ではスキーをはいても胸ぐらい潜るきついラッセルだった。彼は初めてスキーをはき、それを扱いかねているようだったが、その上借り物のシルが時々切れるので、おくれがちであった。そこで私達は、先に行くとなつていて、ラッセルしていった。目的地で私達は、今ごろ彼は初めてはいいたスキーに泣きべそをかいているぞ、と笑って待っていたが、一時間もすると彼はニコニコ笑いながら、すでに暗くなつた道に姿を現したので、いささか拍子抜けがした。彼はスキーをぬいで、またラッセルをやり直しながら歩いてきたのであった。

二年の冬と春には西穂高の稜線をトレースしたが、彼は春山には参加できなかった。冬山の先発隊は彼と私とフレッシュマン二人であった。最初の日、中の湯で泊つた私達は翌朝早く釜トンネルにさしかかった。釜トンネルの雪ヨケ棚を潜り抜けた

私達は、側面からの雪崩のデブリの傾斜面を鼻歌まじりで歩いてきた。よもやこんなところで、どうこう起る筈はないとたかをくくっていたとたんに、フレッシュマンの一人が足をすべらした。すぐあとを歩いてきた彼は、す早くその腕をつかまえたが、双方とも重荷のためバランスをくずして、その儘崖を滑り落ち、下の滝壺へ水音も高くはまりこんでしまった。私はいつも釜トンネルを通るとき、下の滝壺をみて思わず顔をほころばさずにはられない。あの時は夢中で救い上げたが、あとで考えるとこれはまさに喜劇的アクシデントであった。しかし、この時の彼の態度は彼の性格をよく表していると思う。彼は友人が困まっていると、自分のことを忘れてそれを助けるといふ俠氣の持ち主であった。こんな訳でこの年の冬は彼は山の姿もみずじまいであった。

三年の冬山と春山は、慶応尾根から前穂高北尾根をトレースした。しかし、この時の冬山でも三峰の登りで彼は災難にあつた。丁度三―四の科尔で私と彼は二日間吹雪かれていた。登る途中で円ピを落してしまったので、雪洞が掘れず、私達は狭いツェルトの中で動くに動かれず、体もこぼわってしまった。その頃、名古屋の岩稜会のパーティが、真向いの四峰のAフェースあたりでピバークしていた。吹雪がやみ昼過ぎ、彼等が盛んにコールするので、彼と私は出来れば四峰の頂上から下をのぞいて、そのパーティと連絡をとってみたいと三峰へ登りかけた。

彼がトップで私が確保していた。しかし体がいうことをきかず、彼は常に似合わずスリップし下の谷へおちてしまった。ナイロンザイルはいとも簡単に切れ、私は楽だったが、むかいの岩稜会のパーティは同じようにナイロンザイルがきれ、そちらの方は犠牲者がたつたことをあとで知った。このことで岩稜会の石岡さんのお宅にもよく邪魔した。その後の同会のナイロンザイルについての真摯な啓蒙運動に、彼は深い感動を受けて、その後もこのことについてよく話し合ったものである。この年の春山で、彼と私はまたこの稜線をトレースしたが、ついぞ二カ月程前スリップしたことは顔に出さなかつた。相変らず難しい岩場をたくみにこなしてゆくので私は彼の度胸に感心した。

四年の春山はブナクラ谷から剣へトレースした。最後の学生時代の山であり、先輩風を吹かしてアタックメンパーにしてもらい、私と彼は仲良く剣の頂上を踏んだ。

卒業してからも彼とは同じ会社に入り、山以外のことでも彼から相変らず感化をうけていた。

ヒマラヤ行きがきまり森本先輩と彼が二人きりで横浜港を出るとき、私は一人で彼等を見送りにいった。その日は海からの風がきつく寒い日だった。彼は私に高いデッキの上から、「寒いから早く帰れ！」と何回もくり返して叫んだ。私は今迄の彼とのつき合いでいつもそうであったが、彼の言葉に甘えてテープも切らず、出航前に別れを告げて船から離れた。何遍も振

り返って見たが、いつ迄も彼は私の後姿を見ているようであった。しかし、これが彼を見る最後の機会となったことを思うと、言い知れぬ悲しみに包まれる。(橋本信行)

大島健司氏略歴

昭和九年一月一〇日誕生。

昭和三十一年三月 大阪市立大学卒業。ヒマラヤ遠征当時、関谷

産業株式会社輸出課勤務。

昭和三十五年六月 日本山岳会入会(会員番号五〇三八)。

会務報告

一九六一年十月～一九六二年九月

◇十月理事会 十月五日(木) 図書室

出席者 日高会長、(理事) 渡辺、折井、太田、山崎、金坂、木下、

古沢、川上、田辺、高橋、村木、田村、(評議員) 藤島、交野、須

賀東海支部長、初見、中野、小林(以上北大)

▽議事、報告

一、本会財政の現況について。会費未納者は三十五年度分まで三二〇名

(九月二十九日現在)。

三十五年度分会費収入 一、一〇四、五〇〇円

同支出 二、四三三、六六一円

支出増に伴い財政状態は苦しい。会費値上げの必要がある。

二、ルーム、山荘基金の募集について。

1 クラブルーム移転計画(第一青山ビルの予定) 総額二二〇万円。

2 上高地山荘(日本山岳会山岳総合研究所) 総額二八〇万円。計五

〇〇万円の基金として委員会をつくる。この件については評議員会を開くこと。

三、海外遠征各隊の歓迎会の件。十一月下旬に年次晩餐会をかねて開催する。

四、上高地山荘の件。厚生省の了解を得たので正式に申請書を提出する。開所式は十月下旬の予定、管理人決定次第一般会員に通知する。

五、第三次登山技術指導者講習会の件。

場所、西穂高岳。期日、昭和三七年度三月十八日～二十四日。今年度が最終となるので若い講師を集める方針。

六、登山技術研究委員会懇談会の件。十一月初旬に谷川岳付近で開催予定。

七、米国南極隊長であったフィン・ロネ氏が目下各国を講演旅行中であり、本会でも出来れば日本に立寄るよう米大使館に依頼中、実現すれば朝日講堂で講演会を開きたい。

八、ルーム備付図書の新分類完了の件。

蔵書目録を作製し、会報付録として会員に配布の企画をしている。

九、東京支部十五周年記念パーティーの件。

十月十八日。国際文化会館にて開催の予定。

十、静岡支部の件。大室支部長退任に伴い後任につき理事会として態度決定の必要あり、取りあえず牧野衛氏に支部長事務取扱いを依頼すること。

十一、東京外大蒙古遠征の件。無期延期となる。

十二、北大ヒマラヤ遠征の件。当初の目標カンジロバ・ヒマールをチャムランに変更。中野征紀隊長他六名、期間三月一七日～六月二六日の予定。

◇十一月理事・評議員会 十一月二日(木) 図書室

出席者(理事) 渡辺、折井、山崎、川上、金坂、田村、徳久、古沢、

高橋、(監事) 野口、(評議員) 交野

▽議事、報告

一、アメリカ山岳会ハウス・ストン氏来日の件。ハウス・ストン氏父子との懇談会を十一月十五日、三井本館食堂にて開催の予定。

二、年次晩餐会開催の件。十二月一日(金)午後六時より茗溪会館にて開催に決定。

三、台湾省山岳協会登山隊来日の件。十一月下旬に来日予定の連絡があった。

四、ルーム図書総目録作製の件。

五、文部省主催登山指導者講習会(日本山岳協会)担当全日本山岳連盟の件。

十一月二十三日～二十六日、富士山に於て、本会から講師派遣について。

六、上高地山荘開きの件。

日高会長、山崎、川上、高橋各理事、片桐、竹田、山野井、高山信濃支部長、百瀬、出席。営林署関係者、地元有志と懇談す。

七、日本スポーツ賞(読売新聞社)受賞者推薦について。本年度は該当者なしと回答のこと。

八、昭和三十六年度秋季コーチ会議(休協主催)の件。十一月十一日、順天堂大学に於て、田村理事に一任す。

九、アメリカ内務長官富士登山の件。

十一月四日～五日、植名賞会員、松方副会長、成瀬評議員、折井、田辺理事が同行する予定。

十、昭和三十七年度海外遠征外貨割当の件。現在、北大、日大、京大、大阪大、早大の計画につき計四一、五九八ドルの申請あり。海外登山審議委員会において検討すること。

◇十二月理事会 十二月七日(木) 図書室

出席者 日高会長、(理事) 浜野、折井、太田、山崎、川上、金坂、田村、中島、古沢、徳久、田辺、高橋、(監事) 野口、松本、藤島
越後支部長、岩佐東京支部委員

▽議事、報告

一、ガルトゥエン遺児援助資金募金結果報告。

一般寄附(一二二件)

五六五、六〇九円

本会員寄附(二〇〇件)

二〇三、八七〇円

ヒマラヤ登山隊員(三八件)

二〇三、五〇〇円

会計(三六〇件)

九七二、九九九円

二、海外遠征の件。十一月二十九日海外登山審議委員会を開いた結果、外貨の割当額と要求額に大きな差があるので、一応白紙に戻し十二月十日各隊の代表者と話し合いをすることにした。

京大、サルトロカンリ

一三、四〇四ドル

北大、チャムラン

一〇、七二四・三五ドル

日大、ムクト・ヒマール

六、三六〇・八〇ドル

大阪大、P 29

六、五〇〇ドル

早大、アンデス

五、六九四・六ドル

計

四二、六八三・七五ドル

割当予想は二万ドル以上は無理の模様。

三、静岡支部長後任について。牧野衛氏に依頼することに決定す。

四、インド政府主催「高所医学に関する研究会」昭和三十七年一月五日～七日、ダージリンに於て、本会より辰沼会員を派遣することを決定。

五、山梨岳連懇親会に本会より沼倉寛二郎氏(東京支部評議員)出席。

六、ルーム、山荘基金寄附申込の件。

賛助会員を設け大口寄附を受入れては如何、評議員が推薦した個人及

び団体を受けるか等につき意見の交換あり。
七、ハウストン氏より山岳圖書の寄贈申出に接す。五月頃アメリカより
送付ある筈。

八、近藤等会員(在バリ)、フランス国立登山学校入会の件、承認。

九、福岡支部の件。北九州支部を改めて福岡支部とする。

支部長、末松大助、副支部長、高尾徳繁、顧問、岡田喜一の各氏が就
任した。

福岡県在住会員五十一名(十一月末現在)。

事務所、八幡市中央町SSスポーツ内。

十、法政大学山岳部三十五周年記念祝賀会の件。十一月十一日、私学会
館にて。太田理事が出席した。

◇一月理事・評議員会 一月十一日(木) 図書室

出席者 日高会長、松方副会長、(理事) 渡辺、折井、浜野、山崎、

太田、川上、金坂、村木、木下、田村、田辺、古沢、中島、徳久、

(監事) 野口、松本、(評議員) 神谷、深田、望月、永井大分支部
長、岩佐東京支部委員

▽議事、報告

一、登山遭難対策打合せ会(文部省主催)の件。一月十三日、午後二時
より文部省において、浜野、山崎理事出席のこと。

二、登山技術指導者講習会の件。

本年度講習会(第三年目)を以って一応予定のコースを終ることに
なる。テキストは一月下旬に出来る予定。

三、次期登山技術研究委員会の在り方について。ヒマラヤ登山を目標と
して総合研究と資料の整理、調査を行いたい。そのためヒマラヤ委員
会と連絡の下に、各部門それぞれの活動を行うことが可能と思われる

ので、この方向に進みたい。(ヒマラヤ委員会に対しては、日高会長、
折井理事から内容説明することにして承認。)

四、会費値上の件。

東京支部所属会員と他の地方支部会員の会費の均衡について考慮を要
す(例、東京一六〇〇円、地方二二〇〇円)。

終身会費については常識的な線で考えたい。尚原案を各支部長に送り
意見を聞くこと。

五、山日記の件。六二年版、三二、七〇〇部印刷 既に関係先に配布、
一般発行良好。

六、新年度役員会の件。常務理事に一任。

◇二月理事・評議員会 二月一日(木) 図書室

出席者 日高会長、(理事) 渡辺、折井、浜野、太田、川上、徳久、

村木、田村、木下、中島、古沢、(評議員) 深田、小原、青木、(監

事) 野口、牧野静岡支部長、岩佐東京支部委員

▽議事、報告

一、新年度役員推薦の件。

日高会長が健康上の理由で辞任を希望されるに伴い次期会長、副会長
その他についても新しい構想をたてたいので、人材の推薦を願ひ三月
役員会までに会員総会上提の推薦者を決定すること。

二、新年度予算編成につき各担当理事より資料提出のこと。

三、ルーム、山荘募金の応募状況。

先般各会員宛依頼状発送により、一月末までに一、三八三、五〇〇円
の申込あり、各支部関係の分は未着につき予想つかない。

四、海外登山の外貨割当について。

北大は昭和三十六年度分の中から種目振替で割当を貰える見透しがつ

いた。京大、早大は昭和三十七年度分の体協割当を以てする。日大は一般外貨が割当てられた。

五、第三次登山技術指導者講習会テキスト作成について。

第三次を以って一応講習会が終了となるので、今までの反省と検討の上、テキストを作成したので批判されたい。なお入票の向あれば申込まれたい。

六、第二一八回小集会の件。

恒例による現地小集会は三月三日(土)～四日(日)宮城支部担当、蔵王かもしか温泉白雲山荘にて開催する。会費六百元、多数参加を希望する。

七、静岡支部の現況について。毎月第二土曜日に定例会合をもつことにした。現在支部所属会員三十六名。

八、山形支部主催冬山登山技術講習会へ講師派遣の件。

二月十五日～十八日(日)蔵王山にて、川上理事を派遣決定。

九、文部省主催の遭難対策協議会について。豊林、気象、電々公社、群馬県、長野県、警察各方面から出席あり。浜野理事出席、具体的な決定事項なし。

十、山日記一九六二年版反省会について。

二月二十日午後六時、本会ルームにて開催の予定。

十一、「山岳」総索引について。

故沼井鉄太郎氏著作の原稿を刊行したいので担当者を決めて年次計画にのせ、予算措置を講じたい。

◇三月理事・評議員会 三月八日(木) 図書室

出席者 日高会長、松方副会長、(理事)渡辺、浜野、折井、太田、山崎、川上、金坂、村木、田村、(監事)野口、松本、(評議員)藤

島、深田、成瀬、神谷、高山信濃支部長、牧野静岡支部長、辰沼、

▽議事、報告

一、役員改選につき候補者推薦の件。

日高会長辞任につき、後任に現松方副会長、三田副会長留任、副会長の後任として渡辺常務理事を推薦、新理事に辰沼広告、皆川完一、竹田吉文三氏を推薦。太田理事辞任の他は現理事を推薦する。

新東京支部長に石原憲治氏、監事松本熊次郎氏留任を総会に提出すること。

(来年度日本山岳協会長は日高会長に代って新会長が就任することになる。)

二、役員会の在り方について。

理事会が単なる事務連絡のみに終る傾向があるが、会としては山の思想的な面も掘下げて考える必要がある。常務理事会、常任委員会など週一回位開くようにしたい。支部長会も年三回位は開いて各支部相互との連絡を十分にしたい。

三、通常会員総会開催の件。

期日、四月二十一日(土)、場所、体協会議室、同日東京支部総会も開催する。

四、会費値上げについて。

① 地方支部 一二〇〇円(支部費は各支部の実情により決定する。)

② 東京支部 一六〇〇円(支部費として一〇〇円を含む。)

③ 入会金は三〇〇〇円。終身会員会費は一〇万円、但し二〇年以上在籍会員は五万円とする。

五、ルーム・山荘募金について。

二八八名申込み、一、七五五、五〇〇円(二月末現在)。各役員には

重ねて募金方をお願いする。

六、「山岳」五十六年広告の件。

広告代十七万八千円也申込みを得たので、今月末発行の予定。

七、海外登山の外貨について。

日大、北大は既に学術調査として外貨割当を獲得したので、体協割当

の外貨は京大、早大に決定した。

八、第三次登山技術指導者講習会の件。

三月十八日～二十四日、西穂高岳、今回は歩くことを中心に基礎的なものを徹底して実施する。

九、インド国防省主催「高所医学に関するシンポジウム」出席報告（辰

沼）。

期間、一月四日～七日、場所、ダーズリン。

十、韓国山岳会について。

海外遠征（マッキンレー）の計画あり。日本装備の展示希望あり。な

お学校山岳部の交流につき申込みがあった。

◇四月理事・評議員会 四月五日（木）図書室

出席者（理事）折井、浜野、山崎、川上、太田、田村、古沢、中

島、徳久、（監事）松本、（評議員）神谷、深田、織内

▽議事、報告

一、通常会員総会開催の件。

期日、四月二十一日（土）午後二時より。

場所、日本体育協会々議室にて、なお東京支部総会を午後一時三十分

よりとする。

報告、一九六一年度の行事、決算報告。

議案、一九六二年予算案。

会長、副会長、定款改正（会費、入会金の値上げ）

理事改選、新理事として辰沼弘吉、皆川完一、竹田吉文、及び

松本監事は再任を推薦決定。

今年度に限り地方支部に年会費中から一〇〇円を還元する方法を考

慮したい。

二、中華民国台湾省体育会山岳協会訪日登山の件。神戸に四月七日頃着

予定。富士山、八ヶ岳、北アルプスの山に登る計画、東京着の上詳細

打合せする。

三、韓国山岳会より装備展示につき協力要請の件。本会として出来るだ

け援助する。なお、共和運動具製作所竹内社長からも賛意あり。

四、富士山頂気象観測所員の疲労調査について、報告書が出来た。

五、図書案件。分類の整理が完了した。

六、第三次登山技術指導者講習会終了のこと。

期間、三月十八日～二十四日、場所、西穂高岳、受講者、三十五名

講師及び連絡員三十二名計六十七名参加す。三ブロック別を実施した

講習会はこれで終了。今回は雪に馴れない者が多く、バランスの点で

はレベルが低いようであったが、非常に真面目であった。来年からは

新しい方針で、海外登山についても諸研究を行い度い。

◇通常会員総会 四月二十一日（土）体協会議室。

▽議事、報告

一、一九六一年度事業報告並びに各支部報告。

二、一九六一年度決算報告。

三、一九六二年予算案付議、可決。

四、定款改正の件。入会金三千円（現二千円）年会費は東京都、神奈川

県、埼玉県、千葉県在住者、千六百元。その他地域の在住者、千二百

円(現八百円)。終身会費(一時金)十万円。但し入会後二十年を経過した会員は五万円とする(現五万円)。可決。

五、会長、副会長改選の件。

会長、松方三郎。副会長、三田幸夫、渡辺公平各氏を連任(一九六二年～六四年)。

六、一九六二年理事として、浜野正男、折井健一、山崎安治、古沢肇、木下是雄、金坂一郎、村木潤次郎、徳久珠雄、川上隆、高橋進、日下田実、田村扇一、中島伊平、田辺寿、辰沼広吉、皆川完一、竹田吉文各氏を選任、会長、副会長を含め二十氏に決定。

七、監事一名改選の件。

松本熊次郎氏再任(一九六二年～六三年)を可決。

八、緊急提案事項、退任された日高前会長を評議員に推薦。可決。

◇五月理事・評議員会 五月十日(木) 図書室

出席者 松方会長、渡辺副会長、(理事) 浜野、折井、山崎、川上、辰沼、中島、村木、古沢、皆川、高橋、田辺、竹田、(監事) 松本、(評議員) 神谷、成瀬、深田、北川宮城支部長、後藤山形支部長、永井大分支部長、岩佐東京支部委員

▽議事、報告

一、理事の事務分掌。

(常務理事) Ⅱ 浜野(企画、遭難対策)、折井(総務、海外連絡)、山崎(指導、編集)、川上(総務、集会)、中島(経理、集会)、辰沼(調査、研究)。

(理事) Ⅱ 古沢(会報)、木下(調査、研究)、村木(海外登山)、徳久(図書)、金坂(指導)、高橋(指導)、日下田(指導)、田辺(指導)、皆川(山日記)、田村(調査、研究)、竹田(総務)。

渡辺副会長(編集、支部担当)
二、委員委嘱の件。

① 海外登山審議委員会 Ⅱ 委員長は従来会長兼務であったが前会長日高信六郎とし、松方三郎、三田幸夫、榎有恒、入沢文明、今西錦司、渡辺公平、竹節作太、成瀬岩雄、堀田弥一、小原勝郎、加藤泰安、望月達夫、今西寿雄、辰沼広吉、金坂一郎、村木潤次郎、松田雄一。

② ヒマヤ委員会 Ⅱ 委員長三田幸夫、成瀬岩雄、小原勝郎、金坂一郎、村木潤次郎。

③ 登山技術委員会 Ⅱ 委員長松方三郎、浜野正男、折井健一、山崎安治、金坂一郎、川上隆、村木潤次郎、田村扇一、加藤喜一郎、今西寿雄、梶本徳次郎、石島襄二、高橋進、田辺寿、片桐理一郎、日下田実、竹田寛次、山野井武夫。

④ 山日記編集委員 Ⅱ 大貫良夫。

⑤ 図書委員会 Ⅱ 深田久弥、小林義正、大橋晋、朝倉宏、鈴木郭之。

三、登山技術研究委員会の件。
第三次登山技術指導者講習会も終了したので、新年度は海外登山の研究を積極的に進めることにしたい。

四、新潟県山岳協会主催登山講習会の件。

四月十四日～十五日谷川岳にて三十九年度国体飯豊登山のリーダー養成のため講習会が行われ藤島越後支部長、川上理事が参加。

五、支部よりの希望事項。

大分支部 Ⅱ 各支部単位に講習会的なものを実施されたい。会報を支部に余分に送付されたい。

宮城支部 Ⅱ 第二八回現地小集会は盛会に終了したが、今後も支部主催行事に各地から多数参加されたい。

山形支部Ⅱ地方講習会には積極的に講師を派遣されたい。熊肉を喰う会を開催(五月十二日〜十三日、大井沢にて)につき多数の参加を希望する。

六、山日記編集の件。

年内出版を目標に既に編集を初めた。

七、高体連登山の件。

七月、八ヶ岳において、文部省、高体連主催で講習会を行うにつき援助されたい意嚮あり。

◇六月理事会 六月七日(木) 図書室

出席者 松方会長、渡辺副会長、(理事)折井、浜野、山崎、辰沼、古沢、木下、徳久、村木、高橋、田辺、(監事)野口、高木関西支部委員、岩佐東京支部委員

▽議事、報告

一、役員会運営の件。

理事会の開催は従来通り第一木曜日午後六時半から八時半とする。常務理事、常任評議員会を毎月二十日前後の昼食時に開催の予定とする。

二、支部長会議開催の件。

七月十四日(土)午後三時〜七時、国際文化会館にて開催予定。

三、日本山岳協会役員総会の件。

六月十一日(月)日本山岳会図書室にて。協会規約により、協会副会長に松方会長、浜野退任(大阪転勤のため)、残任期間を山崎理事、なお専務理事には渡辺副会長に就任願うことにする。議案、報告として会計報告(三五・六年度)、事業報告、計画が提出される筈。

四、第十六回ウェストン祭の報告。

六月二日〜三日、徳本峠越えにて上高地に入り、三日碑前祭を行った。

五、訪日台湾省山岳協会登山隊帰国の件。

蘇梅燿隊長外十名四月十一日來日以來予定の登山を終了し、六月十二日帰国した。なお今回を契機として、日本からも渡台登山の希望がある。(同志社、早大ワンゲル、静岡支部等)。

六、上高地山荘の件。

使用規定を制定し会報に発表、会員の利用を希望する。管理は信濃支部で担当する。

七、フランス山岳会、クラブ・インストラクターに沂藤等(在パリ)、岡村崔両氏を派遣する。

八、読売新聞社主催、立山登山講習会に共催依頼あり、可決する。

九、富士山美化清掃の件。

国土美化の会主催、本会にも呼びかけがあり、第一回打合せ会(五月二十一日)に石原東京支部長が出席した。

十、富士山頂研究所開設の件。

例年通り七月〜八月開設に決定。

十一、日本山岳会医療連絡会の件。

夏山診療所開設に厚生省より支給される薬品類は連絡会で一括受領し配布に決定。

十二、図書目録和書の部完成の件。

会報発送時に同封し会員に配布する。

十三、山日記の件。

六十三年度山日記の予定原稿決定につき依頼中。

十四、山梨支部百瀬舞太郎氏果敢功績者表彰祝賀会の件。

五月二十七日甲府にて、渡辺副会長、折井理事出席。
十五、東京薬科大学山岳部十周年記念会の件。

本会に招待あり、六月十七日、辰沼理事出席とする。

◇七月理事會 七月五日(木)、図書室

出席者 松方会長、渡辺副会長、(理事)折井、山崎、辰沼、金坂、木下、古沢、皆川、竹田、(監事)野口

▽議事、報告

一、ルーム、山荘募金の件(六月三十日仮締切)

口数Ⅱ三百三十六口、申込額Ⅱ二百十二万八千六百円也。八月発行予定の会報に寄附申込者氏名を報告する。なお募金は続ける。

二、本年度会費納入状況について。

六月三十日現在、納入者二百八十三名。年度末といわず早く約入されるよう会員に依頼すること。

三、支部長會議(七月十四日)議題について。

①海外登山の経過報告。②山日記に対する要望。③支部よりの要望。

④その他を中心に懇談したい。

四、報知新聞社より「山岳遭難救助法実技公開」につき後援及び講師派遣依頼の件。

七月十五日、三越本店にて。後援と講師として山崎理事派遣を決定。

五、新生活運動協会より「旅の新生活運動」の協賛名義使用依頼あり。

承認。

六、会員章の件。

戦前の会員章と同程度のものにするよう見本を作ったので、今後のものはこれに決定。希望会員には実費で作ること。

七、山日記の件。

各県の遭難対策に関する組織を調査の結果、二十七県に何らかの組織があり相当量の資料が集った。カットに山小屋を入れたいので適当な写真を集めたい。日記欄に日々の山岳史など掲載を考えている。

八、ベースボールマガジン社より「登山入門書」執筆依頼の件。

登山技術委員会編とすることで承諾。

九、海外遠征について。

七月十九日にヒマラヤ委員会、登山技術委員会、常務理事で次期海外遠征について懇談会をする。

十、静岡支部「訪中華民国登山隊」の件。

台湾省山岳協会へ連絡し準備中。

◇九月理事・評議員會 九月十三日(木) 図書室

出席者 松方会長、三田副会長、(理事)折井、辰沼、山崎、中島、川上、金坂、古沢、田村、村木、徳久、田辺、皆川、高橋、(監事)

野口、松本、(評議員)藤島、神谷、深田、篠田、織内、石原東京

支部長、岩佐東京支部委員。

▽議事、報告

一、山岳「五十七年」発行の件。

五十六年と同様に広告二十万円は確保したい。内容①山岳十話(稜)

②コルディエラ・ブランカとアポロパンバ(吉沢)③ペルー・アンデ

スの山(藤木)④P 29の西面(篠田)⑤未踏の山ランタン・リルン

(広谷)⑥ビッグ・ホワイト・ピーク(梶本)⑦マッキンレー登山

(交野及び吉阪)⑧西部カラコルム紀行(島)⑨劔岳源治郎尾根の由

来(馬場)⑩ヒマラヤ登山年譜(統)(田中他)他。編集Ⅱ望月。

二、立教大学山岳部創立四十周年記念会(十月五日)招待の件。

松方会長に出席願うこと。

◇木暮祭 十月二十二日(日)山梨県金山平にて碑前祭。日高会長、藤木顧問、小野幸氏及び地元関係者出席す。

◇ユードル米内務長官の富士登山 十一月四日(日) 姓名警備員、松方副会長、成瀬評議員、折井、田辺理事、百瀬舞太郎、松方峰雄会員と登った。

◇ハウストン父子の来日 ハウストン父子(オスカ・チャールズ両氏)を囲んで有志懇談会を十一月十五日、三井本館食堂にて開催。出席者近藤茂吉、植有恒、日高信六郎、松方三郎、西堀栄三郎、吉沢一郎、島田巽、小林義正、交野武一、加藤泰安、山崎安治、辰沼広吉、松田雄一、田辺寿、折井健一。

◇北九州支部改組 十一月十五日、従来の北九州支部を改組して「福岡支部」とする。支部長末松大作氏。副支部長高尾徳繁氏が新しく就任。

◇年次晚餐会 十二月一日(金)於茗溪会館 海外遠征の各隊一橋大学、関西学院大学(以上アンデス)、大阪大学、大阪市立大学、日本岳連桐本隊長(以上ヒマラヤ)の歓迎を兼ねて盛大に開催、出席者九十六名。

◇第三次登山技術指導者講習会 三月十八日(土)二十四日、西穂高山荘をベースに、四国、中国、九州の十六県より各二名選出の受講者により、チーフ・リーダー浜野正男、講師日高会長等役員団三十二名が、日本山岳協会主催、責任担当日本山岳会として実施。台北市登山会周廷旺が特別参加した。

◇中華民国台湾省山岳協会訪日登山隊歓迎会 四月二十一日(土)於休協会議室。

登山隊員、蘇梅瑠、余初雄、紀林全、莊国章、陳建地、鄭丁塗、曾耀麟、郭光仁、林陳查某、鄭林阿却、鄭清玉、十一名を囲んで歓談す。

出席者五十名。

◇第十六回ウェストン祭 六月二日(日)徳本特越え、上高地にて碑前祭と記念講演会が開催された。

◇有志懇談会(第五回) 六月十七日(日)小石川六義園心泉亭にて。出席者二十六名。

◇支部長会議 七月十四日(土)国際文化会館にて。出席者、池田(石川) 牧野(静岡) 末松(福岡) 藤島(越後) 水野、津田(関西) 須賀(東海) 高山(信濃) 福田(秋田) 石原、岩佐(東京)、松方会長、渡辺副会長、日高、神谷、青木、織内、野口、松本、辰沼、金坂、川上、山崎、竹田、中島、折井、太田、皆川、坂本。

各支部情報交換、特に支部主催諸行事に対し積極的な援助をする。支部地域会員で、その支部に未登録者については調査し支部に連絡を計ること。山日記の資料について各支部から現地情報を通知願うこと。山岳協会の運営には役員会の回数を増し、対人関係を通じ円滑化を計り、地方岳連の育成につとめること等懇談した。

◇富士山頂研究所開設 厚生省国立公園管理人舎にて、七月十四(八月三十一日、医師延人員二十九名、患者総数一三六〇名)。

◇上高地山荘開設 六月二十日より。

①使用は原則として本会々員及びその同伴者に限る。②使用者は予め信濃支部に申込み許可を取付ける。③使用に際しては使用許可書を管理人に渡し、会員証(当該年度)を提示する。以上の使用規程により会員の利用に供する。バス開通期間は管理人常駐の見込み。

◇山岳 五十六年を三月三十日発行、編集者望月達夫。

◇会報 二一七号(二二二号)を発行、編集者古沢肇。

◇山日記 一九六二年版(第二十七輯)を十二月二十日発行、編集担当理事渡辺公平、委員皆川完一。

一九六二年度役員

会長 松方三郎
副会長 三田幸夫、渡辺公平
常務理事 浜野正男、折井健一、山崎安治、辰沼広吉、川上隆、中島伊平
理事 古沢肇、木下是雄、皆川完一、金坂一郎、村木潤次郎、徳久球雄、高橋進、日下田実、田村扇一、田辺寿、竹田吉文
監事 野口末延、松本熊次郎

常任評議員 入沢文明、成瀬岩雄、望月達夫、小原勝郎
評議員 日高信六郎、藤島敏男、神谷恭、早川種三、交野武一、伊藤秀五郎、今西錦司、深田久弥、篠田重治、橋本三八、青木昇

織内信彦、今西寿雄、藤井運平

評議員 荒巻広政(秋田)、後藤幹次(山形)、伊藤弥十郎(福島)、

北川正次(宮城)、藤島玄(越後)、石原憲治(東京)、三井松男(山梨)、高山忠四朗(信濃)、中田勇吉(富山)、池田知幸(石川)、牧野衛(静岡)、須賀太郎(東海)、水野祥太郎(関西)、織田収(山陰)、末松大作(福岡)、永井清(大分)、三谷孝一(熊本)

顧問 藤木九三

山岳バツクナンバー

第四四年二号	一八〇円
第四六・四七年	四〇〇円
第四八年	四〇〇円
第五〇年	五〇〇円
第五一年	五〇〇円
第五二年	五〇〇円
第五三年	五〇〇円
第五四年	七〇〇円
第五六年	八〇〇円

★右各号在庫品が僅かに残っています。会員には右記定価の二割引きで、おわかり致しますので、御希望の方は本会事務室まで御申出下さい。

★郵送御希望の方は、別に郵税を御負担下さるようになります。

SANGAKU

The Journal of The Japanese Alpine Club

Vol. LVII

Issued in March, 1963

Contents

(in English)

Andes Expedition, 1961	By Ichiro Yoshizawa.....	1
The Peruvian Andes Expedition, 1961	By Takane Fujiki.....	8
Peak 29, 1961.....	By Gunji Shinoda.....	11
Langtang Lirung, 1961	By Koichiro Hirotani.....	13
Jugal Himal, 1961	By Tokujiro Kajimoto.....	15
Mt. McKinley, 1960	By Takeichi Katano.....	17
Climbing the South-West Ridge of Mt. McKinley	By Takamasa Yoshizaka.....	18
West Karakoram, 1961	By Sumio Shima.....	20

(in Japanese, except the articles mentioned above)

Random thoughts of mountain and mountaineering	By Yuko Maki.....	1
Origin of the "Genjiro Ridge" of Mt. Tsurugi.....	By Chuzaburo Baba.....	165
The Leaders' Institute of winter climbing held by the Japanese Alpine Club.....	By Ichiro Kanesaka.....	168
In Memoriam :		
Haruo Yamazaki, Gyaltzen Norbu, Kaichi Morimoto, Kenji Ohshima		173
Club Proceedings.....		211
Himalayan Chronicle, 1954-1955.....	By Eizo Tanaka and Katsuyoshi Baba.....	23

Editor : Tatsuo Mochizuki

Associate Editors : Kohei Watanabe, Kenichi Orii, Yasuji Yamazaki

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : No. 6, 4-chome, Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo.

.....
(April, 1962~March, 1963)

President : Saburo Matsukata

Vice-Presidents : Yukio Mita, Kohei Watanabe

Honorary Secretary : Kenichi Orii

Honorary Editor : Tatsuo Mochizuki

Honorary Librarian : Tamao Tokuhisa

Honorary Treasurer : Ihei Nakajima

Auditors : Suenobu Noguchi, Kumajiro Matsumoto

.....
Committee

Hajime Furusawa	Masao Hamano	Minoru Higeta
Ichiro Kanesaka	Takashi Kawakami	Koreo Kinoshita
Kwanichi Minagawa	Junjiro Muraki	Ihei Nakajima
Kenichi Orii	Susumu Takahashi	Yoshifumi Takeda
Senichi Tamura	Hisashi Tanabe	Hirokichi Tatsunuma
Tamao Tokuhisa	Yasuji Yamazaki	

.....
Council

Noboru Aoki	Unpei Fujii	Toshio Fujishima
Kyuya Fukata	Sanpachi Hashimoto	Tanezo Hayakawa
Shinrokuro Hidaka	Kinji Imanishi	Toshio Imanishi
Fumiaki Irisawa	Hidegoro Itoh	Kyo Kamiya
Takeichi Katano	Tatsuo Mochizuki	Iwao Naruse
Katsuro Ohara	Nobuhiko Oriuchi	Gunji Shinoda

.....
Heads of Local Branches

<i>Akita</i> : Hiromasa Aramaki	<i>Yamagata</i> : Kanji Gotoh
<i>Miyagi</i> : Shoji Kitagawa	<i>Fukushima</i> : Yajuro Itoh
<i>Echigo</i> : Gen Fujishima	<i>Tokyo</i> : Kenji Ishihara
<i>Yamanashi</i> : Matsuo Mitsui	<i>Shizuoka</i> : Mamoru Makino
<i>Shinano</i> : Chushiro Takayama	<i>Tokai</i> : Taro Suga
<i>Ishikawa</i> : Tomoyuki Ikeda	<i>Toyama</i> : Yukichi Nakada
<i>Kwansai</i> : Shotaro Mizuno	<i>Sanin</i> : Osamu Oda
<i>Fukuoka</i> : Daisaku Suematsu	<i>Kumamoto</i> : Koichi Mitani
<i>Oita</i> : Seiichi Nagai	

.....
Adviser : Kyuzo Fujiki

Andes Expedition, 1961

By Ichiro Yoshizawa

(I) Pucahirca Norte (6050 m)—Cordillera Blanca—

The Hitotsubashi National University Expedition to the Andes of 1961 was organized and despatched by the Expedition Committee of the Hitotsubashi University Alpine Club, sponsored and realized not only by the Asahi Press, but also by many leading trading and manufacturing companies. They kindly contributed nearly 22 thousand dollars to the expedition in the form of equipments and other materials as well as much need cash.

We hoped to celebrate the 85th anniversary of the foundation of the University and at the same time to immortalize the 40-year existence of the Hitotsubashi University Alpine Club. I have been, to my great honour, an active member of the club since its inception.

The main objective of our expedition was the first ascent of Pucahirca Norte (6050 m) in the Cordillera Blanca of the Peruvian Andes. After having attacked Pucahirca, successfully or unsuccessfully, we would then go over to the Cordillera Apolobamba which lies north of the famous Titicaca Lake and also on the frontier between Peru and Bolivia. There we had especially hoped to explore and climb the Pupuya group which was found but left untouched by the German Expedition in 1957.

The names of our 7-man expedition are as follows : (all are the graduates or students of the University.)

Ichiro Yoshizawa, the leader (57)

Jiro Amari, the sub-leader (27)

Tamotsu Nakamura (26)

Noriji Maruyama (26)

Shigeo Nakagawa (23)

Hiroshi Nakajima (23)

Kei Kurachi (22)

Now, to begin with, I must send my heartiest thanks, especially to the famous Himalayanist Mr. Nicolas B. Clinch of Berkeley, (now residing to South

Pasadena) California who helped us by all sorts of precious advice and information about the Pucahirca group. He and his companions were there in 1955, and explored and climbed some high and virgin peaks of the group for the first time.

Besides Mr. N.B. Clinch, I can not forget the names of the following "alpinistas" who gave us much valuable advice and instruction which contributed to our successes in the Cordillera Blanca and Apolobamba.

Charles S. Houston (Aspen, Colorado), Geoffrey C. Bratt (Tasmania, Australia), Fred N. Lakin (Tasmania, Australia), Mr. Leigh and Mrs. Irene Ortengurgers (Los Altos, California), Raymond Leininger (Paris), Günther Hauser (Stuttgart, West Germany), Emanuele Andreis (Torino, Italy), Alessandro Musitelli, (Bergamo, Italy), Mr Francis P. Farquhar and his wife (Berkeley, California).

At the beginning of our expedition, we were thrown into confusion with the problem of nomenclature. In the opening stages of our campaign we had decided that our primary object was to make the first ascent of Central Pucahirca, according to the account and ridge diagram of Mr. Harbey N. Platts who wrote "Nevado Pucahirca" in the *American Alpine Journal* (1956). Both the Raymond Lambert's party (1957) and Bruno Berlendi's party (1960) attacked Central Pucahirca, too. In fact there were actually two Central peaks which had kept their virginity until the middle of June 1961.

To our great good fortune, we found the real objectives only after we arrived in Peru. An Italian expedition began an ascent of the southern Central Peak (C. 6000 m) and we attempted the northern Central Peak (6050 m) which is now known as North Pucahirca or Pucahirca Norte.

Thus we could attack the two virgin peaks respectively with peace. The Italians started from Huaras, the capital city of the Department of Ancash, which lies on the western side of the Cordillera Blanca, about one week earlier than our departure.

We left Huaras (which means "the Great Daybreak" in old Quechua) on the 27th of May. The weather was very fine as is usual in those days of the dry season. Many spirelike white peaks of the Cordillera Blanca seemed so near, and yet were many, many kilometers away. Mr. S. Tanikawa and his family sent off us on the outskirts of the town. Mr. J.M. Ramirez (40) who had accompanied the American expedition in 1955 as interpreter and keeper of their base camp, shook hands with us, too, and wished us success in our climbing.

From the lake Yanganuco, we travelled up and down on horseback through

the very interesting country of the Quechua tribes. Portachuelo de Yanganuco is one of the highest "puntas" (pass, 4767 m) in the Cordillera Blanca and 1000 m higher than Mt. Fuji in Japan.

When I descended down this pass, I was caught by a severe "soroche" (mountain sickness) for the first time. But as our caravan went on, I gradually recovered from my sickness; and after 4 days arduous marching, we at last reached the base camp site under the Pucahirca glacier on May 31 st. The altitude of this Märchen-like place was 4000 m.

After establishing this camp, we followed almost the same route taken by the American party in 1955 as far as the upper glacier plateau.

On the way to Camp I (4700 m), we found some cairns built by Americans, and moreover, by the side of our camp, we were very pleased to find some remains of their former camp lives there.

When we climbed on the glacier plateau, we were so much astonished and pleased that the peaks of the Italian party and of ours were entirely different.

We found that the aim of the Italian party is "real" Pucahirca Central which stands on the left side of Pucahirca Norte. So-called Pucahirca North, which was climbed by the Americans' party was seen on the right side with snow cornices overhanging to the north. Moreover, we were all very happy to find out that our Pucahirca Norte was the highest peak in that group.

Camp I was established on the 2nd of June and I sent off the reconnoitering parties to climb up and down the rock spur which descends from the Americans' peak. At last we found a very negotiable rock-shelf on the lower part of this spur.

Crossing this comparatively broad and easy shelf, we climbed a glacier hill and down the sheer snow slope to the South Glacier which descends from the col between Pucahirca Norte and the Americans' Peak.

Under the great hanging side-glacier and of course on the spot where there seems no danger from it, we made our Camp II (5150 m) on the glacier terrace. The site of Camp III (5400 m) was found under the rock wall directly below the perpendicular rocky cliff of the Americans' peak.

Ice-fall between Camp III and the col was a little difficult and dangerous. The great crevasse between the col and the upper end of the ice-fall was most difficult to cross. It took the first attacking party about 4 hours to cross which delayed their reaching to the top of Pucahirca Norte.

The time records of the climbing parties are as follows.

- The first reconnoitering party (J. Amari, H. Nakajima, K. Kurachi)
 —June 11 th—CIII (7.00 a.m.)—Ice-shelf (5650 m, 2.00 p.m.)—CIII (4.00 p.m.)
- The first attacking party (T. Nakamura, H. Nakajima, S. Nakagawa)
 —June 12 th—CIII (5.40 a.m.)—Ice-self (9-9.30 a.m.)—Under lip of the great crevasse (10.30-11.00 a.m.)—Upper lip (3.00 p.m.)—Snow plateau of the col (3.15 p.m.)—main ridge (4.45 p.m.)—Top of Pucahirca Norte (6.15-6.45 p.m.)—bivouac (5750 m, Upper lip of the big crevasse, 9.00 p.m.)
 —June 13 th—Bivouac (6.20 a.m.)—Ice-shelf (9.30-10.00 a.m., met with the second party)—CIII (11.15 a.m.)—to C II
- The second attacking party (J. Amari, N. Maruyama, K. Kurachi)
 —June 13 th—CIII (5.25 a.m.) —Ice-shelf (7.30-9.30 a.m.) —main ridge (12.00-12.30 p.m.)—Top (1.25-3.50 p.m.)—main ridge (4.15 p.m.)—point of bivouac (4.30 p.m.)—CIII (6.50 p.m.)

Thus we completed the first ascent of Pucahirca Norte which has remained as virgin until 1961. It is not so high when compared with those of the highests of Himalayas. But we had no glacier experiences in our country before. Fortunately, we met with many interesting and reasonable difficulties in the ice-falls, on the ice walls, or over the great crevasses and treacherous snow slopes.

As for me, 57 years I contented myself to climb as high as CIII (5150 m) in this case. But later on, I was happy enough to make a first ascent of a 5450 m peak, named Cacahuaycho ("Bird Mountain") and a second ascent of a 5836 m high peak, Huelancaloc, in the Cordillera Apolobamba.

The main objective of our expedition has been solved satisfactorily. By the late evening of the 14th of June, a little electric light came down flickering on the sparsely forested side slope. I was literally alone in our base camp. The electric light got nearer. I stood in the dark pampas. I shouted through this darkness. "Who, in the world, are you?" The little light replied "I am Nakajima. I came down alone all the way from CIII, to inform you, our Jefe, about our successful climb. All the climbing members reached the top and returned to the lower camps without incident."

Hearing these words, I embraced him warmly by his shoulders and could not keep my tears back. At last, we had done it. A lot of many faces of my friends, of my family, especially of my old mother who has been eagerly waiting for her old son's success, good news, ran fast before me. we had done it, it is true. The last unclimbed peak over 6000 m throughout the long Cordillera Blanca

now kindly gave us its white and virgin tower.

The route which we took in our return journey, was almost the same as that of the American expedition in 1955. So I think it is not necessary to say more here about the last part of our travels to Huaras.

(II) Cordillera Apolobamba

—Northern part and Southern part (Pupuya group)—

There is a mountain called Huelanccallo (5836 m) in the southern part of the Cordillera Apolobamba which stretches about 100 kilometers from Peru to Bolivia, crossing the boundary line of the two countries. This mountain was climbed for the first time in 1957 by a German party of which Mr. Werner Karl was the leader. From its top, they found a splendid mountain group including many fine virgin ice peaks stretching southward as far as the endless and hazy Bolivian pampas. I was very much impressed when I read his article in the *Jahrbuch des Deutschen Alpen-Vereins*, 1958. At the end of his stories about the activities of their expedition, he wrote as follows. “.....Die gewaltige Kette der hoch-kordillere birgt noch viele wenig bekannte und manche unbekannte Gebirgszüge. In ihren Klüften und Flanken, auf ihren Graten und Gipfeln wartet das grosse Abenteuer der tat.....”

In fact, we found there more than ten virgin peaks over 5600 m high. No man ever touched these ices, snows and rocks. No man ever entered and explored in these remote and far away high valleys with glittering and tremendous white glaciers.

In the northern part of Cordillera Apolobamba, we established our Northern Base Camp (4650 m) at Chocñacota (“Green Lake” in Aymara). This is on the western side of the boundary line. From here two parties went over to the north and east. The former party led by T. Nakamura climbed Chaupiorco (“Centre Mountain” in Aymara) Norte (C. 6000 m), Puinapata (5600 m), Nevado K. (5600 m), and Los Tres Hombres (5500 m). The first peak seems to be the second ascent and the latter two are the first ascents.

On the 27 th of July, Mr. Nakajima and myself climbed the virgin Cacahuaycho (5450 m) for the first time. It was a very fine peak much like a bird spreading her wings on both sides. The last six pitches of 240 metres on the deep and steep snow ridge were very interesting.

The second party led by Mr. J. Amari made the third ascent of Chaupiorco (6044 m), Chocñacota (5650 m, the second ascent), Palomani Grande (5769 m, the third ascent), Salluyo (5808 m, the second ascent) and one minor peak.

Mr. Nakagawa and Kurachi had a fine rock-climbing on Nevado N.K. (5250 m, the first ascent) east of Callejon (5824 m). Also, Mr. Nakagawa and a Bolivian, "Pollo", reached the top of Ritipata (5272 m) on the 17th of July, but it is not an important peak.

The southernmost part of Cordillera Apolobamba, they call it "Cordillera Pupuya".....Pupuya, Puyu Puyu, Puyo Puyo means "a great mass of black clouds" in Aymara.

We established our Southern Base Camp (4700 m) near the Aymara village, Puyo Puyo, about 20 kilometers east of Ulla Ulla (4600 m).

Here again I divided our party into two. "B" party led by T. Nakamura was to go to the southern end of the group and climb two peaks, that is, Acamani (5700 m) and Yanaorco (5600 m).

"A" Party led by myself was to climb Canisaya (5750 m), Cavayani (5700 m) and Huelancallo (5836 m).

On the same day, 7th of August, the two parties left Base Camp with the pure blue sky over our heads. "A" party established Camp I (5100 m) under the great ice-cliff of Huelancallo near a small glacier stream. The virgin peaks which were climbed by the "A" party are shown in the table below.

"B" party reached their Camp I (4900 m) on the 8th of August. From there they had to establish one more higher camp, CII (5350 m) near the crest line of the main ridge. Of the two peaks which they climbed for the first time, Acamani was very difficult. They had to spend one night on the very treacherous rock wall on their way down from the top.

When the "A" party returned to the Puyo Puyo Base Camp, on the 14th of August, they found the members of the "B" party already there. Our climbing days now came to the end at last. We were all happy to have had no accidents. In all, we climbed 17 mountains including 10 virgin peaks in the Peruvian and Bolivian Andes. But we will not be able to forget that we climbed those mountains from the shoulders of our many pioneers and predecessors. Some members and especially Miss Gertrud Bandholz, Secretaria General, of the Club Andino Boliviano were very kind to us. I think they did their very best to assist us. But it seems that they need more practical experiences in the true high mountains and in big expeditions. The same advices would be applied to Mr. Alfred Martinez (26) and to Mr. Raul Centeno ("Pollo", 23), the two who accompanied us from La Paz to the Cordillera Apolobamba.

At any rate we received a very wonderful impressions of their country and

List of Peaks climbed by Hitotsubashi University
Andes Expedition (1961)

Ichiro Yoshizawa

Areas	Dates	Names of Peaks	Heights in		1, 2, 3 Ascents	Names of Climbers	Meanings of Peak names
			metres	feet			
Cordillera Blanca	6.12	Pucahirca Norte	6,050	19,850	I	1) T.N., S.N., H.N. 2) J.A., N.M., K.K.	Red Mountain
	6.13	Ritipata	5,272	17,300	II	S.N., Pollo	Snow Top
Cordillera Apolobamba	" .20	Chochacota	5,650	18,538	II	H.N., Martinez	Green Lake
	" .22	Palomani Grande	5,769	18,928	III	J.A., Martinez	
	" . "	Chaupi Orco	6,044	19,830	III	S.N., H.N.	Centre Peak
	" .23	Salluyo	5,808	19,056	II	J.A., S.N., H.N.	
	" . "	Chaupi Orco-Norte	6,000	19,686	II	T.N., K.K.	
	" .24	Puinapata	5,600	18,374	I	N.M., Pollo	
	" .26	Los Tres Hombres	5,500	18,045	I	T.N., N.M., K.K.	3 Brothers
	" .27	Nevado K	5,600	18,374	I	N.M., K.K.	
	" . "	Cacahuaycho	5,450	17,881	I	I.Y., H.N.	Bird Mountain
	" . "	Nevado N.K.	5,250	17,225	I	S.N., K.K.	
	" . 8	Canisaya	5,750	18,866	I	N.M., S.N.	Dirty Place with Houses
	" .10	Acamani	5,700	18,702	I	T.N., H.N., K.K.	East Water
	" .11	Cavayani	5,700	18,702	I	J.A., N.M., S.N.	Steep Stony Place
" .12	Yanaorco	5,600	18,374	I	T.N., H.N., K.K.	Black Mountain	
" .13	Huelancalloc	5,836	19,148	II	I.Y., N.M., Pollo Mar		

especially from those beautiful and splendid mountains.

I hope we will have another chances to go into this area again and enjoy the woderful mountains to our hearts' content.

(1) The following names are the porters employed in Peru and Bolivia.

Peru (Huaraz)

Emilio Angeles (36) He had been in Cordillera Blanca several times since 1951. Useful high altitude porter.

Demetrio Natividad Henostroza (21)

Pablo Morales Flores (21)

Bolivia (La Paz)

Venancio Pachaway (30)

Julio Choque (18)

(2) It was my great honour to be invited to lecture about our Andes Expedition before the members of the American Alpine Club in New York. Miss Mona Monahan, the Secretary of the Club was very kind to prepare its first meeting of the season.

(3) On my way home, I called on Mr. Francis P. Farquhar's and Mr. Nick Clinch in Berkeley, California. They treated me so kindly that I will not be able to forget them forever.

The Peruvian Andes Expedition, 1961

By Takane Fujiki

In celebration of the 70th anniversary of Kwansei Gakuin University and of the 40th K.G.A.C., we, K.G.A.C., decided to organize the Peruvian Andes Expedition. The reason why we chose the Peruvian Andes is that three members of our club took part in the Japanese Peruvian Andes Expedition in 1959 and found unexplored region "Ccoylloritti".

Our members are as follows :

Leader	Daizen Kawamura (44)
Sub-leader	Takane Fujiki (34)
Member	Ichizo Misawa (30)
:	Sotoji Tanaka (26)

- : Hidehiro Minamii (25)
- : Hiromitsu Nagai (25)
- : Akira Nomura (24)
- : Yoshihiko Ogawa (21)
- : Sukenari Yokoyama (21)
- : Itaru Nishimura (28)

On April 2, seven of us left Yokohama by the "Cuba-Marú" owned by the Kawasaki Kisen K.K. and landed on Callao on May 18. On the other hand, our leader and sub-leader had already reached Lima by air on May 5.

In order to ascend Huascarán, we departed from Lima by taxi with Nishimura, who had joined with us at Lima.

May 26. We got into Musho village (3200 m) by a truck, and spent the first night in tents in Andes.

May 29. We established our Base Camp at 4200 m. Up to there, all of our packages were carried by twenty-six donkeys.

May 31. We established Camp I (5300 m) on a glacier, west side of Huascarán. There were so many narrow but long crevasses near the foot of the glacier that we were forced to try to search a safety route for carrying of foods and equipments. At Camp I, propane gas ranges worked in good condition as well as in the Base Camp.

June 4. We set up Camp 2 (5800 m) in the middle of precipitous ice-fall. As it was impossible to take a route in the center of the ice-fall, we had to take a traverse route from under part of the main peak.

June 9. At 6 a.m., Fujiki and Nishimura started to attack the North Peak from Camp 2. By way of the Col "Garganda" they could come up to the North Peak of Huascarán at 4.25 p.m.

June 11. So far, we retreated from attack three times owing to not only failure of acclimatization but also heavy mists coming from Amazon area, at last, the last chance to attack the main peak came. At 5 a.m. Tanaka and Ogawa left Camp 2, and at 2.20 p.m. they could make an ascent of the main peak of Huascarán, the highest of the Peruvian Andes.

June 14. We came back to Musho, where was the village we left on May 29.

June 20~23. We left Lima by a truck, two buses, and reached Cuzco on June 23~25. At this place, we happened to meet and talk with the Spanish Exp. party, and found that they had already made the expedition of Ccoylloritti area

and many first ascents.

June 28. We went to Marhuayani (4100 m) by a truck, at where we camped.

July 1. We established our Base Camp (4650 m) in the Ccoylloritti valley.

July 4. After deciding the two appropriate routes, we started to climb Ccoylloritti from there, one party (Minamii, Nagai and Nomura) tried to approach from a long ice-ridge, and another party (Misawa, Nishimura and Yokoyama) did from a direct route. Mr. Victor joined us as a police-escort of us from Cuzco.

July 6. Fujiki, Tanaka, Ogawa's party did it too. All of us succeeded in ascending Ccoylloritti, that was the main object of our party. From the top of it, we could take a view of Ayacachi (N), Corquepunco (N.E), Cayangate (S. E.S), Ausangate (S), and other peaks of the Vilcanota-group. The rest of us set up an advance camp (5000 m) in Corquepunco valley crossing a long ice ridge of Ccoylloritti.

July 7. Misawa and Minamii ascended Corquepunco (5600 m) and Ayacachi 4 (5550 m). According to *the Alpine Journal* Nov., 1955, the height of Corquepunco was recorded 6020 m, but our altimeter indicated it as 5600 m.

July 9. Tanaka, Nomura and Ogawa got to three peaks : Ayacachi 1 (5600 m), Ayacachi 2 (5450 m), and Ayacachi 3 (5500 m). Above all, Ayacachi 1, first ascent by our party.

July 10. We carried a transit compass across our shoulder by turns and, from the top of Ccoylloritti, took photos to draw maps of its vicinity.

July 12. We broke up our Base Camp and got down to Marhuayani.

July 16. We left for Cayangate with Mr. Victor. On the other hand, Kawamura and Nagai turned back to Cuzco to investigate "Inca".

July 17. We set up Base Camp (5000 m) beside Pichita-cocha which lies in a valley between Cayangate and Huayna-Ausangate.

July 21. Advance Camp (5300 m) was established on a moraine between Cayangate and Jatunhuma.

July 26. Despite twice failures of attack, Nomura and Ogawa succeeded in the first ascent of Cayangate 2 (5931 m). They started from advance camp on July 25 at 6.45 a.m., bivouacked in that night on a glacier and on the following day 12.40 p.m. they climbed up a virgin peak "Cayangate 2".

July 27. Tanaka and Yokoyama started from Advance Camp at 7.00 a.m. and made the first ascent of Cayangate 3 (5969 m) at 3.10 p.m. It was very dangerous to take a route on the glacier which had been flowing down from Peak 2 and

Peak 3, because of its steepness, numerous crevasses and breaking down of huge ice blocks.

July 30. Fujiki, Misawa, Minamii and Mr. Victor climbed an unnamed virgin ice peak (5885 m) just N.E.N. side of Cayangate 1. We named it "Pico de Victor" after Mr. Victor.

Aug. 5. We came back to Cuzco after finishing all of our climbing schedules.

It comes to the conclusion that the main factors of our success are as follows :

- (1) In that season, good weather favored us in the Andes.
- (2) We could cook tasty foods with propane gas and it saved us time and energy.
- (3) Fortunately, we could take Japanese-style foods at every meals which we used to have had in Japan.
- (4) We could keep in contact with each other by four handy-talkies. But it goes without saying that we did not ignore, all the time, the significance of "team-work".

Besides, we must add the difference between the Japanese Alps and the Andes, that is; 1) extremes of temperature in night and day. 2) glacier, hard ice, nieve-penitente and numerous hidden-crevasses. 3) steepness of mountain itself. 4) high altitude and so on.

At any rate, we can't forget that our success was done under the auspices of the party concerned.

Peak 29, 1961

By Gunji Shinoda

Our Peak 29 Expedition in the spring of 1961 failed to reach the summit owing to unfriendly conditions of the mountain.

The reason of why Peak 29 (7835 m) was aimed is that it lies between Manaslu and Himalchuli, both the scenes of the great Japanese effort, and also it is one of the highest virgin peaks in the world.

Studying the informations given from the expeditions to the adjacent peaks, we reached a conclusion that there found no possible route to the summit if we

approach the mountain from the east, or Buri Gandaki, but from the west, or Marsyandi, we had no positive data to deny to find the hopeful route. However, geographically, the area around the mountain was entirely blank to us before we climbed up there.

After a formidable business of preparations, the advance party set sail for Calcutta from Kobe on 17th February. The main party departed by air on 11th March, but arrived well in advance.

The members were : Prof. Gunji Shinoda aged 56, leader ; Senya Sumiyoshi aged 34, deputy leader ; Shoji Bito aged 32, doctor ; Mitsuji Yamamoto aged 30 ; Motoo Nishikawa aged 27 ; Yoshio Kanekiyo aged 23 ; Nobuki Yamamoto aged 23 and Takakuni Koakimoto aged 53, cameraman.

Our mountainous baggages were transported from Calcutta to Bhairawa by lorries, and Bhairawa to Pokhara by air. Four of us travelled with these packages to watch over the transference of them. Meanwhile, the main party flew to Pokhara via Kathmandu, and made a rendezvous. Sirdar, Ajeeba, and other Sherpas already arrived there.

On 4th April a reconnaissance party started from Pokhara. Two days later, the main party with 116 coolies started. At Khudi, a little town on the Marsyandi river, we stayed for about one week, and sent another reconnaissance party to an effective-looking ridge. They reached over 4300 meters but came down in vain.

Meanwhile, the advance party was going up the Musi Khola to find that not a glacier flowed down from Peak 29 to the Musi Khola, but the mountain appeared utterly inaccessible from this south-west side. The glacier seemed to be beyond the west ridge of Peak 29. On 17th April, they found a passable pass over the ridge, whose height was about 4900 meters. From the Pass they discovered spellboundly a great glacier falling down from the inner Sanctuary of Manaslu and Peak 29 with Great Icefall, flowing to the west, turning to the north, and there was a large lake at the end.

The main party began to move again at this report. The coolies did not want to go farther from a khalka of 4000 meters in height, and also impossible for coolies to carry the baggage across the Pass on their bare foot, the baggages weighing three tons were carried by climbers and Sherpas, and some volunteered coolies thereafter.

The base camp was established on the last day of April on the left bank of the glacier about 7000 meters below the Pass. The site was not a ideal one, but it had the advantage of being near to the foot of the great icefall. We had to

find a way in the great icefall, for the other part of the mountain was protected by sheer precipices of brown rock and blue ice.

We engaged in reconnaissance of the great icefall under considerable difficulties. Day by day, the frequency of ice avalanche flowing over the glacier increased, and the glacier itself began to break to fall. We realized that to surmount the icefall in this season was too perilous and would be suicidal.

Just at this moment, a mortal trouble happened at the base camp. On 14th May, the leader Prof. Shinoda suddenly vomited much blood. Our doctor Bito came down on the next day, diagnosed him as gastric ulcer. He lay down, very feeble and severe with anaemia. The immediate concern was him. We could only give up to climb higher, and then, up to 29th May, we were engaged to reconnoitre and survey the mountain from every possible directions, and got many important data.

About two weeks thereafter, fortunately, the leader recovered as to be carried down the mountain.

Meanwhile, we sent a party to go down the valley. The valley was very deep and beautiful, decreasing the height, lovely rhododendron blossoms graduated from white to pink, and into scarlet. The second day, they found a trail in the valley; and on the third day, they could meet again the Marsyandi river at the village called Naje. They learned the valley was called Dona Khola.

On 30th May, the mountain stood behind us, as we leaved the base camp site for Naje. On the returning trip we had no troubles, and came back to Pokhara on 11th June.

Langtang Lirung, 1961

By Koichiro Hirotani

In the 40th anniversary of the founding of Osaka City University Alpine Club, an expedition was organized for climbing Langtang Lirung (7,245 m), the main peak of the Langtang Himal, and reconnaissance of the Tunga Glacier.

Leader : Kaichi Morimoto (age 41)

Sub-leader : Koichiro Hirotani (age 28, medical doctor)

Member : Kenji Oshima (age 26)

Isamu Fujimoto (age 25)

Tetsuya Kondo (" 24)

Akira Ban (" 21)

Liaison officer : Shree Krishna Amatya (age 27)

The Sherpas employed were Gyaltsen Norbu (Sirdar), Lhakpa Tsering, Pa Norbu, Ang Dawa 4 and Mingma Tsering.

On 17 th of February, we sailed from Kobe with the luggages of 3 tons, and could leave Kathmandu on 30 th of March without any difficult troubles.

After a nine days caravan, the base camp (4,000 m) was pitched on the Lirung Glacier on 8 th of April, and we began to reconnoiter the western side and southern ridge of Langtang Lirung, and came to the conclusion that it was impossible for us to climb Langtang Lirung from both the western side and southern ridge.

We therefore decided to take the route along the Lirung Glacier to the ridge of 6,400 meters high.

On 13 th of April : Camp I (4,200 m) was established.

On 16 th of April : Camp II (5,070 m) was pitched.

(Between Camp I and II, there was a big and steep ice-fall)

On 21 st of April : Camp III (5,600 m) was located on the south-east edge of a big snow-field.

From camp II, we had to go round along the steep wall side of Kymshun to this field.

Next, our two members succeeded to reach the eastern ridge (6,450 m) and found the suitable site of Camp IV, that was expected to be the attack camp. Finishing the preparative stage as above, all members gathered the base camp and scheduled to at attack after taking the rest for 3 days.

But, owing to the unexpected bad weather, we were compelled to stay at the base camp for 2 weeks.

On 8 th of May, as the weather improved, we again left the base camp, beginning to execute the final attack plan.

On 10 th of May, all our 6 members and 5 Sherpas reached Camp III on the snow-field. At 4 : 45 a.m. of 11 th May, with strong blast, block avalanche rushed on and our three tents in which all members were sleeping, were blown off by it. That was due to the collapse of "ice building" around the edge of the ridge, sliding down over the big snow-field.

Unfortunately, Gyaltsen Norbu was found dead, and the leader, Kaichi Mo-

rimoto, and Kenji Oshima were lost. With only one and half crampon and four ice-axes, dug from debris, we could scarcely search for missing members because of hard ice block. We buried Gyaltzen Norbu to the bottom of a crevasse, praying silently for three persons, and came down to Camp II.

On 12th of May : Returned the base camp.

On 24th of May : Reached Kathmandu.

The above is the brief record of our expedition to Langtang Lirung 1961, in which we experienced the first accident among all Japanese Himalayan expeditions.

Forever may the souls of Kaichi Morimoto, Kenji Oshima and Gyaltzen Norbu rest and sleep in peace in the crevasse of 5,600 meters high at the Lirung Glacier.

Jugal Himal, 1961

By Tokujiro Kajimoto

The second attempt of Longpo Gang (the Big White Peak, 7083 m), the highest mountain in the Jugal Himal, was made by All Japan Mountaineering Association in the spring of 1961. The first attempt in 1960 was failed to reach the summit due to the bad weather, but they climbed an unnamed 6800 m-peak located in just front of Longpo Gang and christened it "Madiya Peak". (See *J.J.A.C.* Vol. 56, 1961)

The members of our second expedition have been selected among the Tokyo and Osaka branches of the Association. Our team attacked the top of this mountain by excellent members with sufficient equipments and provisions, and reached at the height of about 7050 m (only 33 m in height and about 200 m in distance from the top). However, we were obliged to go back due to bad weather also, because the monsoon had come early to the Jugal and Langtang area.

Summary of our expedition as follows :

1. Members

Tokujiro Kajimoto (39 of age) Leader of All Japan Himalayan Expedition (A.J.H.E. 1961), Mitsuru Nakano (35) Vice-leader, Tetsuya Nomura (33) Vice-leader, Nobuo Akayama (32), Hiroharu Bamba (31), Jyuntaro Koizumi

(30), Takayasu Yamada (30), Keiji Hamada (28), Tadashi Morita (26), Yoshito Tsukazaki (29), Tetsutaro Shigeno (27), Masahide Nozawa (35) Photographer, Makoto Takagi (34) Cameraman.

2. Liaison Officer : Pre Kumar Shresta (24).

3. Sherpas : Pasang Phutar II (48) Sirdar, Sherpas 12, Local Porters 6.

4. Records

February 17 Departed from Japan.

March 14 All members arrived in Calcutta.

15 Advanced party arrived in Kathmandu.

April 5 Departed from Kathmandu for Jugal Himal.

15 Arrived at Bompasel and established Base Camp (4200 m).

17 Settled Camp 1 on Phurbi Chyachumbu Glacier (4400 m).

19 Set up of Camp 2 (4900 m).

24 Set up of Camp 3 (5400 m).

27 Set up of Camp 4 (5800 m).

30 Set up of Camp 5 (6100 m).

May 1-9 Reconnoitred and traced the route from Camp 5 to Camp 6.

10 Set up of Camp 6 (6700 m).

12 3 members (Akayama, Koizumi and Morita) attacked the top of Longpo Gang, but because of bad weather they compelled to bivouac in a snow hole without tent at about 6990 m in height.

13 3 members who passed the night, attacked again the top, but the route was entirely covered with hard ice and furthermore the weather became worse, so they gave up to go further and retired from the point about 7050 m in height. On the way back, they again bivouacked another night in the same snow hole.

14 Because of bad weather and shortage of food, they could not stay in the high altitude camps. So they went down to Camp 4 and reported the leader, who decided to give up another attempt considering all circumstances.

20 All members and Sherpas withdrew to Base Camp.

24 Departed from Base Camp.

June 2 Arrived in Kathmandu.

Furthermore, during our scaling the main peak of Jugal Himal, some of our members climbed other two minor peaks.

1) On May 11, Kajimoto, Bamba and 4 Sherpas climbed Gyaltzen Peak (6705 m),

which was already climbed by a British party in 1955.

- 2) On May 13, Nomura, Yamada and 2 Sherpas went along the Ladies Glacier and climbed an unnamed peak which situated on the border ridge between Ladies Peak (6000m) and Phurbi Chyachu (6440 m). We named it "Gumasi Peak" and its height is about 6100 m above the sea level.

(Note) Longpo Gang was ascended by the third expedition of A.J.M.A. in May, 1962. Its record will be shown on the next volume. —Ed.

Mt. McKinley, 1960

By Takeichi Katano

Commemorating the 80th anniversary of the founding of Meiji University, the Alaskan Area Combined Academic Research Team was organized in 1960. And, as a part of its geographical research, a mountaineering group with the purpose of climbing Mt. McKinley and investigating its glaciers was added to it.

The Mountaineering Group of 13-man consisted of Takeichi Katano (52), the leader; Tsuneo Kanazawa (29); Susumu Takahashi (29); Yoshihiro Fujita (27); Masato Higashi (24); Koji Kobayashi (22); Kiyoshi Mimuro (21); Masatake Dohi (21); Kozo Kaji (32), technical officer for geographical research in Ministry of Construction and members of Publicity circle including Eiji Katayanagi (31), Kinjiro Suzuki (36) of the Yomiuri News Paper; Tadahiko Matsuda (33) of the Toei Film Co., Ltd.; Shin Takagi (32) of the Nihon N.T.V.

We asked Dr. Bradford Washburn, the Museum of Science in Boston for concrete instructions of the mountaineering. Availing of an aircraft, our party arrived at the upper part of the Kahiltna Glacier and decided to climb the West Buttress.

On April 5, 1960, the party arrived at Anchorage and at Talkeetna, where Mr. Don Sheldon, a native pilot transported for us by air about two tons of fittings and provisions required for our 13-member party for two months thereafter. On April 9, the base camp was established at the height of 2400 m on the Kahiltna Glacier and then Camp I on the Kahiltna Pass (3120 m). No advance was, however, made thereafter for 17 days due to snowstorm. On April 25, we pitched Camp II (3900 m) on the Windy Corner and on May 3, Camp III on the West Buttress (4550 m). On May 5, a party headed by Susumu Takahashi

sent for the purpose of reconnoitering the route to the summit of McKinley, extended their reconnaissance to reach as far as the summit of South Peak and returned the camp in the midnight. On May 9, we pitched Camp IV at the height of 5150 m directly below the Denali Pass and all members occupied it.

On May 12, Camp V was established on the Denali Pass (5450 m). On May 13, S. Takahashi and Koji Kobayashi went out for the reconnaissance of a climbing route for North Peak and eventually reached the summit at 7 p.m. On May 14, they furthermore succeeded in the second climbing of South Peak, on the top of which they stretched a tent for two and stayed over night under the tent and on May 15, they came down to Camp III and next day all members returned to Camp I and to Talkeetna on May 20.

Before starting for the climbing, Dr. B. Washburn had asked us to reinforce a bamboo pole erected by him in 1957 on the top of South Peak. So, we reinforced it, which we found leaning toward the north a little, using a special tape given by him.

Climbing the South-West Ridge of Mt. McKinley

By Takamasa Yoshizaka

Introduction

The South-West Ridge of Mt. McKinley was conquered by 4 men—Kito, Teratani, Imamura and Kikushima—on 14th and 15th of May, 1960. This party was composed of 6 old-timers of Waseda University Alpine Club. They are Takamasa Yoshizaka (Leader), Mantaro Kito (Treasurer and also in charge of general affairs), Masayasu Teratani (Recorder and also in charge of utensils), Shunsuke Imamura (Cameraman), Yoshihiko Kikushima (in charge of food), and Akira Yamamoto (Carrier).

May 1

We took an airplane from the town of Talkeetna in Alaska, which is the entrance to Mt. McKinley, to the glaciers and from there, we began our climbing. This glaciers, the landing place, is about 8,000 ft. high above the sea level.

May 2

We moved to the place of 11,000 ft. high to make a Base Camp, and we made it perfectly.

May 3-6

Twice in a day, early in the morning and in the evening, we carried bundles to make a camp, because in the daytime, the sunbeam on the glaciers was too exhausting for our bodies.

The place of the Camp 1 was on the "Windy Corner."

May 7-9

We spent all day to make up the Camp 2. This Camp 2 was on the tableland which is about 1 km. south of the junction of the West Ridge, and it became an advance camp of the South-West Ridge attack party.

May 10

Now we began attacking. Kito, Imamura and Yamamoto tried to make it but had to return on half way because of the wind, just as the day before yesterday.

May 11

Yoshizaka, Teratani, Kikushima and Yamamoto spent the night at the Camp 1, while Kito and Imamura at the Camp 2.

May 12

Yoshizaka, the leader and Yamamoto were decided to support from the West Ridge, so we two brought up our tent to the shoulder of the West Ridge. Teratani and Kikushima went up to the Camp 2. Imamura and Kito went out to attack from the Camp 2 but they had to return from the height of 17,000 ft.

May 13

Yoshizaka and Yamamoto went to near the top from the shoulder of the West Ridge for supporting. Teratani and Kikushima went up as high as 16,000 ft. and returned.

May 14

Kito, Imamura, Teratani and Kikushima went out for attacking from the Camp 2, and bivouacked on the South-West Ridge. Supporting two, Yoshizaka and Yamamoto spent the night near the top and all returned to the Camp 2 in the morning.

May 15

After Kito, Imamura, Teratani and Kikushima climbed up the South-West Ridge, they came back to the Camp 2 through the route of West Ridge.

May 16

We struck the Camp 2 and all gathered at the Camp 1.

May 17

All came down to the Base Camp together. Here we had a small party with the guests of the Meiji University Expedition from Japan.

May 18-19

We couldn't move an inch because of a heavy snowstorm.

May 20

As we heard the news of the Seattle party from the States having met an accident, we climbed again to the half way guiding the rescue squad. After coming back to the Base Camp, we went back to our base of climbing, the town of Talkeetna by air.

Conclusion

Our climbing report is as I described above.

When we tried climbing, there were 3 other parties besides us, the Meiji University party from Japan, Anchorage party of Alaska and Seattle party from the States, and fortunately (thank heaven) 2 parties from Japan could make out the climbing.

West Karakoram, 1961

By Sumio Shima

In summer 1961, we, Sumio Shima and Masami Takeuchi staying in the university of the Panjab as the foreign researchers, were planning on reconnoitring the Batura river in west Karakoram.

Our plan, however, was rejected by the government of Pakistan on account of national defence affairs. We decided unavoidably to change our schedule to the reconnaissance in southern area of the Batura group.

On September 7 th, we left Gilgit to Chalt with two students of the university of Panjab who accompanied with us as the combined party.

In Chalt, sixteen porters were employed for the organization of caravan. It set off on the next morning and went up into the valley of Bola Das. Our purpose was placed on reconnoitring many glaciers and investigating way of lives of shepherds lived in these three valleys called Daintar, Kukuar and Baltar.

After two days of journey from Chalt, we arrived at Daintar village. Spending few days for observing the conditions of villagers and their farmings, we left for the Daintar glacier with thirteen porters. This glacier was relatively small. From base camp, it was possible to get the Daintar col, about 5,000 m high, by three days, which reached at the eastern ridge of Sato Maru (6,293 m) and Swat Marao (6,300 m).

By September 16th, removal of our base camp to next destination, the Baltar glacier was made. On fifth day of march in barren vale bottom, the tongue of Baltar glacier appeared in our sight over the vast piled moraine plateau.

At the point of the height of 4,000 m, pretty small grassy plain was there. Batura peaks rose to the sky and frequently frightened our base camp with intermittent roar of huge avalanches.

The next day, the trial-climbing at the peak named Teigni (7,200 m?), led the snow ridge upward the peak of Batura from south-west side, was carried out. We built Camp I at the site of 4,000 m high where a lot of icy terrace piled up on the Teigni glacier.

The next midday our progress was suddenly intercepted without getting the height of 4,500 m. Large bottomless crevasses were there! These huge obstacles had spoiled all our plans and made us retreat to base camp.

“This time the conditions of glacier were getting worst”.

All of us could not but agree with this hopeless opinion.

For two days of staying our base camp, the brilliant sunlight and calm vale made us cheerful with sedate promenade on the glacier.

The next destination! That was on the Kukuvar glacier.

We issued “mobilization order” to shepherds lived near by our base camp for organization of caravan.

The third base camp, two days march apart, was established at the site of 3,500 m high closed to the junction of the Kukuvar and Sato Maru glaciers.

Reconnoitring the eastern side of the Kukuvar glacier continued to the foot of Bari Dorkush (6,780 m), Sani Dorkush (6,872 m) etc.

September 25th, we made a progress to the mountain called Kuti Dorkush (6,000 m) situated in front of our base camp.

At that time we had two purposes. One of them was just climbing up the summit of this mountain, the other in surveying the opposite valleies, Batura and Kampire Dior, was.

Camp I established on the height of 4,500 m, Camp II, at a stretch, on 5,000 m, where the ridge of upper glacier fell into lower. On the third day since we departed from base camp, the trial to attack the summit broke out with sunrise. The conditions of glacier were getting out of hand. In upper glacier, 5,700 m in height, we should have spent one night in the shallow crevasse, because the huge ice fall, about 100 m high, had thrown pertinaciously obstacles in our way.

The next morning after the bitter bivouac, it was covered with deep gloomy fog. We almost did not bring with any foods and clothes. Forecast of threatening weather made us give up the idea of climbing the main summit. Time fled for hesitation.

We then attacked the other snow peak, that is to be said the fore peak, and stood on the top of it. The altimeter showed the height of 5,800 m.

On the returning way to Gilgit, we visited Baltit, the capital of Hunza State and spent joyful four days by surveying the life of the people and meeting the Mir of Hunza.

This light expedition was not expected to bring a great fruit in the field of mountain climbing. This would, we suppose, result in insufficient equipage and foods, besides weak party.

On the contrary, the wandering about vast range in Bola Das valley was carried out to the extent of our full satisfaction, in order of the light equipage. And it was convenient for us to observe the conditions of villagers and collect various data of agriculture and glaciers.

Acknowledgement

The author wishes to express his deep gratitude to the Swiss Foundation for Alpine Research, Zurich, for its helpful presentation of hearty advice and of many data, maps about west Karakoram.

The author's grateful acknowledgement is also made to Deutscher Alpen Verein for encouragement in this expedition.

ヒマラヤ登山年譜 (続・補遺)

(1954~1955)

田中栄蔵・馬場勝嘉共編

凡 例

1. 本年譜は『山岳』第49年に発表した「戦後のヒマラヤ登山年譜」の補遺を行い、その後1954~1955年までの各遠征を収録したつもりであるが、調査不十分のところもあり、洩れているものは御教示を乞う。
2. 配列と記載の順序=年代、遠征期間、隊長名(隊名)、地域と目標の山岳の登山・探査範囲、到達地点、人名、月日、文献抄を附した。
3. 文献のうち定期刊行物は下記の略号を用いた(カッコ内は発行山岳会名)。

AAJ=American Alpine Journal (AAC)

AJ=Alpine Journal (AC)

Alpen=Die Alpen, Les Alpes. (CAS)

GHM=Groupe de Haute Montagne.

BW=MW=Berge der Welt or The Mountain World. (SSAF)

DAVJ=Jahrbuch des Deutschen Alpenverein (DAV)

GJ=Geographical Journal (R.G.S.)

HJ=Himalayan Journal. (HC)

J=Journal (Swiss Foundation for Alpine Research)

Kurz CH=Marcel Kurz: Chronique himalayenne, 1959. SSAF.

MA=Montagne et Alpinisme (CAF)

RM=Rivista Mensile (CAI)

1954

- 3~6. Sir Edmund Hillary Nepal. Arun 河に入り途中で Choyang, Iswa, Barun (New Zealand H- 渓谷の3隊に分れて測量、探査をしながら溯り、Barun 渓谷に集合。再び分散して探査。Makalu へは、同名の氷河を登り Makalu I と II を結ぶ北西稜上のコルを目指したが、隊員 MacFarlane を救助するときうけた肋骨の傷が悪化した Hillary を下山さすため中止した。Baruntse (7,181 m) は Plateau 氷河から 5月30日 G. Harrow と C. Todd が初登頂。6月1日 G. Lowe と W. Beaven

が第2登. このほか Pethangtse (6,730 m), Nau Lekh (6,529 m) など 6,000 m 以上の峯 19 座に登頂した.

Hillary and Lowe : East of Everest, AJ=291. 227—238, MW=1955. 97—110, NZAJ=1955, 5—53, GJ=121—2. 129—135.

3~6. 堀田 弥一
(J.H.E.)

Nepal. Buri Gandaki 河を溯り Manaslu を目指したが, Sama 部落民の登山阻止にあい, 目標を Ganesh Himal に変更, Tolo Gumpa 氷河から Ganesh の北面を試登し, Lampu との主稜 6,350 m に達した. 帰路 Chhuling Khola から Himalchuli を偵察し, Rupina La (4,734 m) を越す.

日本山岳会編: マナスル 1954—6, 山岳=第 50 年 42—63, MW=1955. 129—132.

3~6. F.G. Ibañez
(Argentine)

Nepal. Mayandi Khola に入り Dhaulagiri を目指す. 北面に挑み <Pear> 上端にダイナマイトをかけ, 頂稜直下 7,500 m に C7 を設け, 北西面を登り主稜(西稜)から頂上直下 170 m に達した. イバニエスはカトマンズで凍傷死した.

Magnani, A.E., : Argentinos al Himalaya. Anuario del Club Andino Bariloche No. 23. MW=1955 122—124.

3~6. Ralph Izzard
(Daily Mail Abominable Snowman Exp.)

Nepal. デイリー・マイル紙のイエテイ(雪男)探検隊として, エヴェレスト西面—Khumbu 地方を探查し, Kang Cho (6,100 m) (第2登) などに登頂した.

R. Izzard : The Abominable Snowman Adventure, C. Stoner : The Sherpa and the Snowman.

3~6. Dr. W. Siri
(America)

Nepal. Arun 河から Barun 渓谷に入り, Makalu 北西稜を偵察後, 南東稜を攻撃したが悪天候のため一旦 BC に戻り, 再登したが約 7,200 m に達し, 嵐と新雪のため引返した.

AAJ=9—2. 7—24, HJ=19. 57—67.

4~6. John Kempe
(Britain)

Nepal. Kangchenjunga 南西面偵察行. Yalung 氷河に入り Talung saddle への試登などを行い, Talung Peak を北面から試み, この時に Kangchenjunga の great ice-shelf に取付くルートを発見した.

J. Tucker : Kanchenjunga, AJ=289. 428—431, HJ=19. 18—32.

- 4~5. Showell Styles
(Britain) Nepal. Darondi Khola に入り Baudha 峯の南稜を試登したが断念. Rupina La を越して北面に出て Chhuling Khola に入り, Baudha 峯の東面を試登したが再び断念. ルピナ・ラで堀田隊と逢う.
S. Styles : The Moated Mountain.
- 5~6. Dr. R. Jonas
(Oesterreich) Nepal-West. Kali 河を越して東進し, Seti 河から支流の Ghat Khola に入り, Saipal 氷河に基地をおく. 左岸の 5,450 m 峯と右岸の 5,850 m 峯に登頂後東面に廻る. Saipal の東稜の下のコルに達したが登攀の可能性なく基地に戻る. ついで Firnkopf 氷河からその主稜に登り, その前峯 (6,500 m) に達した.
Rudolf Jonas : Ho, Pasang !
- 5~6. P. Ghiglione
(Italia) Nepal-West. Chamlia 渓谷を溯り Api 南面を偵察後, Rapla から Kali 河をへて Api 渓谷に入り, 西 Api 氷河をつめ, 6月15日 Barenghi が悪天候について単身登頂後行方不明となる. Bignami は疲労死.
Piero Ghiglione : Eroismo e Tragedia sul Monte Api, Barenghi, Bignami, Rosen Krantz : Alla Conquista del Monte Api, Alpen = 31. 169—173, HJ=19. 176—179.
- 5~8. M. Rebitsch
(Deutsch-Oesterreich H-K-Exp.) Karakorum. Hunza の Chalt 北方の Kukuar および Baltar 氷河をさぐった後, Batura 氷河を精査し, その右岸の P. 6,885 m に登頂した (8月5日 D. Meyer と M. Schliessler). この隊は登攀班と科学班から成立っている.
W. Pillewizer : Zwischen Wüste und Gletschereis, Paffen, Pellewizer, Schneider : Erdkunde 10—1. 1—33, MW=1955. 19—33, HJ=19. 120—130.
- 6~7. G. Singh
(India) Garhwal-Tibet. Dhauli Ganga 支流の Dunagiri から Pharchola (4,825 m) を東稜から登り, Bampa から Lama Surjang (5,139 m) を西稜から初登頂 (6/13), 次いで北方の Bara Hoti を中心として P. 5,350 m などに登る. 6/27~7/16 まではチベットに入る. Sutlej 左岸を進み Kailas 峯を1周し Manasarowar Lake に達し, 右岸を Bara Hoti に戻る. 続いて南稜より Silakang (5,873 m) に第2登. Bamlas La を越して Niti に出た.
AJ=291. 257—269, HJ=19. 3—17.
- 6~10. Ardito Desio Karakorum. Baltoro 氷河に入り, 5月末から K2

- (Italia) (8,611 m) Abruzzi 稜に攻撃をかけ, 7—31 日 C9 を出た A. Compagnoni, L. Lacedelli が初登頂した. 登山班と科学班 17 名で編成された.
- A. Desio : La conquista del K2. M. Fantin : K2 Songo Vissuto. AJ=290. 3—16, HJ=19. 82—97, MW=1955. 37—66, GJ=121—3. 261—273, R.M=74. 278—330.
- 6~8. A. Tissières
(C.U.M.C. Exp.) Karakorum. ケンブリッジからヨーロッパ大陸を自動車
で横断し, Rakaposhi の北西稜の Secord Peak に達し,
続いて南西支稜を忠実に登り, Monk's Head の 6,340 m
に達した. 天候悪化と食糧欠乏のため引返えした.
- G. Band : Road to Rakaposhi. AJ=290. 48—57, HJ
=19. 109—119, MW=1955. 34—36.
7. Pierre Vittoz
(Suisse) Ladak. Yan Kangri (6,100 m) 北稜より, Mashro
West (5,950 m) に初登頂.
- J=5. 283—284, Alpen=31. 272—280.
- 7~9. R. Platts, N. Woll-
aston Lahul. Chandra 河の Sissu Nala Basin に入り, 氷河
右岸の 5,770 m, 5,181 m, 5,331 m, 左岸の Gepang (5,870
m) に登頂した.
- (Britain) AJ=290. 62—68.
- 8~9. Dr. Harrington Nepal. Seti 河の Niuno Khola に入ったが通過不能の
ゴルジュで本流に引返えし, Rakshya Urai (Byasrikhi
Himal) 周辺を探索し, モンスーン中に 6,000 m 峰 3 座
に登り, 植物昆虫などを研究する.
- HJ=19. 142—146.
- 8~11. Jean Franco Nepal-Tibet. Barun 溪谷に入り, Makalu の登路を偵
(F-H-Exp.) 察, 10月22日 Makalu II (7,660 m), 10月30日 Chomo
Lönzo (7815 m) に夫々初登頂. なお Pethangtse に第2
登し, 附近の 6,000 m 峰 8 座に登頂した.
- MA=1 1955—Feb, 4—19, GHM=1955. 2—18, AJ=
292. 13—18, MW=1956—57. 129—130.
- 9~11. Dr. H. Tichy Nepal. Namche Bazar から Nangpa La を越し, Cho
(Oesterreich) Oyu の西面からこれを攻撃した. C4 (7,000 m) でジェ
ットストリームをうけて退却. 10月12日 Jöchler と
Heuberger は対岸の Tiroler Köpfl (6,300 m) に初登
頂. フランス・スイス隊に合同登山を申し入れられたが断

り、攻撃再開、10月19日 Tichy (凍傷中), Jöchler, Pasang Dawa Lama が Cho Oyu (8,153 m) に初登頂した。

H. Tichy : Cho Oyu, HJ=19. 131—141, AJ=291. 239—247, MW=1955. 81—95, OAVJ=1955. 80—102, MA=2. 42—49.

9~11. R. Lambert
(Franco-Suisse)

Nepal. Rolwaling 谷から Hadengi La をこして Menlung 盆地に入り Gaurisankar に試登したが見込なく Menlung La, Nangpa La を越して Cho Oyu に向う。Tichy 隊のあと 10月28日 C4 から攻撃したが、寒気と悪天候のため 7,700 m で引返す。Mme C. Kogan は女性最高到達記録を樹立した。

Lambert et Kogan : Record à l' Himalaya.

9~11. K. Herrligkoffer
(D-H-Exp.)

Karakorum. Hidden Peak 目指して Baltoro 氷河へ入ったが、目標を Broad Peak (8,047 m) にかえた。同峯の西面の1氷河の支稜を登り、11月6日 7,200 m に達した。

K. Herrligkoffer : Deutsche am Broad Peak.

9~11. W. Kick
(D-H-Exp.)

Karakorum. Herrligkoffer 隊科学班として、Arandu から Chogo Lungma 氷河を精査した。

GJ=122-1. 93—96, MW=1956/57. 163—172.

9~12. J.O.M. Roberts
(Britain)

Nepal. Dhaulagiri Himal の北面 Barbung Khola に入り、Himal の北、北東、北西から調査し、6,150 m 峯2座に登頂。11月11日 Roberts と Ang Nima は Putha Hiunchuli (7,240 m) に初登頂。Kali 河にそって下る。

HJ=19. 19—108, AJ=291. 248—256.

1955

2~6. Rudolf Rott
(Deutsche)

Panjab. 前半はネパールを歩き、4月 Malana 河を溯り5月末 5,229 m 峯に登頂、6月3日今度こそ本当の Deo Tibba (6,001 m) 第2登に成功した。

R. Rott : Durch Indien zum Himalaya.

3~5. Alfred Gregory
(M-H-E.)

Nepal. Bhote Kosi から Rolwaling Himal に入り、Parchamo (6,320 m), Pimu (6,349 m 南東稜より), Singkar (6,291 m, Shipton の Trident) その南の 6,260 m 峰, Daplipangdigo (6,100 m), Panaio Toupa (6,660 m) 等19座に登り、この地方の地誌を明確にした。

AJ=292. 54—59.

- 3~6. Charles Evans
(B-H-E.)
Nepal. Yalung 溪谷に入り Western Buttress の Great Shelf に達し、5月25日 Band, Brown が West Col より西山稜を通過して Kangchenjunga (8,585 m) に初登頂、翌日 Hardie, Streater が第2登をした。
C. Evans : Kangchenjunga, The Untrodden Peak. AJ=291. 207-226, HJ=19. 33-56, MW=1955. 102-123. MA=5. 132-141.
- 3~6. Jean Franco
(F-H-E.)
Nepal. Barun 溪谷に入り、前年のルートを辿り Makalu Col から北西面を登り5月15日 Terray, Couzy が Makalu I (8,470 m) に初登頂。続く2日間に全員で第2, 第3登をなしとげた。
J. Franco : Makalu, MA=4. 102-124, AJ=292. 13-28. HJ=19. 68-74. MW=1956/57. 124-142.
- 4~5. M. Jackson
(1st W-H-Exp.)
Nepal. Balephi Khola-Langtang Khola に入り、Pulmutang Khola より Jugal Himal の Phurbi Chyachumbu 氷河源頭の Gyalgen Peak に5月11日 Jackson, Stark, Gyalgen が初登頂した。
Jackson & Stark : Tents in the Clouds. AJ=292. 60-62, HJ=19. 75-81.
- 4~5. John Howard
(Kenya)
Nepal. Marsyandi 河から Musi Khola に入り Baraha Pokhri Lekh の稜線の Meme Pokhri から Himalchuli をねらう。主稜の Snow Dome (6,000 m) に前進したが、A. Firmin が遭難(途中死亡)で中止した。
AJ=292. 38-44.
- 4~7. Stanley Conway
(N-Z. H.Exp.)
Karakorum. Shyok 川から Hushe 溪谷に入り, Sérac 氷河より Masherbrum を南東面より攻撃したが、7,080 m で引返した。アタックの遅れと悪天候、ポーターの肺炎のため。
AJ=292. 29-37.
- 4~11. H. Steinmetz
(D-H-E.)
Nepal. Marsyandi 河を溯り北面より Annapurna IV (7,524 m) を5月30日初登頂。続いて Kang Guru (7,009 m) など8座に初登頂した。モンスーン中は Mustang に足をのぼし Tukcha をへて、Pokhara から Westl. Lamjung (6,200 m) に初登頂した。
Steinmetz & Wellenkamp : Vier im Himalaya, — : Nepal. DAVJ=81. 87~94.

- 5~6. A.J.M. Smyth Lahoul. Chandra 河から Kulti 溪谷に入り, Tragiri
(RAF.M-A. Exp.) (6,400 m), Jori, Tambu, 登頂. Shikar Beh(6,200 m) の
初登などを行った.
AJ=292. 45—53, HJ=19. 147—155.
- 5~6. J.E. Murphy Jr. Hindu Kush. Tirich Mir 氷河を登り, 南面から西稜
(Princeton M.C. Exp.) をへて, 6月8日 Istor-O-Nal (7,389 m) に初登頂した.
HJ=19. 156—164.
- 5~6. Martin Meier Nepal. Dhaulagiri を北面から攻撃したが極寒と強風・
(D.S.H.E.) ひどい降雪のため 7,600 m から引返した. ドイツスイ
ス隊でリーダーとチームがしっくりしなかった.
DAVJ=81. 74—79.
- 5~9. Reinhardt Sander Karakorum. Chogo Lungma 氷河に入り, Spantik
(Frankfurter H.E.) (Shipton の Yengutz Har 7,027 m) の南稜にとりつき,
7月5日 R. Diepen, E. Reinhardt, J. Tietze が初登頂
した.
DAVJ=81. 68—73, MW=1956/57. 173—190.
- 5~9. 今 西 錦 司 カラコラム・ギルギットからフンザ, ナガールをへて,
(京大カラコラム・ヒンズークシ学術探
検隊・フンザ隊) ヒスパイ氷河=スノーレーク=ピアフォ氷河, アスコール
よりバルトロ氷河のコンコルディアに達し, 再びアスコ
ールよりスコロ・ラをこしてスカルドに出た.
今西錦司:カラコラム, 山岳=50. 1—23.
- 5~9. 藤 田 和 夫 カラコラム・ギルギットからインダス河ぞいに溯りカル
(同上インダス隊) クルからイスタク・ラとガンガ・ラを越して, ブラルド河
ぞいにアスコールに達し, バルトロ氷河は今西隊と合流
し, 再びアスコールでフンザ隊と別れ, フンザ隊のルート
をフンザ, ギルギットに出た.
藤田和夫・林田重男編:カラコラム(アサヒ写真ブック
30), 山岳=50. 24—41.
- 6~7. Maj. N.D. Jayal Garhwal. Dhaul Ganga 溪谷を溯り, Raikhana 氷河,
(H.M.I. & B.S. Exp.) 東 Kamet 氷河を進み西稜より, 7月6日 Kamet (7,759
m) に第2登する. 途中より分れた Singh と Dias は Abi
Gamin に登頂した.
MW=1956/57. 143—147.
- 6~10. Norman Hardie Nepal. Kangchenjunga 登頂後, Tseram で隊と分れ,
(N. Zealand) シェルパ3人といわゆる High route を通って 26日目に
Namche Bazar につく. その後妻と Innukhu, Hongu, Imja

などをさぐった。

N. Hardie : In Highest Nepal. HJ=20. 87—93.

7~8. H. McArthur
(Britain)

Lahul. Chandra 溪谷から Kunzum La を越し South Kunzam Peak に登頂後、Chandra Tal 湖に出て Samundar Tapu に BC をおき、この氷河流域を探索測量をする。Tapugiri (5,791 m) に登頂後、8月5日 Candi Ki Shigri (Silver 氷河) 右岸の Tara Pahar (6,227 m) に西稜から登頂す。帰途は北にまわり Rohtang Pass に出た。

AJ=293. 279—295.

8. P.F. Holmes
(C-U. Exp.)

Panjab. Chandra 溪谷から Kunzum La を越して、Spiti 溪谷に入り、Taktshi-Karcha 分水嶺上の 5,639 m 峯に初登した後、Gyundi 溪谷を探索し、さらに南にまわって 5,944 m 峯、6,011 m 峯に初登、ついで Shilla の高度を確かめるために Guan Nelda に登った。

AJ=293. 296—309, HJ=20. 78—86.

9~10. N.G. Dyhrenfurth
(I.H.E.)

Nepal. Lhotse 目指して Khumbu 氷河より Western Cwm に入り、9月末と10月15日アタックした。後者で E. Senn は東 Lhotse 氷河上部の 8,100 m に達した。その後アメリカ人は Everest の南部をさぐり、Dudh Kosi 奥の Langcha (6,400 m) などに登頂。Senn は Pemba と Lho La に南から初めて登った。

DAVJ=81. 80—86, Alpen=32—4. 86—104, AJ=295. 171—173, AAJ=10. 7—20.

9~10. R. Lambert
(F-S. G-H-Exp.)

Nepal. Chilime Khola を溯って、Sangje 氷河に入り、東南面から 10月24日 E. Gauchat (帰途墜落死)、C. Kogan, Lambert が Ganesh Himal 主峯 (7,406 m) に初登頂した。

Alpen=32—4. 104—112.

9~12. 小原勝郎
(J.A.C.)

Nepal. マナスル先遣隊としてブリ・ガンダキを溯りサマをへて、ナイケ・コルから氷瀑を偵察。帰途ラルキヤ峠の北方チョウ・ダナからマナスルのプラトーを偵察、マルシャンディを下る。

日本山岳会編：マナスル 1954~56, JAC 会報 182, 183 号。

10~12. Sydney Wignal

Nepal-Tibet. 西 Nepal の Saipal 奥の Jung Jung

(Welsh-H-E.) Khola を登りに出かけたが, Wignal と Harrop が Taklakot で中共兵につかまり, 2 カ月捕えられクリスマスに釈放された.

S. Wignal : Prisoner in Red Tibet.

補 遺 (山岳 49 年参照)

1948

7. J.T.M. Gibson

Bhagirathi 溪谷および Harki Doon 附近探査.

HJ=18. 93.

1950

6. E.H. Peck

Panjab. Deo Tibba 西面を偵察. Piangneru 氷河の下部プラトーまで踏査.

HJ=17. 122—123.

1951

4~5. R. Becker-Larsen

Nepal. Everest の Khumbu La 試登, Nangpa La (2 回), Chang La の 6,800 m まで.

BW=1952. 277—279.

5. E.H. Peck 夫妻

Panjab. Deo Tibba の南面を偵察試登. 5月25日 Duhangan Pass から南下し 5,229 m 峰に登頂.

HJ=17. 123—125.

6. Gurdial Singh, R.D. Greenwood

Garhwal. Trisul (7,120 m) 第3登. 6月23日, Dawa Thundup を伴う. また Mrigthuni の 6,700 m まで. および Rataban (6,166 m) の第2登.

HJ=17. 112—114, AJ=291. 257—261.

6. Robert Walter

Garhwal. Trisul 第4登. 6月24日. Nima Tenzing 同伴.

Alpinism=1952, 57—62.

8. Pierre Vittoz

Ladak. Stok Kangri (6,121 m) 初登(単独) 8月12日.

BW=1952. 286—287.

9. R.C. Evans

Panjab. Deo Tibba 南東面の Piton ridge および Watershed ridge 試登.

HJ=17. 118—125.

10. Georg Frey

Sikkim の Yalung 氷河とその支流の Tso 氷河を探査. Ratong La の第3登越. Kabru 試登. Kabur (4,810 m) 登頂. Gocha La 探査.

BW=1952. 145—154, 275—276, G.O. Dyhrenfurth :
Das Buch vom Kantsch. 138—142.

1952

- 4~6. T.H. Tilly
Garhwal. Nilkanta 西側から試登. “Avalanche Peak”
(6,196 m) 南面より初登. 6月13日. David Bryson,
John A Jackson.
HJ=18. 103—109, Jackson : More than Mountains.
65—81.
6. Edouard Frenedo
Garhwal. Chaukhamba (7,138 m), 6月13日. 北東稜
より V. Russenberger, Lucien George 初登頂.
Deo Dakhni (6,075 m) (Bhagirath-Kharak 氷河左岸)
6月20日. Frenedo, Mme Plovier, Col. Repiton, Pasang
Dawa 初登頂.
Alpinisme 1952. 115, J=1. 50—52, M-L-P-Chapelle :
Pèlerinage interdit.
6. Harold Williams
Garhwal. Kamet の 7,500 m まで試登.
Monutain Craft. No. 18, 4—7.
6. J.T.M. Gibson
Garhwal. Bandarpunch, Surgnalin, Harki Dun など
を探索.
HJ=18. 93—97.
- 6~8. Jan de V. Graaff.
Panjab. Deo Tibba (6,001 m), Duhangan (西面) よ
り同名の峠の北で南稜に達し, 8月5日 K.E. Berril,
Pasang Dawa Lama などと初登頂. おな Indrasan (6,221
m) を試みた.
MW=1954. 220—221.
- 8~10. J.B. Tyson.
(O.U.E.C.)
Tehri-Garhwal. Bhagirathi 河の Harsil から Rudug-
aria Kharak に入り, Tyson と Lampery が, 9月10日
北東稜より Gangotri III (6,577 m), Tyson, Pasang Dawa
および Paul Huggins と Annulu ほかが, 10月3日北東
稜より Gangotri I (6,672 m) に夫々初登頂した. Hug-
gins は肺炎のため10月6日死亡.
HJ=18. 87—92, AJ=289. 462—463.
- 9~11. T. MacKinnon.
Nepal-Rolwaling. Katmandu から東へ向い, Beding
附近で 6,000~6,700 m の 4座に登頂. Tesi Lapcha を
越して Namche Bazar より Phalong Karpo の 1座に
登り, Jubing より Charikot に出た.

- AJ=289. 417—420, T. Weir : East of Katmandu.
 9~11. 今西錦司 (前出) 今西, 高木, 中尾, 林, ガルツェンは10月22日 Chulu West (6,200 m) に初登頂.
 山岳=48. 1—59.
10. Monica Jackson, R.H.T. Dodson Sikkim. Zemu 氷河の Green Lake から Hidden 氷河の南岸の 6,114 m の雪峯登頂および Sugarloaf の南西頂稜に試登.
 Mountain Craft 21, 6—9, AAJ=1953. 573—9, MW=1954. 189—190.
10. T.H. Braham North-East Sikkim. Chombu (6,362 m) の東北面を試登, 続いて Lachung Chu 左岸の Kangpup の P. 5581 および右岸の Burum 附近をさぐった.
 HJ=18. 124—129.

1953

3. B.R. Goodfellow. Annapurna Himal の南面をさぐった. J=3, 159—164.
 4~5. J.O.M. Roberts Inukhu-Hongu. Everest へ酸素供給後, Schukung から Hongu 河に入り, 右岸の Mera (6,437 m) に5月20日登頂, Lungsuma から Chaunrikharka までをさぐった.
 J=3. 164—167, HJ=18. 59—64.
- 4~6. J.W.R. Kempe Nepal. Yalung 氷河左岸の Boktoh に試登. 続いて East Ratong 氷河より (事実はこの氷河より南のもの!) Koptang の北の肩に達した. 引返して Yalung 氷河右岸 Tso 氷河より, Kabru と Talung Pk. のアレートの Kabru の北の肩 (7,315 m) に達した. 帰路 Ratong La (5,197 m—第3登越) をこした.
 AJ=288, 316—322.
- 5-6. H. Williams. Garhwal. Abi Gamin (7,355 m) 第2登. 6月17日 N.D. Jayal らが南面および南稜より初登攀.
 Kurz CH, 340—341.
6. J.T.M. Gibson Bandarpunch. 同名の氷河(西面)より Black Peak (6,387 m) の 6,200 m まで試登. HJ=18. 93—102.
 (註) 前出. Nicole は取消す.
- 8~9. Hamish MacInnes. Nepal. Pumori (7,135 m) の南面から試登し 6,700 m に達した. Pingero (約 6,000 m) に東北稜より登頂.
 AJ=290, 58—61.

- 8~12. H. Tichy Nepal-West. Kathmandu より西へ Marsyandi を溯り Muktinath の北, Mustang の Rot Kopf (6,480 m) に初登頂, さらに西に進み Patrasi Himal の 6,000 m 級 4 座に登り, Talkot から Saipal (7,040 m) を南面から試登し Pithoragarh まで初横断をした.
Tichy : Land der namenlose Berge, 1954.
- 9~10. A.E. Gunther Panjab. Kulu-Spiti 分水嶺の Bara Shigri 氷河をさぐった. 附近の Pk. 5,975, Pk. 6,100 m に登頂.
AJ=288. 288—298, GJ. March 1955. 117—119.
- 9~10. Navnit Parekh Nepal. Pumori の南面から約 6,400 m? まで試登.
HJ=18. 150—156.
〔このほかは山岳 49 年に既出〕

日本山岳会検定



セルバン

登山靴



姉妹品

セルバンナイロン登山靴

セルバンマットレス



興国化学



■ 全国有名デパート/運動具店にて発売中!!

国産化された遭難救助用具

山岳事故が問題になっている昨今、わが国では優れた救助用具に乏しく、研究もおくれている状態です。

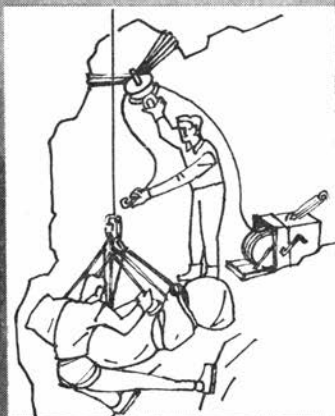
当社ではこの憂うべき現状に対処すべく、かねてより海外に資料を求めていました。

このたび1962年度“Osterreichischer Alpenvevin”の後援と山岳救助協会技術顧問W・マリーナ氏のご援助にもとづいてつくられた用具を輸入し、テスト研究を重ね、その上更に権威者多数のご協力を得た結果、'62年1月初めて国産化に成りました。

山岳事故の防止およびスムーズな処置にいくらかでもお役に立てば幸いです。

吊り降ろしに要する用具一式

1. 4.9mm径ワイヤー100m 2巻
 2. ブレーキ・ディスク 1個
 3. 滑車等のアタッチメント一式
- 重量はわづか30Kgです。



株式会社 共和運動具製作所

財産づくりに有利・安全な



三井の貸付信託

三井信託銀行

本店 東京日本橋室町
支店 都内及全国主要都市

あと一息

頂上をめざす山登りにも

“あと一息”という たのしい一瞬があるように
まとまったお金を あれこれと思わずらう
心豊かなひと時がある

旅行資金の
お積み立てには

計画預金

三和銀行



山 日 記

1963年版 日本山岳会編 ￥300

赤い表紙でおなじみの岳人必携の書。28集のよき伝統を重ねていますが内容はいつも新鮮さを失わず年々若々しい歩みを続けています。

山 で 唄 う 歌

戸野 昭・朝倉 宏編

A 6ポケット版 I ￥130 II ￥160

Iは赤いカバー IIは濃緑色のカバーです。Iのカットには各国の山岳会のマークとピッケルのマークが入れています。IIのカットは串田孫一氏のスケッチを豊富にいただくことが出来ました。附録の解説は読んで面白く愛唱する歌にますます親しみが増すことでしょうか。

アンナプルナ日記

京都大学山学会著
原色版3葉 写真28頁 地図2葉 ￥690

これは小人数(7人)の貴重なヒマラヤ遠征の記録です。出発前の準備から南面の障壁、困難な峠を越えて北面への大迂廻、頂上アタックを前にして、ジェット気流の嵐に最前線キャンプを吹き飛ばされて敗退するまでの克明な記録。

山 岳

日本山岳会機関誌 年1回発売

在庫46, 47年合併号 48年 ￥400 50, 51, 52, 53年 ￥500 54年 ￥700 57年 ￥800

南極新聞 1956-7

B 5版 横トジ230頁 写真16葉箱入 ￥600

第一次南極観測隊の記録集大成、公共、学校図書館必備の極地文献、学校新聞部、職域新聞部等の好資料読物としても遠征記録としても抜群。

書店に注文下さればどこの店でもすぐ取寄せてくれます。

東京 神田
駿河台2の1

茗 溪 堂

電話(201) 9642

技報堂の優良理工学図書選

気象学ハンドブック

同編集委員会編

A 5・1200頁 価2500円

近代気象調査法

渡辺次雄著

B 6・310頁 価450円

天 気 学

技報堂全書10

渡辺次雄・荒井隆夫共著 B 6・350頁 価500円

栄養学ハンドブック

同編集委員会編

A 5・1240頁 価2500円

ハロー・メーザー生化学入門

西村民男訳

A 5・350頁 価1000円

気象学の基礎理論から応用までを気象庁第一線技術者が詳述

調査の方法、資料の纏め方、調査指針をわかりやすく解説す

天気ありようと天気のはたらきを体系的にまとめた好書。

栄養学の一大体系で我が国唯一の便覧と好評の書関係者必携基礎生化学をよりよく理解するために書かれた教科書に好適

図書目録送呈

東京都港区赤坂溜池5 振替東京10 Tel. 481-8581

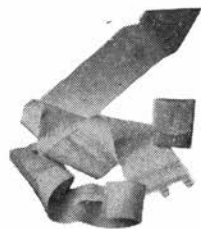
技 報 堂



画期的なサポーター

アイクバンド

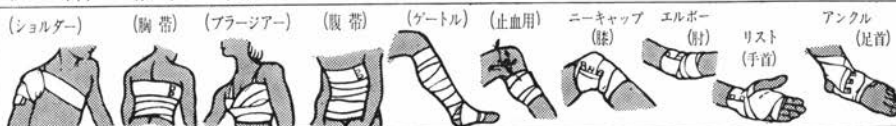
アイクバンドは、いままでのサポーターとちがひ1本の縞帯式のサポーターです。登山家にとって必携のサポーターで、この1本のアイクバンドが不慮の出来ごとに対し立派にサポートしてくれます。岩登りに、沢あるきに1ケのアイクバンドを貴方のポケットに、貴方以外のパートナーのためにも。……



- #K-63 (巾)7cm (長さ)100cm (色)白、ベージュ 1ケ ¥250
 #B-64 (巾)9cm (長さ)100cm (色) # # 1ケ ¥300

ホホホ

スリーランナーはサポーターのリーダー





日本建鉄の

アルミサッシ

PAT形(エアタイト)

PAN形(普通)

部材構造外観同一

PS形スチール > レティメード
 カーテンウォール > サッシ
 スチール > サッシ
 ステンレース > ドア
 シャッター

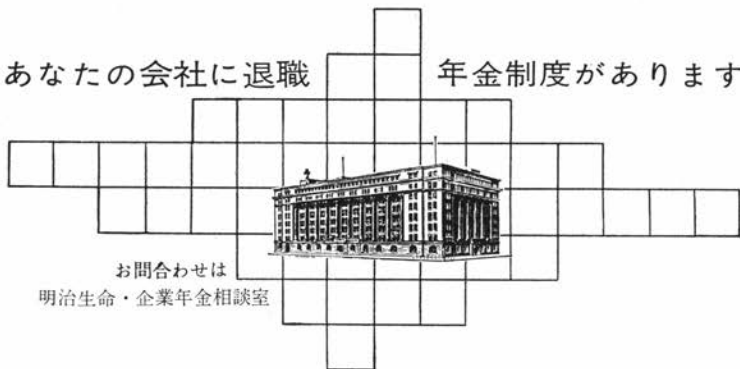


日本建鉄株式会社

東京都千代田区霞ヶ関1の2の5
 電話(581)0361(代表)

あなたの会社に退職

年金制度がありますか？



お問い合わせは
 明治生命・企業年金相談室

企業年金

東京・丸の内

明治生命

■退職後〈一生の間〉あなたの年金をお支払する 明治生命の新しい企業年金制度をぜひご利用ください

■明治生命では 各企業にマッチした年金プランの設計をお引き受けいたします



出光興産

石油／輸入・精製・販売



Himalayan

東レナイロン使用

ヒマラヤン印登山靴

● 岳人の為に造られた岳人の靴……
東レナイロンを膠皮に使用している為
美麗にして強靱、雨水に対しても絶対
に強く防水装置により雨降り、沢歩き
にはその効果を発揮します。



価格
¥2300

特殊金具付

オニツカ株式会社

神戸市須磨区寺田町三丁目四

TEL (7) 9761-4

産業と科学を支える

計測 / オートメーション計器

横河電機製作所 代理店
本山製作所(仙台)

有信計器株式会社

横浜市西区花咲町4丁目117 (中銀ビル)

TEL 長者町 (3) 6551 (代)

取締役社長 神谷 恭

(会員番号 774)

登ってよかった！
読んでよかった！



山を征服した感激は
一生忘れられません
そして、つくづく思います
“登ってよかった”と
“読んでよかった”と
しみじみ思うのが これです
それは 読む人の身になって
企画されているからです

週刊

サンデー毎日

毎週木曜日発売 / 40円

毎日777

毎週木曜日発売 / 80円

月刊

カメラ毎日

毎月20日発売 / 200円



東京都文京区竹早町
エーザイ株式会社
大阪・札幌・名古屋・福岡

(サンブル・パンフレット送呈 ソラキ錠係まで)
一二錠 一五〇円 五〇錠 五〇〇円

一日を存分に楽しんで、さてそのあとで足がひきつる、肩がこる、大切な仕事に差支える。こんな心配はもう無用、ソラキ錠が引受けました。ソラキ錠は、のんただけで筋肉のこりをほぐし痛みをとり去るスポーツ薬。筋肉の凝りや痛みにスバリ！
山登りの前に二錠、山登りの後に二錠、寝る前に二錠で、さわやかな朝を迎えることができます。

筋肉の
張りと**痛み**に

ソラキ

錠



(姉妹品) リボンシトロン・リボンジュース・リボンコーラ



世界のビール三大名産地
München
 (ミュンヘン)
札幌
 (サッポロ)
Milwaukee
 (ミルウォーキー)

SAPPORO BEER

本場の味

サッポロ

日本麦酒株式会社



レディータッチ

● ミルクを大量配合



明治チョコレート

30円
 50円
 100円

ハイミルク



山小屋の窓に

ペヤグラスを

(断熱複層ガラス)

凍らない くもらない 見晴らしがすばらしい

●お問合せはお気軽にどうぞ

板硝子卸商 株式会社池田商店

常務取締役 池田光二(会員)

東京都中央区日本橋浜町2の39

電話(671)6181~2, 5547, 7418, 7454



土木建築設計施工



大成建設株式会社

東京561・9511
中央区銀座2丁目4



皇室御用品

一八〇ミリットル……四〇円

ヒゲタ しょうゆ

登山・ハイキング
には 便利な
ヒゲタ卓上ピンを



世界中のアルピニストのピッケル



”シモン”

シャモニーの谷から本場の登山用具
が続々と入荷しております。
直売店でお求め下さい。

トビ印登山靴、キスリング、テント
シモン、モンスラー、ラフマ 発売元

福井株式会社
新宿・阿佐谷・吉祥寺・立川

NIPPIN
ニッピン

100万人の山用品



牛革登山靴のNo.1



定休日 第1、第3月曜日

お茶の水	日通ビル	三善銀行	秋葉原駅前	1970町
	交	ヤマザキ	デンキ	52の
お茶の水				

日本用品株式会社

東京都千代田区神田金沢町4 TEL (251) 1452, 4886
国電秋葉原西口2分 都電ハタゴ町下車1分 日通本社ビル横



東京瓦斯株式会社

取締役社長 **本田 弘敏**
取締役副社長 **安西 浩**

東京都中央区八重洲1の3
電話(281)0111-10・0121-10・1121-10

アルケン56N
アルケン60N

アルケンとは……

日本石油洗剤株式会社がこのたび米国California Chemical 社の特許と技術を導入し、はじめて国産化に成功したアルキルベンゾールの登録商標名です。

アルケンは……

鉱油系洗剤の世界的最優秀の主原料として今後さらに著しい需要の伸びが期待されております。

日本石油洗剤株式会社とは……

アルケンを製造販売するために日本石油化学株式会社とCalifornia Chemical 社との共同出資により設立された合弁会社です。

日本石油洗剤株式会社

本社 東京都港区芝田村町1-4(日本本館) TEL. (502)1561
工場 川崎市大師河原字夜光8543-3 TEL. 川崎(3)6321





東京ガスの

コークス

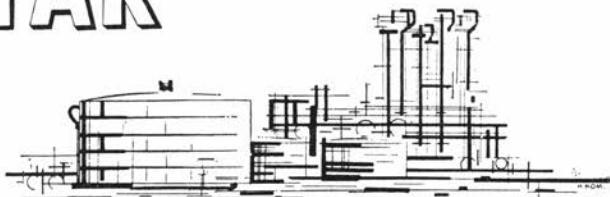
TOKYO COKE CO., LTD.



★ **東京コークス株式会社**
社長 **都留勝利**

本社 東京都中央区八重洲1-3 (東京ガスビル)
電話・東京 (281) 6551-5 番
新潟支社 新潟市下大川南通一之町 1 9 4 3
電話・新潟 (3) 0765-6 番

KANTO TAR PRODUCTS CO., LTD.



ベンゾール類・コールタール類・コールタール分溜製品・タール酸類・タール乳剤・硫安



関東タール製品株式会社

本社 中央区八重洲1-3 (ガスビル内)
電話 (281) 6651-5 (代)

山とスキーの専門店

キスリング

門田ピッケル

// アイゼン

夏冬用テント

片桐

東京都文京区湯島天神町3ノ19
片桐盛之助

電話 下谷(831) { 1794番
6880番



登山とスキーの

日本最古の専門店

好日山荘

東京店
東京都中央区銀座西2の5
電話 (561) 3600
振替東京 113657

大阪店
大阪府北区老松町3の12
日新ビル1階
電話 (34) 7745
振替大阪 68763

神戸店
神戸市生田区三宮町1の32の1
電話 (2) 5951
振替神戸 21352

福岡店
福岡市大名町86
電話 (5) 2990

新製品

元気が出る! 出る!

ローヤル・ゼリーと
ビタミンC 200mg!

アピ内服液

強壮・美容・疲労回復に

日本新薬株式会社



ご家庭に、ご行楽にいつも“味の王様”をどうぞ……



こけし印缶詰



三井物産

丸善の洋書

〈山岳関係書選〉

- Berge der Welt. 1962/63.** Band XIV. (Nymphenburger)..... ¥ 2,780
- Hagen, T.** - Mount Everest. Tr. by E. N. Bowman. '63.
(Oxford U. P.)..... ¥ 3,000
- Herzog, M.** - Les Alpes que J'aime. (Que J'aime' tome 8)(Vilo)¥ 3,100
- Hiebeler, T.** - North Face in Winter: The first winter climb of
the Eiger's north face, March 1961. (Barrie & B.)..... ¥ 960
- Hillary, E.** - High in the Thin Cold Air. (Hodder & Stoughton) inprep.
- Huxley, A.** (ed.) - Standard Encyclopedia of World Mountains.
'62. (Weinfeld)..... ¥ 2,700
- Maraini, F.** - Karakoram: The ascent of Gasherbrum IV. '61.
(Hutchinson)..... ¥ 3,600
- Noyce, W.** - To the Unknown Mountain: The ascent of Trivor.
'62. (Heinemann)..... ¥ 1,260
- Sutton, G.** - Artificial Aids in Mountaineering. '62. (N. Kaye) ¥ 570

上記の他関係書を豊富に取揃えており
ます。御探求書はお申し越し下さい。



東京・日本橋
電話 (271) 2351
他全国各地支店・出張所

「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。

一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。

一、原稿は返却しない。

一、研究並に紀行には、その概要を付けること。

一、紀行にはなるべく概念図を添付すること。

一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。

一、地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。

一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。

一、校正は編集者に一任されたい。

送り先 東京都千代田区神田駿河台四ノ六

日本山岳会「山岳」編集部

編集委員

山折渡望

崎井刃月

安健公達

治一平夫

一九六三年三月三十日発行

山岳 五十七年

定価 八〇〇円

発行所

日本山岳会

東京都千代田区神田駿河台四ノ六

電話東京三五七局 八五三番
振替口座東京四八二九番

編集兼 日本山岳会内
発行者 望月達夫

印刷 株式会社 技報堂
写真版 光村原色版印刷所
製本 株式会社 三水舎

東京都千代田区神田駿河台二ノ一
発売所 株式会社 茗溪堂

電話東京二〇一局九六四二番
振替東京二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁ずる。

南アルプス登山は大井川口から

東海道線金谷から沼平（畑薙）まで



大無間山より南アルプスを望む

大井川鉄道株式会社 TEL 2121
(金谷)



世界一の
規模を誇る

御在所ロープウェイ

三重県湯の山温泉

Around The World



登頂に

観測に

このマークがお
伴いたしました

I	1936年	立教大学	ナンドコート登山隊
II	1952年	日本山岳会	マナスル踏査隊
III	1953年	〃	〃 登山隊
IV	1954年	〃	第二次マナスル登山隊
V	1954年	京都大学	アンナプルナ登山隊
VI	1955年	〃	カラコルム学術調査隊
VII	1956年	日本山岳会	第三次マナスル登山隊
VIII	1957年	文部省学術会議	南極予備・本観測隊
IX	1958年	神戸大学	バタコニア登山隊
X	1958年	深田隊長会	ジュガールヒマール探査隊
XI	1959年	日本山岳会	ヒマールチュリー登山隊
XII	1959年	日本教育テレビ	雪男学術探険隊
XIII	1960年	毎日新聞	アラスカ学術調査隊
XIV	1960年	明治大学	アビ遠征隊
XV	1960年	同志社大学	アジア、ヨーロッパ大陸横断隊
XVI	1960年	早稲田大学	P 2 9 遠征隊
XVII	1961年	大阪大学	ピックホワイトピーク遠征隊
XVIII	1961年	全日本山岳連盟	アンデスエクアドル遠征隊
XIX	1961年	早稲田大学	南米事情調査隊
XX	1961年	上智大学	ピックホワイトピーク第2次遠征隊
XXI	1962年	全日本山岳連盟	サルトロカンリ
XXII	1962年	京都大学	ヒマール登山隊
XXIII	1962年	ヒルマシキム	ヒマラヤ登山隊
XXIV	1963年	電電九州	

ビニロン・ナイロン・テント製造元

千代田区神田 株式

細野テント

Tel. (251)

須田町2-23 会社

6428

The Journal of
The Japanese Alpine Club

S A N G A K U

Vol. LVII 1962